

を失ひ、適、以て子羔を害するに至らん。故に夫子子路を責めてのたまはく、汝學問未だ成熟せざる者を擧げて、數、叛く所の強邑の民を治めしむるは、是れ夫の人の子即ち子羔を害するものにて、子羔を全うするの道に非ずとの義。

【蛾ノ火ニ赴クガ如シ】己が身の滅ぶるをも省りみずして、利を貪るに喩ふ。心地觀經に「心如飛蛾愛燈色」とあり、また事文類聚に「愚人貪財、如蛾赴火」

【牙牌】「カルタ(骨牌)を見よ、

【娥媧】娥は、ミメヨキ義、媧も亦同じ、方言の注に「閩人謂妓女爲媧」とあり、一は妖美の女をいふ、列子に「簡鄭衛之處子——靡曼者」

【河伯】水神なり、抱朴子に「河伯是華陰人、以八月上庚日、渡河溺死、天帝補署爲一、故今庚辰日、不治、航渡河」また史記にも「鄴苦爲一、妾婦」

【柯ハ青銅ノ如ク根ハ石ノ如シ】(柯ハ青銅ノ)を見よ、【翡翠】(翡翠)を見よ、

【河ハ委蛇ヲ以テノ故ニ能ク遠シ】(山ハ陵遲ヲ見よ、【川水ヲ閱テ以テ川ヲ成ス云々】文選四の陸士衡が歎逝賦中の句「川閱水以成川、水沿浴而日度、世閱人而爲世、人冉冉而行暮」とあり、註に「閱總也、毛詩曰、沿浴

江漢、沿浴水流貌、言、總衆水而成、其川終日流去、而水相續也、楚辭曰、老冉冉而逾施、冉冉、人老貌、言總衆人而成于世、終日老謝、而後人相繼也」とあり、方丈記に「行く河の流は、絶えずして、しかももとの水にあらず」とあるはこの意に本づけるか、

【何蕃】唐の和州の人、太學生たると、二十餘年、學成り行尊し、諸生敢て與に齒せず、朱泚の反、諸生將に亂に從はんとす、蕃色を正して之を叱す、故に六館の士汚を受くる者なし、韓愈爲めに傳を作る、

【瓦ノ窓繩ノ樞】甕籠繩樞の四字に本づきたる語なり、貧家のさまをいふ、賈誼の過秦論に「陳涉、甕籠繩樞之子、氓隸之人、而遷徙之徒也」とあり、樞は戸樞なり、甕を以て牖とし、繩を以て戸を繫ぐをいふ(蓬戸甕籠を參看せよ、

【假寐】衣冠を脱かずして寐ぬるをいふ、ウタタネ詩の小雅に「不遑——」また國語に「盛服將朝、蚤而——

【峨眉】山名、四川省嘉定府眉縣の南百里に在り、漢の南安の地、李白の——山月の歌に「峨眉山月半輪秋、影入平羌江水流、夜發清溪向三峽、思君不見下渝州」

【蛾眉】蛾は蠶なり、其の眉細くして長く曲れり、美人

の眉に喩ふ、詩の衛風碩人篇に「螭首——」とあり、李白の詩に「美人捲朱簾、獨坐翠蛾眉」また直ちに美人を稱す、白樂天の燕子樓の詩に「黃金不惜買——」揀得如花四五枝、歌舞教成心力盡、一朝身去不相隨、【蠶ヲ拾ヒ蠶ヲ握ル】(拾蠶握蠶)利の爲めなれば、ちそろしきことをも厭はざるに喩ふ、韓非子に「蠶ハ蛇ニ似テ、蠶ハ蠶ニ似タリ、人、蛇ヲ見レバ、則チ驚駭シ、蠶ヲ見レバ、則チ毛起ツ、然リ而シテ婦人ハ蠶ヲ拾ヒ、而シテ漁者ハ蠶ヲ握ル、利ノ在ル所ロハ、則チ其ノ惡ム所ロヲ忘レテ、皆孟賁トナル」とあり、言ふこゝろは鱸(ウナギ)の形は、蛇に似て、蠶の形は蠶(イモムシ)に似たり、今人蛇を見れば驚き、蠶を見れば身の毛立つ、然れども婦人は、蠶を養ひて何とも思はず、漁者は、鱸を握りて何とも無さは、利する所ろあるが故なり、利慾のためには、心に忌み嫌ふ所ろを忘れて、志も強くなること、昔の孟賁といふ勇士にも劣らずとなり、

【荷負】父の業または師の道を受け荷ふをいふ(負荷)を見よ、詩經の「何天之休」の疏に「——天之美譽也」

【假父】「オヤブ」説苑に「呂不韋曰、吾乃皇帝——也」

【葭葦】(葭葦ノ親)を見よ、

【歌舞】尙書に「詩言志、歌永言」と、蔡邕の月令章句に

カビコ—ガフク

「歌ハ樂ノ聲ナリ」と、毛詩の序に「情、中ニ動イテ言ニ形ハル、之ヲ言ヒテ足ラズ、故ニ之ヲ嗟歎ス、之ヲ嗟嘆シテ足ラズ、故ニ之ヲ詠歌ス、之ヲ詠歌シテ足ラズ、手ノ舞ヒ足ノ蹈ムヲ知ラザルナリ」と、呂氏春秋に「陶唐氏ノ始、陰多ク滯伏シテ、人氣壅闕セリ、故ニ爲メニ、舞ヲ作シ、以テ之ヲ宣導ス」史記樂書に「——宗廟」

【樂府】(一)を見よ、

【下風】下方の義、左傳の僖十五年に「晉大夫三拜稽首曰、君履后土而戴皇天、皇天后土實聞君之言、群臣敢在下風」また漢書鄒陽の傳に「竊高下風之行」とあるは、足下の義に用ひたるなり、師古の注に「下風ニ在リテ側カニ高尙ヲ聽クヲ言フナリ」と、韓文の與鄂州柳中丞書にも「聽於——」とあり、

【甲ヲ卷キ旗ヲ韜ム】戰を止むる義、晉書に「卷甲韜旗、廣農桑之務」

【合巹】類書纂要に「婚ヲ成シ、杯ヲ交フルヲ合巹トイフ、人ノ婚ヲ畢ルヲ賀シテ、合巹禮成ルトイフ」とあり、巹は一瓠を分ちて兩瓠と爲すをいふ、婿と婦と各、一片を執りて酒を飲むの用に供す、詳くは禮記の昏義を見よ、

【合歡】「ネムノキ」なり、本草に「——一名ハ萌葛、一名義を見よ、

ハ鳥類樹、俗ニ馬櫻花ト呼ブと、群芳譜に「一一名ハ青棠、棠或ハ裳ニ作ル、一名ハ合昏、一名ハ夜合」また格物論に「夜合、一名ハ一、マタ合昏ト名ヅク、按ズルニ圖經ニ、五臟ヲ安和シ、心志ヲ和ラゲ、人ヲシテ歡樂セシム、人家多ク庭除ニ植ウ、枝甚ダ柔弱ナリ、葉ハ皂莢、槐ニ似テ極メテ細クシテ密ナリ、其ノ葉暮ニ至リ而シテ合ス、五月花發キ、紅白色ナリ、瓣上絲茸ノ如シ、秋ニ至リ而シテ實リ莢ヲ作ス、子極メテ薄細ナリ」と、東坡の詩に「可憐夜合華、青枝散紅茸」

【蓋寛】字は次公、漢の魏郡の人、性剛直なり、初明經を以て郡の文學となり、孝廉を以て郎となり、方正に擧げられ、對策高第となる、諫議大夫に遷る、公に奉じ法を守る權要を避けず、司隸校尉に終る、

【蓋簪】蓋は合なり、簪は聚なり、朋類相聚るをいふ、簪は髮を聚むるもの、故に聚の義あり、易の豫の卦に朋蓋簪

【甲子】事物紀原に「黃帝大撓ニ命ジテ、一、一ヲ造リ時ヲ正サシム、月令章句に「大撓五行ノ情ヲ探リ、斗剛ノ建ス所ヲ占フ、是ニ於テ始メテ甲乙ヲ作リテ以テ日ニ名ヅク、之ヲ幹トイフ、子丑ヲ作リテ、以テ月ニ名ヅク之ヲ支トイフ、支幹相配シテ以テ六句ヲナス」

【合抱ノ木モ毫末ヨリ生ズ】一かかへある木も、もとは微微たる苗より生じたるをいふ、事は微を積みて大となるに喩ふ、老子に「合抱之木、生於毫末、九層之臺、起於累土、千里之行、始於足下」

【合浦珠還ル】後漢書の孟嘗傳に「嘗合浦ノ太守ト爲ル、郡、珠ヲ産ス、前守貪多ク、珠徒リ去ル、嘗至リテ去珠復還ル」

【嘉聞】好さほまれ、左傳に「生有嘉聞」

【柏】「コノデガシハ」といふ、葉常に青し、史記に、松柏爲百木長、漢武内傳に「藥ニ松柏ノ膏アリ、之ヲ服スレバ、以テ年ヲ延バスベシ」と、杜甫の古柏行に「孔明廟前有老柏、柯如青銅、根如石、貞觀政要に「寇萊公巴東縣ニ知タルトキ、嘗テ手ツカラ雙柏ヲ縣庭ニ植ウ、今ニ至ルマデ、民以テ甘棠ニ比ス、之ヲ萊公柏トイフ」

【嘉平】陰曆の十二月をいふ、即ち臘月に同じ、史記の秦本紀に「秦惠文公十二年初臘」また始皇三十一年更名臘曰一臘は合なり、百神を合祭するなり、

【餓死】餓死する者を孝といふ、殍に作る、同じ、孟子に「野有餓死」

【治淡】あまねきこと、漢書に「不能一、如劉向父子及揚雄也」

【嗑然】笑ふ聲、莊子に「一而笑」また言多き義にも用ふ

【甲第】第は邸なり邸に甲乙次第あり、一は、上邸の義、また凡を物群類に首出するを甲といふ、一は、すぐれて立派なる「ヤシキ」をいふと、張衡の西京賦に「北闕一、當道直啓、また漢書田蚡傳に「治宅甲諸第」

【下物】酒の「サカナ」なり、世説に「有如此下物、一斗不足多也」の註に「下物ハ飲儲サカナナリ」

【甲ニ先ダツ三日、甲ニ後ル、三日】（先甲三日、後甲三日）易の蠱卦の語、甲は日の始めなれば、借りて事の端の義とす、新令を造作する日の前三日、其の是非を思慮し、新令を造作せし後ち三日、其當否を推究するは、思慮の深く推究の遠きなり、

【葭葦ノ親】葭は蘆なり、葦は葭の節中の白皮至薄なる者なり、輿義抄に「アシヅツハ蘆ノ節ノ中ニ薄葉ノヤウニテアル皮ナリ」とあるは是れなり、輕薄にして附著するに喩ふ、また遠き縁類にも用ふ、漢書中山王傳に「非有一之、鴻毛之重」註に「葭葦之親、薄親也」とあり、また鮑宣傳に「侍中駙馬都尉董賢、本無一

【壁ヲ鑿チテ書ヲ讀ム】（鑿壁讀書）西京雜記に「前漢ノ匡衡、學ヲ勤メ燭ナシ、隣舍ニ燭アレドモ速バズ、衡乃チ壁ヲ穿チ、其ノ光ヲ引キテ之ヲ讀ム、邑ノ大姓文不識、家富ミテ書多キニ名アリ、衡乃チ其レガ爲メニ客作シテ、償ヲ求メズ、書ヲ得テ通ク之ヲ讀マンコト願フ、主人感歎シテ資給スルニ書ヲ以テシ、遂ニ大學ヲ成ス」と、漢書の列傳によれば、衡は元帝の時、丞相となるとあり、衡字は稚圭、東海承の人、

【楓】「蛙手」の略、格物論に「秋杪ニ至ル毎ニ、ソノ葉皆赤クシテ錦ノ如ク、爛然トシテ觀ルベシ」と、謝靈運の詩に「曉霜楓葉丹」杜牧の詩に「停車坐愛楓林晚、霜葉紅於二月花」

【蛙ニ耳アリ】多言を戒むる諺なり、詩經の小雅小弁の篇に「君子無易言、耳屬于垣、事文類聚に「姚元崇ガ口箴ニ、多言多失、多事多害、聲繁則淫、音希則大、室本無暗、垣亦有耳」成語考に「戒、輕言、曰、恐屬垣有耳」

【壁ノ中ヨリ求メ出デタリケン書】古文孝經を斥す、孔安國の古文孝經の序に「魯ノ恭王、人ヲシテ夫子ノ講堂ヲ壞タシメ、壁中ノ石函ニ於テ古文孝經二十二卷ヲ得タリ」とあり、

【蛙】格物論に「一ハ蝦蟇ナリ、數種アリ、蟪蛄アリ、蟪蛄

蝮アリ、蝦蟆ハ皮ノ上、腹ノ下ニ黒キ斑點アリ、脚短クシテ能ク跳ル(中畧)蟻蝮ハ、即チ夜鳴ク、腰細ク口大ニ、皮ハ蒼蠶色ナリ、俗ニ田雞ト名ツク、蟾蜍ハ、形大ニ背黒クシテ點ナシ、蝌蚪ハ、蝦蟆ノ子ナリ、形圓ニシテ尾アリ、雷震ヲ聞クハ、尾脱シテ脚生ズ」と、晉の惠帝昏愚なり、華林園に在りて蝦蟆の聲を聞きて、左右に問うて曰く、彼の鳴く者は官の爲めにするか、私のためにするかと左右戯に對へて曰く、官地に在つては官の爲めにし、私地に在つては私の爲めにすと(兩部ノを參看せよ)。

【蝦蟇衣】車前草の異名、本草に「車前草」釋名に「一、蝦蟇喜藏伏于下故江東稱爲一」

【鎌ヲ磨グ】新月をいふ、韓愈の詩に「新月似磨鎌」

【釜ヲ破リ船ヲ沈ム】成語考人事門に「志必勝ニ在ルヲ破釜沈船トイフ」と、史記項羽本紀に「項羽乃悉引兵渡河皆沈船破釜燒燒廬舍持三日糧以示士卒必死無還心」とあるに本づく、

【紙】初學記に「釋名ニ曰ク、一ハ砥ナリ、平滑ニシテ砥石ノ如キヲイフナリ、古ハ縑帛ヲ以テ書ノ長短ニ依リ、事ニ随ツテ之ヲ裁ル、名ツケテ幡紙トイフ、故ニソノ字絲ニ從フ、後漢ノ元興中ニ至リ、蔡倫故布ヲ剉デ

の人の剛直なるさまをいふ、揚子法言に「上交不諂、下交不驕、則可有爲矣」

【上目ヲ用フレバ則チ下觀ヲ飾ル】上たる者、明察に過ぐれば、下たる者、其の行を修飾す、故に其の眞を視るを得ずといふ意、韓非子に「上用自則下飾觀、上用耳、則下飾聲、上用慮、則下繁辭」

【漢】楊子江の支流、書經の禹貢に「嶓冢導漢、東流爲一」、また支那の古の王朝の號、我が紀元四百五十五年劉季帝位に即きしより始まり、六百六十八年に、孺子嬰の廢せらるゝに至るまでを前漢また單に漢といひ、また西漢といふ、劉季の末裔劉秀が紀元六百八十五年に即位せしより、紀元八百八十年、魏に亡ぼされたるまでを後漢また東漢といふ、陶潛の桃花源記に「乃不知有漢、無論魏晉」、また天河をもいふ、詩經に「天有」と、雲漢星漢銀漢など、皆同じ、また男子を賤めていといふ、輟耕錄に「今人謂賤丈夫爲一子」とあり、醉漢癡漢風漢などの漢の如し、

【雁】格物論に「一ハ陽鳥、江湖洲渚ノ間ニ泊ス、動モスレバ計ルニ千百アリ、大ナル者、ソノ中ニ居リ、衆クノ雁ヲシテ雙ビ圍ンデ警察セシム、飛ブニ先後ノ行列アリ、秋南シテ春ハ北ス、鴻ハマタソノ大ナルモノ、羽

搗抄シテ紙トナス、字巾ニ從フ云々、格先生は、一の異名、韓愈の毛穎傳に見ゆ、烏絲欄は、今の罫紙なり、國史補に「宋、毫、開紙有織、成界道、謂之烏絲欄」、韓文に「謂紙爲華陰楮知白字守玄亦曰好時侯」

【上姚嬀ニ規リ渾渾トシテ涯ナシ】(上規姚嬀渾渾無涯)韓愈の進學解に見ゆ、姚は虞姓、嬀は夏姓なり、尙書の舜典大禹謨を斥す、渾渾は廣大の貌、揚子に「虞夏ノ書、渾渾爾」とあり、

【髮ヲ截リ賓ヲ延ク】圓機活法に「范進嘗テ陶侃ニ過ギル、侃家貧ニシテ以テ待ヲ爲ス無シ、母侃ニ謂ツテ曰ク、汝但ダ客ヲ留メヨ、吾自ラ計ヲ爲サント、乃チ髮ヲ截リ、雙髻ト爲シ、賣リテ酒肴ニ易ヘ、豊ヲ極ム、進京師ニ至リ、侃ヲ稱述ス、侃遂ニ名ヲ知ラル」

【上好ム者アレバ下必ズコレヨリ甚シキ者アリ】孟子滕文公上ニ「上有好者、下必有甚焉者矣、君子之德風也、小人之德草也、草尙之風、必偃云々」

【上材ヲ求ムレバ臣木ヲ殘フ】君主小材を求むるときは、臣下は其の意を迎へて、大木を濫伐するをいふ、淮南子に「上求、材臣殘、木上求、魚臣乾、谷上求、糗而下致、船」

【上ニ交ハリテ詔ハズ下ニ交ハリテ駟ラズ】獨立特行毛純白ナリ」と、毛詩の疏に「大ナルヲ鴻トイヒ、小ナルヲ雁トイフ」と、儀禮に「大夫ハ雁ヲ執ル、ソノ時ヲ候ヒテ行クニ取ルナリ、婚禮ノ納采ニ雁ヲ用フ」と、管子に「鴻雁ハ、春ハ北シテ、秋ハ南シ、ソノ時ヲ失ハズ」と、月令に「仲秋、鴻雁來賓」、黃山谷の詩に「雁字一行書絳霄」、古今集に「春霞立つを見捨ててゆく雁は花なき里に住みやならへる」、またその鳴く聲の船の櫓の音に似たるより、白氏文集に「秋雁橋聲來」の句あり、

【顔渥丹ノ如シ】顔色丹朱をそぐ、が如く美なるをいふ、詩の終南に「錦衣狐裘、顔如渥丹」の注に「渥丹ハ赤クシテ、ツヤアルナリ」と、また歐陽修の秋聲賦に「其渥然丹者、爲槁木」とあるは、朱顏忽に變枯するをいふ、

【姦雄】姦智の特にすぐれたる者、家語に「少正卯人之也」また魏志に「許劭謂曹操、治世之能臣、亂世之

【韓嬰】韓の燕の人、文帝の時、博士となる、詩人の意を推して内外傳數萬言を作る、亦易の意を推して之が傳を作る武帝の時、董仲舒と上の前に論ず、仲舒難する能はず、孫の商亦博士となる、

【韓嫣】唐の人、彈を好み、金を以て丸となす、一日失ふ

者十數、長安之が爲めに語して曰く、飢寒を苦しめば

【顔淵】(顔回)を見よ、

【顔延之】字ハ延年、臨沂の人、文章當時に冠たり、南北朝の時、宋に仕へて官太常に至る、延之は謝靈運と名を齊らす、時に顔謝と稱す、されどもその詩品は靈運に及ばず、

【翰苑集】二十二卷、唐の陸贄撰す、贄の文多く駢句を用ふ、蓋し當時の文體自ら然るなり、されども眞意篤摯反覆曲暢して、復た排偶の迹を見ず、新唐書には四六文を收めず、されど獨り贄の文十餘篇を録せり、司馬光の資治通鑑には、その疏を録する三十九篇に至れり、上下三千年取るところ是より多きはなし、眞に經世有用の文といふべし、

【鑒ヲ奪フ】鑒は鏡なり、自ら照し省みる所の鏡を奪ふとの義、左傳に「是天奪之鑒而益其疾也」國語に「天奪之明」とあるも同じ、

【寒ヲ救フハ裘ヲ重ヌルニ如クハ莫シ】徐幹の中論に「語稱救寒莫如重裘、止謗莫如修身、療暑莫如親冰、

【顔ヲ解ク】よろこび笑ふ義、「ニッコリ」列子に「自吾

川の名なるに、その流域地方の泛稱となりたるなり

【翰音】翰は高く飛ぶなり、高く飛んで且つ鳴くをいふ、居ることその位にあらずして、聲のその實に過ぐるに喩ふ、漢書鼓傳に「博之翰音鼓妖先作」とあり、博は朱博、鼓妖とは博の官に拜せしとき、怪しき鼓聲を聞きしをいふ、一説には、曲禮に「雞曰——」とありて、易の中字に「——登于天」とあるは、雞はもと天に登るものにあらず、而るに天に登らんとするは、人の信ずる所らにあらずることを信じて、變ずることを知らざるも、亦かくの如くなるをいふと、

【坎珂】車行きて利ならざる貌、よりにて不遇の義とす、

【輶軻】輶に軻に作る、

【輶軻】前の(坎珂)輶軻を見よ、

【隘筈】谷または洞穴などの空しくひらけたる貌、漢書司馬相如傳に「通谷豁兮——」とあり、豁闢また隘呀に作る、同じ、

【感蒙】漢林に「意氣ニ感ジテ節槩ヲ立ツルナリ、

之事、夫子三年之後、始得夫子一哂而已、五年之後、夫子始一解顔而笑、七年之後、夫子始一引吾並席而坐、魯褒の錢神論に「解嚴毅之顔、開難發之口、歸正錄に「盧胡ハ小笑ナリ、解顔ハ微笑ナリ、捧腹ハ大笑ナリ、哄堂ハ衆皆笑フナリ、絶倒ハ嘆羨ノ甚シキナリ、韻府ニ絶倒ヲ以テ極笑トナスハ非ナリ、

【顔ヲ開ク】よろこび笑ふ義、李白の詩に「開顔酌美酒、樂極忽成醉、

【開多シ】開は隙なり、隙多きは合はざる義、史記魯世家に「君臣多開、

【眼ヲ放ニシテ青山ヲ見ル】貝原益軒の樂訓に見ゆ、白氏文集の洛陽有愚叟といふ長篇の末段に「抱琴榮啓樂荷、鍾劉伶達、放眼青山、任頭生白髮、不知天地内、更得幾年活、從此到終身、盡爲閑日月、

【漢音】わが國と支那との交通の初は、東晉以後なるべし、されば江左、即ち吳の地の音、第一に我に傳りぬこれを吳音といふ、隋の天下を一統し、長安に都するに及びて、わが朝はじめて公に交通せられ、唐に及びて亦長安に都し、爾來遣唐使留學生皆長安に赴く、是に於て支那北部の音、第二に我に傳りぬ(推古帝より宇多帝に至る凡そ三百年間)これを漢音といふ、漢は

一、相稱則授受、大智度論に「函大蓋大」とあり、是れ相應の義、

【開行】「シノビアルキ」開は空なり、空隙に投じて行き、公顯にせざる義、漢書高祖紀に「布與隨何、——歸漢、布は黥布、

【漢高】漢の高祖をいふ、劉氏、名は邦、字は季、沛の人、寛仁にして大度あり、家人の生産を事とせず、遂に兵を起し楚の項羽を滅し、天下を平定して帝位に即けり、詳しくは史記の高祖本紀を見よ、

【關越】いかり叫ぶさま、蘇轍の詩に「死生不願——虎問之何術能使然」と越關(關)を見よ、

【雁行】雁の列をなして飛ぶに、順次に少しづつ後れ行くが如くするをいふ、禮記の王制に「兄之齒——齒は年齢なり、年、兄と相若く者と、道を行くときは、序行してや、後に退き行くをいふ、曲禮に「十年以長則兄事之是也」また戰國策に「韓之於秦也、居爲隱蔽、出爲雁行」とある——は、跟、從する義、

【顔泉卿】字は昕之、春卿の弟、常山、太守となる、安祿山の反、泉卿兵を起して賊を討つ、河北諸郡響應す、已にして賊將兵を引きて城下に至る、泉卿兵を擧げて纔に入日、守城未だ備らざるを以て陷る、賊將執へて

洛陽に至りて之を殺す、臬脚罵つて口を絶たず、顔氏の死する者三十人、

【干戈ヲ倒載ス】 戦をやめるをいふ、兵器を車に載するに、出陣の時は刃を前に向け、歸陣の時は刃を後に向く、故に倒載といふ、禮記に「倒載于戈、包之以虎皮、將帥之士、使爲諸侯、名之曰建纛、然後天下知武王之不復用兵也、また史記の留侯世家に「倒置干戈」とあるも、同義なり、

【扞格】 扞は拒み拒ぐなり、格は凍洛の洛と同じく、地の凍洛して、堅強にして入り難きをいふ、禮記の學記に「發然後禁、則一而不勝」

【巖下ノ電ノ如シ】 (爛々トシテ)を見よ、

【勘合】 「ワリフ」居家辛集に「一ハ即チ古ノ符契ナリ」

【顔甲】 顔の厚さをいふ、鐵面皮といふに同じ、書言故事に「進士王光遠、權豪ニ干索シテ厭クコトナシ、或ハ捷辱ニ遭フモ、畧改悔スルコトナシ、時人イフ、光遠顔厚キコト、十重ノ鐵甲ノ如シト」

【汗簡】 書物をいふ、後漢書の吳祐傳の註に「一ハ、火ヲ以テ簡ヲ炙リテ汗セシメ、其ノ青ヲ取リテ書キ易ク、後ニ蠹むしくよセズ、之ヲ殺青ト謂ヒ、亦之ヲ一トイフ」とあり、青き竹簡を炙りて、油を取れば、則ち

其青色をも殺らすなり、故に汗青とも、殺青ともいふ、黄山谷の詩に「今代誰班馬、能書汗簡青」とあり、また類書纂要に「殺青已就」の註に「編撰成ルナリ」とあり、

【汗顔】 書言故事に「慙ヅル色ヲ言ツテ、一トイフ、韓愈の祭柳子厚文に「血指一」

【坎坎】 鼓を撃つ聲、詩經に「一鼓我」また廣く物を撃つ聲にも用ふ、

【侃侃】 剛直の貌、論語郷黨篇に「朝與下大夫言、一一如也」

【巖巖】 石をつみて高さ貌、詩の小雅に「節彼南山、維石一節は高峻の貌、また魯頌に「泰山一、魯邦所詹」

【巖巖清峙、壁立千仞】 人品の高潔にして衆中に傑出せるをいふ、晉書王衍傳に「王敦曰ク、夷甫ノ衆中ニ處ルハ、珠玉ノ瓦石ノ間ニ在ルガ如シト、顧愷之書贊ヲ作リ、亦衍ヲ稱シテ一、一トイフ」とあり、

夷甫は衍の字(風塵表)を參看せよ、

【咸宜】 すべて皆宜しきに合するをいふ、左傳隱三年

【姦宄】 書經舜典に「冠賊一」とあり、註に「外ニ在ルヲ姦トイヒ、内ニ在ルヲ宄トイフ」

【韓琦】 宋人、字は稚圭、相州の人、年二十進士に登り第

一たり、時に名を唱へ終り、太史奏す、目下五色の雲見はると、范仲淹と兵間に在る最も久し名一時に重く、朝廷倚りて以て重を爲す、天下稱して韓范と爲す、邊人謠ひて曰く、軍中有「韓、西賊聞之、心膽寒、軍中有「一范、西賊聞之、驚破膽と、定州の安撫使たりし時、歲飢う、法を設けて賑を行ふ、全活せしむる者七百萬人、五代以來學校久しく廢す、琦舍宇を葺き、儒生に絃誦を課し、之を鄒魯に比すといふ、累遷して相となり、天下を泰山の安に措く、魏國公に封ぜられ、忠獻と諡せられ、後ち魏王に追封せらる、韓魏公家傳に「韓魏公諫官タルコト三年、存スル所ノ諫稿、欽メテ之ヲ焚キ、以テ古人慎密ノ義ニ倣ハント欲ス、然レドモ人主諫ニ從フノ美ヲ見ルコトナキヲ恐ル、乃チ七十餘章ヲ集メテ三卷トナシ、諫垣存稿ト曰フ、自ラ首ニ序ス、大畧ニ曰ク、諫ハ理ヲ以テ勝ツニ止マリ、而シテ至誠ヲ以テ之ヲ將キルト、一邪曲ナシ」を參看せよ、

【韓休】 唐の長安の人、父の大智は洛州の司功參軍たり、兄の大敏は鳳閣舍人たり、休賢良に擧げられ、補闕に擢てらる、玄宗の朝黃門侍郎に拜す、人と爲り峭直、事に遇へば輒ち諫む、或人玄宗に謂つて曰く、休相と爲りて陛下殊に舊より瘦せたりと、上曰く、朕瘦せたりと雖も、天下は肥えたりと、官太子少師に至る、

【汗牛充棟】 藏書の多きをいふ、柳文の陸文通墓表に「其爲書處、則充棟宇、出則汗牛馬」

【韓琦邪曲ナシ】 宋史に「韓魏公ハ、幼ヨリ性醇一ニシテ、邪曲ナシ、毎ニ謂フ、初節ヲ保ツハ易ク、晩節ヲ保ツハ難シト、故ニ事力ヲ著ケ、立ツ所口特ニ完シ、其ノ詩ニイフ、不羞老圃秋容淡、且看黃花晚節香、其ノ意知ルベキナリ、黃花は菊なり、

【諫議大夫】 舊唐書、職官志に「正五位上、侍從贊相規諫、諷諭ヲ掌ル」

【韓琦ノ大節】 宋元通鑑に「宋ノ韓琦、大節ニ望ミ、危疑ニ處シテ、苟シクモ國家ニ利アレバ、知リテ爲サルコトナシ、湍水ノ深壑ニ赴クガ如ク、畏レ避クル所ロナシ、或人諫メテ曰ク、公ノ爲ル所口誠ニ善シト雖モ、然レドモ萬一蹉跌スルコトアラバ、豈唯身自ラ保タザルノミナランヤ、恐ラクハ家モ亦危カラント、琦歎ジテ曰ク、是レ何ノ言ソヤ、人臣ハ當ニ力ヲ盡シテ君ニ事ヘ、死生之ヲ以テスベシ、唯事ノ是非如何ヲ顧ミルノミ、成敗ニ至リテハ天ナリ、豈豫メ其ノ成ラザルヲ憂ヘテ、遂ニ輟メテ爲サル可ケンヤト」

【顔筋柳骨】 書の極めて立派なるを稱す、范文正の祭

カンキ—ガソキ

石曼卿文に「曼卿之筆、一一」とあり、顔真卿と柳公權との筆法の筋骨を受け得たりとの義。

【閉居】 閉は空なり、事なくして、しづかに家に在るをいふ、禮記に「孔子、子夏侍、陶潛の詩に「一一三十載、遂與塵事冥」

【巖居】 山巖の間に隱居する義、史記に「蔡澤謂應侯曰、君何不歸相印、讓賢者、退而一一川觀、韓詩外傳に「一穴處而王侯不能與爭名、論衡に「上古一一穴處衣禽獸之皮、後世易以宮室有布帛之飾」

【含玉】 支那の古の禮に、死者の口に含ましむるに玉を以てするをいふ、周禮天官に「太宰大喪贊贈玉一一」

【寒玉】 竹の異名、また綠玉ともいふ、唐の陸龜蒙の詩に「萬條一一溪煙」

【干戈】 干は「タラ」戈は「ホコ」戰に用ふる具、詩の大雅に「一一威揚」とあり、揚は鉞なり、一一は轉じて戰の義にも用ふる、一一ヲ事トス」の如し。

【感化】 感動して善に化せらるゝ義、琴賦序に「美、其感化、則以垂涕爲貴」

【銜塊】 罪を請ふなり、塊ヲ銜ムを見よ、

【顏回】 字は子淵、無繇の子、孔子の弟子、天資明睿一を開いて十を知る、十哲の首に居る、年二十九髮盡く

【汗血ノ馬】 一日千里を走る駿馬をいふ、轉じて賢才ある人に喩ふ、漢書の武帝本紀に「將軍廣利斬大宛王首獲汗血馬來、作西極天馬之歌」とあり、廣利は李廣利なり、天馬の種なり、汗出でて血の如し故にいふ、また張騫傳に「烏孫竟與漢結婚、初天子發書易曰、神馬當從西北來、得烏孫馬、好名曰天馬、及得宛汗血馬、益壯、更名烏孫馬曰西極馬、宛馬曰天馬云」

【巖穴ノ士】 世を遁れて山中に棲む人をいふ、史記伯夷傳に「一一之士、趨舍有時」

【銜轡ノ變】 銜は勒なり、クツツ、轡は車の鉤心の木をいふ、クツツ、或は斷れ、鉤心或は出でて傾敗するをいふ、司馬相如の書に「清道而後行、中道而馳、猶時有一一之」

【甘言】 よろこばしくきこゆる言なり、國語に「言之大甘、其中必苦、語在中矣、左傳昭十一年に「幣重而言甘、誘我也、苦言を見よ、

【閉語】 靜かに語るをいふ、史記信陵君傳に「屏人一、諫鼓」 太平記卷の一に見ゆ、鼓を朝廷に立て、君を諫めんと欲するものは、之を撃ちて通ずるなり、淮南子に「堯置敢諫之鼓、舜立誹謗之木」とあり、管子にも、禹

白し、三十二にして卒す、孔子之を哭して慟して曰く「天我を喪ぼせりと、歴代堯國復聖公に累封し、首に孔子の廟庭に配す、明に至りその後を官して翰林院五經博士となす、一簞ノ食を參看せよ、

【干戈ヲ戢メ、弓矢ヲ彙ム】 戰やみて、世既に治まり、また武器を用ふる所無きをいふ、詩の大雅に「明昭有周、式序在位、載戢干戈、載櫜弓矢」の註に「戢ハ聚、あつむ、櫜ハ音カウ、鞘つづむナリ」とあり、「ユミブクロ」に入るをいふ、一説に、櫜は「オサムル」なりと、亦通ず、

【閉關】 猶ほ崎嶇展轉といふが如し、ナンギスル漢書王莽傳に「士死傷略盡、馳入宮、一一至漸臺」

【閉關タル鶯ノ語ハ花下ニ滑カ】 太平記卷四に見ゆ、白氏文集琵琶行の句に「閉關鶯語花底滑」とあり、閉關とは鳥聲なり、また崎嶇展轉の貌と解く、鶯聲の高低屈曲して面白く聞こゆるをいふ、

【簡稽】 簡は閑なり、稽は計なり、兵器を閑し、士卒を計るをいふ、周禮に「以八式經邦治、二曰聽師田、以一一」

【感激】 感動して奮勵する義、趙岐の孟子章句に「千載聞之、猶有一一孔明の出師表に「由是一一、遂許先

立一一於朝、而備訊、咳」と、注に「訊ハ問ナリ、咳ハ驚キ問フナリ、誹謗ノ木を見よ、

【幹蠱】 幹は善蠱は事なり、事を善くするをいふ、易の蠱の卦初六に「幹父之蠱」とあり、人の子たる者は、前人既に壞るの緒を續ぎ、飭治して、振起するをいふ、

【含糊】 はさ／＼と判明せざる義、舊唐書陸贄傳に「朝廷每爲一一未嘗窮究曲直」

【眼語】 目を以て意中を語るをいふ、五代史に「唐ノ昭宗東遷ス、韓建從ツテ洛に至ル、昭宗酒ヲ舉ゲ太祖ニ屬ス、建太祖ノ足ヲ躡ム、乃チ陽ニ醉ヒテ去ル、建出デテ太祖ニ謂ツテ曰ク、天子宮人ト一一シテ而シテ幕下兵仗ノ聲アリ、恐ラクハ公免レザラント」

【閉候】 閉者となりて伺ふをいふ、漢書傅介子傳に「常爲匈奴一一、遮漢使者」

【鉞口】 鉞は封をなすなり、閉づるなり、口をとちて言はざる義、孔子家語に「孔子觀周、入后稷之廟、有金人焉、三緘其口、而銘其背曰古之慎言人也」

【眼孔小】 見識の狭きをいふ、書言故事に「海錄碎事を引きて「宋ノ太祖嘗テ趙普ト桑維翰ヲイフ、普曰ク、維翰ヲシテ在ラシムルモ、陛下亦用ヒズ、維翰ハ錢ヲ愛スト、上曰ク、苟モ其ノ長ヲ用フレバ、當ニ其ノ短ヲ護

スベシ、措大—ナリ、十萬貫ヲ賜與セバ、則チ破屋子ヲ塞ガント、谷響集に「眼孔小トハ瞻大ナラザルヲイフ」唐書安祿山傳に「玄宗祿山ヲ謂ツテ、眼孔大トイヒシハ、大瞻ヲイヘルナリ」

【監國】 國事を監督する義にて、太子の任なり、左傳閔二年に「君行ケバ則チ守ル、守アレバ則チ從フ、從フヲ撫軍トイヒ、守ルヲ監國トイフ、古ノ制ナリ」

【狂獄】 人をつなく處、郷亭に於ては狂といひ、朝廷に於ては獄といふ、詩の小雅に「宜岸宜獄」岸はもと狂に作る、同じ、

【函谷ノ鷄鳴】 齊の田嬰は宣王の庶弟なり、薛に封ぜらる、子あり文といふ、食客數千人ありて、名聲諸侯に聞えぬ、號して孟嘗君といふ、秦の昭王、孟嘗君の賢を聞き、之を招き見んことを求む、孟嘗君秦に至る、昭王止め囚へて之を殺さんと欲す、孟嘗君人をして昭王の幸姫に至り解免せんことを求む、姫いふ願くは君の狐白裘を得んと、蓋し孟嘗君嘗て昭王に獻せし物にて他の裘なし、たまたま客に狗盜を爲す者あり、秦の藏中に入りて狐白裘を取りて姫に獻ず、姫爲めに王に言ひて釋さるるを得、即ち馳せ去り、姓名を變じ、夜半に函谷關に至る、關の法鷄鳴いて方に客を出す、

孟嘗君昭王の後に悔いて之を追はんことを恐る、客によく鷄鳴を爲す者あり、鷄の鳴くまねせしに、近隣の鷄盡くそれに和して鳴きしかば、乃ち無事に關を出ることを得たり、食頃にして追捕の使果して至りしかども、及ぶ能はざりき、詳しくは史記を見よ、

【閉藏】 隔藏に同じ、閉は「ダツル」義、食貨志に見ゆ、

【雁塞】 梁州記に「梁伯縣ノ界ニ一アリ、傳ヘテイフ、此ノ山ニ大池水アリテ、雁アリ之ニ栖集ス、故ニ一ト名ヅク」

【監察御史】 六典に「一—ハ、百僚ヲ分察シ、郡縣ヲ巡按シ、刑獄ヲ糾視シ、朝儀ヲ肅整スルコトヲ掌ル」唐書ノ百官志に「一—ハ六察ヲ掌司ス、一ハ官人ノ善惡ヲ察ス、二ハ賦役ノ均シカラザルヲ察ス、三ハ農桑ノ勤メズ、倉廩ノ耗減セルヲ察ス、四ハ妖猾盜賊ヲ察ス、五ハ茂才異等ヲ察ス、六ハ黠吏豪宗兼并縱暴ヲ察ス」

【汗衫】 書言故事に「夏衣ヲ一ト名ヅク、漢ノ高祖項羽ト大ニ戰ヒ、汗中單ニ透ル、後チ改メテ一ト名ヅク」と、カザミ我が國にても古は汗取りの服をいふ、

【閑散】 閑暇にして事なきをいふ、韓愈の進學解に「投

閑置散、乃分之宜」

【寒山詩集】 一卷、豐干拾得詩一卷を附刊す、この三人は皆唐の貞觀中台州の僧、世頗るその異跡を傳ふ、この集は乃ち台州の刺史閻丘胤僧道翹をして蒐輯せしめしところ、寒山子の詩最も多く、拾得之に次ぐ、豐干は詩二首を存するのみ、その詩多くは偈頌に類す、而して時に名理あり、宋の邵雍の擊壤集の一派は、この書その濫觴なり、

【雁山ノ雲】 (前途程遠シ)を見よ、

【干支】 (十干十二支)を見よ、

【幹止】 幹は事なり、止は居なり、書經に「爾乃尙寧」一、汝の事とする所に安んじ、爾の居る所に安んぜよとの義、

【幹事】 幹は善なり、事を善くする義、また幹は根幹なり、事の根幹となるの義とも解す、易の乾の卦の文言に「君子體仁足以長人、貞固足以幹事」

【漢子】 輟耕錄に「今人賤丈夫ヲ謂ツテ一トナス」と、惡漢、無賴漢の漢は皆この義なり、

【雁齒】 橋の上に横へたる材木の段、遊仙窟に「キザメリ」と訓せり、註に「刻木又刻石爲之、其形一前一却、如雁之行列、人鳥牙齒之形」と、白樂天の句に「一一小

紅橋

【顏驥】 漢武故事に「上至郎署、舍見一老郎、鬚眉皓白、問何時爲之、對曰、臣姓顏名驥、文帝時爲郎、文帝好文、而臣好武、景帝好老、而臣尙少、(一本に老を美に作り、尙少を貌醜に作る)陛下好少而臣已老、是以三葉不遇也、上感其言、擢爲會稽都尉」とあり、十訓抄第九に「齡亞—一過三代而猶沈」とあるは、この故事に本づく、

【監修】 史書の編修を監督する義、合璧事類に「唐太宗以宰相、一國史」

【顔子ガ一瓢】 太平記卷十七に見ゆ、顔子名は回字は淵、孔門第一の高弟なり、論語雍也に「子曰賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂、賢哉回也」

【顔氏家訓】 二卷二十篇、隋の顔之推撰す、多く世俗の失を辨正し、以て子孫を戒む(顔之推を參看せよ)

【韓詩外傳】 燕人韓嬰著す、嬰は漢の文帝の博士なり、この書、その家傳の詩學を述ぶるもの、故事古語を雜引して之を證するに詩詞を以てす、經の本義と比附せず、別に一義をなす、故に外傳といふ、采るところ周秦諸子と出入す、古書たるとうたがひなし、

【顔師古】字は籀、瑯琊臨沂の人、顔子三十七世の孫性簡峭、輩行を視て傲然たり、唐初秘書監となり、經史を校定し、班固の漢書を註し、五禮を修し、子爵銀青光祿大夫弘文館學士に進む、時人顔祕書と稱す、

【顔之推】字は子介、協の子、瑯琊臨沂の人、齊亡びて周に入り、御史上士となり、隋開皇中歿す、文集三十卷、家訓二十篇あり世に行はる、

【甘心】はらいせして意を快くする義、史記齊の世家に「召忽管仲ハ讐ナリ、請フ得テ甘心シ、之ヲ醢ニセシ」とあり、醢はその肉を、シシビシホにするなり、また屈原傳に「秦、漢中ノ地ヲ割キテ、楚ニ與ヘテ以テ和ス、楚王ノ曰ク、地ヲ得ルヲ願ハズ、願クハ張儀ヲ得テ而シテ甘心セン」とあり、左傳莊九年にも見ゆ、

【寒心】恐れてぞつとするなり、史記の荆軻傳に「秦王ノ暴ヲ以テ、而シテ怒ヲ燕ニ積ム、一ノ爲スニ足レリ」の註に「凡ソ、寒キコト、甚シケレバ、則チ心戰ク、恐懼スルモ亦戰ク、今懼ル、ヲ以テ、寒キニ譬フ心戰ヲナスベキヲイフ」

【函人】具足師なり、玉篇に「函ハ鎧ナリ」周禮冬官考工記に「燕非無函也、夫人而能爲函也、孟子に「矢人豈不仁於函人」

台教を傳ふ、天平寶字元年大和尚の號を賜ふ、同七年五月寂す、年七十七、

【顏真卿】字は清臣、瑯琊臨沂の人、師古五世の從孫にして、臬卿の從弟なり、少くして博學、辭章に工なり、官太子の太師に至り、魯郡公に封ぜられ、書法を張長史に學び、草書に工、又楷書に絶妙なり、柳公權、釋懷素等、皆その門に學ぶといふ、著す所、顏魯公集あり、また法帖には中興頌、八關齋功德記、放生池碑等數十種あり、嘗て平原の太守たりし時、安祿山反す、河朔盡く陥る、惟平原のみ城守具備す、玄宗聞て之を稱揚す、李希烈、汝州を陥る、真卿救を奉じ往て之を諭し、屈せずして殺さる、詳しくは唐書卷の一百五十三卷、舊唐書一百二十八卷を見よ、

【甘蔗】「サタウキビ」形は蜀黍の如くにして、葉稍狭し、莖は竹に似て高さ丈餘に至り、葉は互生す、莖に甘き汁あり、生にて食ふべく、また砂糖を製すべし、吳錄に「交趾ノ蔗ハ圓數寸、長サ丈餘、汁ヲ取リコレヲ曝セバ、數日ニシテ飴トナル、口ニ入ルレバ即チ消ス、彼ノ人之ヲ石蜜トイフ」世説に「顧愷之、蔗ヲ食フ毎ニ、尾ヨリ中ニ至ル、或人之ヲ問ヘバ、曰ク漸ク佳境ニ入ルト」

【韓信】史記の淮陰侯列傳に「一ハ淮陰ノ人ナリ、城下ニ釣ス、漂母水を以て絮を撃ちてさらすことを業とするもの」ソノ飢エタルヲ見テ飯セシム、信喜ビテ漂母ニ謂ツテイハク、吾必ズ以テ重ク母ニ報ズルアラント、母怒リテ曰ク、大丈夫自ラ食スルヲ能ハズ、吾王孫（王孫とはなほ公子といふが如し）ヲ哀ンデ食ヲ進ム、豈報ヲ望マンヤト、淮陰ノ屠中ノ少年信ヲ侮ル者アリ、曰ク汝長大ニシテ好ンデ刀劔ヲ帶ブト、雖モ中情怯キ耳ト、衆之ヲ辱メテ曰ク、能ク死セバ我ヲ刺セ、死スル能ハザレバ、我ガ勝下ヨリ出デト、是ニ於テ信之ヲ熟視シテ俛シテ勝下ヨリ出デテ蒲伏ス、一市ノ人皆信ヲ笑ヒテ以テ怯トナス、蕭何之ヲ漢ノ高祖ニ薦メテ曰ク、信ノ如キモノハ國士無雙ナリ、王必ズ、天下ヲ爭ハント欲セバ信ニアラザレバ、與ニ事ヲ計ル者ナシト、高祖用ヒテ大將トシ、ツヒニ能ク天下ヲ定ム、後チ信ヲ齊王ニ封ズ、詳しくは本傳を見よ、

【鑑真】姓は淳于氏、唐の揚州江陽縣の人、年十四にして智滿禪師に就き三藏を極め殊に戒律に精し、我が入唐僧永叙普照の請によりて、その徒八十四人と共に來朝す、時に天平勝寶六年なり、敕して東大寺に居らしむ、始めて戒壇院を立て、大に律宗を唱へ、兼ねて

【檻車】檻は罪人又は猛獸などをとらへ入る「ヲリ」

一は罪人を送る車、漢書陳餘傳に「貫高與趙王、一詣京師、註に「板ヲ以テ四周ストアリ」

【干城】大將をいふ、詩經の周南に「赴赴武夫、公侯一註に「赴赴ハ武キ貌、干ハ盾ナリ、干城ハ皆外ヲ扞ギテ内ヲ衛ル所以ノ者ナリ」

【韓湘】唐の人、愈の姪、字は清夫、落魄不羈、文公之に學を勉めしむ、曰く吾が學ぶところは公の知る所るにあらずと、後果して仙し去る、

【嚴牆】牆の將に覆らんとする如き者をいふ、孟子に「知命者、不立乎一之下」

【干將莫耶】昔支那の名劍の名、吳越春秋に「吳王闔閭干將ニ劍ヲ作ランコヲ請フ、干將ハ吳ノ人、其ノ妻ヲ莫邪トイフ、干將五山ノ精、六金ノ英ヲ采リ、天地ヲ候ヒ陰陽ヲ伺ヒ、百神臨視ス、而シテ金鐵ノ精、未ダ流レズ、夫妻乃チ髮及爪ヲ剪リテ、之ヲ爐中ニ投ズ、金鐵乃チ濡ラギ、遂ニ二劍ヲ成セリ、陽ヲ干將トイヒ、龜文ヲナセリ、陰ヲ莫邪トイヒ、漫理ヲナセリ、干將其ノ陽ヲ匿シ、其ノ陰ヲ出シ、以テ闔閭ニ獻ズ、闔閭甚ダ之ヲ寶重ス」とあり、荀子ノ君子篇ニモ「一、古之良劍

重ス」とあり、荀子ノ君子篇ニモ「一、古之良劍

【乾鵲噪イデ行人至ル】かさゝぎが頻に鳴くときは旅人の歸るを告ぐる兆なり、西京雜記に「眼、鵲有酒食、乾鵲噪行人至、人の目うごくときは必ず酒食を得る事あるなり、また、漢樊噲問陸賈曰、自古人君受命於天、有瑞應乎、賈曰、目瞶得酒食、燈花得錢財、乾鵲噪而行人至、蜘蛛集而百事喜、小既有徵、大亦宜然、」

【紺珠】記憶をよび起す珠なり、宋の王應麟の編せる、小學紺珠は、天地萬物の名數をあつめて、小學の備忘に供するの意にて名づけたるなり（記事珠）を見よ、

【閉出】「スキマ」を伺ひてひそかに外出する義、シノビアルキ、史記張耳傳に「趙王」閉行に同じ、

【刊書】書を版にふるをいふ、陔餘叢考に、河汾燕閒錄を引きて「隋ノ開皇十三年十二月八日、敕シテ遺經悉ク雕版セシム、王阮亭以テ刊書ノ始ト爲ス、胡應麟ノ筆叢ニモ、亦イフ、雕本隋ニ肇マリ、唐ニ行ハレ、五代ニ擴マリ、宋ニ精シ、」

【簡書】戒命をいふ、隣國急あれば、「一」を以て相戒命するによりていふ、詩の小雅に「豈不懷歸、畏此一」漢書、百二十卷、後漢の扶風の人班固（字ハ孟堅）撰す、その妹昭續て之を完成す、前漢十二代二百三十年

【顔】トイフとあれども非なり、
【顔】（顔）を見よ、
【甘井】莊子に「直木先伐、一先竭」と、鮑昭の秋夕の詩に「泉涸、一竭、節徒芳、歲殘」
【甘露】美食なり、露は脆に通ず、史記刺客傳に「旦夕得一以養親」
【汗青】書籍をいふ、文天祥の過零丁洋詩に「留取丹心照一汗青」汗簡を見よ、
【陷穽】「オトシアナ」説文に「穽ハ陷ナリ、獸ヲ取ル所以ノ者ト、穽一に阱に作る、同じ、」
【沼井之蛙】沼は坎に同じ、地のくぼみて「ウツロ」になりたる處をいふ、「一」ハ、井の底の蛙にて道の大を知らざる人に喩ふ、莊子秋水篇に「沼井ノ蛙、東海ノ鼈ニ謂ヒテ曰ク、吾ガ樂至レリト、東海ノ鼈之ニ大樂ヲ告グ、沼井ノ蛙、適適然トシテ驚キ、規規然トシテ自失ス、」
【巖棲ノ伴】巖窟などに棲む隱者のなかま、韋莊の句に「欲結巖棲伴」
【甘井先ツ竭ク】才能ある者は、早く衰廢するに喩ふ、莊子に「直木先伐、一」この語文子にも見ゆ、
【干戚】干は「タテ」戚は「マサカリ」詩經に「干戈戚揚」と

閉の事を紀す、十二帝紀八表十志七十列傳に分つその體例は、史記に比して整齊すと雖も、文章は司馬遷に及ばず、

【雁書】信書をいふ（雁帛）を見よ、

【肝食】肝は晩なり、勤勞して晩く食するをいふ、左傳に「楚君大夫其「一」乎」また漢書張湯傳に「日肝天子忘食」

【閉色】「マジリ」たる色なり、禮記の玉藻の註に「木ハ青クシテ土ノ黄ナルニ克ツ、故ニ綠色、青黄ヲ東方ノ閉色ト爲ス、火ハ赤クシテ金ノ白キニ克ツ、故ニ紅色、赤白ヲ南方ノ閉色ト爲ス、金ハ白クシテ木ノ青キニ克ツ、故ニ碧色、青白ヲ西方ノ閉色ト爲ス、水ハ黒クシテ火ノ赤キニ克ツ、故ニ紫色、赤黒ヲ北方ノ閉色ト爲ス、土ハ黄ニシテ水ノ黒キニ克ツ、故ニ黼黄ノ色、黄黒ヲ中央ノ閉色ト爲ス、正色」を見よ、

【寒食】荆楚歲時記に「冬至ノ後一百五日ニシテ、疾風甚雨アリ、之ヲ「一」トイフ、また周禮に「司烜氏ハ、仲春ニ木鐸ヲ以テ徇シ、火ヲ國中ニ禁ズ、初學記の註に「曆ニ據レバ、合ニ清明前二日ナルベシ」亦冬至を去る一百六日なりとするあり、鄴中記には「并州ノ俗、冬至ノ後百五日、介子推ノ爲メニ、火ヲ斷ジ冷食ス、之ヲ「一」

あり、禮記にも「鐘鼓「一」とあり、轉じて武器の總稱とす、
【飲然】自ら満足せざる意、孟子に「附之以韓魏之家、如其自視「一」即過人遠矣」
【惘然】漢書文帝紀に「一」念外人之有非の註に「寢視安カラザル貌」とあり、また惘然に通用して、勁忿の貌とするもあり、唐書王叔文傳に「一」以爲天下無人、
【惘然】勁忿の貌、左傳昭十八年に「今執事「一」授兵登陣、將以誰罪、揚子法言に「猛ナリ、晉魏ノ閉ニ惘トイフ」
【濫泉】正しくたてに湧き出る泉なり、爾雅釋水に「一」正出也」とあり、濫一に濫に作る、詩經に「觴沸「一」
【韓宣子適魯】蘇軾の李氏山房藏書記の句なり、左傳昭二년에「晉侯使韓宣子來聘、觀書于太史氏、見易象與魯春秋、曰、周禮盡在魯矣、吾乃今知周公之德、與周之所以王也」とあるをいふ、
【閉然スルナシ】閉は罅隙なり、閉然は其の罅隙を指して、非議するをいふ、論語泰伯篇に「禹、吾無閉然矣、非飲食而致孝乎鬼神、惡衣服而致美乎黻冕、卑宮室而盡力乎溝洫、禹、吾無閉然矣」と無閉然とは「スキマ」を指して、非議すべき點なきをいふ、

【干振】夜警する者をいふ、ヨマハリ干は干振は撃盜賊を干ぎ撃つ義、左傳襄二十五年に「陪臣一有淫者」

【閉息ヲ容レズ】淮南子の原道訓に「時之反側、閉不容息」註に「時ノ反側ノ閉ハ、氣息ヲ容レザルヲイフ、促マルノ甚シキナリ」

【漢楚八箇年ノ戰】太平記卷十に見ゆ、漢は高祖、楚は項羽なり、史記に「項王謂其騎曰、吾起兵至今八歳矣、身七十餘戰」

【勘當】君父の怒に觸れて斥けらるゝを「勘當」といふことと文徳實錄に見ゆ、その罪の科を勘當へて律に當つる意なり、唐書に「軍中不暇一」

【甘棠ノ詠】召公(名は奭)周の太保たり、史記の燕世家に「召公之治西方、甚得兆民和、召公巡行郷邑、有棠樹、決獄政事其下、自侯伯至庶人、各得其所、無失職者、召公卒而民人思、召公之政、懷棠樹、不敢伐、歌詠之作、甘棠之詩」とあり、括地志に「召公廟在洛州壽安縣西北五里云云、詩の召南に「蔽芾甘棠、勿剪勿伐、召伯所茇」蔽芾は盛なる貌、甘棠は杜梨なり、「コリンゴ」剪はその枝葉を剪るなり、伐はその條幹を伐るなり、召伯は方伯なり、茇は草舎なり、召伯南國を循行し、以て

文王の政を布く時、或は甘棠の下に舎る、後人その徳を思ふ、故にその樹を愛して傷くるに忍びざるなり、【簡擢】精しくえらびて抜きとる、葉適の句に「一疎賤」

【顔涿聚】呂氏春秋に「一、梁父大盜也、學於孔子、左傳に「晉伐齊、戰于鞌、齊師敗績、知伯親禽顔庚」杜預の註に「犁丘ハ陽ナリ、顔庚ハ齊ノ大夫一」ナリ

【韓侂胄】金の世宗殂するの年、宋の孝宗も亦位を子光宗に禪る、光宗其の皇后李氏の言に惑ひ、頗る禮を父皇に失ふ、是を以て群臣國人服せず、趙汝愚、韓侂胄と謀り、光宗の子寧宗を擁立して位に即かしむ、汝愚相となり、大儒朱熹(晦菴)を任用す、侂胄もと擁立の功を負ひしに、恩賞意に滿たざりしかば、深く汝愚を怨み、其の外戚の故を以て漸く寧宗の親幸を得るや、先づ構へて朱熹を逐ひ、汝愚を竄して、國政を專にす、朱熹一たび黜けらるゝに及んで、天下嚮然として朝政を非とし、侂胄を咎む、侂胄怒り、朱熹の門流を目して偽學の徒とし、其の仕官の途と、其の著書の流布とを嚴禁す、時にわが紀元千八百五十七年なり、侂胄已に宋の國政を專にし、又外征を起して、大に威權を振

【齒莖】蓮花をいふ、爾雅に見ゆ、【肝膽傾ク】心をうちあかし、誠實を盡すをいふ、曾鞏の句に「談笑相逢一」

【邯鄲ノ夢】盧生が、邯鄲の道上にて、生涯の經歷を夢みたる故事、沈既濟の枕中記に「唐ノ開元七年、道士呂翁、神仙ノ術ヲ得タリ、邯鄲ニ遊ブ、道中ノ邸舎ニ息ヒ、少年盧生ヲ見ル、短褐ヲ衣テ青駒ニ乘リ、翁ト言笑ス、盧生其ノ衣裝ノ敝レタルヲ顧ミテ、乃チ歎ジテ曰ク、大丈夫世ニ生レテ諸ハズ、困スルコト是ノ如シト、翁曰ク、子談諧方ニ適シテ、其ノ困ヲ歎ズルハ何ゾヤト、生曰ク、吾レ常ニ學ニ志ス、自ラ惟フ、青紫拾フベシト、今已ニ壯ヲ過ギテ、猶ホ賦畝ニ勤ム、困ニアラズシテ何ゾ、言訖リテ目昏ミ、寐ヲ思フ、時ニ主人方ニ黍ヲ蒸ス、翁乃チ囊中ノ枕ヲ探リ、之ニ授ケテ曰ク、子吾ガ枕ニ枕セバ、當ニ子ヲシテ榮適志ノ如クナラシムベシト、其ノ枕青磁ニシテ、其ノ兩端ニ窺アリ、生、首ヲ俛シテ之ニ就ク、其ノ窺ヲ見レバ、漸ク大ニ明カナリ、即チ身ヲ舉ゲテ入ル、遂ニ其ノ家ニ至ル、數月ニシテ清河ノ崔氏ノ女ヲ娶ル、女ノ容甚ダ麗シクシテ、生質愈厚、明年進士ニ舉ゲラレテ登第ス、楊ヲ釋キテ渭南ノ

はんとす、金の章宗、胥持國を任用してより、國政亂れ北方の塔塔兒諸部叛きて、連年其の邊境を擾すを機とし、わが紀元千八百六十六年、遂に盟に背きて金を伐つ、章宗逆擊して大に之を破り、勢に乗じて南下し連に諸郡を陷る、宋人大に懼れ、侂胄を殺し、其の首を金に送りて和を請ふ、わが紀元千八百六十八年に至り、兩國の和議新に成りぬ、

【雁塔】ただ塔をいふ、釋氏要覽に「西域記ニイフ、昔有比丘見群雁飛翔、戲言知時、忽有一雁、投下自殞、衆曰、此雁垂誠、宜旌厚德、於是瘞雁、建塔、また塔の名、次條を見よ、

【雁塔名ヲ題ス】成語考に「進士及第謂之雁塔題名」と註に「唐ノ章肇及第シテ偶、慈恩寺ノ雁塔ニ于テ名ヲ題ス、後人之ニ效ヒ、遂ニ故事ヲ成ス、神龍ヨリ以來杏園宴ノ後、慈恩寺雁塔下ニ於テ名ヲ題ス、同年ノ中、善書ノ者ヲ推シテ之ヲ紀セシム、他時將相ニ至ル者アレバ、則チ之ヲ朱書ス」この事、古今詩話に出づ、

【甘煖】口にうまささ食物と、體にあたゝかなる衣服をいふ、孝子傳に「竭力備質、以致一」

【閉澹】心のしづかなると、魏志阮瑀傳に「瑀、孫渾字長成、一寡欲、恬澹に同じ、

尉ニ轉ズ、俄ニ監察御史ニ遷リ、起居舍人知制誥ニ轉ズ、ソレヨリ累遷シテ、同中書門下平章事トナル、同列復タ邊將ト交結シテ不軌ヲ圖ルト誣ユ、制獄ニ下サル、中官之ヲ保スルヲ爲シテ、死ヲ減ジテ驩州ニ投ズ、數年ニシテ帝寃ヲ知リテ、復タ進メテ中書令ト爲ス、燕國公ニ封ゼラル、五子ヲ生ム、孫十餘人有リ、後年八十ヲ逾ユルヲ以テ、病ミテ薨ズ、盧生欠伸シテ寤ムレバ、其ノ身方ニ邸舍ニ假シ、呂翁其ノ傍ニ坐シ、主人黍ヲ蒸シテ未ダ熟セザルヲ見ル、生慨然トシテ興キテ曰ク、豈其ノ夢寐ナルカト、翁生ニ謂ツテ曰ク、人生ノ適モ、亦是ノ如シト、生慨然トシテ良久シクシテ謝シテ曰ク、夫レ寵辱ノ道窮達ノ運、得喪ノ理、死生ノ情、盡ク之ヲ知ル、此レ先生吾ガ欲ヲ窒グ所以ナリ、敢テ、教ヲ受ケザランヤト、稽首再拜シテ去ル

【肝膽モ楚越ナリ】 物は觀察の仕かたによりて、肝と膽との近接するものも、楚と越との遠隔するが如くなるをいふ、莊子徳充符篇に「自其異者、既之、肝膽楚越也、自其同者、既之、萬物皆一也」

【咸池】 日の浴する處の天池なり、淮南子に「日浴於一楚辭に「飲余馬於一兮、總余轡於扶桑、」また堯の樂なり、周禮春宮大司樂に「舞一以祭地」

【閑地】 無事の地をいふ、また閑散の義にも用ふ、晉書都督傳に「乞一自養」

【眼中之人】 知人シルベをいふ、何遜の詩に「不見一子、一吾老矣」

【函丈】 師の席をいふ、禮記の曲禮に「若非、飲食之客、則布席、席閉函丈」函は容イルなり、飲食の客に非ざれば、則ち是れ講説の客なり、席の閉一丈を函るとは講説するときは、即ち布く所のの兩席の中閒、相去ること、一丈の地を容る、餘地を存するなり、師に呈する書簡に、某先生函丈と書くはこれに本づく

【顔蠲】 周の齊人、戰國の時隱居して仕へず、嘗て言ふ窮に處する方あり、その藥四味あり、一に曰く、無事以て貴に當つ、二に曰く早寢以て富に當つ、三に曰く、安歩以て車に當つ、四に曰く晚食以て肉に當つと、東坡云ふ、此の若きは窮に處するに巧なりと謂ふべしと

【韓朝宗】 唐の人、思復の子、荊州の刺史となる、李白書を與へて曰く、生きて萬戶侯に封ぜらるゝを願はず、但一たび韓荊州を識らんとを願ふと、襄に二井あり、飲む者死す、朝宗文を移して神を諭す、飲む者恙なし、公井と號す

【翰鳥ノ繳ヲ出ツ】 太平記卷二十九に見ゆ、鈔に「文選第十七ニイフ、若翰鳥繳而墜層雲之峻、言速也云云、周易注ニ云、翰高飛也、說文曰、繳生絲縷也、高クトブ鳥ノ絲ニカ、リテハタト落ルヲイフタゾ、今ノ心ハ此文ヲ翻シテ書イタゾ」

【閑諜】 諜は何なり、閑隙を伺候するをいふ、正字通に「陰ニ敵情ヲ探ルヲ一トイフ、爾雅ニ之ヲ倪ト謂ヒ、左傳ニ之ヲ諜ト謂ヒ、亦游偵トイフ、俗ニ細作トイフ」と、史記に「謹烽火、多閑諜、」マハシモノ

【閑田】 主なきの田地なり、禮記に「名山大澤、不以封、其餘以爲附庸」

【感篆】 感銘に同じ、篆文にて刻するの意、心に銘記して忘れざるをいふ

【監奴】 奴僕の長をいふ、コモノガシラ漢書霍光傳に「初光愛幸一馮子都」

【簡牘】 「テガミ」古は木札に書くを牘、竹札に書くを簡といふ、杜預の左傳序に「大事書之於策、小事一而已」

【肝腦地ニ塗ル】 慘殺せらるゝをいふ、史記劉敬傳に「使天下之民肝腦塗地、父子暴骨中野」

【諫ニ從フコト圓ヲ轉ズルガ若シ】 人の諫に従ふこと、盤上にまろき球を轉ばす如く、少しも逆ふ所らな

【甘寧錦纜】 吳志に「甘寧字ハ興霸、巴郡ノ人、性豪奢輕俠ナリ、ソノ出入スル、歩ニハ則チ重騎ヲ陳ネ、水ニハ則チ輕舟ヲ連ヌ、侍從文綉ヲ被、幃帳珠玉ヲ以テ飾トナス、常ニ錦纜ヲ以テ舟ヲ維グ、去ルニ或ハ割棄シテ、以テ奢ヲ示ス」甘寧は孫權の將にして計略に長じ武功多し、官折衝將軍に至る

【漢ノ三傑】 張良、蕭何、韓信の三人をいふ、高祖本紀に「夫運籌策帷帳之中、決勝於千里之外、吾不如子房、鎮國家撫百姓、給餽饗、不絕糧道、吾不如蕭何、連百萬之軍、戰必勝、攻必取、吾不如韓信、此三人者皆人傑也、子房は張良の字、

【漢ノ蕭芝ガ雉ヲシタガヘケルニ異ナラズ】 十訓抄第一に見ゆ、蕭廣濟の孝子傳に「前漢ノ蕭芝、至孝ナリ、尙書郎ニ除ス、雉數十頭アリ、飲啄宿止ス、上直ニ當リテハ送リテ岐路ニ至リ、下宿シテ門ニ入ルニ及ビテハ、門前ニ飛鳴ス」

【漢ノ陳孝婦】 (陳孝婦)を見よ

【顔ノ徒】 道德を修めて顔回の如くならんと願ふ者は、皆顔の「ナカマ」である、法言に「駟之馬、亦驥之乘

也、歸顔之人、亦顔之徒也

【漢ノ武帝、昆明池ニ遊ビタマフニ云云】十訓抄第一に見ゆ、三秦記に「昆明池、昔有人釣魚、綸絶而去、遂通夢于漢武帝、求去、鈎、帝明日、戲于池、見大魚銜索、取而放之、問、三日、池邊得明珠一雙、帝曰、豈非魚之報耶、昆明池を參看せよ、」

【漢ノ文帝ノ時、一日ニ千里ヲ行ク馬ヲ獻ズ】太平記十三卷に見ゆ、貞觀政要の納諫篇に、昔漢文帝有獻千里馬者、曰吾吉行日三十里、凶行日五十里、鸞輿在前、屬車在後、吾獨乘千里馬、將安之乎、乃償其道里所費而返之、又光武有獻千里馬及寶劍者、馬以駕鼓車、劍以賜騎士、註に「吉行トハ巡幸祭祀ヲイフ、凶行トハ出兵行師ヲイフ、」

【漢ノ丙魏、唐ノ姚宋】駁臺雜話「秦時之無欲」に見ゆ、丙吉字は少卿、累遷して光祿大夫となる、將軍霍光廢立の事あるに及び、吉宣帝を立てんことを勸む、宣帝立ち、吉に爵關内侯を賜ふ、地節三年太子太傅となり、尋いて御史大夫に遷る、神爵三年丞相に拜せらる、人となり深厚にして伐らず、寛大をたふとび、禮讓を好む、五鳳三年薨す、魏相字は弱翁、賢良に擧げられ、對策高第をもて茂陵令となる、遷りて河南の太守とな

り、姦邪を禁じ豪強畏服す、後、章賢に代りて丞相となる、時に丙吉御史大夫たり、二人心を同うして政を輔く、相人となり嚴毅にして吉の寛大なるに如かず、神爵三年薨す、姚崇字は元之少くして儻氣節を尚ぶ、長じて乃ち學を好む、玄宗の朝宰相となり、宋璟と共に心を協せ、治を圖り開元の良政をなす、宋璟は耿介にして大節あり、學を好み、文辭を善くす、玄宗立つに及び、刑部尚書となり、十七年尚書右丞相となり、二十五年に卒す、姚宋二人相繼ぎて相となり、崇は善く變に應じ務を成し、璟は善く法を守り正を持す、二人志操同じからざるも、心を協せて輔佐し、政治和平、百姓富庶なり、唐朝の賢相、前には房杜を稱し、後には姚宋を稱す、

李夫人を思念して已まず、自ら詩賦を作りて、夫人を傷悼せり、詳しくは漢書外戚傳を見よ、

【衡枚】(枚ヲ衡ム)を見よ、

【干寶】字は令升、晉の新蔡の人、書記を博覽し、才器を以て召されて著作郎となり、晉紀を著す、直にして能く婉、咸良史と稱す、搜神記三十卷を作りて以て劉惔に示す、惔曰く、卿は鬼の董狐と謂ふべしと、晉に仕へて始安太守となる、一説に寶の姓は干、

【韓伯愈至孝】漢書に「韓伯愈性至孝ナリ、時ニ過アリテ、母之ヲ杖テバ、則チ大ニ泣ク、母曰ク、他日汝ヲ杖チシニ、汝悦ビテ之ヲ受ケシガ、今日汝ヲ杖ツニ何爲ゾ悲泣スルト、伯愈曰ク往者杖ヲ受ケシニ、常ニ痛メリ、因リテ以テ母ノ康健ナルヲ知レリ、今ヤ痛マズ、母ノ力ノ衰フルヲ知ル、是ヲ以テ悲泣ス、」愈は一に愈に作る、

【早魃】「ヒデリをいふ、詩經の大雅に「早魃爲虐、如惔如焚、魃は旱神なり」

【簡拔】選びぬくこと、諸葛亮の出師表に「是以先帝一以遺陛下」

【閉髮ヲ容レズ】時の甚だ急にして、すこしの「ヒマ」もなきをいふ、說苑の正諫篇に「其出不出、閉不容髮」

【汗馬ノ勞】戰功をいふ、戰に馬疾く馳するときは汗出づ、故にいふ、史記の蕭相國の世家に「高祖、蕭何ガ功ノ最盛ナルヲ以テ、封シテ鄼侯トナス、食ム所ノ邑多シ、功臣皆曰ク、臣等身堅ヲ被リ、銳ヲ執リ、多キ者ハ、百餘戰、少キ者モ數十合、城ヲ攻メ、地ヲ略スルコト、大小各差アリ、今蕭何未ダ嘗テ汗馬ノ勞アラズト、」

【巖扉】岩屋のとびら、隱者などの住むところ、李白の

【衛尾相隨フ】 衛は馬衛なり「クツワ」尾は馬尾なり、行路狭くして並び驅ることを得ず、一騎づつ前後に引續き随ひ行く義。

【韓非子】 舊、韓子と稱す、宋以後、非の字を加へて、韓愈に別てり、二十卷、五十五篇、史記の列傳に「韓非ハ韓ノ諸公子ナリ、刑名法術ノ學ヲ喜ム、韓ノ削弱セルヲ見テ、數、書ヲ以テ韓王ヲ諫ム、王用フルコト能ハズ、是ニ於テ孤憤、五蠹内外儲説、説林、説難等十餘萬言ヲ作ル、人ソノ書ヲ傳ヘテ秦ニ至ル、秦王之ヲ見テ曰ク、寡人コノ人ヲ見テ與ニ遊ブヲ得バ死ストモ恨ミズト、李斯曰ク、此レ韓非ガ著ス所ロノ書ナリト、秦因テ急ニ韓ヲ攻ム、乃チ非ヲ遣リテ秦ニ使セシム」と是レ韓非ガ書を著すの因なり、この言の如くなれば非が書中に初見秦の篇あるべきに非ず、始皇が見たるところの書は、非が韓に在りし時に著す所ろの者に係る、初見秦、存韓の二篇は、非が秦に奉使中に作りしところの書なれば、その本國のために游説し、その直言剛議は、専ら李斯の説を許さ、本國を保存することを辯じたる者に係る、さればこの二篇は後人の補ひたる者なること疑ひなし。

【姦富】 不義なることをして富める者なり、史記の貨殖傳に見ゆ、鶴林玉露に「本富ヲ上トナシ、末富之ニ次ギ、姦富ヲ下トナス、今ノ富メル者ハ、大抵皆姦富ナリ、而シテ本ヲ務ムルノ農、皆姦富ノ家ニ僕妾タリ、嗚呼悲イカナ」

【漢武鼎ヲ得テ以テ其ノ年ニ名ヅク】 蘇軾の喜雨亭記に見ゆ、武帝元狩六年夏、寶鼎を汾水の上に得て、元を改め元鼎といふを斥す、

【悍婦ノ齋ヲ持シ、佛ヲ禮スルハ、奴婢ノ鞭箠ヲ減ズルニ如カズ】 聽松堂語鏡に「悍婦持齋禮佛、佛不如減奴婢之鞭箠」とあり、心あらし女の佛を禮拜し、齋をたもちて、後生を願ふよりは、平生奴婢の過失を打擲することを減ずることの、かへつて神の冥助あるに如かずとなり、

【衡壁輿榭】 降伏の禮なり、左傳僖六年に「許男面縛衡壁、大夫衰絰、士輿榭、榭は棺なり、身に親しむ義、輿は荷なり、壁を以て贊とするも、手を縛せるが故に、口に衝ひなり、將に死を受けんとす、故に衰絰して棺を荷ふなり、

【簡朴】 煩細なることなく、てがるにしてかざりなき義、陸游の句に「衣冠—古風存」

【翰墨】 筆蹟に同じ、宋史に「特妙于一、沈著飛翥、得王獻之筆意」

【乾沒】 貨利を掩ひ取り、没して己が有とすること、水の乾き盡る如きをいふ、一説に、あらかじめ物を貯へ居き、時を待ちて利を得るを乾といひ、利を失ふを沒とすと、史記張湯傳に「始爲小吏—」

【監本】 國子監にて、刊行せし本をいふ、陸深の金臺記に「胡致堂、明宗ヲ論ジテ曰ク、國子監ニ命ジテ木本ヲ以テ書ニ印ス、又監本ヲ以テ正トナス」と、それよりひろく官版の本をもいふ、

【寒盟】 舊約に背くをいふ、チカヒニソムク「古雋考略」に「寒は歇ナリ」と「尋盟」を見よ、

【緘黙】 無言なり、類書纂要に「—トハ、緘ハ封ナリ、其ノ口ヲ封ジテ戒メテ言ハザルナリ」と、家語に「孔子周二觀テ、后稷ノ廟ニ入ル、金人アリ、其ノ口ヲ三緘ス、而シテ其ノ背ニ銘ジテ曰ク、古ノ言ヲ慎シム人ナリ、多言ナレバ敗多シ、口ハ是レ何ヲカ傷ル、禍ノ門ナリト」

【監門】 門卒なり、戰國策に「梁—子」また周禮に「—養之註に「—ハ門徒ナリ」

【咸陽】 縣の名、安西に屬す、秦の都、括地志に「咸陽故亦名渭城、在雍州咸陽縣東十五里、京城北四十五里」

【咸陽宮】 (秦ノ始皇)を見よ、

【韓愈】 字は退之、鄜州南陽の人、七歳書を讀み、日に數千言を記す、長ずるに及び、六經百家の學に博通す、德宗に事へ、監察御史と爲る、事を言ふを以て、陽山の令に貶せらる、憲宗の朝、佛骨を論ずるを以て、潮州刺史に貶せられ、鱷魚の患を除く、尋て袁州に改めらる、後ちまた朝に還り、吏部侍郎と爲り、卒して禮部尙書を贈らる、諡して文といふ、愈宏才卓識を以て、力を古文に用以、八代の陋習を一洗し、唐の文章をして周漢に追蹤せしむ、又孟子の風を慕ひ、異端を排斥して、儒學を扞衛す、世その功を多として、孟子に配するに至る、昌黎文集あり

【巖廊】 殿廡をいふ、巖峻(イカメシクタカシ)の廊なり、朝廷の義に用ふ、漢書董仲舒傳に「虞舜之時、游於—之上、垂拱無爲、而天下太平」

【坎壞】 陷壞また帕輶に作る同じ、不遇にして志を得ざる義、フシアハセ、楚辭に「志—而不達」また文選に「陷壞懷百憂」

【橄欖】 格物論に「—ハ大サ棗ノ如シ、兩頭尖リテ青色ナリ、二月ニ花サキ、九月ニ熟ス、生ニテ噉ヘバ味酢甘ニシテ、香、雞舌ニ勝レリ、核ニ稜アリ、内ノ三竅ニ仁

アリ、煮テ食ヘバ、酒毒ヲ解ス、茶ノ中ニ置ケバ尤モ佳ナリ、野生ノ者ハ子繁シ、樹峻ニシテ梯スベカラズ、但根下方寸許ヲ刻ンデ鹽ヲ中ニ納ルレバ、一タニシテ子皆落ツ、群芳譜に「一名ハ青果、一名ハ南果、一名ハ忠果」

【翰林】 文筆なり、古は羽翰を以て、筆となす、故に筆を翰といふ、揚子雲の長楊賦の序に「聊因筆墨之成章、故藉翰以爲主人、子墨爲客卿以諷」の註に「翰ハ筆ナリ、翰林ハ文翰ノ多キコト、林ノ若キナリ、また一院は官衙の名なり、學士の職、もと文學言語を以て、出入侍從し、因て參議諫諍するを得、一院はその待詔の所なり、唐の玄宗一待詔を置き、四方の表疏批答應和文章を掌らしむ、

【簡練】 簡は擇ぶ義、擇びて練習せしむるをいふ、禮記に「一桀俊ニまた簡練は精しく擇ぶ義、

【甘露】 天酒ともいふ、瑞應圖に「王者ノ徳天ニ至リ、和氣感ズレバ、則チ一松柏ニ降ル」また孫氏瑞應圖に「一ハ、美露ナリ、其ノ凝ル脂ノ如ク、其ノ甘キ飴ノ如シ一名ハ膏露、一名ハ神漿、王充論衡にも「一ハ、味飴蜜ノ加シ、太平ナレバ、則チ降ル」

【韓盧】 駿犬の名、博物志に「韓國有黒犬、曰盧、宋有駿

犬、曰鶻、また漢書嚴延年傳に「一取免」

【韓盧ヲ驅リテ蹇兔ヲ搏ツ】 博物志に「韓國ニ黒犬アリ、盧トイフ」とあり、駿犬なり、蹇兔は「アシナ」の兔なり、至強を以て至弱を討つに喩ふ、史記范雎傳に「以秦卒之勇、車騎之衆、以治諸侯、譬若驅韓盧而搏蹇兔也」

【干祿】 干はこちらより進みて求むるなり、祿は食祿なり、一は仕官を求むるなり、論語に「子張學一」また天祐を求むる義祿ヲを見よ、

【龜】 爾雅に「甲蟲三百六十ニシテ龜之ガ長タリ、王者ノ嘉瑞ナリ」洛書に「靈龜ハ、玄文ニシテ五色、神靈ノ精ナリ、能ク存亡ヲ見、吉凶ヲ明カニス」搜神記に「毛寶人ノ白龜ヲ釣リ得タルヲ見テ、贖ウテ之ヲ江中ニ放ツ、實後チ將トナリ、戰敗レテ江ニ投ズ、物ヲ蹶著スルガ如シ、漸ク浮ンデ岸ニ至ル、實之ヲ視レバ、乃チ昔日放チシトコロノ龜ナリ」尾ヲ塗中を參看せよ、

【甕ヲ破リ兒ヲ救フ】 聞見後錄に「宋ノ司馬溫公幼キ時、群兒ト戯レシニ一兒、水甕ノ中ニ墮ツ、群兒譁ギテ、皆棄テ去レリ、公獨リ甕ヲ破リテ兒ヲ取り、死セザルコトヲ得タリ」

【鳥】 格物論に「一ハ野鴨、色白シ、頭ノ上ニ毛アリ、數百群ヲナス、多ク泊シテ江海ノ閉ノ沙上ニ在リ、沙石

ヲ食ヒテ皆消化ス、唯海蛤ヲ食ヒテ消セズ、ソノ糞ニ隨ヒテ出ヅ、且ツソノ糞、天ヲ蔽ヒテ下ル、聲風雨ノ如シ、至ルトコロノ田圃、稻粱之ガ爲メニ空シ」

【鴨】 格物論に「一ハ家鷄ナリ、雄ハ綠頭文翅紅脚或ハ蒼シ、雌ハ遍身黃赤ナリ、マタ純白ナル者アリ、一名ハ舒鳥」

【可モノク不可モノシ】 言行に過不及なき謂にて、中庸を得たる義、論語に「我則異於是、無可無不可」

【鳧ノ脛短シト雖モ之ヲ續ガバ、則チ憂ヒナン】 物各、性分あり、その性分のまゝに安んずべしといふ意を寓せり、莊子の駢拇篇に「長者不爲有餘、短者不爲不足、是故鳧脛雖短、續之則憂、鶴脛雖長、斷之則悲、故性長非所斷、性短非所續、無所去憂也」

【牙門】 牙旗を立てたる門、後漢公孫瓚傳に「拔其一、(牙城)を參看せよ、

【下問ヲ恥ヂズ】 めしたの者に對して、道を問ふことを恥ぢざるをいふ、論語公冶長篇に「子曰敏而好學、不恥下問」

【鷗】 説文に「一ハ水鳥ナリ、色白シ、數百群ヲナス、多ク漲海中ニ在リ、潮ニ隨ツテ上下ス云云」南越志に「汀鷗一名ハ海鷗、中略、頗ル風雲ヲ知ル、若シ群飛シテ岸

ニ至ルハ、乃チ風フク、黃山谷の詩に「江南野水碧、於天中有白鷗閑似我」

【瑕瑜相拚ハズ】 禮の聘義に「瑕不拚瑜、瑜不拚瑕、忠也」とあり、瑕は玉の病なり、瑜はその中間の美なる者をいふ、一解に、瑜は玉の光采なりと、瑕の疵のために瑜の美を拚はず、瑜の美を以て瑕の疵を拚はず、美德と過失とを、能く兩ながらかくさずして、あらはすを以て忠實となすとの義、拚は音エン覆ふなり、

【家老】 家宰をいふ、國語に「吾子之一也」また一族の長老をいふ、柳宗元の文に「其子姪泊一」

【鴉】 格物論に「鳥ハ鴉ノ別名ナリ、小ニシテ多ク群リ、腹下白キ者ヲ鴉鳥ト名ヅク、ソノ母ニ反哺スル者ヲ、慈鳥ト名ヅク、一種太喙白頭ノモノヲ南人之ヲ鬼雀ト名ヅク、鳴クハ即チ凶咎アリ」説文に「鳥ハ孝鳥ナリ、禽經に「慈鳥ハ孝鳥ナリ、長ズルトキハ、ソノ母ニ反哺ス大背鳥唇」

慈鳥 夜啼 白居易

慈鳥失其母、啞啞吐哀音、晝夜不飛去、經年守故林、夜夜夜半啼、聞者爲沾襟、聲中如告訴、未盡反哺心、百鳥豈無母、爾獨哀怨深、應是母慈重、使爾悲不任、昔有吳起去、母歿

あり、韓愈の復讐議、柳宗元の晉文公問守原議の如き、以て見るべし。

【期頤】百歳の齡をいふ、禮記の曲禮に「百年曰期頤」陳註に「人壽以百年爲期、故曰期、飲食居處動作無不待於養、故曰頤、頤は養ふなり、」

【妓圍】天寶遺事に「申王冬月ニ至リ風雪アリ、苦寒ニ際スル毎ニ宮妓ヲシテ密ニ坐側ヲ圍マシメ、以テ寒氣ヲ禦ガシム、自ラ呼ビテ一ト爲ス」

【杞憂】無益の憂をいふ、列子天瑞に「杞國有人憂天崩墜、身無所寄、廢寢食者」と、杞人の憂ともいふ、俗にいふ「トリコシ苦勞詳しくはその本文を見よ、」

【徵猷】猷は善なり、美なり、一は「ヨキハカリゴト」詩の小雅に「君子有一」

【歸有光】字は熙甫、明の崑山の人、嘉靖十九年郷試に擧げられ、第せず、嘉定の安亭江上に徙居し、書を讀み道を談ず、學徒常に數百人あり、稱して震川先生と爲す、時に天下相率るて浮靡汎濫の詞を爲る、しかるに震川獨り古文をつくるに、經術に原本し、又好みて史記の文を讀み、その神理を得たり、その操行高傑、亦人の及び難き所の者あり、獨り文章を以て世に鳴るのみならず、隆慶五年卒す、年六十六、易經衍旨洪範

の宗とするところとなる、文達と謚せらる、紀文達公遺集あり、

【徵音】徵は美なり、美音に同じ、詩經の大雅に「太姒一」

【氣宇】字は「ノキシタ」また上下四方をいふ、轉じて一は人の度量をいふ、晉書に「一高雅」

【宮娃】娃は「ミメヨキ」女、一は御殿女中の美人なり、釋氏要覽に「今人誇一如菩薩也」唐の李賀に「一」歌あり、

【舊惡ヲ念ハズ】惡む所の人と雖も、其の非を改むれば即ち止むをいふ、論語公冶長に「子曰、伯夷叔齊、不念舊惡、怨是用希」

【牛衣】亂麻を編みてつくる、後世呼んで龍具となす、漢書王章傳に「章疾病無被、臥一中」

【九有】九州に同じ、其の地を撫有するの義に取る、詩經に「奄有一」

【鬼餒ウ】子孫滅絶して、祖先の靈に食を供へ祭る者なきをいふ、左傳に「鬼猶求食、若敖氏之鬼、不其餒而」は助語、

【仇英】明の畫家なり、畫史彙傳に「一」字ハ實父、十洲ト號ス、太倉ノ人、吳郡ニ移居ス、周臣ノ門ヨリ出ヅ、宋

傳震川文集等の著あり、

【鬼域】詩經小雅何人斯に「爲鬼爲域、則不可得」とあり、得べからずとは、見ることを得ざるなり、註に「域ハ短狐ナリ、江淮ノ水ニ、皆コレアリ、沙ヲ含ミテ水中ノ人影ヲ射レバ、其ノ人、輒チ病ム、而シテ其ノ形ヲ見ズ、以テ陰惡ノ人に比ス、」

【希夷先生】圓機活法に「陳搏字ハ圖南、嘗テ白驢ニ乘リテ汗中ニ入ラント欲ス、途ニ太祖ノ登極ヲ聞キテ大ニ笑ヒ、驢ヨリ墜ツ、曰ク天下此レヨリ定マラント希夷先生ト號ス」

【歸一】歸著する所の同じきをいふ、荀子に「百王之法、不同所歸者一也」また史記儒林傳に「韓生推詩之意、而爲内外傳數萬言、其語頗與齊魯之間殊、然其一也」

【揆一】揆は度なり、之を度りて其の道同じからざることをなきをいふ、孟子に「先聖後聖、其一也」また班彪の王命論に「至於應天順民、其一也」

【紀昀】字は曉嵐、直隸獻縣の人、乾隆甲戌の進士官、禮部尙書に至る、時に詔して天下の遺書を求め、四庫館を開き、昀と陸錫熊とに命じて總纂となし、その大凡を撮み、撰んで提要となす、またその應制の作は、詞苑

元ノ名筆臨摹セザルナク、人物鳥獸山水樓觀旗幟車容ノ類、秀雅鮮麗ニシテ皆名筆ト稱ス

【久要】舊約なり、論語の憲問に「子曰、一一不忘平生之言、亦可以爲成人矣」

【窮猿林ニ奔ル、豈木ヲ擇ブニ暇アラシヤ】貧しき時に仕ふるには祿の輕重には拘らざるをいふ、晉書李充傳に「征北將軍褚裒李充ニ謂ツテ曰ク、君能ク志ヲ百里ニ屈センヤ否ヤト、答ヘテ曰ク、窮猿奔林、豈暇擇木ト、遂ニ鄒陽ノ命ニ就ク」とあり、百里は縣令をいふ、縣は大率方百里なればなり、一本奔を投に作る、

【窮ヲ通ジ困ヲ振ス】困窮の者をすくひにぎはす義、管子に「九惠之教、一曰老、老、二曰慈、幼、三曰卹、孤、四曰養、病、五曰合、獨、六曰問、病、七曰通、窮、八曰振、困、九曰接、絕、振は救なり、スクフ」

【穹ヲ窺ギ、傾ヲ支フ】駢臺雜話「作文は讀書に在りに見ゆ、穹を窺ぐとは、詩の幽風七月に「十月蟋蟀、入我牀下、穹窒熏鼠」とあり、朱註に「室中空隙者塞之」と見えたり、傾を支ふとは、文中子に「大廈將顛、非一木所支也」とあるに由るか、

【九夏】夏時九十日をいふ、蕭統の六月啓に「三伏漸ク終リ一將ニ謝セントス」

【九歌】 楚辭にいふ、一は屈原の作る所なり、楚國南郢の邑、沅湘の間、俗、鬼を好みて祠るとを好む、祠るに必ず歌を作る、屈原その域に放逐せられ、その詞の鄙陋なるを見て、因つて爲めに一を作ると

【躬行】 身に實行するをいふ、言ひたると、又は思ひたるとを實際に行爲にあらはすをいふ、漢書に「不言而一」また實踐一などと連用す、

【丘壑】 陵谷に同じ、世説に「顧長康畫、謝幼輿在巖石裏、人問其所以、曰、此子自謂一一過于庾亮、故宜置丘壑中」一丘一壑を參看せよ、

【牛角ニ書ヲ掛ク】 唐書の李密傳に「密開包愷在綏山往從之、以蒲鞞乘牛、掛漢書一帙角上行、且讀、楊素適、見于道、躡其後、問所讀、曰、項羽傳、因與語、奇之」

【牛角ノ歌】 一に飯牛ノ歌ともいふ、琴操に「寧戚牛ニ車下ニ飯セシメ、牛角ヲ叩イテ歌ヒテ曰ク、南山矸、白石爛、生不逢堯與舜禪、短布單衣纒至髀、從昏飯牛薄夜半、長夜漫漫何時旦、齊ノ桓公之ヲ聞キ、舉ゲテ相ト爲ス、沈德潛の古詩源に引くところは二首あり、その一首はこれに同じ、南山ノ歌の條に出せるは、二首を混合して一首とせしに似たり、

【裘葛】 冬は裘を被、夏は葛を被る、一年に必ず一たび

ろ奇なるの義なり、左傳に「少皞氏、有不才子、毀信廢忠、崇飾惡言、靖譖庸回、服讒蒐慝、以誣盛德、天下之民、謂之一一」史記五帝紀の注に「一一ハ、即チ共工氏」

【窮鬼】 貧困をつかさどるかみ、俗にいふ「ビンバツガ」韓文に「三揖一一」

【九九】 算法なり、韓詩外傳に「齊桓公、設庭燎、待人士、不至、東野有以一一見者、曰九九薄能耳、君猶禮之、況賢於九九者乎」

【休休】 道をたのしみて安閑なる貌、詩の唐風に「良士一一」一説に、一一は儉なりと、

【九牛ノ一毛】 極めて多數の中の、一小分に喩ふ、漢書の司馬遷の傳に「假令僕伏法受誅、若九牛一一一毛」また、禪林句集に「四海一滴、一一一」

【九疑山】 水經の注に「一一盤蒼梧之野、峯秀數郡之閒、異嶺同勢、遊者疑焉、故曰九疑、亦作九疑」また漢書武帝紀に「祀虞舜於九疑」山は湖南省に在り、

【九垓】 垓は「カギリ」一は天地の「ハテ」爾雅に「九天之際、曰一一」天垓また八垓などといふも同じ、

【九棘】 外朝なり、また九卿の義、後漢書に「使三槐一一議、臣罪戾三槐一一」を見よ、

被易ふるものなれば、一年の義に用ふ、五裘葛は五年なり、韓非子に「冬日鹿裘、夏日葛衣、韓愈の原道に「夏葛而冬裘、葛とは、クズカヅラ」の纖維にて織りたる、カタビラなり、

【九合】 史記に「一一諸侯、一匡天下、九は糾に通ず、聚ひるなり、莊子の天下篇に「禹親操橐籥、以九雜天下之川、註に、九は糾と讀む、糾合錯雜して川流をして貫穿して海に注がしむるなり、

【糾合】 糾は三合の繩なり、一一は聚め合す義、史記鄼生傳に「起一一之衆、收散亂之兵、不滿萬人、九合と通用す、

【久早甘雨ニ逢フ】 長くつゞきたる「ヒデリ」の日に好き雨に逢ひたるは最も喜ばしき事の一なり、容齋隨筆に「久早逢甘雨、他郷遇故知、洞房華燭夜、金榜掛名時」とあり、蓋し宋人の語、

【九畿】 周禮に「大司馬一一ノ籍ヲ以テ邦國ノ政ヲ施ス、職方千里ヲ王畿トイヒ、其ノ外ヲ侯畿トイヒ、甸畿トイヒ、男畿トイヒ、采畿トイヒ、衛畿トイヒ、夷服トイヒ、鎮服トイヒ、蕃服トイフ」

【窮奇】 天神の名、淮南子地形訓に「一一廣莫風之所生也、また四凶の一、其の行ふ所窮して、其の好む所

【舊曲】 書よりある音曲、徐陵の句に「江陵有、一一」

【鳩居鵲巢】 禽經に「拙者莫如鳩、不能爲巢、とあり、さて鳩は性拙くして巢をつくること能はず、鵲のつくりし巢に居ることあり、以て女子自ら家を成す能はずして、夫の家に居るに喩ふ、詩の召南に「維鵲有巢、維鳩居之」

【舊勳】 勳は、説文に「能ク王功ヲ成スナリ」とあり、皇室に對する功勞をいふ、一一は「フルキイサヲ」左傳に「我襄公未忘君之一一」

【九廻腸】 憂悶して、心腸の廻轉するが如きをいふ、司馬遷の書に「腸一日而九廻」また單に屈折の義にも用ふ、柳子厚の詩に「江流曲似一一」

【救火夫】 「ヒケシニンソク」願體集に「凡城郭村鎮、公設一一數十名、使其晝夜巡邏」

【九官】 書經舜典に見ゆ、司空、后稷、司徒、士共工、虞秩宗、典樂、納言をいふ、司空は「百揆を總べ、后稷は農政を掌り、司徒は五教を敷き、士は訟獄を理め、共工は百工の職事を供給し、虞は山澤の事を掌り、秩宗は宗廟百神を祀ることを掌り、典樂は音樂舞踏の事を掌り、納言は帝命を出納するの官にして、下言を聽きて上に納れ、上言を受けて下に宣ふるものなり、詳くは

舜典を見よ。

【舊貫】 猶ほ舊制の如し、論語先進に「魯人爲長府、閔子騫曰、仍一何之何、何必改作」の註に「貫、事ナリ」又慣に通ず。

【九刑】 墨刑(イレズミ)劓刑(ハナキル)剕刑(アシキル)宮刑(勢ヲ割ク)大辟(死ニ處ス)を五刑といふ、これに流贖鞭朴の四を加へて一といふ、鞭は鞭を以て打ち、朴は朴を以て打つ、共に答刑なり、左傳に「周有亂政、而作一」

【九卿】 儀禮の疏に「漢十二卿ヲ置ク、正卿ハ九、太常光祿衛尉太僕廷尉大鴻臚宗正少府大司農云々資治通鑑の胡三省の註に「漢太常郎中令中大夫令太僕太理太行令宗正太司農少府爲正九卿、中尉主爵都尉內史列于九卿」

【九經】 初學記に「周禮儀禮禮記以上三禮」左傳公羊傳穀梁傳以上春秋三傳、易經書經詩經ヲイフ、一説に、易詩書禮記春秋孝經論語孟子周禮をいふと、【久敬】 交ること久しうしてます、敬ふをいふ、人情交ると久しきに及べば、互に狎れあなどりやすきものなるに、一はそれに反してます、敬ふをいふ、論語公冶長篇に「子曰、晏平仲善與人交、久而敬之」

【九五之尊】 天子の位をいふ、易の乾の卦九五に「九五、飛龍在天、利見大人」傳に「位ヲ天位ニ進ムルナリ、聖人既ニ天位ヲ得レバ、則チ下ニ在リテ大徳ノ人ヲ見テ、與ニ共ニ天下ノ事ヲ成スニヨロシ」と、本義に「剛健中正、以テ尊位ニ居ル、聖人ノ徳ヲ以テ、聖人ノ位ニ居ルガ如シ」と、句解に「大君ノ位ナリ、飛ハ剛然、修忽トシテ上ニ居ルヲイフ、萬國ニ君臨ス、龍ノ天ニ在ルガ如シ」と、履卦の疏に「剛ヲ以テ中ニ處ル、其ノ正位ヲ得、九五ノ尊ニ居ル、是レ剛中正ニシテ帝位ヲ履ムナリ」

【丘嫂】 長嫂の義、いちばんの「アニヨメ」漢書楚元王傳に「高祖微時、嘗與賓客過其、食」

【穹蒼】 天をいふ、詩經の大雅の註に「穹蒼ハ天ナリ、穹ハ其ノ形ヲイヒ、蒼ハ其ノ色ヲイフ」

【舊相識】 「フルキナツミ」(舊識)を見よ、

【朽索六馬ヲ馭ス】 朽索は、くちたる繩なり、朽索は絶え易く、六馬は力強ければ、とても馭すべきに非ず、以て極めて危険にして畏るべきに喩ふ、書經に「予臨兆民、漘乎若、朽索之馭六馬」淮南子に「若以腐索御奔馬」とあるも同じ、

【九思】 (君子ニ九思)を見よ、

【九州】 冀兗青徐荆揚豫梁雍なり、禹の洪水を治

【宮刑】 腐刑に同じ、精を斷つをいふ、男は淫勢を割き、女は陰部を幽閉する刑、禮記に「公族無一、不翦其類」

【九惠ノ教】 九つの慈惠の教をいふ(窮ヲ通ジ)を見よ、

【九原】 禮記の檀弓に「從先大夫於一」の註に「晉ノ卿大夫ノ墓ハ、一ニ在リ」とあり、さればもとは地名なりしを、後世は黄泉と同義に用ふるに至れり、

【舊澆】 澆は穢なり、舊政の澆穢をいふ、左傳文六年に「趙盾爲政治、澆、たまり水の義の時、昔ヲ」

【牛後】 大いなる者のしりへに從ひて使はるること、戰國策に「鄙語曰、寧爲雞口、無爲一」

【窮寇ニハ迫ルナカレ】 迫るときは、かへつて害に遇ふの謂なり、窮する寇は、或は舟を焚き、或は釜を破り死を決して戦はんことを求む、之に迫るときは反つて敗らる、孫子の九變篇に「歸師勿遏、窮寇勿迫」

【九孔螺】 「アツビ」なり續博物志に「石決明マター一ト名ヅク」

【九穀】 周官に「太宰、九職ヲ以テ萬民ニ任ズ、一ニ曰ク、三農一ヲ生ズ、鄭司農いふ、稷、秬、秠、黍、稷、粱、大小豆、大小麥ナリ」西陽雜俎に「黍、稷、稻、粱、三豆、二麥」

【舊五代史】 (五代史)を見よ、

めて開きしところなり、詳しくは書經の禹貢を見よ、禮記に「凡四海之内、一州方千里」

【牛耳ヲ執ル】 盟には、卑者牛耳を執り、尊者之に澁むを禮とす、されども牛耳を執るを以て、主盟者と爲すことあり、左傳哀十七年に「諸侯盟、誰執牛耳」と、鄭玄曰く「主盟者牛耳ヲ割キ血ヲ取ル、耳ハ盛ルニ珠盤ヲ以テシ、主盟者之ヲ執ル」

【舊識】 ふるき相識をいふ、左傳襄二十九年に「吳公子札、聘于鄭、見子產、如舊相識」

【玉人】 玉のサイクニン、孟子に「使十雕琢玉、王工王作家、穿珠家皆同じ、

【九仞ノ功ヲ一簣ニ虧グ】 八尺を仞といふ、簣は土籠なり、九仞の山を築くに、一簣の土を缺けは、完成すること能はず、以て積年の勞も、一失の爲めに敗るるに喩ふ、書經の旅獒に「夙夜罔或不勤、不矜細行、終累大徳、九仞功、虧一簣」論語子罕篇にも「子曰、譬如爲山、未成一簣、止吾止也」

【休祥】 休は美なり、善なり、慶なり、祥は福の先づ見はる者にて、吉兆といふが如し、書經の泰誓に「朕夢協朕卜、襲于」襲は重なり、

【舊章】 先王の禮樂政刑をいふ、詩經に「不愆不忘、率」

由一ニまた書經に「無作聰明亂一ニの註に「一ニ、先王之成法」とあり、柳宗元の賀大赦表に「渙發大號、申明一ニ」

【九錫】 錫一音セキ賜なり、與なり一ニは天子より、大功あるか、又は特別の權力ある臣に賜ふもの、禮緯文に「一ハ、一ニ曰ク輿馬、二ニ曰ク衣服、三ニ曰ク樂器、(器一に則に作る)四ニ曰ク朱戶、五ニ曰ク納陛、六ニ曰ク虎賁、七ニ曰ク弓矢、八ニ曰ク鈇鉞、九ニ曰ク鉅鬯、馬は大輅戎路各一、玄馬二をいふ、衣服は、玄裘をいふ、樂則は軒轅の樂をいふ、朱戶は居る所の室、その戸を朱にするをいふ、納陛は中陛よりして升るをいふ、虎賁は三百人をいふ、弓矢は形旅の弓矢をいふ、鈇鉞は大柯斧をいふ、之を賜ひて搏殺せしむ、鉅鬯は、鉅鬯の酒、賜ひて以て祭祀せしむ、漢書武帝紀を見よ、

【牛首ヲ懸ケテ馬肉ヲ賣ル】 (懸牛首賣馬肉) 牛首を懸くるは、禁物の令を掲げ示すに喩へ、馬肉を賣るは、その禁物を用ふるに喩ふ、晏子春秋に「靈公、婦人ニシテ而シテ丈夫ノ飾スル者ヲ好ム、國人盡ク之ヲ服ス、公、吏ヲシテ之ヲ禁ゼシム、曰ク女子ニシテ而シテ男子ノ飾スル者ハ、其ノ衣ヲ裂キ、其ノ帶ヲ斷タント、衣ヲ裂キ、帶ヲ斷ツモノ、相望ミテ止マズ、晏子見ユ、公

問ヒテ曰ク、寡人吏ヲシテ女子ニシテ男子ノ飾スルヲ禁ジ、其ノ衣帶ヲ裂斷セシムルニ、相望ミテ而シテ止マザルハ何ゾヤト、晏子對ヘテ曰ク、君之ヲ内ニ服セシメテ、而シテ之ヲ外ニ禁ズ、猶ホ牛首ヲ門ニ懸ケテ、而シテ馬肉ヲ内ニ賣ルガ如キナリ、公何ゾ以テ内ヲシテ服スルコトナカラシメザル、則チ外敢テ爲ルコトナケント、公曰ク善シト、内ヲシテ服スルナカラシム、月ヲ喩エテ而シテ國之ヲ服スルコトナシ」

【九暑】 管子に「一乃チ至ル」の註に「一ハ九夏ノ暑ヲイフ」

【牛渚】 晉書の温嶠傳に「武昌ヨリ一磯ニ至ル、水深クシテ測ルベカラズ、世ニイフ、ソノ下怪物多シト、嶠遂ニ犀角ヲ燬シテ之ヲ照ス、須臾ニシテ水族ヲ見ル、火ヲ覆ヘバ、奇形異狀、馬車ニ乘リ赤衣ヲ著クル者アリ、嶠ソノ夜人己ニ謂ツテ曰ク、君ト幽明道別、何ゾ相照スト意ハシヤト夢ミ、意ニ甚ダ之ヲ惡ム」とあり、この故事によりて極めて明かなるを燃犀といふ、例へば史眼燃犀とは、歴史眼の極めて明かなるをいふ、燃は然の俗字、

【九如ノ篇】 (天保九如)を見よ

【九折】 坂路のつづら折なるをいふ、蜀都賦に「馳一ニ、故に清朝に至りて二書並に刊行するとなれり、窮達】 窮困と、利達となり、班彪の王命論に「一有命吉凶由人」

【牛僧孺】 字は思黯、唐の鶻狐の人、弘の裔、進士に第し、憲宗の時、賢良方正を以て對策し、失政を條指す、累遷して御史中丞となる、穆宗の時同平章事たり、敬宗立ち奇章郡公に封ぜられ、太子少師に終る、

【求仲】 漢の隱士なり、羊仲と共に車を治むるを以て業となす、蔣元卿、舍中竹下に三徑を開く、二人常に之に従つて遊ぶ、時に二仲と稱す、

【九層ノ臺】 圓機活法に「晉ノ靈公九層ノ臺ヲ造ル、三年成ラズ、人力困敝ス、荀息曰ク、臣能ク十二ノ碁子ヲ累ネ九卵ヲ其ノ上ニ加フト、公曰ク、危イ哉ト、息曰ク、公臺ヲ造リ三年成ラズ、男耕ヤサズ、女織ラズ、亦甚ダ危シト、公遂ニ止ム、千里ノ行を見よ、

【仇池筆記】 二卷、舊本に宋の蘇軾撰すと題す、今その文を勘驗するに、蓋し後人その雜帖を集めて、之を爲す、軾の手著にあらず、されども頗る考證に資するを以て、故に今に至るまで之を傳ふ、書中に軾の語に類せざる者あるは、後人の竄入に係るものなるべし、この書子部雜家類に入る、

【窮措大】 「ピンバフ書生」措大)を見よ、

【鳩杖】 老人のつく、ツエをいふ、後漢書の禮儀志に「民年七十者、授之以玉杖、以鳩鳥爲飾、欲老人如鳩不墮也」註に「噎ハ、食ノ氣ヲ窒ギテ通ゼザルナリ」

【窮鼠猫ヲ齧ム】 「シニモノグルヒ」にて、勇氣を出し、強敵をやぶるに喩ふ、鹽鐵論に「死不再生、窮鼠齧猫」

【九重】 王城をいふ、楚辭に「君之門兮一駱賓王之詩に、山河千里國、城闕一門、韓愈の詩に「一封朝奏九重天」また晉書の陶侃傳に「侃夢ニ八翼ヲ生ジ、飛ンデ天ニ上ル、天門九重ヲ見ル、スデニ其ノ八ニ登リ、唯一

門入ルヲ得ズ

【休徴】 休は美徴は證なり、善き、キザシなり、休祥に同じ、メダタキシルシ、漢書平帝紀に「一嘉應、頌聲並作」

【九鼎大呂ヨリモ重シ】 史記平原君傳に「毛先生一至、楚使趙重於九鼎大呂、九鼎は、禹の時九州より金を貢せしめて鑄造せし鼎にして、夏殷周三代相傳へて寶となす、大呂は、周廟の大鐘、その音、大呂に合す、共に國の寶器なり、

【牛蹄ノ際ニハ尺ノ鯉ナシ】 すこしの水には大魚はずまず、澤は深水なり、アメノタマリミヅ、淮南子傲真訓に「牛蹄之涔、無尺之鯉、塊阜之山、無丈之材、土山を阜といふ、ツチクレの如き小山には、一丈ほどの材は生ぜず、新論に「牛躡之露、不生、魴鱗、巢幕之窠、不容、鵝卵」とあるも義は似たり、牛躡之露は牛の足迹にたまれる水をいふ、

【朽條】 くらたる繩なり、易林に「一腐索、不堪、施用」

【窮鳥懐ニ入ル】 人窮困して來り倚るに喩ふ、顔氏家訓に「窮鳥入懐、仁人所憫」

【糾逃】 逃は遠なり、悪人を糾して之を遠ざくるをいふ、左傳僖二十八年に「敬服、王命、以綏、四國、一王」

【九方臯】 藝文類聚に「善ク馬ヲ相スル者、伯樂ノ儔ナリ」と、列子に「九方臯能ク馬ヲ相ス、秦ノ穆公之ヲシテ馬ヲ求メシム、三月ニシテ返リ報ジテ曰ク、已ニ之ヲ得タリ、沙丘ニ在ツテ、馬ノ牝ニシテ黃ナルモノナリト、既ニ至レバ則チ牡ニシテ驪ナリ、公悦バズ、伯樂ヲ召シテ曰ク、牝牡色物、臯且ツ知ラズ、何ゾ馬ヲ之レ能ク辨ゼント、伯樂曰ク、臯ノ見ル所ハ天機ナリ、其ノ精ヲ得テ其ノ粗ヲ忘ル、其ノ内ニ在ツテ其ノ外ヲ

ニ倍キ初ヲ忘ル、ハ、仁者ノ用心ニアラズ、故ニ仁ヲ以テ之ヲ目ス」と、楚辭に「鳥飛反故郷兮、狐死必首丘」
【丘ノ禱ルコト久シ】 論語述而篇に「子疾、病、子路請禱、子曰、有諸、子路對曰、有之、誄曰、禱、爾于上下神祇、子曰、丘之禱久矣、病とは疾の危篤なるなり、禱は鬼神にいのりて災をはらひ福を求むるなり、誄は死者を哀みてその人の行を述ぶる詞なり、子路師を愛するの至情を以て神明に禱りて夫子の病を禱はんとす、孔子告げたまはく、吾は罪を天地に獲ざらんとの心を以て、平生禱ること久しきなり、今あらためて禱るには及ばざるなりと、心だに誠の道にかなひなば禱らずとも神ヤ守らむ」といふ昔公の歌もその意は同じ、

【九方臯】 藝文類聚に「善ク馬ヲ相スル者、伯樂ノ儔ナリ」と、列子に「九方臯能ク馬ヲ相ス、秦ノ穆公之ヲシテ馬ヲ求メシム、三月ニシテ返リ報ジテ曰ク、已ニ之ヲ得タリ、沙丘ニ在ツテ、馬ノ牝ニシテ黃ナルモノナリト、既ニ至レバ則チ牡ニシテ驪ナリ、公悦バズ、伯樂ヲ召シテ曰ク、牝牡色物、臯且ツ知ラズ、何ゾ馬ヲ之レ能ク辨ゼント、伯樂曰ク、臯ノ見ル所ハ天機ナリ、其ノ精ヲ得テ其ノ粗ヲ忘ル、其ノ内ニ在ツテ其ノ外ヲ

【九方臯】 九方の天なり、淮南子に「天有九野、中央曰鈞天、東方曰蒼天、東北方曰變天、北方曰玄天、西北方曰幽天、西方曰昊天、西南方曰朱天、南方曰炎天、東南方曰陽天、呂氏春秋には昊を瀾に作る、また大玄經に曰く「一、中天、二、羨天、三、從天、四、更天、五、辟天、六、廣天、七、威天、八、沈天、九、成天、また天の高き義にも用ふ（九重）を見よ、

【求田問舍】 (買田)を見よ、

【窮途ノ哭】 困窮して「カナシムをいふ、晉書に「阮籍時率易獨駕、不由徑路、車跡之所窮、輒痛哭而返、また王勃の滕王閣序に「阮籍猖狂、豈效窮途之哭」

【九乳ノ龜鐘】 太平記卷十五に見ゆ、周禮考工記に「鳧氏作鐘」とあり、九乳とは鐘につける、九つの「イボ」をいふ、

【丘ニ首ス】 狐の死するとき首をもと住みたる丘に向くるは其の本を忘れざるなり、禮記の檀弓に「君子曰、樂樂其所、自生、禮不忘其本、古之人有言曰、狐死正丘首、仁也、陳註に「狐ハ微獸ト雖モ、丘ハ其ノ窟藏セシ地、コレ亦生キテ此ニ樂ム、故ニ死ニ及ビテ、猶ホ其ノ首ヲ正シテ丘ニ向フ、其ノ本ヲ忘レザルナリ、本

忘ルト、馬至レバ果シテ天下ノ良馬ナリキ」
【牛馬ヲ斷チ盤區ヲ截ツ】 盤區は銅器なり、毛皮ある牛馬を切り、堅確なる銅器を截るは、劍の極めて銳利なるを稱す、戰國策に「吳子之劍、肉試則斷、牛馬、金試則截、盤區、また、龍淵、大阿、皆陸斷、馬牛、水擊、鴻臚、當敵、即斬、堅、龍淵と大阿とは名劍の名、

【牛馬走】 走は猶ほ僕の如し、牛馬を役する所ろの僕といふ義にして、自稱の謙辭なり、司馬遷の報任少卿書に「太史公、一」とあり、太史公は、遷の父談、太史令たりしを以ていふ、自ら謙して下走といふも、蓋し此に本づく、

【窮髮】 髮は、猶ほ毛の如し、毛は草なり、北極無草の地をいふ、莊子逍遙遊に「一之北、有溟海者、天池也、また謝靈運の詩に「周覽、倦、瀛壖、況乃凌、一」

【九法教ル】 韓文の與孟尚書書に「三綱淪而、一」とあり、九法は洪範の九疇を謂ふ、蔡傳に「洪範九疇ハ天下ヲ治ムルノ大法、ソノ類九アリ」とあり、教は敗なり(洪範九疇)を見よ、

【鳴鑿茶】 (一)を見よ、

【九尾ノ狐】 奸佞なる人に比す、成語考に「九尾狐、譏陳彭年素性詭而又奸、註に「宋真宗時、陳彭年素性奸佞

【九方臯】 藝文類聚に「善ク馬ヲ相スル者、伯樂ノ儔ナリ」と、列子に「九方臯能ク馬ヲ相ス、秦ノ穆公之ヲシテ馬ヲ求メシム、三月ニシテ返リ報ジテ曰ク、已ニ之ヲ得タリ、沙丘ニ在ツテ、馬ノ牝ニシテ黃ナルモノナリト、既ニ至レバ則チ牡ニシテ驪ナリ、公悦バズ、伯樂ヲ召シテ曰ク、牝牡色物、臯且ツ知ラズ、何ゾ馬ヲ之レ能ク辨ゼント、伯樂曰ク、臯ノ見ル所ハ天機ナリ、其ノ精ヲ得テ其ノ粗ヲ忘ル、其ノ内ニ在ツテ其ノ外ヲ

に「願ハ望ミ慕フナリ」とあり、乘は、副馬(ソヘムマ)顔は顔同なり、

【貴ヲ挾ム】 挾は、兼有して之を恃むの稱、富貴を恃みて人に驕るの意、孟子に「不挾長、不挾貴、不挾兄弟、而友、また、挾貴而問、挾賢而問、挾長而問、挾有勤勞、而問、挾故而問、皆所不答也」

【驥ヲシテ鼠ヲ捕ラシム】 大人を小事に用ひて、其の才を展ばさしめざるに喩ふ、莊子の秋水篇に「驥驥驪驪一日ニシテ馳スルコト千里、鼠ヲ捕フルハ狸狴ねこに如カズ、技ヲ殊ニスルヲイフナリ、鷓鴣(ふくろ)ハ夜蚤ヲ撮リ毫末ヲ察ス、晝出デテ目ヲ瞋ラスモ、丘山ヲ見ズ、性ヲ殊ニスルヲイフナリ」

【幾ヲ知ルハソレ神カ】 (知幾其神乎) 易の語、幾は動の微、吉の先づ見るる者なり、

【妓ヲ携ヘテ遊ブ】 晉書に「謝安東山ニ棲遲シ、情ヲ丘壑ニ放イマ、ニシ、音楽ヲ好ミ、遊ブ毎ニ必ず妓ヲ以テ從フ(謝安)を見よ」

【技ヲ尙ビテ車ヲ賤ム】 技能を尊みて、器物を賤み、賞賜に吝かならざるをいふ、禮記に「尙技而賤車、則民興藝、貴人而賤祿、則民興讓」

【機ヲ見ル】 事の微を識るをいふ、易の繫辭下傳に「幾、

者動之微、吉之先見者也、君子見幾而作、不俟終日」とあり、幾は機に同じ、金壁故事に「晉ノ張翰齊王ノ司馬トナリ、秋風ノ起ルヲ見テ、因ツテ吳江ノ中ノ蓴菜ノ羹、鱸魚ノ膾ヲ思フ、乃チ歌ヲ作ツテ曰ク、秋風起兮木葉飛、吳江冷兮鱸正肥、人生貴在適、志耳、何能羈官數千里ト、遂ニ駕ヲ命ジテ歸ル、俄ニシテ齊王敗レヌ、時ノ人々之ヲ機ヲ見ルトイフ」

【微音】 微は美なり、善なり、美譽をいふ、詩の小雅に「大如桐」

【祇園】 祇園とは、祇樹給孤獨園の略なり、祇樹とは、祇陀太子の樹林なり、給孤獨園とは、給孤獨長者佛の爲めに、黄金を布き竝べて、太子より買ひ求めし所の園なり、此の時に當りて、太子隨喜して、樹木を佛に供養す、舍利弗此の園林の名を佛に請問す、佛乃ち二人の所施なるを以て、祇園と名づく、阿彌陀經の合讚に見ゆ、

【祇園精舎】 印度の寺の名、釋迦の説法せし舊跡、もと祇陀太子の園なりしかば祇園といふ、須達長者その園を請ひて寺としたるものといふ、精舎は寺をいふ、釋氏要覽に「藝文類聚ニイフ、ソノ精妙ナルニ由ルニアラズ、行ヲ精練スル者ノ居ル所ヲレバナリ」と平

家物語に「一一一の鐘の聲、諸行無常の響あり」とあり、

【杞ヲ以テ瓜ヲ包ム】 (以杞包瓜) 杞は喬木にして葉大なり、瓜は美實にして下に在り、人君高位に在りて下に在る賢才を求むること、杞葉を以て瓜を包むが如きに喩ふ、易の姤の卦の語、

【戰ヲ以テ驛突ヲ御ス】 戰は古の羈の字にて、馬の絡頭をいふ、驛突は惡馬なり、輕き刑罰を以て、奸兇を制するに喩ふ、漢書刑法志に「今漢承衰周暴秦極弊之流俗、已薄於三代、而行堯舜之刑、是猶以戰而御驛突、機ヲ忘ル」(忘機)を見よ、

【寄綴】 人の妻を姦するをいふ、綴は牡猪にして、淫を好むによりていふ、史記秦紀に「夫爲一一一、殺之無罪」

【戲下】 戲は麾に通ず、大將の旗なり、故に大將に直隸する者を戲下といふ、ハタモト「史記淮陰侯傳に「信杖劍從之、居一一一、また漢書項籍傳に「一一一騎從者、八百餘人」

【塵下】 前の戲下に同じ、

【氣概】 氣象すぐれて、節操高きをいふ、宋史に「俊邁能文尙一一一」

【耆艾】 老人をいふ、禮の曲禮に「五十ヲ艾トイヒ、六十

ヲ耆トイフ」荀子ニ「一一一而信可以爲師」また師傅の義とす、國語の周語に「一一一修之」

【機械】 機巧を施したる器械をいふ、カラクリ「莊子に「有一一一者、必有機事、有機事者、必有機心、機心存乎胸中、則純白不備、純白不備、則神生不定、神生不定、者、道之所不載也」

【氣海觀瀾】 支那にて出版せし理科の書にて、わが國にても翻刻し、明治初年の頃、學校の教科書となせり

【機械ノ心】 機械は巧にして詐る義、淮南子に「一一一之機、藏于胸中、則純白不粹、神德不全」

【危行】 行を高くする義(危言一一一)を見よ、

【紀綱】 典章法度をいふ、大を綱と爲し、小を紀と爲す、書經に「今失其道、亂其一一一、また國を治むる義にも用ふ、國語に「一一一齊國、稗補先君」また詩の大雅に「綱紀四方」

【貴庚】 「アナタノオントシ」青箱記に見ゆ、尊庚に同じ、

【跋行隊息】 踵を以て行く者、隊を以て息する者、隊は「クチサキ」蟲鳥の類をいふ、史記匈奴傳に「一一一、蠅動之類、莫不就安利而辟危殆」

【紀綱僕】 事を紀綱する所ろの臣僕なり、その大事を網總し、その細事を紀理する義、左傳僖二十四年に、秦

伯送衛於晉三千人實一衛は護衛なり、
 【希革】革は改なり、毛希にしてあらたまり易はるをいふ、書の堯典に「鳥獸一」
 【倚角】其の後を紐ぐを倚といひ、其の前を紐ぐを角と云ふ、前後より夾撃する義、左傳襄十四年に「譬如捕鹿、晉人角之、諸戎倚之、角は「ツノ」をとる、倚は「カタアシ」をとるなり、
 【義甲】「コトノツメ」丹鉛錄に「琴ヲ彈ク假爪甲ナリ」
 【沈濫】ふさでる泉なり、爾雅に「側出沈泉、正出濫泉」とあり、資治通鑑に「奉高之器、譬諸一、雖清而易挹」
 【祁寒】祁は盛なり、大なり、一は、大寒なり、書經の君牙に「冬一」
 【奇寒】例年に異りていたく寒きこと、西陽雜俎に「今歲一」
 【季威】書言故事に「巫者ヲ獎メテ一ノ秘術ヲ得タリトイフ」莊子に「鄭ニ神巫アリ、季威トイフ、人ノ生死ヲ知ル、人之ヲ見テ、棄テテ走ルトアリ」
 【龜鑑】祖庭事苑に「龜ハ疑ヲ決スル所以、鑑ハ物ヲ辨ズル所以ナリ」とあり、それより軌範(テホン)の義に用ふ、東坡が乞校「正陸贄奏議」進御劄子にも「實治亂之一」とあり

【飢寒ヲ苦メバ彈丸ヲ逐】(金丸ヲ彈ズ)を見よ、
 【鬼瞰ノ禍】揚雄の解嘲に「高明之家、鬼瞰其室、鬼神は盈滿を惡む、故にその室をうかひて禍をくださんとするなり、
 【危機】危害の發動せんとする時機をいふ、晉書諸葛長民傳に「貧賤常思富貴、富貴必踐一、今日思爲丹徒布衣、豈可得哉」また蘇軾の詩に「晚覺文章真小技、早知富貴有」
 【忌諱】諱は避なり、忌なり、忌みきらふ義、漢書馮唐傳に「鄙人不知一、また周禮に「詔王之」こあるは、王の嫉み嫌ふ所るの事を告ぐるをいふ、
 【祁祁】詩の召南「被之」の傳に「被ハ首飾ナリ、一ハ舒遲ノ貌、また爾雅に「采繁」の傳に「一ハ盛ナリ」また小雅に「與雨」の傳にも「盛ナリ」また大雅に「諸娣從之、一如雲」の註に「一ハ徐靚ナリ、雲ノ如ク衆多ナルナリ」
 【奇技】奇異の技藝をいふ、書經に「作一淫巧、以悅婦人」また禮の王制に「作一奇器、以疑衆」
 【應應】(應々)を見よ、
 【規規】自ら失ふ貌、莊子秋水篇に「一然自失也」また日月の圓かなる貌、文苑英華の海日初出賦に「赫赫光

滿、一質圓
 【熙熙】和らぎ樂む貌、老子に「衆人一、如享大牢」
 【嘻嘻】和らぎ樂む聲、易の家人に「婦子一」また自得の貌、揚雄の河東賦に「一旭旭」
 【機宜】時機の宜しさを得る義、嵇康の絶交書に「不識人情、闕於一」
 【駸駸】強くして息まざる貌、詩の小雅に「四牡一」
 【夔夔】敬ひ懼るゝ貌、書の大禹謨に「一齊慄、替亦允若」替は舜の父瞽瞍なり、
 【魏禧】字は冰叔、一の字は叔子、勺庭と號す、清の寧都の人、十一歳諸生に補す、甲申の變、愍帝社稷に死す、禧慟哭して日に縣庭に臨み、義兵を倡へんと欲して果さず、乃ち隱居して教授す、康熙十七年博學鴻儒に擧げられしが、疾を以て辭す、十九年卒す、年五十七、兄際瑞、弟禮と並に文章を以て名あり、人之を寧都の三魏といひ、宋の三蘇に比す、禧は左氏の學に精しく、古文を善くし、侯朝宗汪若文と三家と稱せらる、著すところ左傳經世鈔及び叔子詩文集等あり、
 【巍巍】山の高大なる貌、また獨立の貌にも用ふ、論語に「一乎、唯天爲大」
 【騏驎一日千里】荀子に「騏驎一日而千里、驚馬十駕則亦

及之矣」愚者も勉めて倦まざるときは、賢者と同じく功を成すに喩ふ、また淮南子に「騏驎千里一日而通、驚馬十舍旬亦至之」とあるも同じ、
 【箕裘ノ業】弓人の子は、其の父が堅き幹角を矯めて、弓を成すを觀て、軟かなる柳條を曲げて、箕を製することを學び、治工の子は、其の父が堅き金鐵を鍛かし破器を補繕するを觀て、軟かなる獸皮を補綴して、裘を製することを學ぶ、因りて父祖の業を承ぐ義とす、禮記の學記に「良冶之子、必學爲裘、良弓之子、必學爲箕、また列子に「良弓之子、必先爲箕、良冶之子、必先爲裘」
 【期期艾艾】史記の張丞相傳に「昌爲人吃、又盛怒曰、臣口不能言、然臣期期知其不可、また書言故事に「口ノ訥ナルヲ一トイフ、漢ノ周昌爭高帝廢太子之事、怒曰、臣期期不奉詔」また世説に「魏ノ鄧艾口訥ニシテ常ニ自ラ艾艾ト稱ス」
 【睚眦眦眦】睚は仰ぎ視るなり、眦は眉を揚げて上視するなり、また視ることの周章する貌、莊子寓言に「而一而誰與居」また集韻に「睚眦ハ小人喜悅ノ貌」博雅に「一元氣也、質朴の貌にも用ふ、王延壽の魯靈光殿賦に「鴻荒朴略、厥狀睚眦」

【騏驎ノ衰フルヤ、驚馬之ニ先ダツ】 賢人も老衰すれば、愚者に劣るに喩ふ。戰國策に「騏驎之衰也、驚馬先之、孟賁之倦也、女子勝之」とあり、史記の刺客傳に「騏驎壯ノ時ニハ、一日ニシテ而シテ馳スルヲ千里、其ノ衰老スルニ至ツテハ、驚馬之ニ先ダツ」とあり、戰國策の一本に騏驎を驎に作る騏驎は、千里の馬をいふ、騏驎に同じ、驚馬は荷をばこぶ、つまらぬ馬をいふ、
 【企及】 くはだて及ぶ義、唐書に「揚雄枚卓可一也」
 【危急存亡之秋】 諸葛孔明の出師表の句、李善曰く「歲以秋爲功畢、故以喻時之要也、馮衍與田邑書曰、忠臣立功之日、志士馳馬之秋」
 【饑饉】 詩に「天降喪亂、一薦臻、爾雅に「穀熟セザルヲ饑トナシ、蔬熟セザルヲ饑ト爲ス」饑は飢に通用す、
 【騏驎一躍十歩ナル能ハズ】 (騏驎一躍不能十歩) 荀子勸學篇の語、以て賢者と雖も學を成すには次第を追ひて進まざるを得ずとの意に喩ふ、
 【起居】 書經周命に「出入一、罔有不欽」一は「タチキフルマヒ」漢武内傳に「比來一何如」
 【箕踞】 坐して兩足を展ばすをいふ、その形箕の形の如し、箕坐に同じ、史記刺客傳に「倚柱而笑、一以罵、王維の詩に「科頭一長松下、白眼看他世上人」

【岐嶷】 詩經の大雅に「克岐克嶷」とあり、鄭箋に「嶷、識也、其見嶷嶷然、有所識別也、朱註には「峻茂ノ貌」とあり、幼者の卓異なるをいふ、
 【枳棘ハ驚風ノ棲ム所ニアラズ】 (枳棘ハ一) を見よ、
 【起居注】 晉書に「起居郎ヲ左史トイヒ、起居舍人ヲ右史トイフ、書スル所ノ言動、皆一トイフ」
 【歸去來兮】 「カヘリナンイザ」と訓す、陶淵明の歸去來辭に「一、田園將蕪、胡不歸」來兮二字は共に助語なり、
 【菊】 禮記に「季秋ノ月鞠ニ黃華アリ」爾雅に「治蔕ト名ツク」或は、日精と名つけ、或は周盈と名つく、仙書に「茱萸ヲ辟邪翁トナシ、菊花ヲ延壽客トナス、故ニ九日コノ二物ヲ假リ、以テ陽九ノ厄ヲ消ス」鄭谷の十日菊の詩に「節去蜂愁蝶不知、曉庭暈繞折殘枝、自緣今日人心別、未必秋香一夜衰」楚辭に「夕飡秋菊之落英」東坡の詩に「荷盡已無擎雨蓋、菊殘猶有傲霜枝」陶淵明の詩に「采菊東籬下、悠然見南山」
 【起句】 絶句の第一の句をいふ、滄浪詩話に「一好尤難得」また廣く詩文の起手の句をいふ、
 【崎嶇】 玉篇に「山路平カナラザルナリ」李羣玉の句に「正穿詩曲一一路」またかゝる路は之を跋めば困難を

感ず、よりに困難の義に轉用す、史記燕世家に「一強國之閉、また陸賈傳に「一山海閉」
 【詭遇】 正しき法度に由らずして、遇合するをいふ、孟子滕文公下に「爲之一朝而獲十」正しく車を御すれば、終日一禽だにも得ざるに、正道に由らずして僥倖せしことをいふ、
 【菊ヲ餐ス】 楚の屈平の賦に「朝飲木蘭墜露、夕餐秋菊之落英」
 【鞠躬】 身をかがめて敬ふなり、論語鄉黨篇に「入公門、一如也、如不容、公門は高大なり、而るを容れられざるが若くするは、敬の至なり、
 【菊花酒】 西京雜記に「菊花舒ル時、莖葉ヲ舂セ採リ、黍米ヲ雜エ之ヲ釀シ、來年九月九日ニ至リ、始メテ熟シ、就キテ飲ム、故ニ一トイフ」
 【菊月】 提要錄に「九月ヲ一トイフ」
 【規矩準繩】 規は、ブンマハシ圓をつくるもの、矩は「サシガネ」方をつくるもの、準は「ミヅモリ」平をはかるもの、繩は「スミナハ」直をなすもの、孟子に「聖人既竭目力焉、繼之以一、以爲方員平直」また淮南子の説林訓に「非規矩不能定方圓、非準繩不能正曲直」

【麴生】 酒の異稱、麴一に麴に作る、開天傳信記に「葉法善居玄眞館、常有朝客十餘人、詣之、滿座思酒、忽有入叩門云、麴秀才、傲視直入、法善密以小劍擊之、隨手喪元、墜于階下、化爲瓶榼、一座驚遽、視其處所、乃盈瓶醞醞也、咸大笑飲之、醉而撫其瓶、曰、一風味、不可忘也」
 【鞠治】 罪をただししらべる、史記に「輒下高令一之」
 【鞠塵】 華の名、黄色なり、周禮天官内司服に「天子乃薦麴衣」の注に「色一、如シ我國にても、天皇の裳の御袍の染色とす、蓋草、紫草、灰等にて染むといふ、黄にして青みあり、御紋は、桐竹、鳳凰、或は唐草と鳥となり」といふ、
 【僞君子】 「ニセノクンシ」丹鉛總錄に「蓋眞小人、其名不美、其肆、惡有限、一則既竊美名、而其流、惡無窮矣」
 【歸化】 他國の人が此方の國に籍をうつすをいふ、此方の徳化に歸服する義、唐書に「及四夷一之事」
 【義和】 書の堯典に「乃命一」とあるは、義氏和氏の二氏にて、曆象を司る官たりし人、また日の取者をいふ、楚辭に「日忽忽、其將暮、吾令一」

【棄灰ノ刑】 灰を道に棄つる者を罪する刑なり、韓非子に「般之法、一於衢者刑」また史記李斯傳に「商君之法、刑棄灰于道者」と

【岐黃】 醫術を一之術といふ、黃帝岐伯をして草木を嘗め味ひ、醫を興し病を療せしむ、故にいふ、

【義皇以上ノ人】 人品の高きこと、太古の伏羲時代より以上の人と云ふ義、書言故事に「晉ノ陶潛、夏月北窓ノ下ニ高臥ス、風アリ颯然トシテ而シテ至ル、自ラ謂フ、義皇以上ノ人ナリト」

【奇貨居クベシ】 珍らしき貨は、時を待つて賣るときは大利あり、故に之を買ひこみおくべしとの義、史記の呂不韋傳に「子楚秦ノ爲メニ趙ニ質子タリ、秦數、趙ヲ攻ム、趙甚ダ子楚ヲ禮セズ、子楚ハ秦ノ諸庶孽孫ニシテ、諸侯ニ質タリ、車乘進用饒ナラズ、居處困ミテ意ヲ得ズ、呂不韋邯鄲ニ賈ス、見テ而シテ之ヲ憐ミテ曰ク、此レ奇貨可居ト、乃チ往イテ子楚ニ見エテ、説イテ曰ク、吾レ能ク子ノ門ヲ大ニセント、子楚笑ツテ曰ク、且ニ自ラ君ノ門ヲ大ニシテ、而シテ乃チ吾ガ門ヲ大ニセヨト、呂不韋曰ク、子ハ知ラザルナリ、吾ガ門ハ、子ノ門ヲ待ツテ而シテ大ナラントある註に「子楚ヲ以テ財貨ニタクラブルナリ」

【奇貨居クベシ】 珍らしき貨は、時を待つて賣るときは大利あり、故に之を買ひこみおくべしとの義、史記の呂不韋傳に「子楚秦ノ爲メニ趙ニ質子タリ、秦數、趙ヲ攻ム、趙甚ダ子楚ヲ禮セズ、子楚ハ秦ノ諸庶孽孫ニシテ、諸侯ニ質タリ、車乘進用饒ナラズ、居處困ミテ意ヲ得ズ、呂不韋邯鄲ニ賈ス、見テ而シテ之ヲ憐ミテ曰ク、此レ奇貨可居ト、乃チ往イテ子楚ニ見エテ、説イテ曰ク、吾レ能ク子ノ門ヲ大ニセント、子楚笑ツテ曰ク、且ニ自ラ君ノ門ヲ大ニシテ、而シテ乃チ吾ガ門ヲ大ニセヨト、呂不韋曰ク、子ハ知ラザルナリ、吾ガ門ハ、子ノ門ヲ待ツテ而シテ大ナラントある註に「子楚ヲ以テ財貨ニタクラブルナリ」

【奇貨居クベシ】 珍らしき貨は、時を待つて賣るときは大利あり、故に之を買ひこみおくべしとの義、史記の呂不韋傳に「子楚秦ノ爲メニ趙ニ質子タリ、秦數、趙ヲ攻ム、趙甚ダ子楚ヲ禮セズ、子楚ハ秦ノ諸庶孽孫ニシテ、諸侯ニ質タリ、車乘進用饒ナラズ、居處困ミテ意ヲ得ズ、呂不韋邯鄲ニ賈ス、見テ而シテ之ヲ憐ミテ曰ク、此レ奇貨可居ト、乃チ往イテ子楚ニ見エテ、説イテ曰ク、吾レ能ク子ノ門ヲ大ニセント、子楚笑ツテ曰ク、且ニ自ラ君ノ門ヲ大ニシテ、而シテ乃チ吾ガ門ヲ大ニセヨト、呂不韋曰ク、子ハ知ラザルナリ、吾ガ門ハ、子ノ門ヲ待ツテ而シテ大ナラントある註に「子楚ヲ以テ財貨ニタクラブルナリ」

【揮霍】 猝遽なり、陸機の文賦に「紛紜一註に「一ハ、疾キ貌」張協七命に「翁忽一、雲廻、風列」

【揮霍】 字書に「搖、手曰揮、反、手曰擲」とあり、必しも手字に拘せず、他物を以て揮去するにも用ふべし

【機關】 「カラクリ」をいふ、活動のしかけを施したる機械の稱、漢書藝文志に「技巧者、習手足、便器械、積一以立、攻守之勝者也」また鬼谷子に「口者一也」

【羈貫】 「アゲマキ」卯角なり、殺梁傳昭十九年に「子生一、成童不就師父之罪也」註に「一ハ、交午剪髮以爲飾」

【葵傾】 「ヒマハリ」の花の日輪の方に傾き向ふによりて、借りて君主又は長上の徳を仰ぎ慕ふ心をいふに用ふ、曹植の文に「葵藿之傾葉、太陽雖不爲之回光、終向之者、誠也」

【機警】 「サトキ」こと、綱鑑に「操少一有權數」註に「一ハ機關アリテ警省いましめかへりみる」スルナリ

【權數】 權謀術數なり、

【儀刑】 儀は象なり、法なり、刑もまた法なり、象り法とる義、詩の大雅に「一、文王、萬邦作、孚」

【紀曉嵐】 (紀昀)を見よ、

【詭激】 言行の中正を失してはげしきと、南史に「文辭

一、また激説とも用ふ、後漢書范冉傳に「好違時、絶俗爲激説之行、冉一に丹に作る、

【詭譎】 猶ほ奇怪の如し、東都賦に「瑰異一、燦爛炳煥、また史記司馬相如傳に「奇物譎詭」

【魏闕】 魏は高なり、闕は門なり、莊子の讓王篇に「中山ノ公子牟、瞻子ニ謂ツテ曰ク、身在、江海上、心居、乎魏闕之下、奈何」註に「魏闕ハ國君ノ門ナリ、淮南子に「魏闕之高、上際青天」轉じて朝廷の義にも用ふ、

【割闕氏】 割は曲刀、闕は曲鑿なり、品字箋に「割闕ハ、雕刻ノ刀ナリ、故ニ刊刻ヲ謂ツテ割闕ト爲ス」一ハ、版ホリをいふ、楚辭に「握割闕、不用兮、操規矩、而無所施」

【撝謙】 易の謙卦に「謙尊而光、卑而不可踰、無不利」撝は施なり、謙とは自らへりくだる義、

【微言】 善言なり、書經に「嗚呼我且、已受人之一」威告孺子王矣、且は周公旦、

【機嫌】 楞嚴經に「誹謗比丘、罵詈徒衆、訐露人惡、不避一、ことあり、先方のさし思はくの事をいふ、東鑑に「於蹴鞠者、不論一、また平家物語に「今一度君を見參らせんとして一を顧み候はず」義經記に「京の一をを伺ひまひける」徒然草に「世に従はん人

は先一を知るべし」といふ如し、轉じて人の氣分の事にいひ、更に轉じて御無事といふ程の事を御機嫌よくといふ、後漢書晉書等に譏嫌の字あるに由りて、機は譏の誤りならんとの説は、なか／＼に非なり、

【危言危行】 危は高峻なり、言行を高くするをいふ、論語憲問篇に「子曰、邦有道一、邦無道、危行、言孫、孫、孫、遜に同じ、卑順なり、また禮記に「民言不危行、而行不危言矣」とあるは、言行一致して、偏高偏短の弊なきを要するをいふ、

【寄語】 ことを寄せ傳ふ、コトズテ鮑昭の句に「一、後生子」

【綺語】 うるはしく飾りたる言なり、梁武帝の勅に「所、言國美、皆非事實、不無一之過」大藏法數に「一トハ眞實ニ乖背シ、言辭ヲ巧飾シ、人ヲシテ好樂セシムルヲ謂フ」无量壽經に「兩舌惡口妄言一」

【擬古】 古體の文詩にまねて作るをいふ、捫蝨新話に「一詩難於近似、觀江文通雜體詩二十首、便是淵明具體、叔敖復生也」

【鬼哭】 淮南子に「蒼頡書ヲ造ル、而シテ天粟ヲ雨ラシ鬼夜哭ス」また杜甫の兵車行に「君不見青海頭、古來白骨無人收、新鬼煩冤舊鬼哭、天陰雨濕聲啾啾」

は先一を知るべし」といふ如し、轉じて人の氣分の事にいひ、更に轉じて御無事といふ程の事を御機嫌よくといふ、後漢書晉書等に譏嫌の字あるに由りて、機は譏の誤りならんとの説は、なか／＼に非なり、

【危言危行】 危は高峻なり、言行を高くするをいふ、論語憲問篇に「子曰、邦有道一、邦無道、危行、言孫、孫、孫、遜に同じ、卑順なり、また禮記に「民言不危行、而行不危言矣」とあるは、言行一致して、偏高偏短の弊なきを要するをいふ、

【寄語】 ことを寄せ傳ふ、コトズテ鮑昭の句に「一、後生子」

【綺語】 うるはしく飾りたる言なり、梁武帝の勅に「所、言國美、皆非事實、不無一之過」大藏法數に「一トハ眞實ニ乖背シ、言辭ヲ巧飾シ、人ヲシテ好樂セシムルヲ謂フ」无量壽經に「兩舌惡口妄言一」

【擬古】 古體の文詩にまねて作るをいふ、捫蝨新話に「一詩難於近似、觀江文通雜體詩二十首、便是淵明具體、叔敖復生也」

【鬼哭】 淮南子に「蒼頡書ヲ造ル、而シテ天粟ヲ雨ラシ鬼夜哭ス」また杜甫の兵車行に「君不見青海頭、古來白骨無人收、新鬼煩冤舊鬼哭、天陰雨濕聲啾啾」

【鬼谷子】 一卷、漢書藝文志に著録せず、隋志に始めて之を縦横家に列して三卷とす、皇甫謐の註に「一ハ楚人ナリ、周ノ世ニ、鬼谷ニ隱ル」史記の張儀傳に「儀蘇秦ト俱ニ鬼谷先生ニ事ヘテ術ヲ學ブ」と、王應麟の玉海に「周ノ時ノ高士、郷里族籍名字ナシ、ソノ隱ルルトコロヲ以テ自ラ鬼谷先生ト號ス、蘇秦張儀之ニ事フ」と、その族籍名字を傳へざるは、猶ほ鶻冠子の如きなり、宋濂いふ「鬼谷ノ言フトコロノ捍閭鉤籍揣摩等ノ術ハ、皆小夫蛇鼠ノ智ナリ、家之ヲ用フレバ家亡ビ、國之ヲ用フレバ國亡ビ、天下之ヲ用フレバ、天下ヲ失フ（中略）士大夫宜シク唾シ去リテ道ハザルベキナリ」と、この書後人の偽作たること疑なしと雖も、皇甫謐の手に成れりとの説は確證あるにあらず、四庫全書提要に「隋志ニ、皇甫謐註ト稱スルキハ、則チ魏晉以來ノ書タルハ固ヨリ疑ナシ、ソノ術道フニ足ラズト雖モ、ソノ文ノ奇變詭偉ナルハ、要スルニ後世ノ能ク爲ル所ロニアラズ」とあるを以て定論とすべし、

【鶻冠】 かみさる義、猶ほ鶻冠の如し、史記田儼傳に「秦復得志於天下、則一用事者墳墓矣」

【騎虎ノ勢下ルコトヲ得ズ】 虎にのりて、阪路をひた下りに下るときは、其の勢極めて急にして、中途にて

虎より下ることを得ず、以て事に従ひては、中止すべからず、中止するときは、かへりて害を受くるに喩ふ、隋書獨孤皇后傳に「當周宣帝崩、高祖入居禁中、總百揆、后使人謂高祖曰、大事已然、騎虎之勢不得下、勉之」

【議婚ノ詩】 白樂天の詩、白氏文集に見ゆ、左の如し、

天下無正聲、悅耳即爲娛、人閒無正色、悅目即爲姝、顔色非相遠、貧富則有殊、貧爲時所棄、富爲時所趨、紅樓富家女、金縷繡羅襦、見人不斂手、嬌癡二八初、母兄未開口、已嫁不須臾、綠窓貧家女、寂寞二十餘、荆釵不直錢、衣上無真珠、幾同人欲聘、臨日又踟躕、主人會良媒、置酒滿玉壺、四座且勿飲、聽我歌兩途、富家女易嫁、嫁早輕其夫、貧家女難嫁、嫁晚孝於姑、聞君欲娶婦、娶婦意何如、

【危坐】 正しく端坐すること、危は、タカキ義、正しく坐すればたかくなる、史記に「正襟危坐」

【箕坐】 兩足をさし出して、「ミ」の如くすわる、論衡に「趙陀推髻一」

【忌妻】 ねたみ深き妻、晉書に「劉孝標云、馮有、一、自

操井曰

【餽歲】 俗にいふ歳暮の「トリヤリ」なり、東坡集に「蜀ノ風俗晚歳相與ニ餽問ス、之ヲ一トイヒ、酒食相邀フヲ別歳トナシ、除夜ニ至リ且ニ達スルマデ眠ラズ、守歳トナス」と、餽一に饋に作る（別歳）を見よ、

【起草】 文の草稿を書き起す義、書言故事に「撫言云、温庭筠作賦、未會起草、一吟一韻、場中號温八吟」

【義倉】 凶年のそなへに設けたる米倉をいふ、唐會要に「開成四年、詔曰、一防水旱」

【箕帚ノ妾】 人の妻となることを謙していふ、史記の高祖本紀に「呂公曰ク、臣少ヨリ好ンデ人ヲ相ス、人ヲ相スル多シ、季ガ相ニ如クハナシ、願クハ季自愛セヨ、臣ニ息女アリ、願クハ季ガ箕帚ノ妾ト爲サント」妾となして洒掃に供へんとの謙辭なり、

【季札劔ヲ掛ク】 史記に「春秋ノ時、吳ノ季札出デ使シテ徐ノ君ニ過ギル、徐ノ君季札ガ劔ヲ好ス、然レドモ敢テイハズ、季札心ニ之ヲ知ルト雖モ、上國ニ使スルガ爲メニ、未ダ獻ゼズ、還リテ徐ニ至レバ、徐ノ君已ニ死セリ、乃チ其ノ寶劔ヲ解キ、之ヲ徐ノ君ノ冢樹ニ掛ケテ去ル、從者曰ク、今徐君已ニ死セリ、之ヲ掛ケテ去ルハ何ゾヤト、季札曰ク、始吾ガ心ニ已ニ之ヲ許セリ、

豈其ノ死ヲ以テ吾ガ心ニ背クベケンヤト」季札は吳王壽夢の季子なり、

【季札上國ニ聘ス】 (季札聘於上國)蘇軾の李氏山房藏書記の句なり、左傳襄二十九年に「吳公子來聘、請觀周樂」とこれなり、上國は、即ち中國なり、吳は東南卑下の地、故に中國を指して、上國と爲す、

【危棧】 あぶなき、カケハシ、元稹の句に「每逢一處、須作魚貫行」

【岐山】 説文に「山ノ名、后稷十三世ノ孫、古公亶父、始メテ此ニ居ル」詩經の大雅に「率西水滸、至于岐下」一統志に「山兩岐アリ、故ニ名ヅク」六書故に「一ハ今ノ鳳翔府岐山縣ニ在リ、禹貢ノ導嶺及岐トアル是レナリ、又山海經ノ一ハ今ノ汾州介休縣ニ在リ、中畧禹貢ノ治梁及岐トアル是レナリ」

【義山ガ殺風景ノ譏】 駁臺雜話「春秋のあらそひ」に見ゆ、こは李義山の雜纂に、殺風景の目ありて「花開鴨道、看花涙下、苔上鋪席、斫却垂楊、花下曬裊、石筍繫馬、月下把火、妓筵説俗事、果園種菜、背山起樓、花架下養雞鴨」等を擧げたり、雜纂は五朝小説、説郭等に收めたり(李商隱)を參看せよ、

【箕山ノ志】 昔、許由巢父の箕山に隠れ居たる故事に

よりて、退隱する志にいふ、晉書に「文帝問曰、聞有箕山之情、何以在此、秀曰、以爲巢許狷介之士、未達堯心」

【雉】 爾雅に「一ニ數種アリ、青質ニシテ五色ナルヲ鶡雉トイヒ、長尾ニシテ走リテ且ツ鳴クヲ鶡雉トイヒ、黄色ニシテ自ラ呼ブヲ鳴雉トイヒ、山雞ニ似テ小冠ナルヲ鶡雉トイヒ、五色備ハリテ章ヲ成スヲ暈トイフ、此レ左傳ニ所謂五雉ナリ尙書に、華蟲とあるは雉なり、曲禮に「宗廟ヲ祭ルニハ、雉ヲ疏趾トイフ」と、儀禮に「士相見之贄、各執雉」注に「ソノ介ヲ守リテ節ヲ失ハザルニ取ル」

【杞梓】 二木の名、皆良材なり、杞は樹柳の如く、葉鹿にして白色、理は微赤、梓は楸の疎理白色にして子を生ずるもの、資治通鑑周安王二十五年に「一連抱、而有數尺之朽、良工不棄」

【紀事】 文體明辨に「按ズルニ、紀事ハ、記志ノ別名ニシテ、野史ノ流ナリ、古ハ、史官時事ヲ記スルコトヲ掌リテ、耳目ノ逮バザル所ノ者ハ、往往遺ス、是ニ於テ文人學士、見聞スル有ルニ遇ヘバ、手ニ隨ヒテ紀錄シ或ハ以テ史官ノ採擇ニ備ヘ、或ハ以テ史籍ノ遺亡ヲ裨フ、名同ジカラズト雖モ、其ノ紀事タルハ一ナリ云

【記事珠】 わすれたる事を、思ひだし得る珍らしき珠なり、開元遺事に「張說、相トナル、人アリ一珠ヲ惠ム、紺色ニシテ光アリ、一トイフ、或ハ遺忘アルトキハ、即チ此ノ珠ヲ玩ベバ、心神頓ニ悟ル」

【貴耳賤目】 (耳ヲ貴ビテ)を見よ、

【忌日】 おやの死せし日、禮記に「君子有終身之憂、一之謂也」

【奇日】 葛原詩話に「半ノ日ヲ一トイヒ、丁ノ日ヲ偶トイフ、又雙日雙日トモイフ、宋書ニ仁宗孫夷ヲ以テ侍講ヲ兼ネシム、初メ詔シテ雙日ニ經筵ニ御ス、是ヨリ雙日ト雖モ亦輔臣ヲ召シテ講讀セシム」韻會に「雙ヲ偶トイヒ、雙ヲ奇トイフ」

【記室】 記録をつかさどる屬官、右筆、イウヒツの類なり、南史に「以爲一」

【樹靜ナラント欲スレバ風止マズ】 韓詩外傳の語「樹欲靜而風不止、子欲養、親不待矣、往而不可返者年也、往而不可追者親也」とあり、説苑家語等にも出づ、語や、異なるのみ、

【箕子廟】 箕子の靈廟をいふ、箕子は、微子、比干と共に殷の紂王につかふ、論語微子篇に「微子去之、箕子爲之奴、比干諫而死、孔子曰、殷有三仁焉」とあり、周の武

【棄市】 罪人を殺して屍を市中にさらすをいふ、史記秦紀に「有敢偶語詩書」漢書景帝紀に「中元二年改磔曰一」

【詭辭】 「イツハリノコトバ」なり、玉篇に「欺也、謾也、穀梁傳文六年に「一而出」の註に「不以實告人也」

【器使】 人を使ふに、その才能の長ずるところにしたがひて用ふることを、なほ器を用ふるが如くなるをいふ、論語に「子曰、君子易事而難悅、及其使人也、器之、なほ書經に「與人不求備」とあると同意、

【懷伎】 伎は一の音キ害ひ很る義、懷はつよく戻る義、一にて甚しくもとる義、史記貨殖傳に「人民矜一、好氣任俠爲姦」

【機事アルモノハ必ず機心アリ】 機事とは機巧の事なり、莊子に「子貢漢陰ヲ過グ、一丈夫アリ、方ニ圃畦ノ爲メニ隠ヲ鑿リ、而シテ井ニ入り、甕ヲ抱キテ出ツ、子貢曰ク、此ニ機アリ、日ニ浸スコト百圃ナリト、畦者笑ヒテ曰ク、有機事者、必有機心、吾羞デテ爲サザルナリト」

【魏紫姚黃】 牡丹の異名、牡丹譜に「錢思公曰、人謂牡丹花王、今姚黃眞爲王、魏紫后爾」

王すてに般に勝ち、箕子の囚を釋き、之を朝鮮に封じて臣とせざりき、かくて箕子は今の平壤に都せしなり、漢書地理志に「箕子去ッテ朝鮮ニ之キ、ソノ民ヲ教フルニ禮樂田蠶織作ヲ以テシ、婦人ハ貞信ニシテ淫セズ、民飲食スルニ蓬豆ヲ以テス、貴ブベキカナ、仁賢ノ化ヤ」とあり、柳宗元に、書「一碑陰」といふ文あり、文章軌範に收めたり、

【幾事密ナラザレバ害ヲナス】 大切の事をしやべると敗の本となるをいふ、幾は機に同じ、次項を見よ、

【機事密ナラザレバ、則チ成ヲ害ス】 機微の事は、慎密にせざるときは、漏泄して、禍を致し、其の事の成就を妨ぐるをいふ、易の繫辭上傳に「亂ノ生ズル所ロハ、則チ言語以テ階ヲ爲ス、君密ナラザレバ、則チ臣ヲ失フ、臣密ナラザレバ、則チ身ヲ失フ、幾事不密、則チ害成是ヲ以テ君子ハ慎密ニシテ、而シテ出サザルナリ」とあり、機は幾に通ず、

【葵心】 人を慕ひて心つねに之に向ふと、「ヒマハリ」の日に向ふが如きをいふ(傾葵)を見よ、

【鬼薪】 刑徒をいふ、薪を採りて、宗廟に給せしむる者、史記秦紀に「輕者爲一」

【崎人】 崎は獨なり、獨異の人をいふ、ヘンジンまた俗

に稱はざるなり、また禮教を缺く者をいふ、莊子の大宗師篇に「子貢曰ク、敢テ一ヲ問フ、曰ク、一トハ人ニ崎ニシテ、而シテ天ニ伴シ」

【疑心暗鬼ヲ生ズ】 我が心に疑ふところあれば、種種の恐ろしき妄想を生ずるをいふ、列子説符篇の虜齊口義に「諺曰、疑心生暗鬼、また天台軌範にも「心迷生暗鬼」

【紀信トイヒケル兵、高祖ニムカツテ申ス】 太平記卷二に見ゆ、史記項羽本紀に「漢ノ將紀信、漢王ニ説イテ曰ク、事已ニ急ナリ、請フ王ノタメニ楚ヲ誑キテ王トナラン、王以テ開カニ出ツベシト、是ニ於テ漢王夜女子ヲ榮陽ノ東門ニ出ダス、甲ヲ被ルモノニ千人、楚ノ兵四面ヨリ之ヲ撃ツ、紀信黃屋車ニ乘リ、左翼ヲ傳ク、曰ク城中食盡キ漢王降ルト、楚軍皆萬歲ト呼ブ、漢王モ亦數十騎ト、城ノ西門ヨリ出デ、成阜ニ走ル、項王紀信ヲ見テ、漢王ハ安クニ在ルカト問フ、信曰ク、漢王已ニ出ツト、項王紀信ヲ燒殺ス」とあり、後信の爲めに廟を順慶に立て忠祐といふ、

【鬼神ニ質ス】 是非を神明に質問するをいふ、中庸に「質諸鬼神而無疑、陽魂を神とし、陰魄を鬼とす、

【杞人ノ憂】 「イラヌンバイ」杞憂を見よ、

容齋隨筆に「與衆共ニ之曰義、義倉、義社、義田、義學、義役、義井之類是也」とあり、また名物六帖に「陰陽文云、造漏澤之仁園、發開蒙之義塾、また輟耕錄に「糊一以淑後進」

【鬼出電入】 鬼出は「アトカタ」の尋ねべきなきをいひ、電入は、その疾きをいふ、出入の測り知るべからざる義、淮南子に「一一一 龍興鸞集」

【宜春】 荆楚歲時記に「立春ニ一一一ノ二字ヲ帖ス」王會宜春帖子に「寶字帖一一一」

【基緒】 緒は事業なり、基業に同じ、書經に「肆嗣王、丕承一一一」

【魏書】 百十四卷、北齊の魏收撰す、之を後魏書といふは、三國の魏に對してなり、志に釋老の目あるは此の書のみにて他に例なし、書中亡佚多く、記事詭譎不平なりとて、世に穢史と稱す、

【記誦詞章】 (俗儒ニ習ヒテ)を見よ、

【木繩ニ從ヘバ正シ】 書經に「木從繩則正、君從諫則聖、曲れる木も繩即ち「スミナハ」をあてて削りなほせば正しくなる如く、君も亦賢臣の諫を受ければ聖君となるとなり、荀子にも「木受繩則直、金受礪則利、君子博學而日參、省乎己、則知明、而行無過矣」

【徽章】 徽は旌旗の屬、章は章采なり、戰國策に「童子爲變、其一以雜秦軍、また禮記の大傳に「殊徽號」とあるも、一一一に同じ、

【漿漿】 漿は飲料とする液なり、一一一は俗にいふ「フルマヒミヅ」搜神記に「羊雍伯、無終山ニ家ス、山高クシテ水無シ、公汲ミテ一ヲ阪頭ニ作り、行ク者ヲシテ、之ヲ飲マシム」

【弁裳屬衣】 柳文の嶺南節度饗軍堂記の字面、弁は草なり、再貢に「島夷弁服」とあり、屬は毛氈の類なり、皆蠻夷の服なり、

【歸寂】 僧の死をいふ、遷化に同じ、宋詩に「想亦自營一一一處、一丘新堂種青松」

【耆儒】 耆は、禮記には六十、周禮には八十をいふとあり、要するに老人をいふ、一一一は、年長けたる儒者なり、十六國春秋前秦錄に「高平蘇通長樂劉祥竝、碩學一一一尤精二禮一一一は宿儒に同じ、

【耆宿】 年老いて徳望あるもの、後漢書に「一一一大賢多見廢棄」

【歸宿】 宿は止なり、歸著の義、荀子に「惘然無所一一一惘然、疎遠の貌、

【義塾】 衆人のために、費用を義捐して、設くる塾なり、

【寄食】 人の家になよりて、口を餉する義、史記淮陰侯傳に「常數從其下鄉南昌亭長一一一」

【詭隨】 是非を顧みずして安りに人に隨ふ義、詩の大雅民勞篇に「無縱一一一以謹無良」一解に、一一一は小惡也、

【疵多シ】 過失多きをいふ、戰國策に「齊兒辨之爲人、也多疵」

【記性】 「モノオホエノウマレツキ」記憶力をいふ、避暑錄に「人之學術皆可勉強、惟一一各有分量、分量とは、うまれ得たるほどをいふ、

【犠牲】 天地宗廟を祭るに用ふる、イケニヘなり、色の純なるを犠といふ、トして吉を得て未だ殺さざるを牲といふ、左傳に「五牲三犧」とあり、班固の東都賦に「薦三犧、效五牲、體神祇、懷百靈」また湯王の故事によりて、己の生命を捐て、人を救ふの義にも用ふ、呂覽に「般湯克夏、而王天下、五年不雨、湯乃以身禱于桑林、剪其髮、割其爪、自以爲一一一用祈、福于上帝、雨大至」

【揮斥】 猶ほ放縱の如し、莊子田子方篇に「至人者、上闔青天、下潛黃泉、一一一八極、神氣不變」と、一解に奮迅なりと、

【奇石ヲ拜ス】 石林燕語に「米芾好奇石、知無爲軍、初

入州麻見立石頗奇喜曰此足以當吾拜遂命取袍笏拜之每呼曰石丈爲言者所憚時人常呼以拜石丈人といへり

【羈縻ヲ負フ】 羈は馬の絡頭なり、縻は馬縶なり、賤役を執るの義、執鞭と同意、左傳に「臣負羈縻從君巡於天下」

【羈縻ノ僕】 羈は馬の絡頭なり、キツナは馬縶なり、縶に作る同じ「タツナ」羈縻を執りて、君の行に従ふ者をいふ、左傳に「居者爲社稷之守、行者爲一之」

【沈泉】 側より湧き出る泉なり、爾雅釋水に「一爪出也」詩經に「有冽一」

【喟然】 喟は歎聲なり、論語に「夫子一歎」また漢書高祖紀に「一歎曰嗟乎大丈夫當如此矣」

【蹶然】 獨立の貌、山のひとりぬき出て高さにも用ふ、莊子に「一有餘」

【巍然】 正義に合したる戦をいふ、孟子に「春秋無一、彼善於此則有之矣」

【巍然】 山の高く大なる貌、轉じて宮殿又は偉大なる人物などをも形容するに用ふ、魏は一に魏に作る同じ、莊子の天下篇に「巍然而已註に「獨立ノ貌」

【蹶足ヲ展フ】 蹶は千里の馬なり、豪傑の士、その才能

衡の詩に「高談一何綺、蔚若朝霞爛」

【虺蛇ノ夢】 女子を生む祥なり（熊羆夢）を見よ、

【皮置】 板にて闇を作り以て物を藏するを皮といふ、

【基時】 「ゴイシ」を布くが如く、處處に割據するをいふ、魏志梁習傳に「往往一」

【龜鈕】 鈕は「ツマミ」一は龜のかたちをさざみたる印の「ツマミ」漢官儀に「丞相ハ黄金ノ一、文ヲ章トイフ」と（印章）を參看せよ、

【儀仗】 仗は劍戟の總名、一は儀式に用ふる武器をいふ、唐書に「掌戎器鹵簿一」

【魏徵】 字は玄成、魏州曲陽の人、太宗の時諫議大夫に拜す、上る所の二百餘奏、剴切帝の心に當らざるなし、貞觀三年秘書監を以て朝政に參預し、後ち鄭國公に封ぜられ、多病の爲めに職を辭す、乃ち特進に拜し、門下省の事を知す、同十七年薨す、帝臨哭して之が爲めに慟す、朝を罷むる五日、司空を贈り、謚して文貞とす、

【乞句】 句は一の音カツ、求なり、乞なり、巧に作る同じ「ゴジキ」をいふ、物を乞ひ求むる者、陳琳の書に「一

を伸し得るに喩ふ、蜀志に「吳ノ將魯肅、先主ニ書ヲ遺リテ曰ク、龐士元ハ百里ノオニアラザルナリ、治中別駕ノ任ニ處ラシメバ、始メテ當展其驥足ノミト」百里の才は、縣令をいふ、

【祇陀】 波斯匿王の太子、祇園精舎の地主なり、逝多を誓多といふ、生ずる時、外國と戦ひて勝つ、故に人を以て樹に命じ勝氏樹ともいふ、諸經に祇樹といふ、戰勝また勝林と譯す、西域記に「逝多唐言勝林、舊一也、金剛經新註に「樹是一太子所施故、言祇樹也」

【詭道】 他の視聽を惑す所の道なり、いつはりて正しからざる道をいふ、孫子に「兵者一也、また潘岳の詩に「兵固一、先聲後實」

【季諾】 確かにうけあふと、史記の季布傳に「楚人ノ諺ニ曰ク、得黄金百斤、不如得季布一諾」季布が信に服するなり、金諾ともいふ、

【北、胡ニ走ラズンバ即チ南、越ニ走ラン】（不北走胡、即南走越）才能の士を捨て、用ひざるときは、必ず去りて敵國をたすくるをいふ、史記季布傳に「季布之賢、漢求之急、此一、一耳」

【忌憚】 忌みはかかる、禮記に「小人而無一也」

【綺談】 麗はしきと綺の如き談話をいふ、文選の陸士

【桔槔】 井上の轆轤にて、水を汲む木、ハネツルベ、莊子に「子獨不見夫一者乎、引之則俯、舍之則仰、彼人之所引、非引人也、故俯仰而不得罪於人、圓機活法に於陵子辭、卿相而一灌園、三才圖會に「一ハ掣水槓ナリ」

【頡頏】（一）を見よ、

【乞巧棚】 七夕（タナバタ）を祭るに設くる、タナハ東京歳時記に「七夕家家錦綵結爲一」また荆楚歳時記に「七夕ニ婦人綵縷ヲ以テ七孔針ヲ穿チ、瓜果ヲ庭中ニ陳ネテ以テ巧ヲ乞フ、蟾子アリテ瓜上ニ網スルハ、則チ以テ巧ヲ得タリトナス」この星祭りを、我國にても、乞巧奠と稱して、天平勝寶七年より始まり、宮中にては清涼殿の庭にて行はせらる、

【佐佐】 壯勇の貌、書の泰誓に「一勇夫」また高大の貌、詩の大雅に「崇墉一」

【拮据】 詩經の豳風鴉鳴篇に「予手拮据」註に「一、手口共ニ作ス貌」

【佶屈聱牙】 文字艱澁にして解し難きをいふ、韓愈の進學解に「周詰殷盤一、一佶屈は「コチタク」してかたきなり、聱牙は、聽き難きなり、

キダン—キツク

【橋化シテ枳トナル】(橋化シテ)を見よ、

【吉月】月の朔日なり、詩に「二月初吉」とあり、周禮に「正月之吉」とあるは、皆朔日をいふ、論語郷黨篇に「吉月必朝服而朝」孔子魯に在りて、致仕せられたる後もなほ月の朔日毎には、必ず朝服を著けて朝せられたるをいふ、

【吉州】江西省に屬す、漢に廬陵といひ、隋唐宋に吉州といひ、元明に吉安府といふ、歐陽修文天祥等の郷里なり、

【橋井】醫家をいふ、錦字箋に「晉ノ時、江淮間ノ人、疫ヲ患フ、蘇耽橋ヲ種エ井ヲ鑿チ、疾ム者ヲシテ橋葉ヲ食ヒ、井水ヲ飲マシメ即チ愈ユ」この事、神仙傳また類書纂要にも見ゆ、

【詰旦】明旦なり(詰朝)を見よ、

【橋中ノ樂】圍碁の樂をいふ、幽怪錄に「巴邛ノ人、家ニ橋園アリ、霜後橋盡ク收斂ス、大橋アリ三斗ノ蓋ノ如シ、巴人之ヲ異トシテ、剖キ開ケバ、每橋二叟アリ、鬚眉皓然、肌體紅明、皆相對シテ象戲ス、談笑自若タリ、一叟ノ曰ク、橋中ノ樂、商山ニ減ゼズ、但ダ根ヲ深クシ替ヲ固クスルヲ得ズシテ、愚人ノ爲メニ摘ドセラシムルヲ憾ムノミト」商山とは、漢の四皓の隱棲せし山

の名、

【詰朝】小爾雅に「一ハ明旦ナリ」左傳僖二十七年に「一ハ相見」また詰旦に作る同じ、說文長箋に「本詰朝ニ作ル、詰ハ古ノ哲ノ字、借リテ明ノ義トス、故ニ明朝ヲ詰朝ト爲ス、今俗ニ詰ヲ以テ詰ト爲スハ、詰ト詰ト字形似タルヲ以テ誤レルナリ」

【狐】格物論に「狐ハ黄ニシテ黄狗ニ似タリ、鼻尖リ尾大ニ、性疑多ク審カニ聽ク」白虎通に「狐死首丘」丘不「忘本也」玄中記に「千歳ノ狐ハ淫婦トナリ、百歳ノ狐ハ美女トナル」說文に「狐ハ妖獸、鬼ノ乗トスルトコロナリ、三徳アリ、ソノ色中和、小前大後、死スレバ則チ丘ニ首ス」白虎通に「德禽獸ニ至ルキハ、則チ九尾ノ狐見ハル」吳越春秋に「禹塗山ニ娶リ、乃チ白狐九尾ノ應ア

【狐尾ヲ濡ス】易の未濟に「小狐汔濟、濡其尾、无攸利」小狐陥溺の患を畏れずして水を濟るに勇む、其の尾を濡して、遂に濟ること能はず、以て事に當りて妄進するも、卒に成ることなきに喩ふ、戰國策に「易曰狐濡其尾、此言始之易終之難也」
【狐ヲ以テ狸トナス】意林新論に「人有以狐爲狸、以惡爲善、後者此非徒不知惡狐、又不知狸與善、後

【狐虎威ヲ假ル】(狐假虎威)臣が君の威をかりて、群下をどすに喩ふ、戰國策に「虎百獸ヲ求メテ之ヲ食フ、狐ヲ得タリ、狐曰ク、子敢テ我ヲ食フコトナカレ、天帝我ヲシテ百獸ニ長タラシム、今子我ヲ食ハバ、是レ天帝ノ命ニ逆フナリ、子我ヲ以テ不信トナサバ、吾子ガ爲メニ先ダチテ行カン、子我ガ後ニ隨ヒテ觀ヨ、百獸我ヲ見テ而シテ敢テ走ラザランヤト、虎以爲然リト、故ニ遂ニ之ト行ク、獸之ヲ見テ皆走ル、虎獸ノ己ヲ畏レテ走ルヲ知ラザルナリ、以爲ラク狐ヲ畏ルルナリト」

【狐ノ疑】狐疑の訓讀なり(狐疑)を見よ、

【狐水ヲ聽ク】(水ヲ聽ク)を見よ、

【木強キトキハ則チ折ル】淮南子原道訓に「兵強則滅、木強則折、革固則裂、齒堅於舌而先之敵」列子黃帝篇にも「老聃曰、兵強則滅、兵強とときは力を恃みて滅び、木強とときは、風雪などにあひて折るるなり、柳の枝に雪をれなきは木の柔かなるに由る」

【橋裏ニ山川ヲ峙ツ】太平記卷の一に見ゆ、圍碁の樂をいふ(橋中ノ樂)を見よ、

【旗亭】酒家なり、旗を立てて、その上に出し標識とす、故に名づく、史記三代世表に「會一、下二」

【儀狄ガ酒、南威ガ色】駢臺雜話「尤物人を移す」に見ゆ、戰國策の魏策に「魏嬰觴諸侯於范臺、酒酣、請魯君舉觴、魯君與避席、擇言曰、昔者帝女令儀狄作酒而美進之、禹禹飲而甘之、絕旨酒、曰、後世必有以酒亡其國者」(中略)晉文公得南威、三日不聽朝、遂推南威而遠之曰、後世必有以色亡其國者」

【蟻垤】垤は字書に「蟻封也」とあり「アリ塚をいふ」アリノタテ「淮南子に「蟻知爲垤」轉じて小さき山に喩ふ、

【畿甸】畿内に同じ、詩の周頌に「邦畿千里、周禮地官小司徒の九畿の疏に「王畿外、仍有九畿、甸は書の禹貢に「五百里甸服、傳に「規方千里之内、謂之甸服、郝經の開平新宮の詩に「畿甸臨中國、山河擁奧區」

【義田】范文正公神道碑に「公嘗テ曰ク、宗族ハ吾ニ於テ固ヨリ親疎アレドモ、祖宗ヨリ之ヲ視レバ、即チ皆其ノ子孫ナリ、且吾ガ祖宗徳ヲ積ムコト百年、而シテ後吾ニ發シテ、大官ニ至ルコトヲ得タリ、モシ獨リ富貴ヲ享ケテ、宗族ヲ恤マズンバ、異日何ヲ以テ祖宗ニ地下ニ見エンヤ、今亦何ノ顔アリテ家廟ニ入ランヤト、遂ニ良田數百畝ヲ買ヒテ、一ト號シ以テ群族ヲ養濟ス、日ニ食アリ歳ニ衣アリ、嫁娶喪葬スルモノ、皆

賸スアリ、仕ヘテ家居シ、代ヲ俟ツ者ニハ與ヘ、仕ヘテ官ニ居ル者ニハ、其ノ給ヲ罷ム

【義徒】 義兵をいふ、義衆ともいふ、南史の宋本紀に「集一、凡二十七人、願從者百餘人」

【際突】 際は毀と通ず、ツキアタリソコナフ、後漢書の袁紹傳に「所過一、また柳文の捕蛇者説に「一、於南北」

【器ト名トハ以テ人ニ假スベカラズ】 (名ト器トハ)を

見よ、

【宜男艸】 草木記に「萱草、一名ハ宜男、婦人懷妊シ、其ノ花ヲ佩ブルハ男ヲ生ム」

【岐ニ哭シ練ニ泣ク】 岐はわかれ路、練はしろき練なり、わかれ路に臨みて哭し、白練を見て泣くは其の本

同じくして末の異なるを悲むなり、淮南子に「楊子見岐路而哭之、爲其可以南可以北、墨子見練絲而泣之、爲其可以黃可以黑、岐一に逆に作る、逆は音キ

九達のわかれ路なり、

【木ニ就ク】 死して棺槨の中に入る義、左傳に「我二十五年矣、又如是而嫁、則就木焉」

【岐ニ泣ク】 岐は、二、塗なり、淮南子に「楊朱見岐路而泣、謂其可以南可以北、泣一に哭に作る、呂氏

春秋には「墨子見岐道而哭之」

【器ニナレバ匱カラズ】 匱は乏なり、同じ器を二つ備ふるときは、用ふる上に、不自由なきの意、左傳に「君異於器、不可以二器二、不匱君二、多難」

【沂ニ浴シ舞雩ニ風ス】 (浴沂)を見よ、

【木ニ縁リテ魚ヲ求ム】 魚は水に棲むものなり、木に縁りて魚を求めんとするも、到底得べからず、以て求むるに其の道に由らざれば、勞して功なきに喩ふ、孟子に「猶縁木而求魚也」

【砧】 衣板の略、衣にすべき布を打つ臺、石又は木にて作る(砧杵)を見よ、

【歸寧】 婦の「サトガヘリ」して、父母の安否を問ふなり、詩經の周南葛覃篇に「歸寧父母」註に「寧ハ安ナリ、安ヲ問フノ謂ナリ」左傳の莊二十七年に「冬杞ノ伯姬來ルハ一スルナリ」

【歸農】 游民を勸めて農業に歸せしむるなり、漢書の食貨志に「賈誼説上曰、歐民歸之農、皆著於本、則善積足而民樂」後漢書李固の傳にも、李固が盜賊共を歸農せしめたるを見よ、

【伎能】 伎は才なり、一は才能に同じ、史記の孟嘗君傳に「無他、一伎一技に技に作る、

して、既はずてに過ぎたる義、故に一一は即ち十六日なり、書經に「惟二月既望」

【義方ノ訓】 子弟を教訓するをいふ、左傳隱三年に「石碏諫曰、臣聞愛子教之以義方、弗納於邪、云云」

【岐伯】 北地の人、黃帝と與に醫を論ず、著すところ素問内經あり、世に行はる、

【箕伯】 故事成語考に「飛廉一一ハ悉ク是レ風神ナリ」の註に「風俗通ニ、飛廉一一ハ箕星ナリ」張衡の賦に「屬一一以函風兮」の註に「一一ハ風師ナリ」箕は風を司る星の名、

【驥伯樂ニ遇ヒテ長鳴ス】 戰國策に「驥驢車ニ服シテ太行ニ上ル、遷延シテ轅ヲ負ヒ上ル能ハズ、伯樂之ニ遭ヒ車ヨリ下リ攀ヂテ之ニ泣ク、驥是ニ於テ俛シテ噴シ、仰ギテ長鳴シ、聲天ニ聞エ、金石ニ出ル者ノ若キハ何ゾ、彼ノ伯樂ノ己ヲ知ルヲ知レバナリ」驥は千里の名馬、己の不遇を伯樂に訴ふるなり、

【歸馬放牛】 (馬ヲ華山ノ)を見よ、

【軌範】 法則なり、孔安國尙書序に「典謨訓誥誓命之文凡百篇、所以恢弘至道、示人主以一一也」

【氣霽レテハ風新柳ノ髮ヲ梳ル】 「氣霽風梳新柳髮、冰消浪洗舊苔鬚」は都良香の聯句にて和漢朗詠集に出

【木ノ長キヲ求ムル者ハ必ズ根本ヲ固クス】 貞觀政要に「魏徵上疏曰、臣聞、求木之長者、必固其根本、欲流之遠者、必浚其泉源、思國之安者、必積其德義」

【魏ノ文侯信ヲ重ズ】 説苑に「魏の文侯、虞人ト獵ヲ期ス、期ニ至リテ大ニ雨フルニ、行ヲ命ズ、左右之ヲ止ム、文侯曰ク、人ト期シテハ、信ヲ失フベカラズト、乃チ雨ヲ冒シテ赴キ往ケリ、是ニ於テ、國人之ニ服セリ」魏は今の河南開封府、周と同姓、文王の子畢公高の後なり、畢萬に至り晉に事へ、魏に邑す、桓子に至り、韓趙と共に知氏を滅し之を分ち、文侯に至り周威烈王の命を以て侯と爲る、

【着婆】 此に能活といふ、影壁王の子、善見太子の庶兄、奈女の生む所、胎を出づる時、即ち針筒藥囊を持す、その母之を惡み、巷中に棄つ、時に無畏王、車に乗じて之を見、乳して之を養ふ、長じて名醫となる、詳しくは翻譯名義集二を見よ、また鳥の名、其命と譯す、一身二頭の鳥なり、

【跋望】 跋は企に同じ、「カカト」を擧ぐるなり、足を企てて遠きを望む義、詩の衛風に「誰謂宋遠、跋予望之」傳に「足ヲ跋ツレバ、以テ之ヲ望見スベシ」

【既望】 日月相望む、之を望といふ、望は陰曆十五日に

づ良香上句を得て、下句を案じ煩ひつゝ羅城門を過ぎけるに、樓上に聲ありて下句を付けたる由、十訓抄などに見ゆ。

【羣飛】 羣は雉の屬、毛色光鮮なり、詩の小雅に「如羣斯飛」箋に「羣ハ鳥ノ奇異ナル者ナリ」頭陀寺碑に「丹刻—」とあり、建物の壯麗なるに喩ふ。

【熹微】 光のかすかなると、歸去來辭に「問征夫以前路、恨晨光之—」

【羈縻】 羈は馬の絡頭、縻は牛の絆なり、牽制の義に喩ふ、漢書司馬相如傳に「天子之於夷狄也、其義—、勿絶而已」絆は牛の「ハナ」につなぐ「ツナ」なり。

【驥尾ニ附ク】 蒼蠅（アヲバ）の、千里の馬の尾につき、遠きに達する如く、後進の人が、先輩の士に従ひて名を成すをいふ、史記の伯夷傳に「太史公曰、伯夷叔齊雖賢、得夫子而名益彰、顔淵雖篤學、附驥尾而行益顯、王子淵の四子講德論に「夫ハ蚊蟻ハ、終日經營スレドモ、階序ヲ越ユル能ハズ、驥尾ニ附ケバ、則チ千里ヲ涉リ、鴻ノ翻ニ攀ヅレバ、則チ四海ニ翔ル」とあるも同じ。

【季父】 父の兄弟中の最も年少者をいふ「ヲヂ」戰國策に「韓君之—也（世父）を見よ、

【汲黯】 字は長孺、漢の濮陽の人性倨にして禮少く、人の過を容れず、景帝の時太子洗馬となり、嚴々以て憚からざる、武帝の時、謁者となり、面折廷諍するを以て、武帝之を憚り、稱して古の社稷の臣に近しと爲し、冠せざれば敢て見ず、後ち出て淮陽の太守となる。

【汲引】 互にひつぱりあひて位に進むをいふ、通鑑の註に「水ヲ汲ム者ハ、繩ヲ引キテ必ズ上ルヲ期ス、人臣ノ相—スル亦猶ホ是ノ如シ」

【給ヲ仰グ】 上より給與を受くるをいふ、史記平準書に「衣食仰給縣官」

【笈ヲ負フ】 笈は書箱なり、之を負ひて途に上るなり、由りて遊學の義となす、史記蘇章傳に「—從師不遠千里」

【汲汲】 促急の情なり「アセル」また速かならんことを欲するの義なり、漢書の揚雄傳に「少嗜欲不汲汲於富貴、不戚戚於貧賤」

【岌岌】 安からざる貌、孟子に「殆哉、—乎」また危き貌、屈原離騷に「高余冠之—兮」

【急急如律令】 惡魔をはらふ咒文なり、資暇錄に「符祝之類末句、急急如律令者、以爲如飲酒之律令、速去不得滯也、一説漢明每行下之書、皆云如律令云云、下學ヲ取ル、其ノ策ヲ射テ中ツル者、之ヲ高第トイフ、隋唐ヨリ以來、進士諸科、遂ニ及第ノ目アリ」

【急灘】 はや瀬なり、水中に石多く、または流急にして舟行の危きところを灘といふ「ナダ」峻灘惡灘義略、同じ。

【記問ノ學】 古書を記誦して、以て學者の問を待つをいふ、禮記の學記に「記問之學、不足、以爲、人師」とあり、心に得ることなくして、知る所限りあり、故に人の師たるに足らざるなり。

【疑兵】 敵をして惑はしむべき、虚偽の兵をいふ、史記淮陰侯傳に「信乃益爲—」

【儀表】 禮儀の「テホン」とする義、史記自序傳に「是非二百四十二年之中、以爲天下—」また淮南子に「行爲—於天下、後漢書張湛傳に「張湛矜嚴好禮、三輔以爲—註に「儀ハ法ナリ、表ハ正ナリ、正法ニシテ則ルベキヲイフ」

【記別】 一に詭辨に作る、佛となることを認可せらるるをいふ、受記分別せられて、佛の地位をゆるさるるをいふ、卓氏藻林に「詭ハ違ナリ、道ニ違フノ辯論ヲイフ」

集に「神符ノ上ニ書ク所ノ文ナリ、一切ノ惡鬼魔ノ邪道ヲ行ズル者ヲ、教誨シテ急急如律令トイフハ、正道ニ歸スベシトナリ、律令ハ法度ナリ、白樂天ノ祭龍文ノ末尾ニモコノ語アリ」

【及瓜】 任期の満つるをいふ（瓜ニ及ブ）を見よ、

【翁霍】 揚雄の甘泉賦に「翁赫霍霍」とあり、師古の註に「開合ノ貌」

【泣血】 悲極りて其の涕の出づること、血の出づるが如き、禮記に「—三年」また韓非子に「下和乃抱其璞、而哭於楚山之下、三日三夜、泣盡而繼之以血、一説に血は音ケイ毛詩古音致には、音ゲキ

【翁忽】 すみやかに疾きと、拾遺記に「神怪—吳都賦に「神化—注に「—ハ疾キ貌」

【急須】 三餘贅筆に「吳人呼暖酒器爲急須、急須者、以其應急而用也、我國にては、湯ヲカシノ名とす、

【翁然】 翁は合なり、盛なり、盛んに口を同じくして和するを言ふ、晉書王衍傳に「朝野—謂之—世龍門、—また盛んに合同する義、

【闡然】 安定の意、史記匈奴傳に「—更始」また住立の貌「タダズム」管子小問篇に「—止、瞭然視」

【及第】 文學の等第に及ぶをいふ、事物紀原に「漢ノ士

【鬼母】 神の名、括異記に「南海小虞山ニ一アリ、一産ニ千鬼、朝ニ之ヲ産ミテ、暮ニ之ヲ食フ、今蒼梧ニ鬼姑神アリ、是レナリ」

【跬歩】 跬は揚子方言に「半歩ヲ跬トナス」玉篇にも「一足ヲ舉グルナリ」と、類篇に「司馬法ニ、凡ソ人一タビ足ヲ舉グルヲ跬トイフ、跬ハ三尺ナリ、兩タビ足ヲ舉グルヲ歩トイフ、歩ハ六尺ナリ」禮記の祭義に「故君子一而不忘、孝也、跬一に跬に作る、同じ、」

【踵歩】 前に同じ、荀子の勸學篇に「故不積一、無以致千里」

【軌模】 法式なり、張衡の歸田賦に「陳三皇之一」

【規模】 規は圓を正す器、模は、形なり、法なり、また規なり、一解に、畫工未だ彩事を施さざる前に下繪を摸畫するをいふと、一は制を立て範を垂る、義とす、漢書高祖紀に「雖日不暇給、一弘遠矣」

【蟻封】 「アリツカ」東觀漢記に「一穴戸、大雨將至、冀北」名馬の産地なり、左傳昭公四年に「冀之北土、馬之所生、冀州は今の直隸省」

【微纆】 繩索なり、三合の索を微とし、二合の索を纆とす、易の坎卦に「繫以、一、眞于叢棘」

【踵歩休マザレバ、跛鼈モ千里】 踵は半歩なり、徐行し

ても閉断なくば、足なへたる鼈と雖も、遂に千里の遠きに達するをいふ、荀子勸學篇に「跬歩不休、跛鼈千里、累土不輟、丘山崇成」註に「跬ハ跬ニ同ジ、淮南子にはこの句の下に「累積不輟、可成、丘阜」に作る、意同じ、」

【君射レバ、則チ臣決ス】 上の爲す所は、下必ず之に倣ふの謂なり、荀子に「君射、則臣決、楚莊王好細腰、故朝有餓人、決は象骨を以て之をつくり、右手の五指に著け、以て弦を鈎き體を開く者なり、また戰國策に「其君好發者、其臣決拾」とあるも同じ、拾は皮を以て之をつくり、左臂に著け、以て弦を遂ぐる者、」

【君ヲ視ルコト奕碁ニ如カズ】 奕は圍碁なり、奕者の局に對するや、妄に碁子を下さず、今臣下の妄に君を易置するは、是れ君を視ること奕碁にだにも如かさるをいふ、左傳に「甯子視君、不如奕碁、其何以免乎、奕者、碁碁不定、不勝其耦、而況置君而不定乎、必不免矣、甯子は衛の大夫、」

【君君タリ父父タリ】 論語顔淵篇に「齊景公問政於孔子、孔子對曰、君君、臣臣、父父子子、公曰善哉、君不君、父不父、子不子、雖有粟、吾得而食諸」

【君臣ヲ視ルコト土芥ノ如クバ云云】 太平記卷二に見ゆ、孟子の離婁に「君視臣如土芥、則臣視君如寇讎」

に「民以君爲心、君以民爲體、また臣軌にも「臣以君爲心、君以臣爲體、心安則體安、君泰則臣泰」の注に「臣ハ君ノ令ヲ稟ク、故ニ君ヲ以テ心トナス、君ハ臣ノ力ヲ須ツ、故ニ臣ヲ以テ體トナス」

【君辱メラルレバ臣死ス】 臣は君と艱難死生を共にする義なり、國語の越語に「范蠡曰、爲人臣者、君憂臣勞、君辱臣死、韓非子にも、主辱臣苦、上下相與同憂久矣」

【君者舟也、庶人者水也】 荀子の王制篇に「君ハ舟ナリ、庶人ハ水ナリ、水ハ則チ舟ヲ載セ、水ハ則チ舟ヲ覆ス」言ふこゝろは、譬へば君は舟の如く、民は水の如し、水は舟を浮ぶる者にて、又舟を覆す者なりと、

【君ヒトリ臣ヲ選ブベカラズ、臣モ亦君ヲ選ブベシ】 十訓抄第五に見ゆ、後漢書馬援傳に「馬援曰、當今非但君擇臣、臣亦擇君」とあるに本づく、

【歸命頂禮】 佛を祈るときに唱ふる發語、南無を見よ、

【金】 說文に「金ニ五色アリ、黄金ヲ長トナス、久シク埋ムルモ、衣ヲ生ゼズ、百タビ鍊レドモ、輕クナラズ」金はもと金銀銅鐵鉛錫の總名なり、たゞ黄金は最も貴きによりて、また單に金と稱するに至れり、老子に「金玉堂ニ滿ツルモ之ヲ能ク守ルナシ、淮南子に「金之性沈、

とあるを斥すなり、

【君】 尊ト雖モ白ヲ以テ黒ト爲セバ、臣聽ク能ハズ、呂氏春秋に「君雖尊、以白爲黒、臣不能聽、父雖親、以黒爲白、子不能從、君父の尊親といへども、非理無道なるときは臣子はこれに服せざるをいふ、

【機密】 いろこみたる政事の秘密をいふ、易の繫辭上傳に「機事不密、則害成」とあるに本づく、漢書劉向傳に「深留聖思、審固一」

【君ノ過ヲ舉グル者ヲ忠トイフ】 舊唐書謝偃傳に「舉君過者曰忠、述主美者爲佞、直言骨鯁をたふとぶの弊は、臣として君の非をあぐるを以て忠とし、君の美を稱するを以て佞とするに至る、

【君ハ君タラズト雖モ云云】 太平記卷二に見ゆ、古文孝經の孔安國の序に「君雖不君、臣不可以不臣、父雖不父、子不可以不子」とあるに本づく、(君君タリ)を參看せよ、

【君ハ國ノ隆ナリ】 君主は國の最も尊きものなりとの義、隆は尊なり、荀子に「君者國之隆也、父者家之隆也、隆一而治、二而亂、自古及今、未有二隆爭重而能長久者也、國に二君なく、家に二長なきなり、

【君ハ民ヲモテ體トス】 十訓抄第一に見ゆ、禮記の緇衣

【托】之于舟上二則浮、勢有所支也(金ヲ攫ム者)を見よ、
【錦衣玉食】衣の麗しくして錦の如く、食の奢りて玉の如くなる義、宋史李薦傳に「薦雖在山林、其文有一

【金衣公子】鶯の異名、天寶遺事に「明皇禁苑ノ中ニ於テ、黃鶯ヲ見テ、呼ンデ—トナス」

【均一】平等の義、唐書薛平傳に「徭賦—」
【金印紫綬】(金紫)を見よ

【金鳥】日の異名(玉兔)を見よ、

【禁掖】天子居す所を禁といふ、蔡邕曰く「漢制天子所居、門閣有禁、非侍御之臣不得妄入」宮闕の傍の小門を、左右掖門といふ、—は禁中といふに同じ、

【禁煙】寒食の節をいふ、後漢書周舉傳に「太原舊俗、以介子推焚骸、中冓寒食、莫敢煙爨」また顧瑛の詩に「春遊憶得到寒泉、正值鶯花過—」また宮中より起る煙の義とす、李遠の詩に「漠漠—籠遠樹、冷冷宮漏響前除」

【金ヲ懷キ紫ヲ垂ル】(懷)金垂紫金印をいだき紫綬を垂るる義にて高位高官にのぼるをいふ(金紫)を見よ、

【瑾ヲ懷キ瑜ヲ握ル】(懷瑾握瑜)衣に在るを懷と爲す、

し、手に在るを握と爲す、瑾瑜はみな美玉なり、以て懿德(ウツクシキトク)を抱持するに喩ふ、楚辭に「—」
【金甌缺クルナシ】(金甌無缺)堅固にして、完全なるを稱す、南史朱异傳に「武帝曰、我國家猶若金甌無一傷缺」金甌とは、金にて作れる「カメ」

【金ヲ堆クシテ北斗ヲ柱フ】多く金をつみ貯ふるをいふ、白氏文集に「身後堆金柱北斗、不如生前一杯酒」

【金ヲ炊ギ玉ヲ饌フ】(炊)金饌(玉)ケツコウなる「ゴチソウ」書言故事に「人ノ款遇ヲ謝スルニ、仰テ炊金饌玉ヲ蒙ルトイフ、駱賓王、盛饌ヲ謂ツテ、金ヲ炊ギ玉ヲ饌フトナス」

【金屋ノ寵】美人を寵するをいふ、書言故事に「漢ノ武帝幼キ時、景帝問フ、兒、婦ヲ得ント欲スルヤ否ヤト、長公主其ノ女ヲ指シテ曰ク、阿嬌ハ好シヤ否ヤト、武帝曰ク、若シ阿嬌ヲ得バ、當ニ金屋ヲ以テ之ヲ貯フベシト、武帝は景帝の子、長公主は、景帝の姉なり、

【芹ヲ獻ズルノ意】(獻)芹之意、人に物を贈る謙辭なり、呂氏春秋に「野人芹ヲ美トシテ、之ヲ至尊ニ獻セント願フ」とあり、詳しくは列子に見ゆ、成語考に「送禮ヲ謙シテ獻芹トイフ」

【金ヲ攫ム者ハ人ヲ見ズ】(攫)金者不見人、列子に「昔齊人、金ヲ欲スル者アリ、清旦ニ衣冠シテ市ニ之キ、金ヲ嚮グ者ノ所ニ適ク、因ツテ其ノ金ヲ攫ミテ而シテ去ル、吏捕ヘテ之ヲ得、問ヒテ曰ク、人皆在ルニ、子、人ノ金ヲ攫ムハ何ソヤト、對ヘテ曰ク、金ヲ取ルノ時、人ヲ見ズ、徒金ヲ見ルノミ」とあり、註に「嗜欲ノ人心ヲ亂ス、此ノ如キノ甚シキナリ、故ニ古人言アリ、秋毫ノ末ヲ察スル者ハ、泰山ノ形ヲ見ズ、五音ノ和ヲ調フル者ハ、雷霆ノ聲ヲ聞カズ」とあり(鹿)逐フ者を見よ、

【金ヲ流シ石ヲ鑠カス】(流)金鑠(石)暑はげしくして、金石もためにとけて流るるをいふ、鑠は銷なり、楚辭に「十日代出、—」十日代出トハ、十個の日が「カハル」出づるをいふ、莊子ニ「大旱金石流、土山焦」とあるも、同じ、

【觀ヲ觀ル】(觀)觀乗ずべき「スキマ」あるを觀るなり、左傳ニ「—」而動

【銀河】「アマノガハ」白帖に「天河謂之銀漢、又曰—」また一斗を受くる酒器の名、

【銀海】道家にて兩目を—といふ(玉樓—)を見よ、

【金革】兵器なり、金は戈兵の屬、革は甲冑の屬、轉じて戰爭の義とす、漢書終軍傳に「驚下不習—」之事

【金革ヲ推ニス】(推)は、臥褥なり、甲冑を被て、戈兵を帶ぶること、臥褥の安きに居るが如きをいふ、中庸に「推金革、死而不厭、北方之強也」北方は、風氣剛勁なり、故に果敢の力、人に勝つを以て強となす、

【銀漢】「アマノガハ」なり、鮑昭の詩に「—傾露落」また温庭筠の詩に「—橫、空萬象秋」

【金牛ヲ驅リテ路ヲ開ク】太平記卷二十に見ゆ、蜀記に「昔秦ノ惠王蜀ヲ伐タント欲ス、路ノ入ルニ由ナシ、乃チ石ヲ刻シ牛頭ヲ爲リ、金ヲ後ニ置ク、僞リ言フ、此ノ牛能ク金ヲ屎ス、以テ蜀ニ遺ラント、蜀侯貪ニシテ之ヲ信ズ、乃チ五丁ヲシテ共ニ牛ヲ引カシメ、山ヲ墮シ、谷ヲ墮メ、之ヲ我都ニ致ス、秦遂ニ道ヲ尋ネテ之ヲ伐ツ、因ツテ石牛道トイフ」

【金橘】「キンカン」なり群芳譜に「—一名ハ金柑一名ハ盧橘ト名ツク」

【金匱計】長久の計をいふ、金匱石室に藏むべき者の義、漢書外戚傳に「不能深授安危定—」也

【金匱書】秘藏の書をいふ、匱は俗の櫃に同じ、「ヒツ」史記自敘傳に「遷爲太史令、袖史記石室—」之「袖」は、綴り集むるをいふ、

【緊急】緊はきびしく繩をない合す義、傳毅の舞賦に

【緊急】緊はきびしく繩をない合す義、傳毅の舞賦に

【弛】弛—之絃張分轉じて事の急要なる義とす、

【董董】少義、僅僅に同じ、漢書地理志に「豫章出黃金然—物之所育」

【斷斷】辯争の貌、史記の魯世家に「孔子曰、甚矣魯道之衰也、洙泗之間—如也、魯は洙泗の間に濱し、その民渡を渉るに、幼者は老者を扶けてその任に代る、俗既に薄くなりて、長者自ら安んぜず、幼者と相讓る、争辯する所あるが若し、故に—如といふなり、また恐り疾む貌、後漢書劉向傳に「朝臣—不可光祿勳何邪」と光祿勳は周堪なり、

【信信】犬の争ひほゆる聲、狎に同じ、楚辭に「猛犬—以迎吠、柳文の劍門銘に「—嘯呼」

【閭閻如】和悦にして諍ふをいふ、論語に「與上大夫言—也」

【銀杏】「イテフ」の木、ギンナン、木の高さ數丈に及び、葉は扇を開けるが如し、又鴨の脚に似たり、その實は食ふべし、一名は玉果、一名は鴨脚樹、一名は公孫樹、明の劉基の句に「—子成邊雁到、菽園雜記に「—實如杏、而核中有仁可食、故曰仁杏、中畧一名公孫樹、言公種而孫始得食」

【金鏡錄】舊唐書の張九齡傳に「時天長節百寮上壽、多

ト爲ス、一日ニ失フトコロノ者十餘、長安之ガ爲メニ語シテ曰ク苦飢寒、逐彈丸ト、京師ノ兒童娼ガ出デテ彈ズル毎ニ、輒チ之ニ隨フ、丸ノ落ツルトコロヲ望ンデ便チ拾ヒ取ル

【金雞障】金雞を畫きて、飾となせる座障なり、白氏文集の胡旋女に曰ク「—養爲兒」

【金雞三たび唱フ】太平記卷十七に見ゆ、淮南子に「桃都山大樹、曰桃都、有天雞、日出即鳴、天下雞皆鳴、祖庭事苑に「人間本無金雞之名、以應天上金雞星故也、天上金雞鳴則人間亦鳴」

【金穴】大に富みて貨財多き家をいふ、後漢の后紀に「郭況ハ光武ノ郭皇后ノ弟ナリ、帝數、其ノ第二幸シ、諸侯親家ヲ會シテ飲燕ス、金錢繚帛ヲ賞賜シ、豐盛比ナシ、京師況ガ家ヲ號シテ、—ト爲ス」

【金關】金馬門の異稱、また廣く天子の居を斥してもいふ(金馬)を參看せよ、

【勤儉】事をつとめはげみ、費をばよく義、陸游の句に「—教兒童、書經に「克勤于邦、克儉于家」

【禁錮】仕進の路を塞ぎて仕ふることを得ざらしむる義、左傳の成公二年の傳に「—勿令仕、」また晉書謝安傳に「有司奏安被召、歷年不至、—終身錮—に

【金魚】黄金もて魚形に作り、有位者に佩びさしむるもの、金史の輿服志に「親王佩玉魚、一品至四品佩—」以下佩銀魚、元稹の詩に「犀帶—束紫袍」

【金玉崇クシテ寇盜至ル】抱朴子に「金玉崇而寇盜至、名位高而憂責集」

【錦繡紛華モ服スルトコロハ體ヲ温ムルニ過ギズ】續は采繡なり、ヌヒ、錦や、ヌヒの如きはなやかなる帛も身を温むるに過ぎず、孔叢子に「錦繡紛華、所服不過温體、三牲大牢、所食不過充腹、三牲は牛羊豕、大牢は牛をいふ、

【金科玉條】科條は法律をいふ、金玉といふは、之を貴びていふ、文選の揚雄の劇秦美新に「懿律嘉量、—」

【巾幗】幗は婦人の髪をつつみて飾とするもの、—は婦人が喪中に著くる冠なり、晉書に「遺帝—婦人之飾、三國志に「諸葛亮ガ數、司馬遷ニ戰ヲ挑ミタルモ懿出デザリシカバ、乃チオクルニ—婦人ノ服ヲ以テス」とあるは、懿を辱かして婦人視したるなり、

【金丸ヲ彈ズ】西京雜記に「韓嫣彈ヲ好ム、金ヲ以テ丸固に作る、

【金口木舌】木鐸をいふ、木鐸は教令を發する時に、振ひて以て衆聽を警動する所の者なり、故に儒者位を得て教を施すを以て木鐸に喩ふ、揚子法言の學行篇に「天ノ道、仲尼ニ在ラズヤ、仲尼ハ説ヲ駕フル者ナリ、茲儒ニ在ラズヤ、如シ將ニ復タ、其ノ説ク所ヲ駕ヘントセバ、則チ諸儒ヲシテ金口ニシテ木舌ナラシムルニ若クハナシ」とあり、註に「駕ハ傳ナリ、茲ノ儒トハ今ノ儒ヲ指ス、後世如シ將ニ復タ、仲尼ノ説ヲ駕ヘントスレバ、則チ諸儒ヲシテ木鐸ニ比シテ、之ヲ宣揚セシムルニ如クハ、莫シ」と、論語八佾篇にも「天將以夫子爲木鐸」

【金吾禁ヲ弛ブ】(金吾弛禁)圓機活法に「漢ノ執金吾ハ、杖シテ非常水火ノ事ヲ禁戒スルヲ掌ドル、曉暝ニ傳呼シ以テ夜行ヲ戒ム、惟ダ元夕ハ金吾ニ勅シ、許シテ禁ヲ弛ブ、前後各一日禁ゼズ」と、また之を放夜ともいふ、元夕とは、正月十五日の夜をいふ、

【金谷園】石崇の金谷園詩序にいふ、余以元康六年、從大僕卿、出爲使、有別廬、在河陽縣界金谷園中、有清泉茂林、衆果、竹柏、藥草之屬、其爲娛目歡心之物、亦已備矣、水經の注に「金谷水出河南大原、東南流、歷金谷、

【金谷園】石崇の金谷園詩序にいふ、余以元康六年、從大僕卿、出爲使、有別廬、在河陽縣界金谷園中、有清泉茂林、衆果、竹柏、藥草之屬、其爲娛目歡心之物、亦已備矣、水經の注に「金谷水出河南大原、東南流、歷金谷、

【金谷園】石崇の金谷園詩序にいふ、余以元康六年、從大僕卿、出爲使、有別廬、在河陽縣界金谷園中、有清泉茂林、衆果、竹柏、藥草之屬、其爲娛目歡心之物、亦已備矣、水經の注に「金谷水出河南大原、東南流、歷金谷、

【金谷園】石崇の金谷園詩序にいふ、余以元康六年、從大僕卿、出爲使、有別廬、在河陽縣界金谷園中、有清泉茂林、衆果、竹柏、藥草之屬、其爲娛目歡心之物、亦已備矣、水經の注に「金谷水出河南大原、東南流、歷金谷、

【金谷園】石崇の金谷園詩序にいふ、余以元康六年、從大僕卿、出爲使、有別廬、在河陽縣界金谷園中、有清泉茂林、衆果、竹柏、藥草之屬、其爲娛目歡心之物、亦已備矣、水經の注に「金谷水出河南大原、東南流、歷金谷、

【金谷園】石崇の金谷園詩序にいふ、余以元康六年、從大僕卿、出爲使、有別廬、在河陽縣界金谷園中、有清泉茂林、衆果、竹柏、藥草之屬、其爲娛目歡心之物、亦已備矣、水經の注に「金谷水出河南大原、東南流、歷金谷、

謂之金谷水東南流經石崇故居云云金谷は晉の石崇の別荘のありし地名崇字は季倫一日賓客を會し觀花の宴を開き詩を賦す詩成らざれば罰として酒三杯を飲ましむ

【金吾四隊ニ列ル云云】太平記卷二十四に見ゆ王建の宮詞に金吾除夜進舞名畫袴朱衣四隊行院院燒燈如白日沈香花底坐吹笙金吾は武官なり應劭曰く吾ハ禦ナリ金草ヲ執リテ以テ非常ヲ禦グナリとまた一解に金吾は鳥の名なりこの鳥の象を取る故に官の名にしたるなりと

【欽差】差は使なり唐書宣宗紀に凡役事委令輪差と欽差は勅使の義勅定を欽定といふも同じ正字通に御音曰欽勅御使曰欽命俗曰欽差とあり御の字の代りに用ひたる所多し明初より始まる由乗獨譚に見えたり參看せよ

【稻載】稻は滿なり財貨などを滿載する義國語に「一而歸」

【巾箱本】形の小さい書籍をいふ事物紀原に南史ニ齊ノ衡陽王鈞嘗テ親手カラ五經ヲ細書シテ一卷トナシテ巾箱ノ中ニ置ク侍讀賀玠曰ク殿下ノ家ニ墳素アリ復タ何ゾ細書シテ別ニ巾箱ニ藏メント鈞曰ク

不然何開口成文揮翰霧散也(錦心)を參看せよ
【金枝玉葉】うつくしき雲をいふ古今註に黃帝蚩尤ト涿鹿ノ野ニ戰フ常ニ五色ノ雲氣一ノ如キアリ帝ノ上ニ止マル

【琴詩酒ノ伴皆我ヲ抛ツ】琴を弾じ詩を賦し酒を酌みし昔の友は皆我を棄て去れりとの義白居易の寄殷協律(自注に多く江南の舊遊を敘す)に五歲優遊同過日一朝消散似浮雲琴詩酒伴皆抛我雪月花時最憶君幾度聽雞歌白日亦曾騎馬詠紅裙吳娘暮雨蕭蕭曲自別蘇州更不聞

【琴瑟ヲ鼓スルガ如シ】(如鼓琴瑟)夫婦和合するをいふ詩經棠棣篇に妻子好合如鼓琴瑟

【巾櫛ヲ執ル】(執巾櫛)巾は手拭巾櫛の取扱をするをいふ人の妻となることを謙していふ左傳僖二十二年に婢子ヲシテ侍リテ巾櫛ヲ執ラシムとあり成語考に執巾櫛奉箕帚ハ皆女ノ家自ラ謙スル辭也

【琴瑟調ハズ】(琴瑟不調)夫婦仲あしきをいふ故事成語考に「一」夫妻反目之詞書言故事に夫婦和スルヲ琴瑟調フトイフの反對拾遺の(更張)を見よ【近習】習は狎なり君のおそば近く侍りつかへて狎れ親む義に取る禮記に仲冬之月審門閭謹房室必

巾箱中檢閱既ニ易シ且ツ更ニ手ヅカラ寫セバ則チ永ク忘レズト諸王之ヲ聞キ爭ヒ效ヒテ巾箱ヲ爲ル今籍ノ細書小本ナル者ヲ謂ツテ巾箱トナスハ此ニ始マル

【金刺】西京雜記に黃金ヲ以テ刺ト爲スト杜甫の詩に「青楓外朱樓白水邊李白の詩に水動影」【金史】百三十五卷元の托克托等撰す本紀十九卷志三十九卷表四卷列傳七十三卷あり遼史と同時の撰なれども遼史に比すれば詳略となす

【金紫】金印紫綬をいふ高位の人の帶ぶる所るもの由りて貴顯の義とす漢書百官表に丞相秦官金印紫綬また後漢書馮衍傳に「衍少事名賢經顯位懷金垂紫竭節奉使不求苟得常有凌雲之志」

【藥至】(一)を見よ
【吟罷】口ヒグをひねりながら詩を考ふる義盧延讓の詩に吟成幾箇字燃斷數莖髭また杜荀鶴の詩に「一」白數莖

【近就】近く就き親むをいふ漢書傅介子傳に「其王一人易得王とは龜茲國王を斥す
【錦繡ノ腸】文詩を善くする人の心を稱する語圓機活法に李白ノ送仲弟令問序ニ心肝五臟皆錦繡耶

重閉省婦事母得淫雖有貴戚一母有不禁也
た曹植の表に昔伊尹之爲滕臣至賤也呂尙之處屠釣至陋也及其見擧于湯武周文誠道合志同立謨神通豈復假一之薦因左右之介哉

【琴心ヲ以テ之ヲ挑ム】(以琴心挑之)女子を挑み動かさんとす其の心を琴聲に寄するなり漢書司馬相如傳に卓王孫ニ女文君トイフモノアリ新ニ寡ニシテ音ヲ好ム故ニ相如繆リ令ト相重ンジ而シテ琴心ヲ以テ之ヲ挑ム令は臨叩の令王吉なり

【金人三絨】(三絨)を見よ
【錦心繡口】「ニシキヤ」ヌヒトリの如きうつくしき口と心との義にて詩文を善くする人をほめていふ柳宗元の乞巧文に駢四儷六一

【巾車】巾は飾なりかされる車左傳襄三十一年に「一」脂轄柳文の獻平淮夷雅表に既巾乃車歸去來辭に或命一或棹孤舟

【今上】天子を上と稱するは司馬遷に始まる臣子たるもの君主を斥言するを憚る上といふは尊敬の意なり今上は現今の天子をいふ史記自敘傳に作一【金城湯池】城池の險固なるをいふ城堅きこと金の

如く、池熱すること湯の如し、北齊書に「唐世治世ノ才アリ、文宣帝童佛寺ニ登リ、并州ノ城池ヲ問フ、或人曰ク「ハ非ナリ」ト、帝曰ク唐世ハ、是レ「ハ非ナリ」ナリ、コレハ非ナリ」

【欽若】 欽は敬なり、若は順なり、敬み順ふ義、書の堯典に「一、昊天」

【均輸】 漢書の百官表に「大司農ノ屬官ニ一、令丞アリ、史記に「桑弘羊大農丞トナリ、諸ノ會計ノ事ヲ管ス、稍々一、置キ以テ貨物ヲ通ズ」

【龜手】 手ひびわれ、龜の文の如くなるをいふ、莊子逍遙遊に「宋人有善爲不「之藥者」

【金鐘兒】 蟲の名「スズムシ」袁宏道の促織志に「一種微ニシテ促織ニ類シ、而シテ韻致悠揚、金玉ノ中ヨリ出ヅル如シ、溫和亮徹之ヲ聽ク、人ヲシテ氣平ナラシム、京師ノ人之ヲ一、トイフ、暗ヲ見レバ則チ鳴キ、明ニ遇ヘバ則チ止ム」花鏡に「一、其聲則磬稜稜」

【近思錄】 十四卷、宋の朱熹その友呂祖謙と、周子程子、張子の言を取り、その切要なる者を選び、六百二十二條を得て十四門に分つ、一、集註は、清の茅星來の撰と江永の撰との二種あり、

【金樞】 月の異稱なり、海賦に「大明撫、轉於一之穴」註

に「大明ハ月ナリ、一、ハ、月没スル處ノ窟穴ナリ」

【金盞玉胎】 うまさ「アエモノ」ナマス、をいふ、轉じて美味を稱する語、事類全書に「南部煙花記ニ吳都ヨリ松江ノ鱸魚ヲ獻ズ、煬帝曰ク、所謂金盞玉胎東南ノ佳味ナリト」

【金聲玉振】 孟子に「伯夷、聖之清者也、伊尹、聖之任者也、柳下惠、聖之和者也、孔子、聖之時者也、孔子之謂集大成、集大成也者、金聲而玉振之也、金聲也者、始、條理也、玉振之也者、終、條理也、始、條理者、智之事也、終、條理者、聖之事也」とあり孔子三聖の事を集めて、一大聖の事と爲す、猶ほ樂を作る者の、衆音の小成を集めて、一大成となすが如し、成とは樂の一終、書に所謂籥詔九成とは是れなり、金は鐘の屬、聲は宣るなり、始は之を始むるなり、終は之を終るなり、條理は猶ほ脈絡といふがごとし、衆音を指して言ふなり、智は知の及ぶ所、聖は徳の就る所なり、蓋し樂に入音あり、金石絲竹匏土革木をいふ、若し獨り一音を奏せば、則ち其の一音自ら始終を爲して、一小成を爲す、八音の中、金石を重しとなす、故に特に衆音の綱紀となし、八音を並び奏すれば、則ち其の未だ作らざるに於て先づ鐘を撃ちて、以て其の聲を宣ふ、其の既に關るを

俟ちて、而して後に特磬を撃ちて、以て其の韻を收む、宣べて以て之を始め、收めて以て之を終ふ、二者の間脈絡貫通して、備はらざる所なきときは、則ち衆小成を合せて、一大成となす、猶ほ孔子の知盡きずといふこと無く、而して徳全からずといふことなきがごとしとなり、

【金石ノ交】 交情のかたきをいふ、漢書の韓信傳に「武涉信ニ説キテ曰ク、足下自ラ以爲ラク漢王ト金石ノ交ヲ爲スト、然レドモ終ニ爲メニ擒ニセラレン」と、孟郊の詩に「君子芳桂性、小人槿花心、惟當金石交、可與賢達論」

【金石文】 鐘鼎碑碣等に銘記する文字をいふ、金又は石に刻むによりていふ、

【金舌蔽口】 金を以て舌となし、口を蔽ふは、不言の義なり、荀子に「一、一、猶將無益也」と、一説に金は讀んで嚙と爲すと、

【金仙】 佛をいふ、佛身金色なるによりて金といひ、轉變生死の境を出て常住不滅の體を證するが故に、仙といふ、

【欽羨】 その人を欽敬して之を羨むの意なり、魏書楊播傳の字面、

【欽羨】 その人を欽敬して之を羨むの意なり、魏書楊播傳の字面、

【欽羨】 欽は貪なり、欲の動くなり、ウラヤム、羨は愛慕なり、情を肆にして物に狗ふをいふ、詩の大雅に「帝謂文王、無然、呼援、無然、一」

【嶽然】 巖のさかしく聳ゆる貌、柳文の鈔鍾潭西小邱記に「一、相累而下者若牛馬之飲於溪」

【金錢花】 群芳譜に「一、一名は子午花、一名は夜落金錢、子改メテ金榜及第花トナス」

【鈞旋穀轉】 陶鈞、車穀の「グル／＼」とめぐるが如く、事物の變遷するをいふ、淮南子に「一、一、周而復市」

【金奏】 樂を奏するに先づ鐘を鳴らすをいふ、金は商聲なり、周禮に「鐘師掌一、一、の注に「鐘ヲ擊チテ以テ奏樂ノ節トナス」と、左傳に「一、作於下、轉しては音樂の義とす、顔延之の詠阮始平詩に「達、音何用深、識、微、在、一、一、また陸龜蒙の詩に「高唱裏、一、朗詠鏗、玉節、在、一、一、」

【金鼠ノ咀】 太平記卷九に見ゆ、高僧傳一に「天寶中、西蕃大石康三國帥兵圍西涼府、詔空入、帝御于道場、空乘香鑪、誦仁王密語二七遍、帝見神兵可五百員、在于殿庭、驚問空、空曰、毗沙門天子領兵救、安西、請急設食發遣、四月二十日、果奏云、二月十一日、城東北三十里許、雲霧間見神兵長偉、鼓角喧鳴、山地崩震、蕃部驚潰、彼營壘中、有鼠金色、昨、弓弩、弦皆絕云云、玄宗の時、

【徂】 遑遑の貌「アヲタダシ」楚辭九歎に「魂—」
而南征兮「また説文に「—ハ遠行ナリ」

【兢】 兢兢業業 韓文の潮州謝上表に見ゆ、兢兢は戒慎
なり、業業は危懼なり、

【疆】 一は、強梁にして善を禦く者なり、詩經に「曾
是—、曾是培克、曾是在位、曾是在服、服は事なり、疆
一に強に作る、漢書敘傳に「曾是強禦、培克爲雄」

【疆】 疆御ヲ畏レズ 疆禦は、わるづよくして、善を禦くを
いふ、公直にして、暴虐の人を畏れざる義、詩經に「不
侮、騷寡、不畏疆禦」

【杏花】 酉陽雜俎に「濟南郡ノ東南ニ、分流山アリ、山上
ニ杏多シ、大梨ノ如ク、黄ニシテ橋ノ如シ、土人之ヲ漢
帝杏トイヒ、マタ金杏トイフ」群芳譜に「一名ハ甜梅、西
溪叢語に「杏ヲ艶客トナス」杜牧の詩に「借問酒家何處
在、牧童遙指—村」

【杏花ノ雨】 提要録に「清明ノ雨ヲ杏花ノ雨トナス」事
文類聚に、南土人の詩に「沾衣欲濕—、吹面不
寒楊柳風」

【郷貫】 貫は名籍、ニンベツ、郷里に於ける戸籍上の
貫族にて、身分姓名等をいふ、唐書の選舉志に「自今—
委有司、以—三代名諱送中書門下」

【強仕】 四十歳をいふ、禮記の曲禮に「四十曰強而仕」と
あるに本づく、強に二義あり、一は四十にして惑はず、
智慮の強きをいふ、一は氣力の強きをいふと、
【姜宸英】 字は西溟、湛園と號す、浙江慈谿の人、古文
を以て名を擅にす、魏叔子いふ、侯朝宗は肆にして醇
ならず、汪若文は醇にして肆ならず、湛園は醇肆の閒
に在りと、最も知名の文は、明史稿となす、書は晉人の
室に入り、摹古に長じ、小楷尤も工なり、聖祖嘗て朱彝
尊嚴繩孫と並に目して、江南の三布衣となす、康熙丁
丑第三人に及第す、年已に七十なり、編修を授けらる、
葦園集、湛園未定稿、西溟文鈔等の著あり、

【行狀】 文の一體なり、劉勰云ふ、狀は貌なり、禮貌の
本原は其の事實を取る、先賢の表證並に行狀あるは、
狀の大なる者なり、漢の丞相倉曹の傳に、朝鮮始めて
楊元伯の行狀を作りしより、後世卒に之に因れりと、
蓋し死者の世系名字爵里行爲壽年の詳細なる事を具
狀し、或はこれを官に上りて編録を請ひ、或はこれを
作者に託して墓誌碑表の類を乞ふに用ふるなり、顧
炎武いふ、誌狀は文章家に在りては史の流たり、之を
史官に上り、之を後人に傳へて、史の本と爲す、史は以
て事を記し、亦以て言を載す、故に其の一人一生著す所

【郷先生】 儀禮の疏に「郷有郷學、取在郷之中大夫爲
太師、致仕之士爲少師、在學中、名爲郷先生」
【郷黨】 ニハ齒ヲ尙ブ (郷黨尙齒) 孟子の公孫丑の下篇
に「天下有達尊三、爵一、齒一、德一、朝廷莫如爵、郷黨
莫如齒、輔世長民、莫如德、また莊子の天道篇に「宗

【薑桂】 性老ニ到リテ愈々辣シ 薑(ハジカミ)や肉桂
は古くなるほどいよ／＼辛くなるものなり、以て剛
直の性の人は、老いていよ／＼烈しくなるに喩ふ、宋
の晏敦復、和議を力誅す、秦檜人をして之を許さしめ
て曰く、公若し曲從せば、兩地中書、樞密トワイフ、巨
夕に至るべしと、公曰く、吾終不以身計誤國、況吾薑
桂之性、到老愈辣

【狂狷】 狂は志極めて高くして、行掩はず、狷は知未だ
及ばずして、守ること餘りあるをいふ、論語子路篇に
「不得中行而與之、必也—乎、狂者進取、狷者有所
不爲也」

【狂言】 理に反る言をいふ、史記の淮陰侯傳に「廣武君
曰、狂夫之言、聖人擇焉」また漢書谷永傳に「將軍說其
—、また韋應物の詩に「飲酒任眞性、揮筆肆狂言」

【郷愿】 愿は謹厚なり、原に作る同じ、一郷稱して謹厚
の人とする者なり、論語陽貨に「—、德之賊也」とあり、
蓋し其の流を同くし、汙に合して、人に媚ふ、德に似て
德に非ず、與に聖人の道に入るべからざるを以て、賊
と爲すなり、孟子に「閹然、媚於世也者、是—也」

【狂草】 草書の最もくづしたるもの、五雜組に「今之學
—者、須識粗中有細、疎中有密」

ろの文を讀まざれば、以て作るべからず、其の人にし
て公卿大臣の位に在りしならば、一朝の大事を悉さ
ざれば、以て作るべからず、其の人に於て曹署の位に
在りしならば、一朝の掌故を悉さざれば、以て作るべ
からず、其の人に於て監司守令の位にありしならば、
一方の地形土俗因革利病を悉さざれば、以て作るべ
からず、今の人未だ此に通ぜずして、漫に人の爲めに
誌を作り、史家また考へずして之を承用す、是を以て
牴牾して合はずと、また、以て其の誌狀を作るの難き
ことを見るべし、或は題して逸事狀といふ者あり、柳
宗元の段太尉逸事狀方苞の左忠毅公逸事狀の如き
是なり、蓋し其の人の逸事を收録する者にして行狀
の別體なりといふべし、

【響石】 鄭常の洽聞記に「南嶽响巖峰有—、呼喚則
應、如人共語、而不可解也」とあり、わが鸚鵡石の類な
るべし、

【郷先生】 儀禮の疏に「郷有郷學、取在郷之中大夫爲
太師、致仕之士爲少師、在學中、名爲郷先生」

【郷黨】 ニハ齒ヲ尙ブ (郷黨尙齒) 孟子の公孫丑の下篇
に「天下有達尊三、爵一、齒一、德一、朝廷莫如爵、郷黨
莫如齒、輔世長民、莫如德、また莊子の天道篇に「宗

廟尙親朝廷尙尊郷黨尙齒行事尙賢大道之序也齒は齡なり

【疆弩ノ末勢、魯縞ヲ穿ツ能ハズ】(疆弩末勢、不能穿魯縞) 疆は強に同じ、至つて強きものも、其の勢の衰ふるに及びては、何事をも爲し能はざるに喩ふ、強弩はつよき、イシユミなり、魯國の縞は、至つて薄きものなり、史記韓長孺傳に「疆弩之極矢、不能穿魯縞、衝風之末力、不能漂鴻毛、非初不勁、末力衰也」また漢書韓安國傳には「衝風之衰、不能起毛羽、疆弩之末力、不能入魯縞」に作る

【竟ニ入ツテ禁ヲ問フ】他國の境に入りては、先づ禁令を問ひてその風俗に従へとの義、竟は境に同じ、郷ニ入ツテハ)を見よ

【享年】年をうくる義、隋書に「一八百」

【岐陽之鼓】所謂石鼓なり、歐陽修の集古錄目序に見ゆ、集古錄にいふ「石鼓文、在岐陽、初不見稱、於世至唐人始盛稱之、而韋應物以爲、周之文王之鼓、至宣王刻詩爾、韓退之直以爲、宣王之鼓、在今鳳翔孔氏廟中」

【襜褕】襜は幅八寸、長一丈二尺、小兒を背に約して負ふに用ふる帶なり、褕は小兒の破をいふ、ムツギ、列子に「人生有不見日月、不免一者、一に強葆に作る、

シム云云、また己の妻を稱して「一」といふ、西溪叢話に「沈休文ノ詩、還家問一、詎堪持作夫、また南史に「張彪敗ル、妻楊氏ニ謂ヒ、呼ビテ一ト爲シテ曰ク、我不忍令一落他處、ト會稽ノ人、家里トイフ、其ノ意同ジキナリ」

【杏林】醫家をいふ、神仙傳に「董奉、廬山ニ居ル、日ニ人ノ爲メニ病ヲ治ス、敢テ錢ヲ取ラズ、重キ病癒ユル者ニハ、杏五株ヲ種エシメ、輕キ者ニハ一株ヲ種エシム、此ノ如クスルヲ數年、計十萬餘株、鬱然トシテ林ヲ成ス、董仙ノ杏林ト號ス」

【強梁】多力なり、木の水に架するを梁といひ、又棟を負ふを梁といふ、其の力の強さに取る、一に威に任せ、氣を使ふ貌とも解く、老子に「一者、不得其死、揚子に「君子、一以德、小人、一以力、また鬼を食ふといふ神の名、強は疆に作る、同じ、

【郷往】郷は嚮に同じ、心の嚮ひ往くは、仰慕する義なり、史記仲尼世家に「雖不能至、然心一之」

【逆修】佛經の語、逆に冥福を修するをいふ、即ち少き者、先に死して老いたる者が、かへりてその後世を弔ひ同向などすると、

【逆ニ取リテ順ニ守ル】道理に逆ひて取りたるものな

史記魯世家に「成王少、在強葆之中」

【襜褕】襜は、縷を織りてつくり、小兒を背に約する者、論語に「四方之民、一其子而至矣」

【響ト】「ツヂウラ」唐の王保定撫言に「畢相公及第、夜聽一」

【匡裕】字は子孝、魯の匡邑の宰、句須の後、春秋の時、柱下史老聃を師とし、長生の術を得たり、兄弟七人同じく廬を南障山中に結び修煉す、周の定王嘗て方今神仙の世に在る者幾何ぞと問ふ、老聃五嶽の諸仙を擧げて對ふ、裕はその一なり、王之を召せども、見えず、後ち使者をしてその隱所を訪はしむるに、僅に草廬の存するあり、邦人遂に匡山と呼び、又廬山と曰ふ、

【狂瀾ヲ既ニ倒レタルニ廻ス】甚しく衰へくづれたることを、もとにひきかへすに喩ふ、韓愈の進學解に「尋墜緒之茫茫、獨旁搜而遠紹、障百川而東之、廻狂瀾於既倒」

【郷里】輿地提綱に「郷ノ言タル向ナリ、衆ノ向フトコロナリ、里ノ言タル止ナリ、衆ノ止マルトコロナリ、古者二十五家ヲ一里トナシ、萬二千五百家ヲ一郷トナス、秦ニ至リテ、井田ヲ破ルト雖モ、漢ハ十里ニ一亭、十亭ヲ一郷トス、郷ニ三老ヲ置キテ教化ノ事ヲ職ラ

れど、道理に従ひて守るをいふ、史記に「湯武逆取、而以順守之」

【卻聘ノ書】駿臺雜話「歲寒知松柏」に見ゆ、元の程文海、元主の命にて江南の人才を求め、謝枋得を以て首となし、之を薦めし時、書を文海に遺りて之を拒絶せり、又宋の降將留夢炎と、魏天祐とに與へし書もあり、靖獻遺言を見よ、

【諛浪】諛は戲言なり、浪は放蕩なり、放蕩にして戲慢するをいふ、詩の邶風に「一一笑敖」一解に、「一は、不敬なり」と、

【逆鱗】人主の怒をいふ(逆鱗)を見よ、

【覬覦】望むまじき上の位をこひねがふ義、左傳の桓二年に「民服事其上、而下無一」註に「下、上位ヲ冀望セズ」

【窺竄】すきを伺ふをいふ、晉書元帝紀に「狡寇一」また陶侃傳に「陶侃夢ニ八翼ヲ生ジ、飛ンデ天ニ上ル、天門九重ヲ見ル、已ニソノ八ニ登ル、惟一門入ルコトヲ得ズ、闞者杖ヲ以テ之ヲ擊ツ、因ツテ地ニ墜チ、其ノ左翼ヲ折ルト、八州ニ都督トナリ、上流ニ據リ、強兵ヲ握ルニ及ビ、潛ニ一志アリ、折翼ノ祥ヲ思フ毎ニ、自ラ抑ヘテ止ム」前の覬覦に通じ用ふ、

史記張儀傳に「韓梁稱東藩之臣、齊獻一之」
 【氣世ヲ蓋フ】 氣象の至つて大にして一世を蓋ひつゝ
 義(四面楚歌)を見よ。
 【虚ヲ擣ク】 (擣虚)虚は空なり、敵の備なきところをう
 つと、唐書李吉甫傳に「請起兵擣三峽之虚、賊勢必分」
 【許嫁】 よめいりの約を定めおくこと、「イヒナツケ」禮
 記に「女子一笄而字」
 【倨傲】 高ふりあなどると、魏書に「魯國孔融高才一」
 【許衡】 字は仲平、魯齋と號す、元の懷州河内の人、幼に
 して端慤、七歳にして學に入る、師に問ふ、學を爲すは
 何の爲めぞと、師曰く、科第を取るのみと、曰く斯の如
 きのみかと、師之を奇とす、書を授くる毎に、能く其の
 旨義を問ふ、久之にして師その父に謂つて曰く、見は
 凡ならず、他日必ず大いに人に過ぐる者あらん、吾は
 その師にあらざるなりと、固辭す、是の如くすると數
 年間、凡そ二師を更ふ、稍長じて益、學を嗜む、姚樞に
 從ひて程朱の書を得、益、大いに得るあり、慨然として
 斯道を以て己の任とす、官集賢殿大學士兼國子祭酒
 に至る、元代の儒者皆朱子を崇尙する者は、衡が首唱
 の功なり、世祖の至元十八年卒す、年七十二、著す所、
 小學大義、讀易私言、孟子標題等あり、宋元通鑑に、許魯

齋嘗テ暑中ニ河南ヲ過グ、渴スルコト甚シ、道傍ニ梨
 アリ、衆爭ヒ取リテ之ヲ啖フ、魯齋獨リ樹下ニ危坐シ
 テ顧ミズ、或人之ヲ問フ、曰ク、其ノ有ニ非ズシテ之ヲ
 取ルハ、不可ナリト、或人曰ク、世亂レテ梨ニ主ナシト、
 曰ク、梨ニ主ナキモ、吾ガ心ニ獨リ主ナカラシヤト、
 曰ク、學ヲ爲スニハハを參看せよ、
 【巨鰲山ヲ戴ク】 列子湯問篇に「渤海ノ東ニ大鰲アリ、
 中ニ五山アリ、岱輿、員嶠、方壺、瀛洲、蓬萊ナリ、臺觀皆
 金玉、居ル所ノ人皆仙聖ノ種ナリ、五山ノ根、連著ス
 ル所口無シ、常ニ潮波ニ隨ヒ上下往來シ、暫モ峙ツコ
 ヲ得ズ、帝西極ニ流レンコトヲ恐レ、禹強ニ命ジ巨鰲
 十五ヲシテ首ヲ擧ゲ之ヲ戴カシム、始メテ峙チテ動
 カズ」
 【巨壑】 大壑に同じ、海をいふ、參岑の精衛の詩に「西山
 木石盡、一何時平」
 【虚喝】 「カラヲドシ」をいふ、史記の蘇秦傳に「秦深ク入
 ラント欲スト雖モ、則チ狼ノ如ク顧ミテ、韓魏ノ其ノ
 後ヲ議ランコトヲ恐ル、是ノ故ニ恟疑虚喝シ、驕矜
 シテ而シテ敢テ進マズ、則チ秦ノ齊ヲ害スル能ハザ
 ル、亦明ケシ註に「恟ハ、恐懼ノ心ナリ、喝ハ本亦獨ニ
 作ル、高誘曰ク、虚獨ハ喘息シテ懼ルル貌、劉氏曰ク、

秦自ラ疑懼シテ敢テ兵ヲ進メズ、虚シク恐喝ノ詞ヲ
 ナシテ以テ韓魏ヲ脅カスナリ」
 【歔歔】 悲泣して氣咽びせさあぐるなり、「ススリナキ」
 後漢書馮衍傳に「忠臣過故墟而一」楚辭に「會一」
 余鬱邑兮」
 【倨倨】 臥して思慮なき貌、淮南子覽冥訓に「臥一、興
 眊眊」
 【困圍】 困みて未だ舒びざる貌、孟子に「始舍一之、一」
 焉」
 【遽遽然】 自得の貌、莊子に「昔者莊周夢爲胡蝶、栩栩
 然胡蝶也、俄而覺一、一、周也」陸游の詩に「夢中聊喜蝶
 遽遽」
 【棘園】 韻府に「章承貽ノ詩ニ蓬巷幾時聞吉語、一何
 日免重來一ト、按ズルニ唐禮部ヲ閱試スルノ日、棘ヲ
 以テ之ヲ圍ムナリ」とあり、
 【玉辰】 太平記卷の三に見ゆ、玉座といはんが如し、辰
 とは屏風なり、文選卷三の注に「辰、屏風樹之坐後也」
 と、また三禮圖に「辰、從廣八尺、禮の明堂位にも「天子筭
 辰、南鄉而立」とあり、
 【玉璽】 たまのさかづき、禮記に「夏后氏以璆、殷以璽、
 周以爵」

【玉海金山】 氣韻の高潔なるを稱す、書言故事に「梁ノ
 武帝曰ク、朱异ハ器宇宏深、神采峯峻、金山萬丈、綠陟ス
 ルモ登リ難シ、玉海千尋、窺映スルモ測ラルル莫シト」
 【曲學阿世】 邪曲の學問を爲して、世俗に阿附するな
 り、史記儒林傳に「鞅固之徵也、薛人公孫宏亦徵、側目
 而視、固、固曰公孫子、務正學、以言無曲、學以阿世」
 【玉顏】 美貌をいふ、宋玉の神女賦に「苞溫潤之」
 【玉顏寂寞トシテ淚闌干】 太平記卷二十二に見ゆ、長
 恨歌の句なり、ただ原文には顔を容に作る、心に思あ
 りて美しき顔も何となくさびしく、涙のたらくと
 垂るる貌をいふ、
 【嶷嶷】 高さ貌、史記帝嚳紀に「其色郁々、其德一一註
 に「德高キナリ」
 【玉玦】 玦は玉佩なり、「オビダマ」環の如くにして連
 らず、史記の項羽本紀に「范增數目項羽、舉所佩一一」
 以示之者三」とあり、一一を擧げて羽に示す者は、蓋し
 その意を決して沛公を殺さしめんと欲するなり、白
 虎通に「君子ハ決斷ヲ能クス、則チ玦ヲ佩ブ」とあり、
 【玉鈞】 弦月をいふ、「ユミハリツキ」鮑昭の詩に「始出西
 南樓、纖纖如一一」
 【玉昆金友】 人の兄弟のすぐれて高潔なるを稱す、宋

の王銓、風儀に美なり、弟錫と齊しく孝行あり、人曰く、
「銓錫二王、一」と二王とはその姓を斥す、昆は兄
友は弟なり、その兄弟金玉の貴重なるが如しとなり、

【玉擗】賢人の死に喩ふ、文選に「先賢一」
【局趣】躡小の貌、小さくちかまる義、漢書灌夫傳に
「今日廷論、一效、轅下駒、趣一音ソク、」

【玉山】人品の高潔なるに喩ふ、書言故事に「晉ノ裴楷
字ハ叔則、容儀俊爽ナリ、時人之ヲ玉人トイフ、マタ稱
ス、叔則ヲ見レバ、玉山ニ近ヅクガ如ク、人ヲ照映スル
ナリト」

【玉山將ニ類レントス】酔ひて倒れんとするをいふ、
玉山は、人品の皓潔なるに比す、晉書に「嵇康字叔夜、山
濤言、叔夜爲人、巖巖、若孤松之獨立、其醉也如玉山
之將頹、」

【玉卮】「タマノサカヅキ」韓非子に「堂谿公見韓昭侯
曰、人主漏泄羣臣語、譬猶一之無當、當は底なり、
【玉趾】「オミアシ」の義、趾は脚足なり、玉は美稱、左傳
の僖二十六年に「齊侯未入竟、展喜從之曰、寡君聞
君親舉玉趾將辱於敝邑、使下臣犒執事、」

【玉璽】漢の輿服志に「璽ハ皆玉螭虎紐、文曰、皇帝行璽、
皇帝之璽、皇帝之信璽、天子之行璽、天子之璽、天子之信
璽、凡六」とあり、また太平御覽に「傳國璽ハ、是レ秦ノ
始皇ノ刻ム所口、其ノ玉、藍田山ヨリ出ヅ、是レ丞相李
斯ノ書スル所口、其ノ文ニ曰ク、受命于天、既壽、永昌
ト、漢ノ高祖三秦ヲ定ム、秦王ノ嬰此ノ璽ヲ獻ズ、漢ノ
高祖位ニ即クニ及ンデ、仍ホ之ヲ佩ブ、因ツテ以テ相
傳フ、故ニ號シテ傳國璽トイフ」と、事類全書に「舊制乘
輿ハ璽、唐ニ改メテ寶トナス、」

【玉人】玉の如き皎潔の人、晉書裴楷傳に「風神高邁、容
儀俊爽、時人謂之、」また玉にて作りたる人形、拾
遺記に「蜀ノ先主ノ甘后ハ玉質柔肌、態媚ニ容冶ナリ、
河南ノ一ノ獻ズ、高二尺、乃チ一ヲ取リテ后ノ側ニ
致ス、后ト一ト潔白ニシテ潤ヲ齊シクス、嬖寵ノ者、
【玉卮當ナシ】玉にてつくりたる「サカヅキ」の底なき
をいふ、韓非子に「堂谿公、昭侯ニ見エテ曰ク、今白玉ノ
卮アリテ當ナク、瓦器アリテ當アリ、君渴スルトキニ、
將ニ何ヲ以テ飲マントスルカト、君曰ク、瓦器ヲ以テ
セント、堂谿公曰ク、白玉ノ卮、美ニシテ君以テ飲マザ
ル者ハ、ソノ當ナキヲ以テニアラズヤ、君曰ク、然リ、堂
谿公曰ク、人主トナリテ、ソノ羣臣ノ語ヲ漏洩スルハ
譬ハバ猶ホ玉卮ノ當ナキガ如シト、左思の語に「玉卮
無當、雖寶非貴、」

【玉樹】人の風采の高潔なるに喩ふ、杜甫の飲中八仙
歌に「宗之瀟洒美少年、皎如——臨風前、芝蘭——
——を參看せよ、
【玉樹三女ノ序】太平記卷十三に見ゆ、西源院本に、三
女を三樂に作る、三體詩の「玉樹歌殘、玉氣終」の注に「陳
ノ後主玉樹後庭花ノ曲ヲ作ル、玉氣終トハ、隋、陳ヲ并
セ、南朝此ニ至リテ滅スルヲイフ、隋ノ亡ブル伴侶曲
アリ、陳ノ亡ブル後庭花アリ、皆亡國ノ音ナリ、」
【玉潤】女婿を稱す、晉書の衛玠傳に「玠ハ風神秀異、
妻ノ父樂廣、海内ニ重名アリ、議者以爲ラク、婦翁ハ氷
清、女婿ハ——ト、」
【玉食】珍らしき食物、書經の洪範に「惟辟——」また
美食の義、
【玉燭】四時の氣候の調和するをいふ、爾雅釋天に

【玉燭】四時の氣候の調和するをいふ、爾雅釋天に
惟甘后ヲ妬ムノミニアラズ、亦——ヲ妬ム」と、また妻
がその夫を稱してもいふ、また玉を琢く工人をば玉
人といふ、周禮考工記に見ゆ、玉とは異り、
【玉振】（金聲——）を見よ
【玉簪花】「ギバウシユ」なり、群芳譜に「——一名ハ白
萼、一名ハ白鶴仙、一名ハ季女、」根に數十葉叢生す、夏
日莖を出し、白又は紫の花開く、花の狀は穂の如し、
【玉樹】人の風采の高潔なるに喩ふ、杜甫の飲中八仙
歌に「宗之瀟洒美少年、皎如——臨風前、芝蘭——
——を參看せよ、
【玉樹三女ノ序】太平記卷十三に見ゆ、西源院本に、三
女を三樂に作る、三體詩の「玉樹歌殘、玉氣終」の注に「陳
ノ後主玉樹後庭花ノ曲ヲ作ル、玉氣終トハ、隋、陳ヲ并
セ、南朝此ニ至リテ滅スルヲイフ、隋ノ亡ブル伴侶曲
アリ、陳ノ亡ブル後庭花アリ、皆亡國ノ音ナリ、」
【玉潤】女婿を稱す、晉書の衛玠傳に「玠ハ風神秀異、
妻ノ父樂廣、海内ニ重名アリ、議者以爲ラク、婦翁ハ氷
清、女婿ハ——ト、」
【玉食】珍らしき食物、書經の洪範に「惟辟——」また
美食の義、
【玉燭】四時の氣候の調和するをいふ、爾雅釋天に

【玉燭】四時の氣候の調和するをいふ、爾雅釋天に
惟甘后ヲ妬ムノミニアラズ、亦——ヲ妬ム」と、また妻
がその夫を稱してもいふ、また玉を琢く工人をば玉
人といふ、周禮考工記に見ゆ、玉とは異り、
【玉振】（金聲——）を見よ
【玉簪花】「ギバウシユ」なり、群芳譜に「——一名ハ白
萼、一名ハ白鶴仙、一名ハ季女、」根に數十葉叢生す、夏
日莖を出し、白又は紫の花開く、花の狀は穂の如し、
【玉樹】人の風采の高潔なるに喩ふ、杜甫の飲中八仙
歌に「宗之瀟洒美少年、皎如——臨風前、芝蘭——
——を參看せよ、
【玉樹三女ノ序】太平記卷十三に見ゆ、西源院本に、三
女を三樂に作る、三體詩の「玉樹歌殘、玉氣終」の注に「陳
ノ後主玉樹後庭花ノ曲ヲ作ル、玉氣終トハ、隋、陳ヲ并
セ、南朝此ニ至リテ滅スルヲイフ、隋ノ亡ブル伴侶曲
アリ、陳ノ亡ブル後庭花アリ、皆亡國ノ音ナリ、」
【玉潤】女婿を稱す、晉書の衛玠傳に「玠ハ風神秀異、
妻ノ父樂廣、海内ニ重名アリ、議者以爲ラク、婦翁ハ氷
清、女婿ハ——ト、」
【玉食】珍らしき食物、書經の洪範に「惟辟——」また
美食の義、
【玉燭】四時の氣候の調和するをいふ、爾雅釋天に

【玉燭】四時の氣候の調和するをいふ、爾雅釋天に
惟甘后ヲ妬ムノミニアラズ、亦——ヲ妬ム」と、また妻
がその夫を稱してもいふ、また玉を琢く工人をば玉
人といふ、周禮考工記に見ゆ、玉とは異り、
【玉振】（金聲——）を見よ
【玉簪花】「ギバウシユ」なり、群芳譜に「——一名ハ白
萼、一名ハ白鶴仙、一名ハ季女、」根に數十葉叢生す、夏
日莖を出し、白又は紫の花開く、花の狀は穂の如し、
【玉樹】人の風采の高潔なるに喩ふ、杜甫の飲中八仙
歌に「宗之瀟洒美少年、皎如——臨風前、芝蘭——
——を參看せよ、
【玉樹三女ノ序】太平記卷十三に見ゆ、西源院本に、三
女を三樂に作る、三體詩の「玉樹歌殘、玉氣終」の注に「陳
ノ後主玉樹後庭花ノ曲ヲ作ル、玉氣終トハ、隋、陳ヲ并
セ、南朝此ニ至リテ滅スルヲイフ、隋ノ亡ブル伴侶曲
アリ、陳ノ亡ブル後庭花アリ、皆亡國ノ音ナリ、」
【玉潤】女婿を稱す、晉書の衛玠傳に「玠ハ風神秀異、
妻ノ父樂廣、海内ニ重名アリ、議者以爲ラク、婦翁ハ氷
清、女婿ハ——ト、」
【玉食】珍らしき食物、書經の洪範に「惟辟——」また
美食の義、
【玉燭】四時の氣候の調和するをいふ、爾雅釋天に

をいふ、詩經小雅正月篇に「謂天蓋高不敢不局」局は、跼に同じ、跼は「ヌキアシ」足を静かにもたげて音せぬやう歩むをいふ、同篇に「謂地蓋厚不敢不跼」また跼「天跼地」ともあり、天の高さにもせせくまり、地の厚さにもぬきあしするは、慎み恐るるの甚しきなり

【玉石同碎】よきものも、悪しき者も、あはせ亡ぶるに喩ふ、玉石俱焚に同じ、袁宏名臣贊に「滄海橫流、玉石同碎」

【玉石俱焚】善惡の差別なく、害にかかるをいふ、書經の胤征に「火炎崑岡、玉石俱焚、天吏逸、德烈于猛火」註に「崑ハ玉ヲ出ス山ノ名、岡ハ山脊ナリ、逸ハ「アヤマチ」ナリ、言フコロハ、火崑岡ニ炎ユルトキハ、玉石ノ美惡ヲ辨ゼズシテ共ニ焚ク、苟モ天吏トナリテ、過逸ノ德アルトキハ、人ノ善惡ヲ擇バズシテ之ヲ戮ス、其害猛火ノ玉石ヲ辨ゼズシテ焚クヨリモ甚シキコトアルナリ」類書纂要に「玉石俱ニ焚カルトハ、君子小人ヲ分タザルナリ」

【曲折】委曲に同じ、錯綜せる事情をいふ、漢書李廣傳に「青欲上書報天子失軍、青は衛青、

長、青古無有、また白居易の詩に「照他幾許人腸斷、一銀蟾遠不知」月中の兔の事は、離騷の天間に見ゆ、事文類聚に「張衡ガ靈憲ニ日ハ太陽ノ精ナリ、積デ鳥ノ象ヲナス、鳥ハ陽ノ類ナリ、其ノ數奇ナリ、月ハ陰精ノ宗ナリ、積デ獸ノ象ヲ成ス、兔ハ陰ノ類ナリ、其ノ數偶ナリ」

【玉貌】尊容といふが如し、史記魯仲連傳に「今我視先生之、非有求平原君者也」

【玉帛鐘鼓】玉帛は禮をいふ、舜典に謂ふ所ろの五玉三帛なり、五玉は五等の諸侯執る所ろのもの、即ち五瑞なり、公は桓圭、侯は信圭、伯は躬圭、子は穀璧、男は蒲璧なり、三帛は、諸侯の世子は纁を執り、公の孤は玄を執り、附庸の君は黃を執る、玉帛は贊と爲して相見ゆる所以なり、鐘鼓は樂をいふ、論語に「禮云禮云、玉帛云乎哉、樂云樂云、鐘鼓云乎哉」とあり、

【曲庇】道理にもとりまげて他をかばふ義、宋史に「納厚賂、一之」

【棘木ノ聽】罪狀を鞫問するをいふ、棘は「ウバラ」なり、小ざら棗に似て叢生するもの、禮記の玉制に「史以獄成、告于正、正聽之、正以獄成、告于大司寇、大司寇聽之、棘木之下」註に「九棘ヲ左ニシテ、孤卿大夫位シ、九

【崑然】崑は高くぬきいてたる義、晉書江統傳に「統靜默有遠志、時人語曰、一稀言江應元」また杜甫の詩に「一賢後、復見秀骨清」

【玉泉】荊州に在り、天台智者大師、隋の開皇十四年四月より一夏の間、こゝに住し、摩訶止觀の一念三千の法門を談じき、初は一音寺といふ、寺に清泉あるによりて「一」と改む、

【局趣】器量の小さき貌、また屈しかがむ貌、漢書灌夫傳に「一、效轅下駒、趣は一に促に作る、同じ、

【玉臺】上帝の居る處をいふ、漢書禮樂志に「遊闔闔、觀

【玉塵】雪の異名、何遜の句に「若逐微風起、誰言非

【跼蹐】蹐蹐して進まざる貌、「タチモトホル」史記淮陰侯傳に「蹐蹐之、一不如驚馬之安歩」

【曲聽】人の言に屈從するをいふ、漢書游俠傳に「仇家

【玉斗】斗は、酒をくみ取るに用ふる、「ヒシヤク」の類、一はそれを玉もて作りたるなり、史記の項羽本紀に「一、一雙、欲與亞父」

【玉蘭】「モクレンゲ」なり、花疏に「一ハ辛夷ヨリモ早シ、故ニ宋人名ヅクルニ迎春ヲ以テス、千幹萬莖葉セズシテ花サク、其ノ盛ナル時ニ當リ、玉樹ト稱スベシ」群芳譜に「一花ハ、九瓣ニシテ色白ク、微碧ナリ、香味蘭ニ似タリ、故ニ名ヅク」

【崑立】山の高く峻しく立つ貌、

【玉曆】正朔をいふ、搜神記に「舜耕於歷山、得一於河際之巖」

【玉樓銀海】趙德麟の侯鯖録に「東坡黃州ニ在ル日、雪ノ詩ヲ作ル、曰フ凍合玉樓寒起粟、光搖銀海眩生花、人ソノ事ヲ使フヲ知ラズ、後チ王荆公ニ見ユ、詩ヲ論ジテ此ニ及ブ、公云フ、道家兩肩ヲ以テ玉樓トナシ、目ヲ以テ銀海トス、コレ此ノ事ヲ使ヘルヤ否ヤト、坡曰ク、惟ダ荆公ノミ此ヲ知ル」

【渠魁】渠は大なり、惡首を斥す、賊の「カシラ」書經の胤征に「殲厥一、脅從、罔治」

【魚貫】群れる魚の亂れ散ると、南史に「鳥散一」

【魏志鄧艾傳】將士皆攀木緣崖、一而進

漢の范式字は巨卿張元伯と友たり、春京師に別れ、暮
秋期をなす、元伯九月十五日に至り、雞を殺し黍を炊
ぎ、以て之を待つ、母曰く、相去ること千里、何を以て至
ることを必すと、元伯曰く、巨卿は信士なり、必ず期
を愆らずと、言ひ訖れば巨卿果して至りぬ、

文ヲ撰ビ音ヲ制シ、傳ヘテ後式ト爲ス、梵音茲ニ始ラ
爲ス、魚一に漁に作る、これ聲明の始なり、

【鉅公】 天子を稱す、公は父の敬稱、列子に家父を家公
とせり、漢書郊祀志の註に「父ヲ公トイフ、天子ハ天下
ノ父タリ、故ニ一トイフ」また大家の義、文章ノ見よ、
【巨口細鱗狀如松江之鱸】 後赤壁賦の句なり、後漢書
左慈傳に「曹操願衆賓曰、今日高會、珍羞略備、所少
吳松江鱸魚耳」とありて、注に「松江、出好鱸魚、味異、它
處」とあり、隋唐佳話に「吳都獻松江鱸魚、煬帝曰、
所謂金齏玉鱸、東南之佳味」

【御璽】 璽は古、天子諸侯の信印の稱、秦漢より後は天
子の信印に限りて用ふ、一は皇帝の御印なり、史記
に「僞王一、蔡邕の獨斷に「皇帝六璽」とあり、
【虛舟ヲ泛ブ】 (泛、虚舟)己を虚うして以て世に遊ぶに
喩ふ、唐詩に「對君疑是、疑是、疑是、志林に「參寥子獨好
面折人過、然人知其無心、如一之觸物、蓋未嘗
有怒之者」

【御在】 御は侍なり、猶ほ侍坐の如し、國語に「侏儒成施
寔一、側近頑童也」

【魚豕ノ惑】 文字の誤りあるをいふ、抱朴子に「書三寫
以魚爲魯云云是れ言ふところは寫すと二度にして、

【魚山ノ嵐】 太平記卷二に見ゆ、魚山は支那の地名、釋
氏要覽に「昔、魏ノ陳思王曹子建、魚山ニ遊ビ、忽チ空中
梵天ノ音ヲ聞ク、清響哀婉、ソノ聲、心ヲ動カス、獨リ聽
クコト良久シ、乃チソノ節ヲ摸シ、寫シテ梵唄トナシ、

【漁色】 容色の美なる者を、貪りおかすこと、漁者の魚
に於けるが如きをいふ、禮記の坊記に「諸侯不下」

遂に魚といふ字を誤りて、魯の字となしたりとなり、
また孔子家語に「子夏見讀史志者曰、晉師伐秦、三家
渡河、子夏曰非也、己亥耳、問之晉使、果然云云、是れ言
ふところは、子夏が、史書を讀む人の三家渡河といひ
しを聞き、恐らくは三家は、己亥の誤りならんとい
ひ、之を晉の使者に問ひしに果して其の如くなりし
なり、十八史畧陳殷の序に「不無魚豕之惑也」

【渠帥】 賊徒の「カシラ」をいふ、史記に「斬殺其渠帥
渠帥、前に同じ、巨魁の義、史記田叔傳に「田叔取其一
二十人、各笞五十」

【去就】 進退の如し、陳琳の檄吳將校部曲文の「昔先
賢之、一の註に「先賢ハ伊尹ヲイフ、去就ハ夏ヲ去リ
テ、殷ニ就クヲイフ」

【魚水ノ親】 親密なる交をいふ、水魚ノ親を見よ、
【虛聲】 「カララドシ」文獻四裔考に「特爲一、以動中
國」

【巨浸】 おほいなる澤なり、浸は水のたたへあつまり
たるところの總稱、春渚紀聞に「三湖皆漫水」

【鉅屑】 「ノコギリクツ」「オガクツ」言語の出でて盡き
ざるに喩ふ、蘇軾の句に「高論無窮如鉅屑」

【許慎】 後漢の召陵の人、性惇篤少くして博く、經籍を
學ぶ、馬融常に之を推敬す、時人語りて曰く、五經無雙
許叔重と、叔重とは慎の字なり、初め慎五經の傳説臧
否同じからざるを以て、五經異義を爲る、また說文解
字十四篇を作る、獻帝の時、孝廉に擧げらる、

【巨然】 宋の畫僧、山水は董源を祖述して妙に至り、董
巨と並稱せらる、聖朝名畫評に「釋一、江寧ノ人、業
ヲ本郡開元寺ニ受ケ、畫山水ヲ攻ム、僞唐ノ李煜ノ命
ニ歸スルヤ、巨然隨ツテ京師ニ至リ、開寶寺ニ居リ、謁
ヲ在位ニ投ズ、遂ニ聲譽アリ、烟嵐曉景ヲ學士院ノ壁
ニ畫ク、當時絶ト稱ス云」

【鉅儒】 鉅は大なり、大儒に同じ、隋書經籍志に「光武中
興篤好文雅、明帝尤重經術、四方鴻生一、負軼自遠
而至者、不可勝算」

【居然】 坐して動かざる意、詩經に「一、生子、また徒
然の義にも用ふ、高適の詩に「舍下蛩亂鳴、一、自蕭索」

【居諸】 光陰をいふ、詩經の柏舟篇に「日居月諸」の註に

【舉錯】 擧げ行ふと、錯さてやむとなり、行止に同じ、職

國策に「臣以所學者觀之先王之」有「高世之心」
また淮南子に「一不能當動靜不能中」

【魚袋】東帯の時に、石帯の右に著けて帯ぶるもの、長さ三寸巾一寸厚五分許の匣を白絞の皮にて四面を張り魚の形を表に六つ背に一つ著け、紐にて帯ぶ、三位、參議以上は、其の魚鍍金なり金魚袋といふ、四位以下は銀にて銀魚袋といふ、實錄に、三代には章を以てこれを作る、これを笄袂と云ふ、魏の時これを易へて龜とす、唐の高祖隨身魚を賜ひ、三品より以上は其の飾金を以てし、五品より以上は、其の飾銀を以てす、故に魚袋と名づく、と。

【漁奪】民の物を食ひ取ること、漁獵して取るが如きをいふ、漢書景帝紀に「吏以貨賂爲市、一百姓侵牟萬民」

【渠荅】鐵疾藜に同じ、敵を防ぐに用ふる、ヒシなり、漢書鼂錯傳に「布一」

【虛沖】心ひなしくして、やはらぐをいふ、張華の句に「安能守一」

【蓬條戚施】蓬條は、俯すこと能はざる醜疾なり、由りて偃人の稱とす、戚施は、仰ぐこと能はざる醜疾なり、由りて偃人の稱とす、詩の邶風に「蓬條不鮮」また「得」

入寇、遣其將王世冲、以蕃漢兵攻廣廬州、九月豫下、僞詔遣子麟入寇、及誘金人宗輔、撻辣兀朮分道南侵、

【虛ニ據リ影ヲ搏ツ】據、虚搏影、力を加ふることは、若し、影、善者とは、善く兵を用ふるものをいふ、

【居ハ氣ヲ移ス】人の氣は、居る所によりて移さるものなれば、居る所は慎むべしとの義、孟子に「居移氣、養移體、大哉居乎」

【巨擘】人群中に卓出する者をいふ、孟子滕文公下篇に「齊國ノ士ニ於テ、吾レ必ズ仲子ヲ以テ一ト爲ス」の註に「一ハ、大指ナリ、言フココロハ、齊人ノ中ニ仲子アルコト、衆小指ノ中ニ、大指アルガ如シト」蘇洵の史論下に「范曄陳壽實一焉」

【遺伯玉】名は瑗、伯玉はその字なり、衛の賢大夫なり、孔子衛に至るとき、その家を主とす、莊子に「伯玉行年五十、而知四十九年之非」また「伯玉行年六十而六十化」とあり、老に至るまで進徳の工夫を積みて倦まざりし人なり、論語に曰く「遺伯玉使入於孔子、子問之曰、夫子何爲、對曰、夫子欲寡其過而未能力也」

【禦侮】武臣の折衝して「アナドリ」をふせぐをいふ、詩の大雅に「予曰有「一」予は詩人なり、

此戚施とあり、爾雅に「蓬條、口柔也、戚施、面柔也」の註に「蓬條之疾、不能俯也、口柔之人、視人顔色常不伏、因以名云、戚施之疾、不能仰也、而柔之人、常俯似之、亦以名云」とあり、國語の晉語に「蓬條不可使、俛、戚施不可使、仰」とあるは、性惡なる者は、之を教誨するも善に化せしむること能はざるに喩ふ（戚施を見よ、

【魚肉セラル】史記項羽紀に「樊噲曰ク、人方爲刀俎、我爲魚肉、また張儀傳に「爲秦所魚肉也」とあり、その他にも多く見ゆ、後漢書の註に「言人所吞噬也」

【虚ニシテ往キ實ニシテ歸ル】駁臺雜話の序に見ゆ、莊子の徳充符に「虚而往、實而歸、固有不言之教、無形而心成者耶」とあるに本づく、ここに虚實といふは、智徳の空虚なると、充實するにつきていふ、

【僞豫入寇】胡澹菴の上高宗封事の句、劉豫字は彦游、景州阜城の人なり、始め進士に擧げられ、宣和六年河北提刑に除す、金人南侵し、豫官を棄て亂を避く、建炎四年七月、金人豫を冊し皇帝と爲し、國を大齊と號し、大名府に都せしむ、九月豫僞位に即き、境内に赦し、金の正朔を奉じ、天會八年と稱す、建炎七年十一月、豫を廢して蜀王と爲す、豫、王を僭する凡そ八年にして廢せらる、宋史に「建炎四年豫即僞位、紹興元年十月、劉豫

【御風】風に乗ずるなり、莊子の逍遙遊に「列子、一、冷然善也」

【魚腹ニ葬ラル】（葬、魚腹）水に投じて死するをいふ、楚辭の懷沙賦に「寧赴常流而葬乎江魚腹中耳」常流は長流の如し、

【漁父ノ利】（鵝蚌ノ争）を見よ、

【魚網鴻離ル】詩經の邶風に「魚網之設、鴻則離之、燕婉之求、得此戚施」の註に「魚網ヲ設ケテ、カヘツテ鴻ヲ得タリ、以テ燕婉ヲ求メテ、カヘツテ戚施ヲ得、得ル所ヲ求ムル所ニ非ザルヲ興ズルナリ」燕婉は美人、戚施は醜疾の人なり、望みとちがひたる「ツマラヌ」ものを得たるにたとふ、

【虚無】己の心を虚ラして爲す所なきなり、史記に「道家無爲其術以「一」爲本、淮南子に「一」者道之舍也」

【虚無因應】史記の老子傳の贊に「太史公曰ク、老子ノ貴ブ所ノ道ハ、一、無爲ニシテ變化ス、故ニ書ヲ著スニ、辭微妙ニシテ識リ難シト稱ス」虚無は體なり、因應は用なり、因應とは因りて之に應ずるなり、

【魚目燕石】魚目、燕石は、共に玉に似て非なる者、以て虚偽の人に喩ふ、韓詩外傳に「白骨類象、魚目似珠」と

入寇、遣其將王世冲、以蕃漢兵攻廣廬州、九月豫下、僞詔遣子麟入寇、及誘金人宗輔、撻辣兀朮分道南侵、

あり、また説苑に「宋ノ愚人、燕石ヲ得、之ヲ藏シテ以テ大寶ト爲ス、周ノ客聞テ之ヲ觀ル、主人齋スルヲ七日、端冕元服シテ以テ寶ヲ發ク、革櫃十重、緹巾(丹黃のふくさ)十襲、客見テ俛シテ口ヲ掩ヒ、胡盧シテ笑ヒテ曰ク、燕石ナリト、主人大ニ怒ツテ曰ク、盲瞽ノ言ナリト、藏スルコト愈々固ク、守ルコト愈々謹メリ」とあり、また韓文に「燕石ヲ裹ンデ玄圃ヲ履ミ、魚目ヲ帶ビテ漲海ニ遊ブ、祇ニ誹ヲ取ル耳」とあり、玄圃漲海は玉の多き處なり、成語考に「魚目豈可混珠、碓硃焉能亂玉」とあり、碓硃は石の玉に似たる者、

【漁陽ノ聲鼓地ヲ動シテ來ル】 太平記卷の十に見ゆ、白樂天の長恨歌に「漁陽聲鼓動地來、驚破霓裳羽衣曲」とあり、天寶十四載安祿山藩兵十四萬を率ゐ、漁陽に起リ、南向して關を指シ、詭言すらく、詔を奉じて楊國忠を誅すと、聲鼓の聲地を動して來る、

【距離】 超越するなり、「コユル」左傳僖二十八年に「一三百」

【魚鑰】 魚の形の「チャウマイ」をいふ、事文類聚に「芝田録ニイフ、門鑰ニ必ズ魚ヲ以テスル者ハ、其ノ目ヲ瞑セズシテ、夜ヲ守ルノ義ニ取ル」

【許由巢父】 許由は箕山の隱士なり、堯これに天下を

譲らんとせしに、許由聞きて耳の汚なりとて潁川の水に耳を洗ひたりといふ、巢父も同じ頃の隱士にて許由の耳を洗ひし水を汚れたりとて渡ることをもせざりといふ、事文類聚の隱逸部に見ゆ、

【許由ノ瓢】 蒙求に「許由箕山ニ居ル、唯ダ一瓢アリ、水ヲ酌ミ、樹枝ニ掛ク、風瓢ヲ吹キテ鳴ラス、以テ煩トナシ、擲チテ之レヲ去ル」詳しくは高士傳を見よ、

【居庸關】 長城の城壁を穿ちて作れる五角形の穹窿道にして、全部白石を以て作る、穹窿の幅六十四尺、深四十九尺八寸、穹窿の左右の石壁は、各三十三尺八寸、高欄の下より地上まで三十一尺、「アーチ」の幅四尺五寸あり、前後の「アーチ」の周圍に、彼の囉嘛教に特有の彫像あり、其の左右に女體ありて頭上に七蛇を置き、その尾はみな蛇となれり、穹窿の内面も、また精巧緻密なる佛像を以て裝飾せられ、其の前後の入口に接せる部分に、四天王像のを刻し(四天王トハ囉嘛教ノ摩利海摩利清摩利紅摩利受ヲイフ)正統十年五月十五日功德關信官林普賢發心修造とあり、正統は明の年號なれば、この時代に修理を加へしを知る、四天王の間に滿、漢蒙古西藏等の文字を以て銘を刻せり、その漢文の末に、至正五年乙酉九月吉日西蜀成都

寶積云の文字あり、至正は元の惠宗の時代にして、皇紀二千八年に當る、

【去來今】 過去現在未來をいふ、圓覺經に「無起無滅」

【魚爛】 一は魚のただれくさるをいふ、以て潰亂の内部分より發するに喩ふ、公羊傳僖十九年に「一而亡」また陳琳書に「十萬之師、土崩一」

【魚鱗】 相次でて並ぶこと、魚鱗の如くに、聚まれるをいふ、漢書劉向傳に「青紫貂蟬、充盈內」一左右

【魚麗ノ陣】 隊形圓くして、すこし長く、群魚の附麗して進むが如き陣法をいふ、左傳恒五年に「爲一之」

【魚鱗鶴翼ノ陣】 下の圖の如き陣

形なり、唐の太宗の文に「躬擐甲、魚鱗鶴翼、親當矢石、夕對魚鱗之陣、朝臨鶴翼之圍」

【鬼、夜哭ス】 (天粟ヲ雨ラシ)を見よ、

【虛靈不昧】 その實在をさす能はざるも、そのはたらし、極めてくしびにして且明かなる義、心の徳を稱していふ、朱熹の語に「明德者、人之所得乎天、而一」

一、以具衆理、而應萬事者也」

【遠慮】 猶ほ傳舍の如し、莊子に「仁義先王之」也、止



可以一宿、而不可久處、

【許魯齋】 (許衡)を見よ、

【危欄】 高くして危き「テスリ」李商隱の句に「輕命倚」

【霧】 説文に「一ハ百邪ノ氣ナリ、陰ノ陽ヲ冒ス」ト爲ス、地ニ本ヅキ天ニ行ハルルナリ」と、爾雅の釋天に「地氣發シテ天應ゼザルヲ霧トイフ、霧ハ之ヲ晦ト謂フ」の註に「晦冥ナリ」釋名に「霧ハ冒ナリ氣蒙亂シテ物ヲ覆冒スルナリ」博物志に「王肅張衡馬均、俱ニ重霧ヲ冒シテ行ク、一人ハ恙ナク、一人ハ病ミ、一人ハ死ス、ソノ故ヲ問フニ、恙ナキ者ハイフ、我レ酒ヲ飲ミタリト病ム者ハ食ニ飽キ、死スル者ハ空腹ナリキ」後漢書に「張楷字ハ公超、性道術ヲ好ム、能ク五里ノ霧ヲ作ス」

【梧桐】 (梧桐)を見よ、

【雉ヲ引キ自ラ刺ス】 (引、雉自刺) 戰國策に「蘇秦讀書欲睡、一、一、一、其股」

【麒麟】 禮記に「毛蟲三百六十、而シテ麟之レガ長タリ」また格物論に「一ハ麋身、馬足、牛尾、黄色圓蹄ニシテ角アリ、角端ニ肉アリ、高サ一丈二尺、仁ヲ含ミ義ヲ抱キ、行歩規ニ中リ、折旋矩ニ中リ、音鐘呂ニ中ル、遊ブルハ必ズ土ヲ擇ビ、翔リテ而シテ後ニ處ル、生蟲ヲ履マ

ズ、群居セズ、旅行セズ、陷穽ヲ犯サズ、網罟ニ罹ラズ、中國聖人有レバ則チ至ル、麟鳳龜龍ノ四靈ハ、王者ノ嘉瑞ニシテ、麟之ガ首タリ、牝ヲ麒トイヒ、牡ヲ麟トイフ、韓文の獲麟解に、詠於詩、書於春秋とあり、毛詩の周南に、麟之趾の篇あり、春秋哀十四年、西狩獲麟とあるを斥す。

【麒麟閣ノ功臣】 すべて十一人なり、漢書の蘇武傳に「甘露三年、單于始メテ入朝ス、上股肱ノ美ヲ思ヒテ、迺チ其ノ人ヲ麒麟閣ニ圖畫ス、其ノ形貌ニ法リ、其ノ官爵姓名ヲ署ス、唯ダ霍光ノミ名イハズ、大司馬大將軍博陸侯姓ハ霍氏トイフ、次ハ衛將軍富平侯張安世トイヒ、次ハ車騎將軍龍領侯韓增トイヒ、次ハ後將軍營平侯趙充國トイヒ、次ハ丞相高平侯魏相トイヒ、次ハ丞相博陽侯丙吉トイヒ、次ハ御史大夫建平侯杜延年トイヒ、次ハ宗正陽城侯劉德トイヒ、次ハ少府梁丘賀トイヒ、次ハ太子太傅蕭望之トイヒ、次ハ典屬國蘇武トイフ、皆功德アリ、名ヲ當世ニ知ラル、是ヲ以テ表シテ之ヲ揚グ」

【麒麟兒】 小兒の衆にすぐれたるを稱す、金壁故事に「昔徐陵、四歳ニシテ家人抱イテ實誌上人ニ見ユ、上人乃チ手ヲ以テ其ノ頭ヲ摩デテ曰ク、天上ノ石麒麟ヲ

リト」杜甫の見徐卿二子歌にいふ、徐卿二子生絶奇、威應吉夢相追隨、孔子釋氏親抱送、並是天上麒麟兒、【麒麟ノ衰フルヤ驚馬之ニ先ダツ】 戰國策に「蘇子、齊ノ閔王ニ説キテ曰ク、語ニ曰ク、麒麟之衰也、驚馬先之」とあり、麒麟は一日に千里を走る駿馬なり、麒麟ノを見よ、

【伎倆】 山堂肆考に「多智校計ノ貌」とあり、書言故事にも、人智計曰「一」ニテナミ、舊唐書司空圖傳に「一」雖多、性靈惡、また康熙字典に「一」巧也

【器量】 才器徳量をいふ、蔡邕の郭有道碑に「一」弘深、姿度廣大、晉書の孫綽傳にも「一」宏曠

【羈旅ノ臣】 羈は寄なり、旅寓なり、羈に通じ用ふ、旅は客なり、寄寓して客たる臣、左傳莊二十二年に「一」之「一」また杜詩に「自古有羈旅」の註に「羈旅ハ、羈絆セラレテ外ニ在ルノ行旅ヲイフ」

【豨咎】 即ち猪咎なり、その塊黒くして猪矢に似たり、滲泄を主す、

【綺麗】 麗はしきこと、綺の如くなるをいふ、劉楨の詩に「投翰長太息、一」不可忘」

【魏禮】 字は和公、一の字は季子、清の寧都の人、諸生を棄て、詩文に工なり、兄際瑞、禱と名を齊くす、世に三魏

と稱す、魏季子文集あり、

【宜僚ノ丸】 楚、宋と戦ひて敗る、宜僚丸を弄ぶ、八個は空中に在り、九個は手に在り、宋の軍之を望む、楚難に免る、莊子の徐無鬼篇に「市南宜僚弄丸而兩家之難解」とあり、韓文の送高閑上人序に「僚之於丸」とあるはこれを斥す、

【鬼録】 冥鬼の籍に録せらるゝ意にて、人の死するをいふ、魏の文帝與吳質書に「觀其姓名、已登一」啓蒙故事收之、

【義和】 (一)を見よ、

【既往ハ咎メズ】 過去の事は、あとから追ひ咎むべからず、ただ將來を謹むべきをいふ、論語八佾篇に「成事不説、遂事不諫、既往不咎」

格言十三則

- 共君一夜話、勝讀二十年書 (古語出「事文類聚」)
- 君甘、則臣酸、君淡則臣鹹 (晏子春秋)
- 君好、之則臣爲之、上行、之則民從之 (禮記樂記)
- 居同、樂得同利、死同、哀 (管子)
- 強國之得、之也、以、收、小、其失、之也、以、特、強 (管子)
- 強將、下、無、弱、卒 (古語、出「蘇軾文」)
- 得、御、者、調、其、駭、失、御、者、逐、其、驥 (天祿閣外史)
- 急流勇退 (宋史陳搏傳)
- 恭、則、遠、於、患、敬、則、人、愛、之 (孔子家語)
- 恭遜敬愛、身之粉澤也、放在、身、則、榮、去、身、則、辱也 (管子)
- 樹、曲、木、者、惡、得、直、景 (說苑)
- 木秀、於、林、風、必、摧、之、堆、出、於、岸、流、必、湍、之、行、高、於、人、衆、必、非、之 (李康運命論)
- 把梓連抱、而有、數尺之朽、良工不、棄 (子思語、出「孔叢子」)

ク

【虞允文】 宋の仁壽の人、七歳にして能く文を屬す、紹興間の進士、中書舍人直學士院に累官す、金人の入寇する、允文諸將を激して力戰せしめ、金人を采石に敗る、孝宗の時、相に拜し、雍國公に封ぜらる、卒して忠肅と謚せらる、出でては將、入りては相、二十年に垂んとし、孜孜忠勤す、著すところ、詩文奏議等の集、數十卷あり。

【煦嫗】 煦は氣を以て煦め、嫗は體を以て嫗むるなり、禮の樂記に「天地訢合、陰陽相得、一覆育萬物」。

【空函大ニ怒ル】 淵鑑類函卷の一百九十七に「桓温將ニ般浩ヲ以テ尙書令ト爲サントシ、書ヲ遣リテ之ヲ告グ、浩欣然トシテ、答書謬誤アラントシテ慮リ、開閉スル者數十、竟ニ空函ヲ達セシカバ、温大ニ之ヲ怒ル」。

【空拳】 「カシテ徒手に同じ、北齊神武帝紀に「魏帝敕曰、縱無匹馬隻輪、猶欲奮一而爭」。

【空弩】 弩は弩弓なり、「イシユミ」は、箭盡きて復た射るべき者なきをいふ、漢書李陵傳に「士張一、」。

【白刃、北首、爭死、敵】 冒白刃、北首、爭死、敵。

【寓言】 寓は寄なり、他人又は他物に寄託して説をなすなり、莊子に寓言篇あり、史記の莊子傳に「大抵率寓言也」。

【偶語】 相對して語るなり、史記の秦紀に「有敢偶語詩書、棄市」。

【寓公】 諸侯國を失ひ、他國に寄寓する者、禮記に「不繼世、史記に「諸侯ハ一ヲ臣トセズ」の註に「公爵ニシテ寄寓スル者ナリ」。

【空谷足音】 さびしき處に人の尋ね來りし喜をいふ、(足音)を見よ。

【偶日】 丁の日をいふ、奇日を見よ。

【偶人】 俑に同じ、デク、偶は對なり、土木を以て人を爲くり、人形に對象するなり、史記殷紀に「爲一謂之天神」。

【空手】 「スデ」徒手に同じ、漢書武五子傳に「搏熊、疑猛獸」。

【空明】 月の水中に在るをいふ、前赤壁賦に「擊一、分、泝、流光」。

【空濛】 雨氣などのためにくらさ也、張衡の賦に「朝雨、如薄霧」また杜甫の詩に「一、辨漁艇、空一に控」。

【寓目】 寓は屬なり、目をつけて見るなり、左傳僖二十八年に「得臣與一焉、得臣は楚の令尹子玉の名、一解に、寓は寄なり、目を寄するなりと、亦通ず、

【虞淵】 日の入る所の名、楚辭に「囚靈元於一」また淮南子に「日出暘谷、入于一」また「日至一」是爲黃昏。

【愚ヲ守ル】 (守) 愚智あれども愚なるが如くなるをいふ、家語に「孔子曰、聰明睿智守之以愚、功被天下、守之以讓、座右銘に「無使名過實、一聖所賦」。

【肝衡】 目をはりあげて見ると、「ミアゲル」漢書王莽傳の「一厲色」の註に「眉ノ上ルヲ衡トイフ、一ハ眉ヲ舉ゲ目ヲ揚グルナリ」。

【虞衡】 山林を掌る吏なり、「ヤマバン」四庫全書簡明目録の序に「從一而入山林、得舟楫、而汎湖海」とあり、また孟子にも「招虞人以旌云云」。

【苦吟】 ほねをりて詩歌を作るをいふ、齊東野語に「一有聲」。

【姁姁】 和好の貌、漢書韓信傳に「項王見人、恭謹言語、一」。

【栩栩】 自ら喜ぶ貌、莊子の齊物論に「夢爲蝴蝶、一」。

然蝴蝶也。

【區區】 小なる貌、史記管晏傳に「以一之齊、在海濱」また漢書楚元王傳に「豈爲一之禮哉」。

【煦煦】 小惠をいふ、氣を以て暖むるの意、韓愈の原道に「一爲仁、子子爲義」。

【詡詡】 大言なり、韓愈の柳子厚墓誌銘に「一強笑語、以相取下」また漢書張敞傳の注に「北方人謂媚好爲詡」。

【筮篋】 (一)を見よ。

【踽踽】 獨行して親む所なきの貌、詩經唐風に「獨行、一」。

【瞿瞿】 却き顧みる貌、詩の唐風に「良士一」また驚き遠て審かならざる貌、禮の玉藻に「視容一」また精神立たず、志守る所なきをいふ、詩の齊風に「狂夫一」。

【悞悞】 容貌の大なるをいふ、詩の邶風に「碩人一」。

【具慶】 父母共に存するをいふ、故事成語考に「一、下、父母俱存、重慶、下祖父母俱在」。

【駒隙】 光陰に喩ふ(白駒ノ)を見よ。

【苦言】 口に苦くして身に利ある言、戰國策に「商君曰、一、藥也、甘言疾也」後漢書東平憲王傳に「一、至戒」。

【望之如渴】
望ムニシテシスルガ
望之如渴

【愚公山ヲ移ス】 智巧を用ひず、勉めて已まざるときは、遂に其の目的を達するを得るに喩ふ、列子の湯問に「太行王屋二山、方七百里、高萬仞、本在冀州南、河陽北、北山愚公者、年且九十、面山而居、懲山北之塞、出入之迂也、聚衆而謀曰、吾與汝畢力平險、指通豫南、達于漢陰、可乎、雜然相許、其妻獻疑曰、以君之力、曾不能損魁父之丘、如太行王屋、何且焉置焉、土石雜曰、投諸渤海之尾、隱土之北、遂率子孫荷擔者三夫、叩石墾壤、箕畚運於渤海之尾、隣人京城氏之孀妻有遺男、始、跳往助之、寒暑易節、始一反焉、河曲智叟笑而止之曰、甚矣汝之不慧、以殘年餘力、曾不能毀山一毛、其如土石何、北山愚公長息曰、汝心之固、固不可徹、曾不若孀婦弱子、雖我死、有子存焉、子又生、孫又生子、子又有子、子又有孫、子孫無窮、匱也、而山不加增、何苦而不平、河曲智叟亡以應、操蛇之神、懼其不已也、告之於帝、帝感其誠、命夸蛾氏二子、負二山、一厓朔東、一厓雍南、自是冀之南、漢之陰、無隴斷焉、帝は上帝なり、

【具獄】 獄案全く成りて、宣告の文具備するをいふ、漢

【草ヲ打チ蛇ヲ驚カス】 (打草驚蛇) 甲を懲して、乙を戒むるに喩ふ、開元遺事に「王魯當塗ノ宰トナル、漬貨ヲ務トス、會、部民連狀シテ、主簿ノ貪賄ヲ訴フ、魯即チ判シテ曰ク、汝打草スト雖モ、吾レ已ニ蛇驚セリト、言ふところは、汝主簿の賄を貪るを訴ふるは、草を打つが如し、則ち我れ蛇の驚かざるが爲めに、已に戒を知れりと、

【草ヲ結ビテ敵ニ抗ス】 (結草抗敵) 左傳宣十五年に「魏顆秦ノ師ヲ輔氏ニ敗リ、杜回ヲ獲タリ、秦ノ力人ナリ、初メ魏武子ニ嬖妾アリ、子無シ、武子疾ム、顆ニ命ジテ曰ク、必ズ是ノ妾ヲ嫁セヨト、疾病ナルトキハ則チ曰ク、必ズ以テ殉トナセト、卒スルニ及ビ顆、之ヲ嫁ス、曰ク、疾病ナレバ則チ亂ル、吾レ其ノ治ニ從フナリト、輔氏ノ役ニ及ビ、顆老人ノ草ヲ結ビテ杜回ニ抗スルヲ見ル、回躓ヅキ顆ス、故ニ之ヲ獲タリ、夜老人ヲ夢ム、老人曰ク、余ハ爾ガ嫁セシメタル所ノ婦人ノ父ナリ、爾先人ノ治命ヲ用フ、吾レ是ヲ以テ報ユト、

【草園固ニ滿ツ】 徳化よく行はれ、犯罪人なきによりて獄屋には草が茂り滿つるをいふ、隋書に「劉廣萍鄉ノ令タリ、七年風教大イニ行ハレ、獄中繫囚ナク、争訟

絶息シ、囹圄ミナ草ヲ生ゼリ、

【鷓鴣】 「ムシバ」史記に「太倉公治、齊中大夫病、一ニ

【歐衆】 歐は驅なり、逐なり、驅逐せられて兵となりしもの、管子に「以教卒練士、擊一白徒、

【區シテ以テ別ツ】 類にしたがひ別つと區別を見よ、

【虞集】 字は伯生、道園と號す、元の臨川の人、汲の子なり、三歳にして書を読むことを知り、稍長じて吳澄に従ひて遊ぶ、諸官を経て翰林學士兼國子祭酒、經筵官となる、命を受けて經世大典を修す、書成り、病を謝して歸り、順帝の至元八年に卒す、年七十七、文靖と諡せらる、著す所、道園集あり、集學問該博にして本原を究極す、早歲弟盤と同じく、書舎を開き、左室には陶淵明の詩を壁に書し、題して陶庵といひ、右室には、邵堯夫の詩を書し、題して邵庵といふ、故に世に邵庵先生と稱す、

【具臣】 員に備はるのみの臣なり、論語先進に「今由與

【虞人】 山林を司る吏なり、周禮に「有山虞澤虞、以掌

山澤ニ虞は度なり、山林の大小及び其の生ずる所を度り知るなりと註せり、

【苦車】 車に多ふ(苦船)を見よ、

【孔雀】 格物論に「一ハ文禽ナリ、廣益ノ諸州ニ産ス

【愚者】 千慮必有一得アリ、愚者の考も、稀には中ることあるをいふ、史記の淮陰侯傳に「廣武君曰、臣聞智者千慮必有一失、愚者千慮必有一得、故曰狂夫之言、聖人擇焉、晏子春秋にも、晏子曰、嬰聞之、聖人千慮必有一失、愚人千慮必有一得」とあり、

【虞舜】 史記の五帝紀に「帝舜有虞氏、姚姓或ハ曰ク、名ハ重華、替腹ノ子ナリ、父後妻ニ惑ヒ、少子象ヲ愛シ常ニ舜ヲ殺サント欲ス、舜孝弟ノ道ヲ盡シ、烝烝トシテ又メテ、姦ニ格ラザラシム、歴山ニ畔ス、民皆畔ヲ讓ル、雷澤ニ漁ス、人皆居ヲ讓ル、堯之ガ聰明ヲ聞キ、賦畝ニ舉ゲ、妻スニ二女ヲ以テス、遂ニ堯ヲ相ケ政ヲ攝ス、堯ノ子丹朱不肖ナリ、乃チ舜ヲ天ニ薦ム、堯崩ジテ舜位ニ即ク、雷澤は鄭玄いふ、濟陰に在りと、

【虞舜ノ世ニハ鳳凰來ル】 太平記卷十三に見ゆ、書經の益稷に「蕭韶九成、鳳凰來儀」とあるをいふ、蕭韶は舜

【區處】の樂の名來儀とは像り舞ひて容儀あるなり、それく處置すると、品字箋に「分別處置スルヲ一トイフ」漢書黃霸傳に「具爲一」

【虞初】佩文韻府に「漢書ヲ引キテ、一ハ河南ノ人、武帝ノ時、方士ヲ以テ郎トナル」と、西京賦に「小説九百本自一」と、小説を作りたる人なるを以て、轉じて小説の義とす、

【虞世南】字は伯施、荔の子、少くして兄世基と同じく學を顧野王に受く、十年精思懈らず、文章贍博なり、貞觀中弘文館學士となる、また書を僧智永に學び、その法を究む、太宗毎にその五絶を稱す、一に德行、二に忠直、三に博學、四に文詞、五に書翰、(行祕書を見よ、)

【虞芮ノ訟】虞芮の二國、田を争ひて決せず、西伯に質さんとて、その境に入れば耕す者は畔を譲り、行く者は、路を譲る、その朝に入れば士大夫皆禮ありしかば、二國の君、嘻、吾儕は小人なり、君子の朝に入るべからずと、相與に退き、先に争へる田地を以て、閉田と爲せりと、家語の好生篇又は、史記の周紀に出づ、漢書の毋將隆傳に「交讓之禮則虞芮之訟息」

【弘誓ノ深キト海ノ如シ】東關紀行に見ゆ、翻譯名義集に「言弘誓者、天台云、廣普之緣謂之弘、自制其心、

謂之誓、志求満足、乃稱願、大士曠懷運心廣普、依无作、四諦之境、起四種弘誓之心」とあり、法華經に「弘誓深如海、歷劫不思議」とあり、すべて四種あれば四弘誓願と稱す、第一に、衆生無邊誓願度、第二に、煩惱無數誓願斷、第三に、法門無盡誓願學、第四に、佛道無上誓願成これなり、弘誓は梵に僧那といふ、菩薩廣懷に心を運し、三界に入りて苦を救ひ、煩惱を斷せしめ生死を度し、證果に至らしむるをいふ、

【苦船】「フネニエフ」(苦船)を見よ、

【虞邵庵】(虞集)を見よ、

【瞿然】驚き變ずる貌、禮記の檀弓に「曾子聞之、一柳文の與、蕭翰林書に「一注視」

【具瞻】瞻は仰ぎ視るなり、一は、要路に立ちて衆庶俱に瞻仰するをいふ、詩の小雅に「赫赫師尹、民具瞻」また魏志高柔傳に「公輔之臣、皆國之棟梁、民所一」

【具然】自ら満足する貌、荀子に「今學曾未、如耽賢、則一欲爲、人師」

【孔叢子】七卷、二十三篇、漢の孔鮒の撰と傳ふれども、書中鮒の没するを記すれば、その自撰にあらざる

一に、小爾雅一篇あり、その説くところ純然古義を失はず、蓋し爾雅の補篇なり、これは孔鮒の撰たる疑なし、その目左の如し、

廣話一 廣言二 廣訓三 廣義四 廣名五 廣服六 廣器七 廣物八 廣鳥九 廣獸十 度量衡

胡應麟曰く、一を孔鮒の撰となすは非なり、孔子の子孫、先世の言行を確記せる者に係れり、その文詞東京(後漢)に類せり、閉魏晉人の手筆あり、孔臧が安國に與ふる書の如き是れなり、宋咸かつて註訓を爲る、宋景濂遂に以て咸が偽撰となす、而して體甚だ宋人に類せず、書七卷記するところ、子思子上子高子順子魚(字鮒)及び漢の孔臧子琳より十餘世なり、季彥に至りては楊震、皇甫規と時を同らす、正に東漢の末なり、則ちこの書は、季彥の輩先世の遺言佚行を集め成せるものにして宋人從つて之を潤飾せしなるべし、その小爾雅・詰墨等の篇は鮒の撰するところなるを以て遂に通じて鮒の作といふに至りたるなるべし、その書奇詭を事とせず、一に規矩に循ひ、稍異端に涉らず、猶ほ吾が孔夫子の家法なりといふべし、

【具足】事物の十分に備りて足らざるなきをいふ、无量壽經に「一五劫思惟攝取莊嚴佛國清淨之行、法

華經に「此大良藥、色香味皆悉一」

【驅鬼】禮緯に「高陽氏ニ子アリ、生レテ亡セヌ、後チニ疫、鬼トナル、一ハ江水ノ中ニ居テ、瘧ヲ人ニ致シ、一ハ宮室ノ區隅ノ中ニ居テ、ヨク小兒ヲ驚カス、コレヲ以テ年ノ十二月祀官ニ命ジテ、儼シテ以テ疫鬼ヲ驅ル」と、按ずるに周禮に大雩あり、漢儀に振子の事あり、これを以て見れば、もと黄帝に始まると雖も、大抵周より起れり、周官に歳の終に、方相氏に命じて百隸を率ゐて室中をさぐり、疫を驅りてこれを逐ふことあり、則ち一の始めなりと、以上事物紀原に見ゆ、

照朝樂事にも「十二月廿四日之ヲ交年トイフ、巧者塗抹シテ鬼形ヲ裝成シ、叫跳一シテ利物ヲ索ニス」と、わが國にても、十二月晦日の夜に、人を疫癘の鬼に扮たせてこれを驅りやらふ式、禁中の公事にもあり、近世俗間にては、節分の夜に、大豆を炒りて鬼打豆と呼び、福は内、鬼は外と叫びて撒くなり、

【衢道ヲ行ク者ハ至ラズ】衢道は、四達之路なり、一解に、兩道をいふと、多くの道を行く者は、達する能はず、以て業は專一ならざれば成らざるに喩ふ、荀子の勸學篇に「行衢道者不至、事兩君者不容」

【笠篋】「タグ」また「タゴ」ともいふ、風俗通に「一

ニ坎侯トイフ吳越解題にいふ漢ノ武帝、太乙后土ヲ
祠ル、樂人侯調ヲシテ琴ニ依リテ坎侯ヲ作ラシム、言
フココロハ、ソノ坎坎トシテ節ニ應ズトナリ侯ハ姓
ヲ以テ冠章スルナリ、後チ訛リテ「トナス」樂府錄
に「トハ乃チ鄭衛ノ音ナリソノ亡國ノ聲ナルヲ以
テ、故ニ空國ノ侯ト號ス、ソノ制二十有四絃」と釋名に
いふ「トハ鍾延ガ作ルトコロ、桑間濮上ノ地ヨリ出
ツ」

【口ヲ出デ耳ニ入ル】(出口入耳)語る者の口より出
てて、聴く者の耳に入るの外に、誰も知る者なきをい
ふ、左傳に「王曰、言出於余口、入於爾耳、誰告建也」王
は楚の平王、建は太子建、また戰國策に「張孟談曰、謀
出二君之口、入臣之耳、人莫之知也」二君は韓魏の
君、

【口ヲ嚙ム】(嚙口)口を「ツグミ」て黙するなり、史記最
錯傳に「恐天下之士、一不敢復言也」また日者傳に
「悵然、一不能言」
【口ヲ箝ム】(箝口)口をふさぎていはゆる義(箝口)を
見よ、
【口ヲ杜グ】(杜口)杜は塞ぐ義、史記范雎傳に「一裹

足莫肯嚙秦耳」
【口ヲ守ル】(守口)晁迥の晁氏客語に「劉器之イフ、富
鄭公年八十、座屏ニ書シテイフ、守口如瓶、防意如城、
書言故事に「言ヲ謹ムヲトイフ、朱晦庵ノ敬齋箴
ニ守口如瓶」とあり、口言は出し易く、瓶水は傾き易
し、故に吾の口を守る瓶を守る如くす、瓶水の傾く再
び收む可からず、口言の出づる再び追ふ可からず、故
に喩ふ、明の劉基の守口如瓶箴に曰く、
吳君以時書守口如瓶以自警、微予言爲作箴曰、
維人有口、瓶亦有口、瓶口弗守、喪厥受、人口弗守、
速厥咎、口乎口乎、其禍福之門而一身之樞紐乎、人有
瓶也、尙克固之、胡然有口、而不知度之、維言如泉、
維口如隄、有出弗稽爲河爲谿、激石揚泥、追不可
回、故曰、好言自口、莠言自口、又曰、君子無易由言、耳
屬于垣、守口如瓶、永矢勿諼、

【朽チタル木ハ雕ルベカラズ】人の志氣昏惰なる者
は、教を施すも益なきに喩ふ(糞土ノ牆)を見よ、
【口尙ホ乳臭】ちちくさ年少をいふ(乳臭)を見よ、
【口ニ籍ク】(籍口)籍は薦なり、物を口に敷く義にて、口
實にするをいふ、「イヒワケ」左傳に「苟有以、一而復
寡君、君之惠也」

【口ニ擇言ナシ】孝經に「口亡擇言、身亡擇行」擇言な
しとは、言ふ所る皆善にして擇ひ棄つべき言なきを
いふ、後漢書の馬援が兄の子を戒むる書にも「敦厚周
慎、口無擇言」とあり、

【口ニ蜜アリテ腹ニ劍アリ】外は和らかにして、内は
陰險なる小人を稱していふ、唐書に「李林甫相タリ、凡
ソ才望功業己ノ右ニ出ヅルモノ、及ビ上ノ爲メニ厚
遇セラレテ、勢位己ニ逼ラントスルモノハ、百計之ヲ
去ル、或ハ陽ニ之ト善クシ、甘言ヲ以テ陰カニ之ヲ陷
ル、世謂フ、林甫ハ、口ニ蜜アリテ、腹ニ劍アリト」

【口ハ是レ人ヲ傷ルノ斧】寶鑑言語篇第十八に「離騷經
ニイフ、甜言如蜜、惡語如刀、人ノ以多言爲善、犬不
以善吠爲良、刀瘡易好、惡語難消、利人之言、暖如絲、
絮、傷人之語、利如荆棘、一言半句、重值千金、一語傷
人、痛如刀割、口是傷人斧、言是割舌刀、閉口深藏舌、
安身處處牢」

【唇亡ビテ齒寒シ】(唇齒ノ國)を見よ、
【靴ヲ隔テテ痒ヲ搔ク】(隔靴搔痒)痒は「カユキ」なり、
事を行ひて、十分に本意を達し得ざるに喩ふ、無門關
の序に「掉棒打月、隔靴爬痒、有甚交涉」
【偏強】「ガウシヤウ」をいふ、梗戻の貌、宋史趙鼎傳に

「鼎不附和議、楫曰、此老一猶昔、楫は秦檜なり、強一
に彊に作る、史記陸賈傳に「欲以新造未集之越、偏彊
於此」とあるは、柔服せざるをいふ、偏一に屈に作る、
【屈原】名は平、字は原、靈均と號す、伯庸の子、楚の同姓
なり、懷王之左徒たり、博聞彊志にして治亂に明かに、
辭令に爛ふ、後ち讒に遭ひ、江南に遷さる、乃ち懷沙の
賦を作り、自ら汨羅に投じて死す(人ノ心ノ濁レル)
を見よ、

【屈原ヲ祭ル】續齊諧記に「屈原五月五日ヲ以テ汨羅
ニ投ジテ死ス、楚人之ヲ哀ミ、コノ日ニ至ル毎ニ、竹筒
ヲ以テ米ヲ貯ヘ、水ニ投ジテ之ヲ祭ル」
【屈産ノ乘】左傳の注に「屈、地生、良馬」とあり、史記世
家の注に「屈産、出名馬之地、乘、備馴也、屈者屈支國也、
又曰、丘茲、或曰、龜茲、龍馬出國也」とあり、長安の西七
千五百里を隔つる地なりといふ、

【偏信】屈伸に同じ、史記管晏傳に「君子偏於不知己、
而信於知己者」
【拙指】拙は屈に同じ、一は指をりかがむるなり、荀
子にも「拙五指而頓之」とあり、漢書陳湯傳に「一計
其日」

【屈到】周の楚の人、芟を嗜む、疾あるとき、宗室を召し

て之に屬して曰く、我を祭るに必ず芘を以てせよと、
祥に及びて祭るに芘を用ふ、子建命じて之を去らし
めて曰く、夫子をして私欲を以て國の典を干すこと
なからしむるなりと。

【屈撓】撓も屈なり、たわみかむ、易の疏に、「不_レ一_レ而
移改_ニ」

【履ハ新シト雖モ冠トナサズ】(履雖新不爲冠)貴賤
上下の分を亂るべからざるに喩ふ、韓非子に「冠雖穿
弊、必戴於頭、履雖五采、必踐_ニ于地_ニとあり、また史
記の儒林傳に「黃生曰、冠雖敝、必加_ニ於首_ニ履雖新、必
關_ニ於足_ニ何者上下之分也、今桀紂雖失道、然君上也、湯
武雖聖、臣下也、夫主有_ニ失行_ニ臣下不能_ニ正言匡過_ニ以
尊天子、反因_ニ過_ニ而誅_ニ之_ニ代立踐_ニ南面_ニ非_ニ弑_ニ而何也」

【屈平】(屈原)を見よ。

【屈盧ノ矛】矛の尤も鋭利なるものを稱す、繁弱の弓
と屈盧の矛とは、共にみな古の異寶とす、繁弱も屈盧
も、共に地名にして、一は良弓を出し、一は利矛を出せ

【句讀】韻會舉要に「凡_ニ經書成文、語絕處、謂_ニ之_ニ句_ニ語未
絶而點_ニ分之_ニ、以便_ニ誦詠_ニ、謂_ニ之_ニ讀_ニ、今秘書省校書式、凡_ニ句
絶則點_ニ於字之旁_ニ、讀分則點_ニ於字之中_ニ、間_ニとあり、韓愈

の師説に「彼童子之師、授_ニ之_ニ書_ニ而習_ニ其_ニ句_ニ讀_ニ者也」
【瞿曇】佛をいふ、玉篇に「西國呼_ニ世尊_ニ曰_ニ一_レ東坡の
詩に坐令魯叟作_ニ一_レ魯叟は孔子をいふ、

【國ヲ享ク】位に在るをいふ、書經に「中宗之享國、七
十有五年」

【國ヲ賣ル】(賣國)私利の爲めに、國を他に與ふるをい
ふ、史記晉世家に「鄭人或賣_ニ其_ニ國_ニ於秦_ニ、また蘇秦傳に
「左右_ニ一_レ、反覆_ニ之_ニ臣_ニ也」

【國ヲ體シ野ヲ經ス】(體國經野)周禮天官の字面、註
に體猶分也、經謂爲_ニ之_ニ里數_ニとありて、疏に「國謂城
中、分_ニ國城之中_ニ、爲_ニ九經九緯_ニ、左祖右社之屬、此野謂二
百里以外_ニ云云」

【國ニ當ル】國事に任ずる義、史記宋世家に「周公旦代
行政當國」

【國ノ爪牙】驍勇なる武臣をいふ、獸の爪牙に比す、詩
經に「予王之爪牙、漢書の李廣傳に「李廣霸陵ノ尉ヲ斬
リテ、上書シテ自陳ス、上報ジテ曰ク、將軍ハ國ノ爪牙
ナリト」

【國亂ルレバ良相ヲ思フ】(家貧シケレバ)を見よ、
【國破レテ山河在リ】杜甫の春望の詩に「國破、山河在、
城春草木深、感時花濺淚、恨別鳥驚心、烽火連三月、

家書抵_ニ萬金_ニ、白頭搔更短、渾欲_ニ不_ニ勝_ニ簪_ニとあり、さて第
一句、國は社稷を重しとなす、今ただ山河のみ在り、社
稷幾んど亡ぶるを見るべし、二句、城は以て人民を住
ましむべし、今ただ草木深ければ、人民殆んど盡くる
を見るべし、三句は時勢を感ずる切なるが爲めに、花
は美なりといへども反つて之を見て涙をそぐ、四
句は離別を恨むこと深きが故に、鳥聲愛すべしと雖
も、之を聽きて反つてわが心を驚かす、五句は感時の
句に應じて戰亂の久しきに涉るを歎じ、六句は恨別
の句に應じて家書の得がたきを悲み、七八二句は髮
もと白きが上に、今は更に短くなりぬ、これ亦時を感
じ、別を恨むる情の致すところ、老に臨み亂を歴るは、
尤も愁傷すべきなり、許穆堂曰く「此詩因_ニ春望_ニ而念_ニ
家書之難_ニ得_ニ、皆由_ニ烽火未息_ニ之故_ニ、後四句、正申明三四
兩句之意」

【苦熱】夏の熱さに苦む義、詩經に「蘊隆蟲蟲」とあり、注
に「蘊ハ蓄ナリ、隆ハ盛ナリ、蟲蟲ハ熱氣ナリ」と、また
「赫赫炎炎、云我無_ニ所_ニ」の注に「赫赫ハ、早氣ナリ、炎炎ハ
熱氣ナリ、無_ニ所_ニハ容ル_ニトコロナキナリ」と、杜甫の詩
に「大水淼茫炎海接、奇峯突兀火雲升、梁の元帝の詩に
「季夏煩暑流_ニ金燦_ニ石_ニと、韓文に「自從五月_ニ困_ニ暑濕_ニ如_ニ

坐深飯_ニ遺_ニ蒸炒_ニとまた(萬國紅爐)を參看せよ、
【九年ノ蓄】禮記王制篇に「國無_ニ九年之蓄_ニ曰_ニ不足_ニ、無_ニ
六年之蓄_ニ曰_ニ急_ニ、無_ニ三年之蓄_ニ曰_ニ國非其國_ニ也、三年耕必
有一年之食、九年耕必有三年之食」

【桑】孟子に「五畝之宅、樹_ニ之以_ニ桑_ニ、五十者可_ニ以_ニ衣_ニ帛_ニ矣」
范石湖の詩に「童孫未_ニ解_ニ耕_ニ織_ニ也、傍_ニ桑陰_ニ學_ニ種_ニ瓜_ニ」
【履ハ賤シク踊ハ貴シ】踊は、別者の履なり、履の價賤
くして、踊の價貴きは、罪を犯す者多きに由る、左傳昭
三年に「國之諸市、一_レ一_レ」別は罪ありて、アシキラ
ルをいふ、

【桑ノ弓蓬ノ矢】太平記卷十三に見ゆ(桑蓬ノ志)を見
よ、

【愚ハ益_ニ愚ナリ】(聖ハ益_ニ聖)を見よ

【虞翻】字は仲翔、三國の時、餘姚の人、少くして學を好
み志氣あり、曹操辟せども就かず、吳の孫權用ひて騎
都尉となす、嘗て著す所の易説を以て孔融に示す、
融曰く、延陵の禮樂を聞き、吾子の易を治むるを觀て
乃ち東南の美は、特に竹箭のみにあらざるを知ると、
【鳩槃荼】瓔形また冬瓜と譯す、この神の陰冬瓜の如
く、行く時は肩の上に置き、坐すれば便ち之に踞す、即ち
厭魅鬼なり、增長天の屬隸にして八部鬼衆の一なり、

或は吉繁陀とも書く、圓覺經に「一食、人精血、其疾如風變化稍多」大藏法數に「梵語——此言、麤形、以其陰似麤故云云」

【懼肥】韓非子に「子夏曾子ヲ見ル、曾子曰ク何ソ肥エタルヤト、對ヘテ曰ク、戰勝ツ故ニ肥エタルナリト、曾子曰ク、何ノ謂ゾヤト、子夏曰ク、吾レ入りテ先王ノ義ヲ見レバ、則チ之ヲ榮トス、出デテ富貴ノ樂ヲ見レバ、マタ之ヲ榮トス、兩者胸中ニ戰ヒ、未ダ勝負ヲ知ラズ故ニ懼ス、今先王ノ義勝ツ、故ニ肥エタリト」

【踵ヲ旋ラサズ】(不旋踵)踵をめぐらす暇もなき義、時日を遷らざるをいふ、史記吳起傳に「其父——遂死於敵、また足を回らして、却かざるの義にも用ふ、漢書龜錯傳に「前死、不還踵」と、還は音セン旋に通ず、

【首ニ畏レ尾ニ畏ル】(首ニ畏レ)を見よ、【區別】區は猶ほ類の如し、類に由りて別つをいふ、論語に「譬諸草木區以別矣」

【九品】觀无量壽經に説くところの極樂往生相の等階なり、即ち上品上生中生下生中品上生中生下生下品上生中生下生をいふ、

【熊】格物論に「熊ハ大サ豕ニ似テ性輕健、山ニ居リ、能ク攀緣シテ高樹ニ上ル、人ヲ見レバ顛倒シテ地ニ投ジテ下ル、行クコト數千里悉ク踞伏ノ所アリ、冬ハ多ク穴ニ入りテ藏蟄ス、始春ニシテ出ツ、掌ハ珍珠タリ、熊ハ熊ニ似テ黃白紋アリ、長頭高脚亦猛ニシテ力アリ、孟子の告子篇上に「魚我所欲也、熊掌亦我所欲也、二者不可得兼、舍魚而取熊掌者也」

【熊ニ當ル】漢書に「孝元帝虎圈ニ幸シテ獸ヲ觀ル、後宮皆坐ス、熊遽ニ逸シテ圈ヲ出デ檻ヲ攀ヅ、左右貴人皆驚キ走ル、馮昭儀直チニ熊ノ前ニ當リテ立ツ、左右格シテ熊ヲ殺ス、上問フ人情驚恨スルニ、何ガ故ニ前シテ熊ニ當レルト、對ヘテ曰ク、猛獸ハ人ヲ得テ止マルト、妾恐ル熊ノ御前ニ至ランコトヲ、故ニ身ヲ以テ之ニ當リシナリト、帝嗟嘆シ、因ツテ敬重ヲ爲ス」

【與シ易シ】(易與)猶ほ當り易しといふが如し、史記淮陰侯傳に「吾平生知韓信爲人、——耳」また漢書李廣傳に「胡虜——耳」

【薰蕕器ヲ同ウセズ】薰は香艸、蕕は臭艸なり、善人惡人と一處に居るべからざるに譬ふ、世説の方正に「培塿無松柏、薰蕕不同器」とあり、左傳に「一薰一蕕、十年尚猶有臭」とあり、薰蕕等分に相和すれば、香氣は盡きて臭氣は、長く存ずると同じく、善は消え易くして、惡

見よ、【群犬恠ム所ロニ吠ユ】(群犬吠)所恠俗人群がり聚りて、賢者の言行の常人に異なるをあやしみ諷るに喩ふ、楚辭に「邑犬群吠兮、吠所怪也」

【訓詁】註解なり、訓とは言の理を釋するなり、詁とは古今の言に通じて、その故を明かにするなり、三都賦序に「聊舉其一隅、攝其體統、歸諸詁訓焉」

【裙釵之流】裙は帯の俗字、下裳なり、紅裙綠帯などと熟し、主として婦人の裳に用ふ、釵は婦人の兩股簪(フタマタノカムザシ)なり、——とは、婦女子の仲間といはむが如し、

【君子】才德衆に出づるの稱、論語に「聖人吾不得而見之矣、得見君子者、斯可矣」子は人の嘉稱、すべて徳の全き人を君子といふ、また在位者若しくは學者を斥して「——といふともあり、論語に「君子學則愛人、君子愛道不愛貧、君子欲訥於言而敏於行、君子固窮、小人窮、斯濫矣」禮記に「君子辭、貴不辭、賤辭、富不辭、貧、孔子の語、君子慎、始、差若毫釐、謬以千里、君子之愛人、也以徳、細人之愛人、也以姑息、左傳に「君子之言、信而有徴、故怨遠於其身、叔向の語、君子務知、大者遠者、小人務知、小者近者、君子動則思、禮行則思、義

【群蟻ノ腥羶ニ附クガ如シ】(如群蟻之附腥羶)衆人の利にあつまりつゝを鄙みていふ、増續韻府に「今人尺寸ノ祿ニ奔リ、絲毫ノ利ニ走ルコト、群蟻ノ腥羶なまぐさのものニ附キ、聚蛾ノ燭火ニ投ズルガ如シ、取ツテ醜トナサズ、貪リテ死ヲ避ケズ」

【群輕軸ヲ折ル】(群輕折軸)至輕の物も、積載してやまざるときは、車軸を毀折するに至るをいふ、(積羽)を

は除き難きをいふなり、

【羣ヲ抜ク】(拔羣)を見よ、

【群ヲ離レテ索居ス】索は散なり、朋友の群を離れて散居するをいふ、禮記檀弓に「子夏曰、吾離群而索居亦已久矣」白居易の詩に「與君多索居」

【君蒿悽愴】君は香氣なり、君蒿は氣の蒸し出る貌、悽愴は精神の悚然たるをいふ、鬼神を形容する辭なり、禮記の祭義に「其氣發揚于上、爲昭明——」此百物之精也、神之著也」と、昭明とは鬼神の光をいふ、蘇軾の潮州韓文公廟碑に「——若或見之、君蒿は香氣の蒸しのぼりて人に感觸するもの、悽愴は鬼神彷彿として前に至るが如く、精神の悚然たるなり、

【軍機】軍事上の機務なり、南史顏竣傳に「竣出入臥内、斷決——」

【群蟻ノ腥羶ニ附クガ如シ】(如群蟻之附腥羶)衆人の利にあつまりつゝを鄙みていふ、増續韻府に「今人尺寸ノ祿ニ奔リ、絲毫ノ利ニ走ルコト、群蟻ノ腥羶なまぐさのものニ附キ、聚蛾ノ燭火ニ投ズルガ如シ、取ツテ醜トナサズ、貪リテ死ヲ避ケズ」

【群輕軸ヲ折ル】(群輕折軸)至輕の物も、積載してやまざるときは、車軸を毀折するに至るをいふ、(積羽)を

不爲利回不爲義疚（穀梁傳に「君子不推人危不攻人厄」宋の襄公の言）公羊傳に「君子見人之厄則矜之小人見人之厄則幸之宣公十五年に見ゆ厄は厄の俗字艱なり困なり通して厄に作る易に「君子在位者を斥す」居其室出其言善則千里之外應之出其言不善則千里之外違之中庸に「君子居易以俟命小人行險以徼幸」易は平地なり居易は位に素して行ふなり俟命は外を願はざるなり徼は求なり鶡冠子に「君子者易親而難狎說苑に「君子居必擇處游必擇士」君子敬以成其名小人敬以除其刑」君子愛口言を慎む」孔雀愛羽虎豹愛爪此皆所以治身法也荀子に「君子貧而志廣富貴而體恭」君子窮處而榮獨居而樂墨子に「君子福大而愈懼爵隆而益恭」韓詩外傳に「君子博學深謀不遇時者衆矣」君子易和而難狎也易懼而不可劫也中論に「君子者無尺土之封而萬民尊之」史記に「君子緇於不知己而信於知己者」晏嬰の傳越石父の語「家語に「君子之行己也」可以屈則屈可以伸則伸淮南子に「君子之居民上」若以朽索御奔馬」君子之於善也猶采薪者見一芥撥之」君子非義無以生失義則失其所以生小人非嗜慾無以活失嗜慾即失其所以活故君子懼失義

小人懼失利戰國策に「君子殺身以成仁義之所在身雖死無憾悔」
 【君子】竹の異名詩の衛風に「瞻彼淇奧綠竹猗猗有斐君子」とあるに本づく
 【麋至】群がり來る義左傳昭五年に「求諸侯而一」註に「麋ハ群ナリ」とまた麋の音キンと讀むと麋は麋の如くむらがり至る義麋は鹿の一種ノロ麋に同じ麋と通ず
 【君子郷】後漢書に「王烈義行ヲ以テ郷里ニ稱セラル」田ヲ争フ者アリ將ニ之ヲ烈ニ質サントス或ハ半途ニシテ反リ或ハ廬ヲ望ミテ反ルアリ居ルトコロヲ名ヅケテ一トナス
 【君子花】蓮の異名周茂叔の愛蓮說に「蓮は花の君子なる者なりと（愛蓮ノ）を見よ」
 【君子國】（君子ノ國）を見よ
 【軍實】兵甲器械の類をいふ左傳襄二十四年に「齊侯祭社蒐一」
 【群風禪中ニ處ル】（風）を見よ
 【君子ニ九思アリ】論語季氏篇に「君子有九思視思明聽思聰色思溫貌思恭言思忠事思敬疑思問忿思難見得思義君子にはこの九箇の思慮すべきこと

あり視聽色貌言事より以下の事すべて疎忽にすべからず一一心を義理の上に置きて事物に接すべしとの義

【君子ニ三畏アリ】（三畏）を見よ

【君子ニ三樂アリ】孟子に「君子有三樂而王天下不與存焉父母俱存兄弟無故一樂也仰不愧於天俯不作於人二樂也得天下英才而教育之三樂也」

【君子ノ過ハ日月ノ蝕ノ如シ】孟子の公孫丑の下篇に「古ノ君子ハ過ツトキハ則之ヲ改ム今ノ君子ハ過テバ即チ之ニ順フ古ノ君子ハ其ノ過ヤ日月ノ食ノ如シ民皆之ヲ見ル其ノ更ムルニ及ンデヤ民皆之ヲ仰グ今ノ君子ハ豈ニ徒ニ之ニ順フノミナランヤ又從ツテ而シテ之ガ辭ヲツクル」の註に「順ハ猶ホ遂ノゴトキナリ更ハ改ナリ辭ハ辯ナリ之ヲ更ムルトキハ即チ明ニ損スル無シ故ニ民之ヲ仰グ順ヒテ之ガ辭ヲツクルトキハ即チ其過愈深シ」とこの語は論語に「子貢曰ク君子之過也如日月之食焉過也人皆見之改也人皆仰之」とあるに本づく
 【君子ノ國】風俗淳良の國をいふ淮南子に「東方有——唐人我が邦を——と稱せしは蓋しここに本づく

【君子ノ徳ハ風】小人の君子に靡き従ふこと草の風に於けるが如きをいふ論語顔淵篇に「君子之徳風小人之徳草草上之風必偃」また書經に「爾惟風下民惟草」

【君子ノ交ハ淡キコト水ノ若シ】禮記の表記の語なりまた莊子の山木篇に「君子之交淡若水小人之交甘若醴（あまざけ）君子淡以親小人甘以絶彼無故以合者則無故以離」

【君子ハ屋漏ニモ恥ヂズ】詩の大雅抑の篇に「相在爾室尙不愧于屋漏」とあり屋漏は毛傳に「西北隅謂之屋漏」とあり鄭箋には「屋小帳也漏隱也禮祭於奧既畢改設饌於西北隅而靡隱之處此祭之末也」とあり奧は室の西南隅なりされば衆人の前にて行を慎むは誰もすることなるが君子は所謂慎獨にて縱令屋漏の如き人の見ぬ暗き處にても行を二つにせざる義なり
 【君子ハ思フコト其ノ位ヲ出デズ】（君子思不出其位）論語に出づ曾子の語君子の思念する所は其の身の處る所の地位より外に出でざるをいふ位とは職位のみをいふには非ず上は君臣父子より下は一物に至るまで其の時と其の地とに當りて思ふ

所る其の所に止りて、外に越えざるなり、此は易の艮の卦の象の辭なり、朱子謂ふ、曾子嘗て之を稱するものならんと、蓋し曾子の學専ら中に主とす、故に其の言此の如し、

【君子ハ器ナラズ】(君子不器)器は各、其の用に適して相通ずる能はず、而るに成徳の君子は、これと異りて體備はらざることをなし、特り一材一藝を爲すのみに非るをいふ、論語爲政篇に見ゆ、

【君子ハ刑人ニ近ヅカズ】公羊傳襄公二十九年に、君子不近刑人、則輕死之道也、と禮記の曲禮に、刑人不在君側、の注に、怨恨ノ爲メニ害ヲ爲ス也、と、王制にも、古者公家不畜刑人、

【君子ハ經ニ反ルノミ】孟子の盡心に、君子反經而已矣、經正則庶民興、庶民興則無邪惡矣、と、朱註に、反ハ復ナリ、經ハ常ナリ、萬世不易ノ常道ナリ云云、

【君子ハ心ヲ勞シ、小人ハ力ヲ勞ス】君子は人を治むる人をいひ、小人は人に治めらるる人をいふ、人を治むる者は、心を勞し、人に治めらるる者は、力を勞して上に奉ずるをいふ、國語に、君子勞心、小人勞力、先王之訓也、また李氏逸書に、北魏ノ侍中崔光、嘗テソノ子ヲ名ツケテ勅トイヒ、勉トイヒ、勵トイフ、文帝ソ

ノ子ヲ名ツケテ愉悅憚トイフ、帝光ニ謂ツテ曰ク、我が兒ノ名ハ、傍ニ皆心アリ、卿ノ兒ハ、傍ニ皆力アリト、答ヘテ曰ク、所謂君子ハ心ヲ勞シ、小人ハ力ヲ勞スルナリト、帝大ニ嗟賞スト、

【君子ハ三端ヲ避ク】君子は人と争はざるをいふ、韓詩外傳に、鳥ノ美羽勾喙ナル者ハ、鳥之ヲ畏レ、魚ノ侈口垂腴ナル者ハ、魚之ヲ畏レ、人ノ利口臆辭ナル者ハ、人之ヲ畏ル、是ヲ以テ君子ハ三端ヲ避ク、文士ノ筆端ヲ避ク、武士ノ鋒端ヲ避ク、辯士ノ舌端ヲ避ク、

【君子ハ盛徳アルモ、容貌愚ナルガ若シ】(良賈ハ)を見よ、

【君子ハ人ノ美ヲ成ス】論語顔淵篇に、子曰、君子成人之美、不成人之惡、小人反之、とあり、成とは誘ひ勸めてその事を成就せしむる義、君子は、その心の存する所は常に厚し、その情の好む所は皆善なり、故に平生人の善事に於ては、わが身に在る如く必ず勸誘して、その事を成就せしめんとするなり、又人の惡事に於ては之を正し救ひてその事を仕上げさせざるやうするなり、

【君子ハ交絶ツモ惡聲ヲ出サズ】史記の樂毅傳に、臣聞古君子交絶不出惡聲、忠臣ハ國ヲ去レドモ、其ノ名

ヲ潔クセズ、註に、君子交絶ツトキハ、己ノ長ヲ説キテ、彼ノ短ヲ談ゼズ、是れ惡聲を出さざるなり、忠臣本國ヲ去リ離ルルトモ、自ラ其ノ名ヲ潔クシテ己罪ナシト云ハズとあり、

【君子ハ豹變】(豹變)を見よ、

【熏灼】熏も灼も燒なり、勢の極めて盛んなるをいふ、漢書の班氏敘傳に、谷永嘗テ言フ、建始、河平ノ際、許班ノ貴キ、前朝ヲ傾動シ、四方ヲ一ス、賞賜無量、内藏ヲ空虛ニス、女寵ノ至極、尙フベカラズとあり、一は、富貴の氣焰なり、

【葦酒】字彙に、葦ハ辛臭ノ菜、葱、蒜ノ屬とあり、モノイミには、葦酒を用ひず、寺門外の碑に勅して、不許葦酒入山門とあり、莊子の人間世篇に、顔回曰、回之家貧、唯不飲酒、不茹葷者數月矣、

【軍須】軍に用ふるもの、唐書の珣瑜傳に、一二期會爲急、また宋史の食貨志に、宋ハ前代ノ制ヲ承ケ絹紬布絲綿ヲ調シテ以テ一ニ供ス、資糧器械等をいふ、

【君夷】書經の篇名、書の序によるに召公と周公と、共に成王を相けて左右の人と爲る、召公は周公を悦ばざることもあり、よりにて周公は一と名づくる一篇を作りたり、史記燕の世家に、召公は周公が國に當り祚

を踐むならんと疑ひたり云云、召公の名は夷なり、一とは尊びて言ひしものなり、

【擿】擿は拾ふなり、撫も亦拾ひ取るなり、一は、收拾の義、史記十二諸侯年表に、往往一春秋之文、以著書、また漢書刑法志に、相國蕭何、一秦法、取其宜於時者、作律九章、

【齟齬】齟は齧に同じ、齒なき貌、荀子に、夫人行年七十有二、一而齒墮、

【齟然】齒のぬけてうつろになりたる貌、説文に、無齒也、韓詩外傳に、太公年七十二、一而齒墜矣、然而用之者文王、

【羣俗風ニ歸ス云云】太平記卷十二に見ゆ、帝範の下、務農篇に、惠可懷也、則殊俗歸風、若披霜而照春日、威可懼也、則中華習軌、若履刃而戴雷霆、威惠の並び行はるる義、

【群孫】多くの孫、類書纂要に、唐郭子儀一問安、不盡辨、惟領之而已、衆孫といふに同じ、明律に見ゆ、

【薰陶】火の物を薰化し、陶の器を造るが如く、人材を育成するをいふ、宋史に、今人善タ其ノ子弟ヲ教フル者ハ、必ズ名徳ノ士ヲ延キテ、之ト處ラシメ、以テ薰陶シテ性ヲ成ス、

【沼灘】 申の歳(一)を見よ。

【軍茶利】 夜叉明王即ち五大尊明王の一にして南方に配す、茶利は久持の義、畧して軍持といふ、即ち寶瓶の義とす、一頭八臂忿怒の相を示す、本地は虚空藏(或ハイフ観音なり、一切阿修羅諸惡鬼神を摧伏すといふ、

【軍持】 翻譯名義集に「梵云一、唐言淨瓶也」水瓶なり、陸游の詩に「遊山雙不借、取水一」不借は草鞋なり、また一は軍茶利の略。

【軍中一范アリ賊膽ヲ破ル】 名臣傳に「范仲淹、韓琦ト謀ヲ協セ、必ズ靈夏、橫山ノ地ヲ收復セント欲ス、邊士ノ謠ニ曰ク、軍中一韓アリ、西賊之ヲ聞キテ心骨寒シ、軍中一范アリ、西賊之ヲ聞キテ驚キテ膽ヲ破ルト、元昊大ニ懼レテ遂ニ臣ト稱セリ」

【破】 破は拆裂なり「ヒビ」アカギレ、破は寒創なり「シモヤケ」ユキヤケ、漢書趙充國傳に「將軍士寒、手足一寧有利哉」

【薰ハ香ヲ以テ自ラ焼ク】 光を頼み晦に處する能はずして身を喪ふに喩ふ、漢書龔勝傳に「嗚呼薰以香自燒、膏以明自銷、龔生竟天、年非吾徒也」

【群分類聚】 異なるを分ち、似たるをあつむるなり、易の繫辭に「方以類聚物以群分」

【君平】 ト者を稱す、漢の嚴君平、成都に隱る、卜筮を以て業となす、日に纒に數人を閱し、百錢を得て自ら養ふに足れば、肆を閉ぢ籬を下して老子を講ず、

【群辟】 辟は君なり、一は諸侯をいふ、書經に「六服一、罔不承德」

【軍鋒】 前軍をいふ、史記黠布傳に「布常爲一」君命ヲ辱カシメズ、主君の命をうけて使者となり、その職を全うするをいふ、論語に「使于四方、不辱君命」

【訓蒙】 童蒙を訓ふる義、書經に「具訓于蒙士」

【薰沐】 香を衣に薰し、髪をあらひて身をさよむるをいふ、國語に「三薰而三沐之」また鄭俠の詩に「譬如方汚垢對之獨一」

【群羊ヲ驅リテ猛虎ヲ攻ム】 弱國をあつめて、強國を攻むるに喩ふ、史記の張儀傳に「夫レ從ヲ爲ス者ハ、無以異於驅群羊而攻猛虎、虎ト羊トハ格セズシテ明ケシ、今王猛虎ニ與セズシテ、而シテ群羊ニ與ス、臣竊ニ以爲ラク大王ノ計過テリト」

【群黎】 群は衆、黎は黎民なり、天下の衆民をいふ、詩經に「一百姓、徧爲爾德」

ノ回轉スル形ナリ」と、春秋元命苞に「陰陽聚爲雲、公羊傳に「石ニ觸レテ起リ、膚寸ニシテ合シ、崇朝ナラズシテ雨フル者ハ、唯泰山ノ雲カ、西京雜記ニ「瑞雲ヲ慶雲トイヒ、景雲トイフ、慶雲ハ或ハ卿雲トイフ、雨雲ヲ油雲トイヒ、雪雲ヲ同雲トイフ」云云、陶淵明の歸去來辭に「雲無心以出、岫易の乾卦に「雲從龍、風從虎」

【蜘蛛】 格物論に「一ハ大腹ニシテ身灰色ナリ、多クハ空中ニ於テ圓網ヲ作ル、長跨ノ者ヲ蠶蛸ト名ヅク、小ニシテ長脚ナル者ヲ喜子ト名ヅク、赤斑ノ者アリ、五色ノ者アリ、本草陶隱居の注に「赤斑ノ者アリ、絡新婦ト名ヅク」と、雜記に「陸賈曰ク、乾鵲噪而行人至、一集而百事吉、廣群芳譜に「蜘蛛、二手六脚、尻圓而出、絲其絲能粘著人物、夏秋布網於空處、經緯區區、實如用規矩者、每居正中、或竄檐間、有諸蟲墨之者、則走出捕之、若可敵于己者、則遠以絲繞其周圍、使蟲不能動搖、竟推丸之捕入、檐間悉食之、如塵芥墨之、則以手悉振拔、天將風、則預知之、吞絲收網」

【雲ヲ披キテ青天ヲ觀ル】 雲霧ヲ披キテ見よ

【雲ノ狀、犬ノ若シ】 世道亂れて義理明らかならざる時は、種種の怪しき雲を生ずるをいふ、呂氏春秋の明

理篇に「君臣相賊、長少相殺、父子相忍、弟兄相誣、知交相倒、夫妻相冒、日以相危、失人之紀、心若禽獸、長邪苟利、不和、義理其雲狀有若犬、若馬、若白鶴、若乘車、中畧有其狀若懸釜、而赤其名曰雲旂、云云、また晉書の天文志に「韓ノ雲ハ布ノ如ク、秦ニ至テ雲美人ノ如シ」とあるは、地氣異り、故に雲の象を成すことも亦同じからざるをいふ、

【雲ハ秦嶺ニ横ハリテ家何クニカ在ル雪ハ藍關ヲ擁シテ馬前マズ】 これは唐の韓愈が佛骨を宮中に迎ふるを諫めて潮州に左遷せられし時の律詩の後聯なり、左遷至藍關、示姪孫湘といふ題にて「一封朝奏九重天、夕貶潮州路八千、欲爲聖明除弊事、肯將衰朽惜殘年、雲橫秦嶺家何在、雪擁藍關馬不前、知汝遠來應有意、好收我骨瘴江邊、大意一二の句、言ふ心は、一朝佛骨を論じたる表を、九重の天闕、即ち朝廷に上つりたるに其の夕方には八千里の遠方なる潮州に貶謫せられたり、三四の句、言ふ心は、聖明なる朝廷の爲めに佛骨を宮中に入るなどの弊事を除き去らんと思ひて爲したることなれば、此の衰へ朽ちたる身を以て僅かなる殘年を惜むことをなさんや、決して惜むところにあらず、即ち命はもとより君にさした

【魁偉】魁は大なり、偉は奇なり、身長大卓異にして倫に出づるなり、後漢書に「郭泰性明、知人好獎、訓士類、容貌一魁梧奇偉の約言なり」

【和熊】母の能く子を教うるをいふ、唐の柳仲郢の母、韓氏善く子を訓ふ、仲郢學を嗜む、常に命じて苦參黃連、熊膽を粉にし、和して丸となし、夜嚙んで勤學を助けしむ、仲郢は公綽の子、

【臥遊】臥しながら畫圖を觀て名山に遊びしが如き樂をなすをいふ、南史に「宗少文、山水ヲ好ミ、遠遊ヲ愛ス、西ハ荆巫ニ陟リ、南、衡岳ニ登リ、因ツテ字ヲ衡山ニ結ブ、疾ノタメニ江陵ニ還リ、歎ジテ曰ク、老病俱ニ至リ、名山遍ク觀難キヲ恐ル、唯當ニ懷ヲ澄シ道ヲ觀、臥シテ以テ之ニ遊バント、凡ソ遊歴セシ所、ハ皆之ヲ壁ニ圖シ、坐臥之ニ向フ、少文名は炳、南陽の人、圖書琴畫に善く、玄理に精し、山水に遊ぶ毎に、輒ち歸を忘る、劉宋の時、前後徵召せらるるも、皆應ぜず、

【塊ヲ衝ム】古昔罪を請ふに、死を決する意を示すと云、ツチクレを含む、それより罪を請ふ義に用ふ、唐書玄宗紀に「天寶末、安祿山反、帝欲禪位太子、楊貴妃、衝塊請死、帝意沮乃止、

【傀俄】傀は偉なり、俄は峨と同じく、傾く貌、山の頽れんとする貌、世説に「山濤曰、嵇叔夜、若玉山之將頽、

【外交】境外の交際をいふ、國語に「乃厚其、而勉之、以報其德、

【瑰岸】秀でてたくまし、冊府元龜に「骨相、一、次の魁岸と略同じ、

【魁岸】魁は大なり、岸とは廉稜あること、崖岸の如きをいふ、一は秀でてたくまし、漢書江充傳に「充爲人、一容貌甚壯、一に雄傑なりと解す、

【鬼隗】山または家などの高くして大いなる貌、文選「甘泉賦に「前殿一、

【外廡】宮殿外に設けある「ウマヤ」戰國策に「趙代良馬、驍必實于、一、一は外國産の馬を畜ふ、

【外舅】爾雅に「妻ノ父ヲ一トナシ、妻ノ母ヲ外姑ト爲ス、

【掛金燈】「ホホヅキ」なり、救荒本草に「姑娘菜、俗ニ燈籠兒ト名ヅク、マター一ト名ヅク、本草に「酸漿ト名ヅク一名ハ醋漿、白花を開き房を結ぶ囊の如し、囊中に實有り櫻桃の大の如し、赤黄色なり、

【談諧】調戲なり、たはむれごとをいふ「オドケル」戲謔諸諧、調諧皆同じ、

【會稽ノ恥ヲ雪グ】（雪、會稽之恥、史記の貨殖傳に「昔者越王勾踐、會稽ノ上ニ困メラル、乃チ范蠡計然ヲ用ヒテ遂ニ強吳ニ報イ、兵ヲ中國ニ觀シ、稱シテ五霸ト號ス、范蠡既ニ會稽ノ恥ヲ雪ギ、乃チ喟然トシテ而シテ歎ジテ曰ク、計然ノ策七ツ、越ニ其ノ五ヲ用ヒテ而シテ意ヲ得タリト、雪は拭ふなり、洗ふなり、清むるなり、

【乖忤】そむきさかふ、漢書に「必生一之患、

【註誤】註は誤なり、欺なり、人をあざむき誤るをいふ、史記孝文紀に「濟北背德反上、一吏民爲大逆、

【魁梧】壯大の意、史記留侯世家の贊に「其人計一奇偉、至見其圖、狀貌如婦人好女、

【外姑】爾雅に「妻ノ母ヲ一トナス、

【同鶴】西域の部落の名、唐書一傳に「元魏ノ時、高車部ト號シ、隋ニハ韋紇トイヒ、亦同紇トイフ、德宗ノ時、請ヒテ改メテ一ト爲ス、

【會葬】葬式に來り會する義、左傳隱元年に「衛侯來一、

【膾殘魚】「シラウヲ」河海の間に生ず、長二三寸、幅一二分、身扁く背とがり、形は「アユ」に似て細長く、全身白くして鱗なし、冬春の間に候とす、皮日休の句に「分

【槐棘】三公九卿をいふ、三槐九卿を見よ、

【槐花】「エンジュの花、槐」を見よ、

【魁】雷將に發せんとして、未だ震はざる聲、詩の「駉風之終風に、一其雷」とあり、一説に「魁音キ、鳥の鳴く聲、詩經の小雅に「鸞聲一」一解に、一は徐行して節あるをいふと、また寛かに明らかなる貌、小雅に「一其冥、

【恢廓】度量の廣大なるをいふ、吳志周瑜傳に「性度一註に「大也開也、また一は張りて大いにする義、方言に「小ヲ張リテ大ナラシムル之ヲ廓トイフ、揚雄の句に「恢之廓之、

【挂冠】官を辭するをいふ、漢書の逢萌傳に「萌字ハ子慶、北海都昌ノ人、長安ニ之キテ學ビ、春秋經ニ通ズ、時ニ王莽其ノ子宇ヲ殺ス、萌友人ニ謂ツテ曰ク、三綱絶エタリ、去ラズンバ禍將ニ人ニ及バントスト、即チ冠ヲ解キ、東都ノ城門ニ挂ケ、家屬ヲ將キ、海ニ浮ンデ遼東ニ客タリ、

【會計】會は大計なり、出納を計算するをいふ、孟子に「孔子嘗爲「委吏」曰、一當而已矣、委吏は委積を主る吏なり、史記平準書に「桑弘羊爲「大農丞、筭諸一、事」筭は管なり、

【明數得】「ヒトキリ」名物方言に「人ヲ刑スル者ヲ一トイフ」郷談正音に「郷ニ殺手トイヒ、正ニ一トイフ」一に僧に作るは非なり。

【繪事】素ヨリ後ニス。素は粉地にして、畫の質なり、繪は先づ粉地を以て質と爲し、而る後ち五彩を施すをいふ、人美質あり、然る後、文飾を加ふるに喩ふ、論語八佾に「繪事後素」周禮考工記に「繪畫之事、後素功」

【外臣】外國の臣民、來りて此の國に在る者をいふ、儀禮に「他國之人、則曰一ニ(草莽ノ臣)を見よ、

【會心ノ處必ズシモ遠キニ在ラズ】會心は心によく適ふをいふ、世説に「梁ノ簡文華林園ニ遊ビテ左右ニ謂ツテ曰ク、會心處不、必在遠、脩然林木、便有濠濮閒趣、覺鳥獸魚鱉自來、親、人ト」

【膾炙】(人口ニ)を見よ、

【掛錫】「クワシヤク」と讀む、僧の止り住するをいふ(飛錫)を見よ、

【懷沙賦】屈原の汨羅に投ずるに臨みて作りたる賦、史記の屈原傳に出づ(人ノ心ノ濁レル)を參看せよ、

【懷春】古は仲春に男女を會し、婚姻を定めしむ、故に女子の婚姻を懷ふを「一」といふ、詩經に「有女一

一、吉士誘之、また陸機の書に「雖幽居之女、無一之情」

【快晴】一點のくもりなく、さつぱりとはれわたる天氣、陳與義の句に「孤松立一」

【外甥】妻の兄弟をいふ、釋名に「妻之昆弟曰一」一解に母方の「ヲヒ」をいふと、

【外戚】母かたの身うち、史記に「蓋亦有一之助焉」

【回雪ノ袖】舞容の巧妙なるを形容す、洛神賦に「飄飄兮若、流風之廻雪」太平記卷の二に引けり、

【塊然】塊は子なり、孤立の義、獨り處る貌、漢書陳湯傳に「使湯一」

【懷素】唐の禪僧字は藏真、京兆の人、長沙に住し、最も草書に巧なり、七十四歳にして寂す、

【馬】馬の病みつかるる貌、詩の周南に「陟彼崔嵬、我馬一」一解に、馬退きて升る能はざるの病なりと、隕一に隕に作り、また類に作る、楚辭に「車軌折兮馬馳

ナリ、若シ乃チ諫ムベキヲ見テ諫メザルハ之ヲ尸位トイフ、退クベキヲ見テ退カザルハ之ヲ懷龍トイフ、懷龍尸位ハ國ノ姦人ナリ

【蒯徹】字は通、范陽の人、楚漢の時の説士、權變あり、武信君嘗てその策を用ひて、燕趙の三十餘城を降し、韓信その計を用ひて、遂に齊の地を定む、自らその説を序し、號して雋永といふ、凡そ八十一首、

【廻天倒日ノ力】力の壯大なるをいふ、陸機の文に「一」

【回天ノ力】天は君の象、回天は君の心を挽き回すをいふ、事類全書に「張元素諫、太宗修洛陽宮、魏徵歎曰、張公論事、有回天之力、可謂仁人之言、其利博哉」轉じて衰へたる國勢を挽回する義にも用ふ、

【會同】時見として常期なく、事あれば來朝するを會といひ、般見として、衆見を同といふ、詩の小雅に「赤芾金鳥一、有釋」また水の合して一となるをいふ、書の禹貢に「灘沮一」

【外府】府は財貨を藏する處をいふ、一は、外國に在る府庫の義、左傳に「猶一也」

【回文ノ詩】晉書に「竇滔ノ妻蘇氏、名ハ蕙、字ハ若蘭、性聰慧、善ク文ヲ屬ス、滔苻堅ノ時ニ、秦州ノ刺史トナ

リ流沙ニ徙サル、蘇氏之ヲ思ヒ錦ヲ織リ回文旋圖ノ詩ヲ爲リ以テ滔ニ贈ル、宛轉循環シテ以テ之ヲ讀ム、詞甚ダ悽惋、凡ソ二百餘首計八百餘言、名ヅケテ璇璣圖トイフ、滄浪詩話には、これを以て回文の詩の始となし、古傳考略には、晉の溫嶠始めて回文の詩ありとす、

回文の詩の例

題織錦畫

蘇軾

春晚落花餘碧草、
夜涼低月半枯桐、
人隨遠雁邊城暮、
雨映疎籬繡閣空、
右の文を回して逆に讀まば東韻の詩は、左の如く眞韻の詩となる、

空閣繡籬疎映雨、
暮城邊雁遠隨人、
桐枯半月低涼夜、
草碧餘花落晚春、

【花烟】はなを聚めて「シトネ」とする義(花ヲ鋪キ)を見よ、

【會盟】左傳昭三年に「有事而會、不協而盟」

【會面難シ】友の會面することは容易ならざる義、杜甫の贈衛八處士詩に「焉知二十載、重上君子堂、主稱一、一舉累十觴」

【隗ヨリ始ム】(從隗始)士の優れたる者を、招かんと

するには、先づ劣者を用ふべしとの義、戰國策に「燕ノ昭王、位ニ即キ、身ヲ卑クシ幣ヲ厚クシテ、以テ賢者ヲ招ク、郭隗先生曰ク、臣聞ク、古ノ人ニ君タルモノ、千金ヲ以テ千里ノ馬ヲ求ムル者アリ、三年得ル能ハズ、涓人君ニ言ツテ曰ク、請フ之レヲ求メント、君之ヲ遣ス、三月ニシテ千里ノ馬ヲ得タルニ、馬已ニ死ス、其ノ骨ヲ五百金ニ買ヒ、反ツテ以テ君ニ報ズ、君大ニ怒リテ曰ク、求ムル所ノ者ハ、生馬ナリ、安ソズ死馬ヲ事トシテ五百金ヲ捐テント、涓人對ヘテ曰ク、死馬スラ且ツ之ヲ五百金ニ買フ、況ンヤ生馬ヲヤ、天下必ズ王ヲ以テ能ク馬ヲ市フトナシ、馬今至ラント、是ニ於テ昔年ナラザルニ、千里ノ馬至ルモノニツ、今王誠ニ士ヲ致サント欲セバ、先づ隗ヨリ始メヨ、隗スラ且ツ事ヘラル、況ンヤ隗ヨリ賢ナル者ヲヤ、豈ニ千里ヲ遠シトセンヤト、是ニ於テ昭王隗ノ爲メニ宮ヲ築キテ之ヲ師トス、樂毅ハ魏ヨリ往キ、鄒衍ハ齊ヨリ往キ、劇辛ハ趙ヨリ往キ、士爭ヒテ燕ニ湊マル」

【傀儡】 からくり人形をいふ、列子に、周ノ穆王ノ時、巧人ニ偃師トイフ者アリ、木人ヲ爲リテ能ク歌舞セシムとあり、梁鍾の傀儡の詩に「刻木牽絲作老翁、雞皮鶴髮與眞同、須臾弄罷寂無事、還似人生一夢中」還

は一に恰に作り、生は閉に作る一説に、傀儡子は、漢の高祖の平城の圍より起れり、其の城の一面は、即ち冒頓の妻閼氏の圍む所、閼氏兵強し、陳平閼氏の妬忌なることを知り、木偶人を造り、埤間に舞はしむ、閼氏謂ふ、是れ生人ならん、慮ふに城を下さば冒頓必ず之れを納れんと、遂に軍旅を退けしと云ふ、

【怪力亂神】 怪異勇力、悖亂鬼神の事をいふ、論語に「子不語怪力亂神」

【同祿ノ災】 火災をいふ、左傳の昭十八年に「子產火ヲ玄冥回祿ニ禳フ」註に「玄冥ハ水ノ神、回祿ハ火ノ神ナリ」と、書言故事に「火災ヲ被ルヲ回祿ニ遭フトイフ」

【光有】 光は大なり、大に保有するをいふ、左傳に「天下」

【皇猷】 天皇の「ハカリゴト」またその道をいふ、帝猷王猷聖猷皆同じ、北史の牛弘傳に「一退闡、化覃海外」

【光陰】 光は日、陰は月なり、歳時の義、李白の春夜宴桃李園序に「天地者萬物之逆旅、一者百代之過客、而浮生若夢、また張九齡の詩、行行念歸路、眇眇惜一光陰、水ノ如シ」(光陰如水)歳月の速なるに喩ふ、顔

氏家訓に「光陰可惜、譬諸逝水」

【光陰箭ノ如シ】 (光陰如箭)歳月の過ぐることを速なるに喩ふ、黃山谷の詩に「日月過箭疾」

【皇英】 娥皇女英とて、堯の二女、舜の妃、

【黃婉】 後漢の人、字は子琰、瓊の孫、瓊初め魏郡の太守たり、建和元年日食す、京師にては見えず、瓊狀を以て太后に聞す、太后食する所の多少を問ふ、瓊況ふるところを知らず、婉年七歳、傍に在りて曰く、何ぞ、日食の餘は、月の初の如しといはざると、瓊大に驚き、即ちその言を以て應ふ、後ち徵されて少府に拜し、又豫州の牧となる、擊つて寇賊を平げ、威聲大に振ひ、關内侯に封ぜらる、董卓政を乘るに及び徵されて司徒となり、太尉に遷り、更に陽泉郷侯に封ぜらる、

【光猷萬丈】 文詩の雄大にして勢あるを稱す(李杜文章)を見よ、

【潢汗】 すこしのたまり水、左傳の隱三年に「一一行潦之水」疏に「畜水ヲ潢トイヒ、水ノ流レザルヲ汗トイフ」

【黃屋左纛】 天子の車服なり、黃屋は、黃緇を以て蓋裏とす、左纛は、乘輿の車衡の左方上に立つる羽毛幢な

り、史記項羽紀に「紀信乘黃屋車、傳左纛、城中食盡、漢王降、敵を欺く爲めに、漢王の車服を用ひしなり、また西南夷傳に「南夷王「一」とあるは、天子の車服を借用せるをいふ、

【續ヲ屬ク】 (屬、續)人の臨終をいふ、禮記の喪大記篇に「屬、續以候絶氣、續は新綿なり、人の死せんとするとき、之を口鼻に屬けて、其の動否を觀て、氣の有無を驗するなり、

【續ヲ挾ム】 恩に感じて、寒を忘れたるをいふ、左傳の宣十二年に「冬楚子蕭ヲ伐ツ、申公巫臣曰ク、師入多ク寒エタリト、王三軍ヲ巡リ拊テ而シテ之ヲ勉メシム、三軍ノ士、皆續ヲ挾ムガ如シ」註に「續ハ綿ナリ、悦ビテ以テ寒ヲ忘ルルヲイフ、書言故事に「感、人恩意、如挾、續之温」の註に「挾ハ懷クナリ持ナリ」

【黃河】 支那第一の長流、單に河ともいふ、江淮濟と合せて四瀆となす、黃河を河宗といふは、四瀆の宗とする所らなればなり、水經の註に「河源ハ崑崙ノ墟ヨリ出ツ、百里一小曲、千里一大曲、九曲ニシテ以テ海ニ達ス、張騫傳ニイフ、騫大夏ニ使シテ河源ヲ窮ムト、惡ゾ謂フ所ノ崑崙トイフ者ヲ視タル乎」

【廣廈】 大屋に同じ、漢書に「一之下、細旃之上、崇廈

高麗皆同じ、
【皇考】 亡父をたふとみていふ、禮記曲禮に「王父ヲ祭ルニ皇祖考トイヒ、王妣ニ皇祖妣トイヒ、父ニニトイヒ、母ニ皇妣トイヒ、夫ニ皇辟トイフ」註に「更設稱號尊神異於人也」歐文瀟岡阡表に「一崇公」

【黃香孝愛】 孝子傳に「後漢ノ黃香、字ハ文彊、安陸ノ人、年九歲ニシテ母ヲ失フ、思慕太切ナリ、郷人其ノ孝ヲ稱ス、躬勤苦ヲ執リ、父ニ事ヘテ孝ヲ盡ス、夏天ノ暑熱ニハ、扇ギテ其ノ枕簟ヲ涼クシ、冬日ノ寒冷ニハ身ヲ以テ其ノ被席ヲ煖ム、太守劉護表シテ之ヲ異トシ甚ダ愛敬セラル、香博く經典を學ビ文章を能くす、京師號して天下無双といふ、肅宗詔して樞機を管せしむ、公務を憂ふると家事の如くす、

【黃河千年一清】 王子年の拾遺記に「丹丘十年一燒、一河清みて聖人生ずと、皆至聖ノ君以テ天瑞トナス」またいふ黃河清みて聖人生ずと、

【皇侃】 (皇侃)を見よ、
【黃幹】 字は直卿、閩縣の人、父の瑀、高宗の時の御史篤行直道を以て著る、幹、朱熹に師事す、熹女を以て之に妻す、歷官して漢陽軍安慶府に知たり、皆善政あり、位に在る者その聲譽を思ひ、羣起して之を濟す、幹遂に里に歸り、弟子日に盛んなり、卒して文肅と諡せらる、經解文集あり、

【廣寒府】 「ツキノミヤコ」なり、龍城錄に「上皇申天師道士鴻都客ト八月望日ノ夜、天師ノ作術ニ因リ、三人同ジク月中ニ遊ビ、一大官府ヲ見ル、榜シテ廣寒清虛ノ府トイフ」また天寶遺事に「唐ノ明皇月宮ニ遊ビ天府ヲ見ル、榜シテ廣寒清虛ノ府トイフ、素娥十餘人皓衣ニシテ白鸞ニ乘リ、桂樹ノ下ニ舞フ」

【黃巾ノ賊】 後漢の靈帝の時、鉅鹿に張角といふものあり、妖術を以て教授し、太平道と號す、また符水を以て病を療す、弟子を四方に遣はして、人民を誑誘すること十餘年、徒衆數十萬あり、一時俱に起り、皆黃巾を著け、所在燔劫す、旬月の間、天下響應す、皇甫嵩等を遣はして之を討たしむ、

【廣居】 仁に喻へ稱す、孟子に「居天下之」
【皇極】 皇は君なり、極は至極の義、即ち君主の建てたる準則にして、四方の萬民をして、則を取らしむる者なり、書經の洪範に「五、一、皇建、其有極」とあり、孔安國の註には「皇ハ大、極ハ中ナリ、大中ノ道ヲ言フ」

【光怪】 ひかりのふしぎにかがやく、懷素の法帖に「夜、夜風雷起、一」

【皇】 皇、美盛の貌、詩の大雅に「穆穆一」また煌煌に「通ず、キラ／＼」詩の小雅に「一者華、また求め望む所ろありて得ざる意、孟子に「孔子三月無君、一」如、またた栖栖の義、いそがしき貌、禮の檀弓に「一一如、有望而弗至、また皇皇は、一に遑遑に作る、同じ、

【洗洗】 武なり、果毅の貌、詩の大雅に「武夫一」
【黃宏】 元の黃巖の人、群經を博覽し、尤も詞賦に長ず、史才を以て薦むる者あるも就かず、江湖に落魄すること幾ど三十年、文章四方に流播す、穀城藁あり、因にいふ、明にまた一あり、字は德裕、六合の人、弘治壬戌の進士、

【煌煌】 光明の貌、詩の陳風に「明星一」
【曠曠】 曠惡の貌、漢書敘傳に「一亡秦、滅我聖文」
【黃卷】 書物をいふ、書言故事に「書ヲ一ト名ヅクルハ白ル所ロアリ、古人書ヲ寫スニ、皆黃紙ヲ用フ、黃藥ヲ用ヒテ之ヲ染メ、以テ蠹ヲ辟ク、故ニ一トイフ、誤字アレバ、雌黃ヲ以テ之ヲ滅ス、紙ト相類ス、故ニ文章ヲ可否スルヲ雌黃トイフ」唐書の狄仁傑傳に「仁傑曰ク、黃卷ノ中方ニ聖賢ト對ス、何ノ暇カ俗吏ニ偶シテ語ランヤト」註に「偶ハ對ナリ」

【黃冠】 禮記の郊特性に「野夫黃冠」一は草野の服

クワウークワウ

に里に歸り、弟子日に盛んなり、卒して文肅と諡せらる、經解文集あり、

【廣寒府】 「ツキノミヤコ」なり、龍城錄に「上皇申天師道士鴻都客ト八月望日ノ夜、天師ノ作術ニ因リ、三人同ジク月中ニ遊ビ、一大官府ヲ見ル、榜シテ廣寒清虛ノ府トイフ」また天寶遺事に「唐ノ明皇月宮ニ遊ビ天府ヲ見ル、榜シテ廣寒清虛ノ府トイフ、素娥十餘人皓衣ニシテ白鸞ニ乘リ、桂樹ノ下ニ舞フ」

【黃巾ノ賊】 後漢の靈帝の時、鉅鹿に張角といふものあり、妖術を以て教授し、太平道と號す、また符水を以て病を療す、弟子を四方に遣はして、人民を誑誘すること十餘年、徒衆數十萬あり、一時俱に起り、皆黃巾を著け、所在燔劫す、旬月の間、天下響應す、皇甫嵩等

を遣はして之を討たしむ、

【廣居】 仁に喻へ稱す、孟子に「居天下之」
【皇極】 皇は君なり、極は至極の義、即ち君主の建てたる準則にして、四方の萬民をして、則を取らしむる者なり、書經の洪範に「五、一、皇建、其有極」とあり、孔安國の註には「皇ハ大、極ハ中ナリ、大中ノ道ヲ言フ」

【光怪】 ひかりのふしぎにかがやく、懷素の法帖に「夜、夜風雷起、一」

なり、後世轉じて道士の稱とす、宋史の文天祥の傳にも見ゆ、
【曠官】 曠は空なり、廢なり、空しく職務を廢するをいふ、正字通に「官職ニ稱ハザルヲ一トイフ」書の皋陶謨に「莫曠、庶官」また韓愈の争臣論に「冒進之患生、一之刺與、

【黃歇】 黔中の人、戰國の時、楚の相となり、春申君と號す、楚に相たること凡そ二十餘年、門下の食客三千人あり、その上客は皆珠履を躡む、趙の使之を見て大に慙づ、後ち李園のために害せらる、

【黃絹幼婦】 黃絹は色絲なり、絶の字となり、幼婦は少女なり、妙の字となる、即ち絶妙の義なり(有智)を見よ、

【黃憲牛醫之賤子也、叔度動名京師、】 十訓抄第三に見ゆ、後漢書の列傳に「黃憲字ハ叔度汝南慎陽ノ人、世貧賤ナリ、父牛醫タリ、苟淑嘗テ憲ニ遇フ、時ニ年十四、疎然トシテ之ヲ異トス、憲ニ謂ツテ曰ク、子ハ吾ノ師表ナリト、同郡ノ陳蕃周舉、常ニ相謂ツテ曰ク、時月ノ閉モ、黃生ヲ見ズンバ、鄙吝ノ萌復心ニ存ズト蕃三公ト爲ルニ及ビ、朝ニ臨ミ嘆ジテ曰ク、叔度若シ在ラバ、吾敢テ先ヅ印綬ヲ佩ビズト、郭林宗モ亦イフ、叔

度若シ在ラバ、吾敢テ先ヅ印綬ヲ佩ビズト、郭林宗モ亦イフ、叔

度若シ在ラバ、吾敢テ先ヅ印綬ヲ佩ビズト、郭林宗モ亦イフ、叔

度若シ在ラバ、吾敢テ先ヅ印綬ヲ佩ビズト、郭林宗モ亦イフ、叔

度ハ汪汪トシテ千頃ノ陂ノ若シ、之ヲ澄セドモ清マズ、之ヲ清セドモ濁ラズ、量ルベカラザルナリト、憲初メ孝廉ニ擧ゲラレ、又公府ニ辟サル、友人其ノ仕ヲ勸ム、憲モ亦之ヲ拒マズ、暫ラク京師ニ到リテ還リ、竟ニ就ク所ロナカリキ、天下號シテ徵君トイフ

【黄口】雀兒をいふ、轉じて乳臭の小兒の稱とす、說苑に「孔子見羅者、其所得者、皆一也、孔子曰、一盡得、大爵獨不得何也、羅者對曰、一從大爵者、不可得、大爵從一者、可得、孔子願謂弟子曰、君子慎所從、不得其人、則有羅網之患ト」また淮南子に「古伐國、不殺一不獲二毛の一は、轉義に従へるなり、

【皇后】白虎通に「天子ノ配、之ヲ后トイフ、后ハ君ナリ、天子ノ至尊ニ配ス、故ニ后トイフ」また初學記に「夏殷已前ハ后妃ノ制其ノ文略ナリ、大率皆妃ト稱ス、故ニ黄帝ニ四妃、帝嚳ニ四妃アリ、周ハ則チ天子ニシテ后ヲ立テ、正嫡ヲ王后トイフ、秦ハ一トイフ、漢之ニ因ル」漢書の「高祖尊王后曰一」の註に「師古曰ク、后モ亦君ナリ、天ニ皇天トイヒ、地ニ后土トイフ、故ニ天子ノ妃、后ヲ以テ稱トナスハ、象ヲ二儀ニ取ルナ

【黄者】老人の稱なり、黄とは老人の髪また黄なるな

り、者とは、老人の面、凍梨色にして、垢の浮べるが如きなり、詩經に「樂只君子、遐不作一」また漢書師丹傳に「德爲國一」とあるは、長老の義

【黄公望】字は子久、富陽の人、聰敏絶倫、百氏の説に通じ、尤も畫山水に工なり、はじめ董源、巨然を師とし、晩年その法を變じて自ら一家を成す、思を運らし筆を落せば人の意表に出づ、元の至元中、浙西廉訪使徐瑛辟して書史となす、未だ幾くならずして棄て去り、名を堅と更め、一峯と號し、又自ら大癡道人と稱す、江湖に放浪し、年八十餘にして卒す、容臺集に「元季ノ四大家、一ヲ以テ冠ト爲ス、而シテ王蒙、倪瓚、吳仲圭之ト對壘ス」

【恍惚】微妙にして測られざる貌、老子に「道之爲物、惟恍惟惚、惚兮恍兮、其中有象、また意を失ひて「ウツトリ」としたる貌、論衡に「神者一、無形」

所ロノ駭犬ノ名ナリ、機嘗テ洛陽ニ在リ、其ノ家、吳都ニ在リ、黄耳常ニ書ノ使ヲナス、

【黄子久】(黄公望)を見よ、

【皇史宬】宬は「モノオキグラ」一は明朝の藏書室の名、字彙補に「明大内、有一一」

【黄震】字は東發、慈谿の人、宋の寶祐中の進士、仕へて史館檢閲となり、直言せしを以て、出されて廣德軍に判たり、人と爲り清介自ら守り、獨り朱氏の學を崇ぶ、著すところ日鈔百卷あり、卒して門人私謚して文潔先生といふ、

【黄潛】元の義烏の人、幼より篤學にして博く群書を極む、常山、教諭王炎澤に事ふ、發して文章と爲れば、澄湖波たたず、一碧萬頃の如し、是をもつて名を當世に擅まにす、延祐の初の進士、累官侍講學士に至り、卒して江西行省を贈り、江夏郡公に追封し、文献と謚せらる、文集あり世に行はる、

【黄壤】壤は「ツチ」土地の耕種すべしやはらかなる土、一は黄色のつち、書經に「厥土惟一一」

【黄雀ノ風】歲華紀麗に「風ヲ黄雀ト名ヅケ、雨ヲ濯枝トイフ」の註に「風土記ニ曰ク、仲夏ノ大雨ヲ濯枝ノ雨ト名ヅケ、六月方サニ止ム、東南常ニ風ノ至ルアリ、

黄雀長風トイヒ、亦薰風ト曰フと、即ち陰曆五月の風をいふ、この時海魚變じて黄雀となる、因つて名づく、風土記に「仲夏長風、暑名、黄雀長風」

【廣成子】古の仙人の名、人の長壽を祝して壽如一一といふ、莊子に「黄帝問廣成子、在崆峒之上、往見之、問曰、聞吾子達於至道、敢問治身、奈何以得長久、廣成子曰、至道之精、窈窕冥冥、至道之極、昏昏默默、無視無聽、抱神以靜、形將自正、必靜必清、無勞、爾形無搖、爾精乃可長生、慎、內閉、外多知爲敗、我守其一、以處其和、故千二百歲、而形未嘗衰」

【曠世ノ度】曠は空なり、一世を空しくして人なきが如くに蔑視するをいふ、晉書郡超傳に「卓犖不羈、有一一之」

【曠笑】「トドロキワラフ」幽棲志に「宋景濂徜徉梅花開一一竟日」

【廣宵大暮】文選に「廣宵何寥廓、大暮安可晨」とあり、死者は長へに曉る期なきを言ふ、人の死を大暮といふは、猶ほ長夜の如し、

【廣斥】ひろくとしたる「シホハマ」斥は「ヒカタ」尙書禹貢の字面、註に「廣漠而斥鹵」とあり、許慎曰く「東方謂之斥、西方謂之鹵、斥鹵鹹地、可煮爲鹽者也」

【黄泉ノ客】(黄泉之客)死者をいふ、土の色は黄なり故に地下を黄泉といふ、左傳の隱元年に「誓之曰、不及黄泉、無相見也」生きて相見ること無きを言ふ、文選に「潛寢黄泉下、千載永不寤」

【黄宗義】字は太冲、黎州と號す、浙江餘姚の人、明末の諸生、劉戡山に師事す、康熙開博學鴻詞に薦舉せらるれども、固辭す、その學六經に本づき、旁ら百氏に通じ、尤も天文の學に精し、著すところ易學象數論春秋日食歷、孟子師說、二程學案、宋儒學案、元儒學案、明儒學案等數十種あり

【皇太子】東宮をいふ(太子)を看よ、

【荒唐ノ言】廣大にして、かぎり無く、漠としてあてど無き言をいふ、莊子の天下篇に「以謬悠之說、荒唐之言、無端崖之辭、時恣縱而不儻、莊子釋文に「荒唐謂廣大無域畔者也」説文に「唐は大言也」詩の毛傳に「荒唐也」

【荒唐】あれすたる義、宋書に「詩書—頌聲寂寞」【皇帝】人君の尊稱、書言故事に「古者伏羲神農黃帝道ヲ以テ治ム、故ニ皇ト稱ス(皇は大なり、道、天の大に配するなり)少昊、顓頊、高辛、唐虞、ハ德ヲ以テ化ス、故ニ帝ト稱ス(帝は諦なり、物に審諦なるなり)」と、史記の

秦の本紀に「臣等謹ンテ博士ト議シテ曰ク、古、天皇アリ、地皇アリ、泰皇アリ、泰皇最モ貴シ、臣等昧死シ、尊號ヲ上リ、王ヲ泰皇ト爲シ、命ヲ制ト爲シ、令ヲ詔ト爲シ、天子自ラ稱シテ朕トイハント、王曰ク、泰ヲ去リ皇ヲ著ケ、上古帝位ノ號ヲ采リ、號シテ皇帝ト曰ハシ、他ハ議ノ如クセント」皇帝と連稱するは此に創まる、唐の陸贄の尊號表に「德合、天謂之皇、德合、地謂之帝、皆至尊之殊號、極美之大名、蔡邕の獨斷に「漢天子正號曰—、自稱曰朕、臣民稱之曰陛下、唐六典に「凡ソ夷夏通稱シテ天子ヲ—トイフ」

【荒庭堅】字は魯直、山谷と號す、宋の分寧の人、進士に擧げらる、蘇軾その詩文を見て、その萬物の表に獨立するを歎ず、紹聖の初め、鄂州に知たり、章惇、蔡京等の惡む所となり、謫せられて涪州別駕を授けられ、黔州に安置せらる、戎州に移され、尋て坐せられて宜州に謫せらる、江西詩派は庭堅を祖とす、世にその詩を以て賦に配して蘇黃と稱す、また秦觀、張耒、晁補之と共に蘇門の四學士と稱せらる、

【黃帝ハ牧童ノ詞ヲ信ズ】十訓抄第三に見ゆ、莊子雜篇徐無鬼に「黃帝將ニ大隗ヲ具茨ノ山ニ見ントス(中略)迷ヒテ塗ヲ問フ所ロナシ、適、馬ヲ牧スル童子ニ遇ヒ塗ヲ問フ、曰ク若具茨ノ山ヲ知ルカト、曰ク然リト、若大隗ノ存スル所ヲ知ルカト、曰ク然リト、黃帝曰ク、異ナル哉小童、徒ニ具茨ノ山ヲ知ルノミニアラズ、又大隗ノ存スル所ヲ知ルト、天下ヲ爲ムルコトヲ請ヒ問フ(中略)黃帝曰ク、夫天下ヲ爲ムルハ、誠ニ吾子ノ事ニアラズ、然リト雖モ、天下ヲ爲ムル事ヲ請ヒ問フト、小童辭ス、黃帝又問フ、小童曰ク、夫天下ヲ爲ムルハ、亦奚ヲ以テ馬ヲ牧スルニ異ナランヤ、亦ソノ馬ヲ害スル者ヲ去ランノミト、黃帝再拜稽首シテ天師ト稱シテ退ク」

【皇天后土】書經の武成に「底商之罪、告于皇天后土、所過名山、大川ニ見ゆ、底は至なり、后土は社なり、皇は大なり、天を尊びていふ、后土とは、左傳昭公二十九年に「土正曰后土」の註に「土爲群物主、故稱后也」【黃東發】(黃震)を見よ、

【黃頭郎ガ夢】太平記卷十一に見ゆ、土はよく水に勝つ、故に船を行く者は黃帽を著く、黃は土の色なり、前漢鄧通以「權」船、爲黃頭郎、文帝夢欲上天、不能、有一黃頭郎推上、天、願見其衣尻、帶後穿、覺而之、漸臺見通、其衣後穿、夢中所見也、甚悅、尊幸之、賞賜金鉅萬

【荒亡ノ行】田獵飲酒の樂にふけるをいふ、孟子に「獸ニ從ヒテ厭ク無キ、之ヲ荒ト謂フ、酒ヲ樂ンデ厭ク無キ之ヲ亡ト謂フ、先王流連ノ樂、荒亡ノ行無シ(流連)を見よ、

【黃白】黃は金、白は銀をいふ、史記平準書に「虞夏之幣、金爲三品、或黃或白、或赤、或錢、或布、或刀、或龜貝、及至秦中、二國之幣爲三等、黃金以鑄名、爲上幣、銅錢、鐵曰半兩、重如其文、爲下幣、赤とは、銅なり、【黃髮】老人をいふ、禮記の曲禮に「君子敬—」疏に「人初メテ老ユレバ、髮白ク、太ダ老ユレバ、髮黃ナリ」

【黄髮番番】 番一に幡に作る、髮黄にして更に白きをいふ、史記秦紀に「謀一則無所過」また鼓傳に「番番黄髮、爰饗營丘」營丘は地名、太公望、封を營丘に受けたるをいふ、また番番の二字は、一解に、勇武の貌、書の秦誓に「一良士」

【曠夫】 曠は空（ムナシキ）なり、妻なくして、獨り空しく居る者、孟子に出づ（怨女を見よ、）

【光風霽月】 心の高明なるとの喩、書言故事に「黄魯直曰、春陵周茂叔、人品甚高、胸中洒落、如光風霽月」

【黄吻】 鳥の雛のくちばしの黄色なるより、經驗なき少年をいふ、世説に「一年少、勿爲評論、宿士、黄口に同じ、」

【廣平ガ賦】 錦字箋に「宋璟字ハ廣平、貞操勁質、ソノ鐵腸石心、媚辭ヲ吐ク能ハザルカト疑フ、乃チ梅花ノ賦ヲ作リテハ、清便艶麗ナリ、ソノ警句ニイフ、鶯語猶澁、蜂房未喧、獨歩早春、自全其天」ト

【皇謨】 帝王の「ハカリゴト」王禹偁の詩に「經史子集燦今古、粉繪帝道張一」ト

【皇甫湜】 字は持正、唐の新安の人、元和中、第に擢てられ、仕へて工部郎中に至る、韓愈その才を愛し厚く之を禮す、李翱、張籍と名を齊しくす、文集あり世に行

【黃鸝】 我が國の「ウグヒス」に似たる鳥なり、詩經の「黄鳥于飛」の陸璣の疏に「今謂黃鸝一也」と、王維の詩に「陰陰夏木轉、一鳴一止、楊柳載の詩に「柳梢聽得、一語、此是春來第一聲」

【廣輪】 猶廣袤の如し、輪は縦なり、東西を廣とし、南北を輪とす、周禮に「大司徒周知九州之地域、一之數」

【黄梁一炊ノ夢】 人世のはかなきこと、邯鄲ノ夢を見よ、

【光祿寺卿】 宋史職官志に「一掌、祭祀朝會宴饗、酒醴膳羞之事、修其儲備、而謹其出納之政、杜氏通典に「秦ニ郎中令アリ、宮殿掖門、戶ヲ掌ル、漢ハ之ニ因ル、武帝ニ至リ名ヲ光祿勳ト更ム、宋朝ハ光祿、祭祀牲牢等、事ヲ掌ル」

【黄魯直】（黄庭堅）を見よ、

【果ヲ投ジ車ニ滿ツ】（潘岳）を見よ、

【瓜ヲ投ジテ瓊ヲ得】（投瓜得瓊）人に微物を贈りて、厚報を得たるをいふ（報瓊）を見よ、

【畫ヲ讀ム】 畫を觀て品評するをいふ、隨園詩話續編に「隨園イフ、畫家畫ヲ讀ムノ說アリ、余謂ヘラク、畫讀ムベキ者ナシ、其ノ詩ヲ讀ムナリト、翁廣平ノ詩ニ

【黄麻】 詔書をいふ、詔は黄麻紙に書す、故にいふ、杜甫の詩に「一似六經」詔詞の深厚六經の文の如しとなり、唐の太宗一紙を用ひて詔勅の文を寫す、玄宗別に學士院を置き内命を掌らしめ凡そ將相を拜免し號令征伐、皆白麻を用ふ（白麻）を見よ、

【混濁】 濁は漾の古文なり、一は水の廣大にして際涯なき義、潘岳の句に「一彌漫劉勰新論に「達者之懷則一而無涯、福人之情、必刻覈而煩細、また沈澁と、義同じ、」

【洗洋自恣】 史記の莊周傳に「其言一以適己」漫然として海洋の限りなきが如く、吾が心に任せて恣に説きたつるをいふ、

【黄老】 黄帝老子をいふ、道家の祖なり、隋書に「漢ノ時曹參始メテ蓋公ヲ薦ム、能ク一ヲ言フト、文帝之ヲ宗トス云云」これより道家の説、漸くに盛なるに至れり、韓文の原道に「一於漢」

【黄履】 劉氏人譜に「宋ノ一、字ハ安中、精ヲ專ニシテ書ヲ讀ム、毎ニ早晨ニ、經書誦スルコト五百遍、飯後ニ、史書百遍ヲ誦シ、夜、子書ヲ誦スルコト百遍、書ヲ誦スル毎ニ危坐シテ動カズ、句句分明ナリ」

【品泉讀畫遲返】 權ト、潘師隨ノ詩ニ「讀畫論詩日往還ト、マタ吳錫麒ノ集中ニ多ク讀畫ノ字ヲ用フ」

【華夏】 華は、文華の義、夏は大なり、支那人が、己の國を尊びていふ稱、魏志荀彧傳に「今一已平」

【禍階】 禍亂の階梯をいふ、左傳隱三年に「階之爲禍」

【瓦解】 分裂して、全からざるをいふ（土崩）を見よ、

【火耕水耨】 漢書食貨志に見ゆ、耨は田草を拔くなり、卓氏漢林に「草ヲ燒キ水ヲ下シ、稻ヲ植ウ、草ト稻ト並ニ生ズ、因テ悉ク艾リ去リ、マタ水ヲ下シテ之ニ灌グ草死シテ稻獨リ長ズ、之ヲ一ト謂フ」我邦にて

も四國邊の山閉にては、山野の草木を燒きて灰となし「ツバ」など、これ亦火耕の類なり、

【蝸角ノ争】（蝸角之争）争ふ所ろの者、小なるをいふ、莊子の則陽篇に「蝸ノ左角ニ國スル者アリ、觸氏トイフ、蝸ノ右角ニ國スル者アリ、蠻氏トイフ、時ニ相與ニ地ヲ争ヒテ戰フ、伏尸數萬、北ヲ逐ヒ、旬有五日ニシテ後チニ反ル」の註に「天下ハ一蝸ナリ、今四海ヲ以テ大ト爲ス、然レドモ無窮ノ中ニ在ルヲ計レバ、有ルガ若ク、無キガ若キナリ、況ヤ魏中ノ梁、梁中ノ王、争フニ足ランヤ」白樂天の酒に對する詩に「蝸牛角上争、何事、石火光中寄、此身、隨富隨貧、且懼喜、不開口笑、是癡

【瓜葛ノ親】 親戚の「ツツキ」をいふ、瓜葛は蔓生して、枝葉相まるとふ、故に親戚相連なるに喩ふ、晉書に「王導王悦ト奕棋シテ道ヲ争フ、導曰ク、相共ニ瓜葛アリ、那ゾ爾カナスコヲ得ンヤト」孔氏雜識に「俗ニ所謂瓜葛亦出ヅル所ロアルナリ、後漢禮儀志上陵儀注ニ、苟先帝有瓜葛之屬、男女畢會也ト、マタ魏ノ明帝ノ種瓜篇ニモ與君新成婚、瓜葛相結連」

【畫家ノ三祖】 圓機活法に「晉以來、顧長康、張僧繇、陸探微カ畫ク所ロハ、神ニ通ズ、畫家ノ三祖ト爲ス」

【華甲】 六十一歳をいふ、華の字を析ちていふ、范成大の丙午新正の詩に「祝我剩周—子、謝人深勸玉東西」

【瓦合】 破れ瓦の相合ひたる如きをいふ、聚め合はすとも、齊しからざるなり、史記儒林傳に「陳涉起、匹夫驅—適成、旬月以王、楚、また漢書酈食其傳に「起—之卒、收散亂之兵、不滿萬人」

【果敢ノ氣】 事にあつて、つよくしとげる氣をいふ、王安石の祭歐陽文忠公文に「果敢之氣、剛正之節、至晩而不衰」

【華菅茅束】 夫婦相須つて用をなす義（白華ノ菅）を見よ、

不可再得、妻不敢違、巨遂掘坑二尺餘、忽見黃金一釜、釜上云、天賜孝子郭巨、官不得奪、人不得取トアリキといふ、この事、今昔物語九にも引けり、

【霍去病】 漢の平陽の人、人となり少言洩さず、敢往の氣あり、騎射を善くす、武帝の朝、衛青に從ひ嫺姚校尉となり、凡そ六たび出てて匈奴を撃ち、狼居胥山に封じ、姑衍に禪し、瀚海に登臨す、冠軍侯に封せられ、驃騎大將軍を加へらる、

【霍光】 字は子孟、去病の異母弟なり、漢の武帝の朝奉車都尉となり、禁闥に出入すること二十餘年、小心謹慎にして、未だ嘗て過あらず、人と爲り、沈靜詳審なり、出入して殿門を下るごとに、進止常處あり、即僕射竊に識して之を視るに、尺寸をも失はざりきといふ、遺詔を受けて昭帝を輔く、百姓充實四夷賓服す、昌邑王を廢して宣帝を立つ、甘露中に、功臣の形を麒麟閣に圖するや、光その第一に居り、大將軍博陸侯霍氏といひて名ははず、

【獲穀自ラ呼ブ】 荆楚歲時記に「四月鳥アリ、獲穀ト名ヅク、其ノ鳴クヤ自ラ呼ブ、農人此ノ鳥ヲ候トシテ則チ犂ヲ把リ岸ニ上ル」註に「郭璞イフ、今ノ布穀ナリ江東ニ獲穀ト呼ブ」

【瓜期】 任期の満つる期をいふ（瓜ニ及ブ）を見よ、

【果毅】 殺を行ふに勇む意、左傳宣元年に「殺敵爲果、致果爲毅」また書經に「爾衆士其尙迪—」以登乃辟、迪は行、登は成、辟は君、

【蝸牛角上ノ争】 小功名を争ふをいふ、蝸角ノを見よ、

【蝸牛ノ計】 田單ノを見よ、

【蝸牛角ノ上ノ争】 石火光ノ中一刹那、太平記卷二十七に見ゆ、白樂天が對酒と題する詩に「蝸牛角上争何事、石火光中寄此身」とあるに本づく（蝸角ノ）を見よ、

【蝸牛廬】 蝸廬を見よ、

【火急】 至急の義、劉詵の詩に「州符昨夜急、如火馬蹄踏、月趨官衙、また北齊書に「幼主特愛、非常之物、取求—皆須朝徹夕辦」

【契機】 契は矩に同じ、機は度なり、—は法度をいふ、屈原離騷に「求—之所同」

【畫一】 一の字をかきたる如く、いづれも整齊にして同一なる義、史記曹相國世家に「蕭何爲法、若—」

【郭巨ガ子ヲ埋ムル悲】 十訓抄第六に見ゆ、孝子傳に「後漢郭巨、家貧養老母、妻生一子、三歳、母常減食與之、巨謂妻曰、貧乏不能供給、共汝埋子、子可再有母

【火鎗】 銃砲なり、

【畫策】 謀計の義、史記留侯世家に「張良多病、未嘗特將也、常爲—臣」

【噱暗】 詞句多きをいふ、一解に、噱は大笑をいひ、暗は大呼をいふと、史記信陵君傳に「晉鄙—宿將、また暗は噱に作る、大聲を發してさげび、かまびすしきなり、柳宗元の句に「跳浮噱」

【擴充】 張りて推しひろげ、満つべきところまで十分に満たす義、孟子に「知皆擴而充之」

【郭子儀】 郭汾陽を見よ、

【郭子儀ガ奢欲】 戰臺雜話「天下の實に見ゆ、舊唐書の傳に「其ノ宅親仁里ニ在リ、ソノ里ノ四分ノ一ニ居ル、中ニ永巷ヲ通ズ、家人三千、相出入スル者、ソノ居ヲ知ラズ、前後良田美器名園甲館ヲ賜フ、聲色珍玩、堆積羨溢勝ゲテ紀スベカラズ、代宗名イハズ、呼ンデ大臣トナス、天下ソノ身ヲ以テ安危ヲナス者殆二十年、權ハ天下ヲ傾ケテ朝忌マズ、功ハ一代ヲ蓋ヒテ主疑ハズ、侈ハ人欲ヲ窮メテ君子之ヲ罪セズ云云」郭汾陽を參看せよ、

【郭象】 字は子玄、晉の河南の人、少くして才理あり

老莊の學を好み、閉居して文論を以て自ら娛む、仕へて黃門侍郎に至る、辨論十二篇を著す、

【郭忠恕】 宋の畫人、王得臣塵史に、「一一」字ハ恕先、一時ニ濃墨汁ヲ以テ縑素ノ上ニ潑漬シ、亟カニ搗ヘテ澗水ニ就キテ之ヲ滌ギ、徐ニ筆ヲ以テソノ濃淡ニ隨ヒテ山水ノ形勢ヲ爲ス、野老記聞に、恕先ノ畫天外數峯略、筆墨アリ、人ヲシテ見テ心服セシムル者ハ、筆墨ノ外ニ在リ、

【郭登】 字は元登、明の臨淮の人、資の孫、虜を破り定襄伯に封ぜらる、天順元年爵を奪はれ、謫せられて甘肅に戍す、成化元年爵を復せられ、團營總兵に充てらる、卒して侯を贈られ忠武と諡す、

【郭汾陽】 唐の名臣、名は子儀、華州の人、肅宗の朝廣平王俶と共に賊を討ち、東西二京を克復するの功により、司徒と爲り、尋て爵汾陽王を賜ひ、代宗立つに及び、子儀を尙びて、尙父と爲し、大尉を加へ、中書令を兼ねしむ、德宗の建中二年六月卒す、年八十五、子儀職に在ること殆んど三十年、府庫珍貨山の如く積む、家人三千人、八子七婿、皆顯官となる、諸孫數十人、安を問ふ毎に、盡く辨ずる能はず、之を領するのみ、

【郭璞】 字は景純、晉の聞喜の人、博學高才、詞賦に工

なり、時に郭公といふ者あり、卜筮に精し、璞之に従ひ遊び、青囊中の書を得たり、是に由つて五行卜筮の術を洞知し、占驗甚多し、洞林新林、卜韻爾雅註數十篇を撰ぶ、又三蒼方言山海經楚辭に註す、元帝之を重んじ以て著作郎となす、

【廓落】 志を失ふ貌、楚辭に、「一一」兮羈旅而無友生、いふ句にて筆をとどめられたるをいふ、これによりて春秋の異名を麟經とはいふなり、

【花魁】 百花の「サキガケ」の義、梅の異名、撫言に、「王文正公嘗テ梅花ヲ賦スル詩ニイフ、雪中未論和羹事、且占百花頭上魁、

【貨賄】 「タカラ」周禮天官大宰に、「商賈阜通、一一」の註に、「金玉ヲ貨トイヒ、布帛ヲ賄トイフ、

【火難ヲ飛シ城ヲ劫カス】 太平記卷二十に見ゆ、晉書列傳に、「江道字道載、陳留圉人、中軍將軍殷浩請爲、諸議參軍、時差及丁零叛、浩軍震懼、姚襄去、浩十里、結營以逼浩、浩令道擊之、道進兵至襄營、謂將校曰、吾當以計破之、乃取數百雞以長繩連之、繫火於足、群雞駭散、飛集襄營、營火發、因其亂而擊之、襄遂敗、

【花縣】 晉の潘岳、河陽の令となり、桃を種る縣に滿つ、

八號して一一と曰ふ、

【詭言】 詭は、偽なり、偽の言を造りて、群聽を惑すをいふ、詩の小雅に、「民之一一、寧莫之懲、

【貨源】 財貨の出づる本源なり、荀子に、「百姓時和、事業得敘者、貨之源也、(財源)を見よ、

【花見羞】 五代史の明宗家人傳に、「淑妃王氏美色アリ、一一」ト號ス、

【火伍】 唐の兵制、五人を伍とし、二伍(十人)を火とす、それより組合または、「ナカマ」の義にも用ふ、

【臥虎】 陳留耆舊傳に、「高謹字ハ孝甫、敦實ニシテ華少ク、口劇語スル能ハズ、而シテ深沈謀ヲ好ム、其ノ徒號シテ一一トイフ、又曰ク、癡ニシテ語ラズ高孝甫ト、

【畫工鬪牛ノ尾ヲ誤リテ牧童ニ笑ハル】 太平記卷二十

五に見ゆ、この事、仇池筆記に出づ、蘇東坡の書、戴嵩畫牛といふ文に曰く、蜀中有杜處士、好畫牛、所畫以百數、有戴嵩牛一軸、尤所愛、錦囊玉軸、常以自隨、一日、鬪牛畫、有一牧童見之、拊掌大笑曰、此畫鬪牛也、牛鬪力在角、尾搐入兩股間、今乃掉尾而鬪、謬矣、處士笑而然之、古語有云、耕當問奴、織當問婢、不可改也、

【寡妻】 寡人の妻の義にて、己の妻を謙していふ、詩經大雅思齊篇に、「刑一一、至兄弟、

【華山】 華は通じて華に作る、次の(華山)を見よ、

【華山】 陝西省、華陰の南に在り、五岳の一、爾雅に、「華山爲西岳」とあり、周禮の職方氏に、「豫州其山鎮曰一一」と、書に、「至于太華」とあり、華山記に、「山頂池アリ、千葉蓮花ヲ生ズ、之ヲ服スレバ羽化ス、因ツテ一一トイフ」と、書經の武成に、「歸馬于一一之陽、また西山記に、「太華之山、削成而四方、其高五千仞、其廣十里、事文類聚に、後漢書を引きて、「張楷字公超、能爲五里霧所居成市、後一一南有公超霧市、搔首集に、「李白登華山落雁峯、曰、此山最高、呼吸之氣相通、帝座矣、

【花子】 乞食をいふ、五雜俎に、「京師謂乞兒爲一一、不知何取義、花は一に化に作る、

【畫師タルヲ羞ツ】 小技に安んぜざるをいふ、唐書に「太宗侍臣ト、舟ヲ春苑池ニ泛ブ、異鳥ノ容與タルヲ見群臣ニ詔シテ詩ヲ賦セシメ、閻立本ヲ召シテ伴シク

狀セシム、立本池左ニ俯伏シ、丹ヲ研シ粉ヲ吮ヒ、羞汗背ニ流ル、既ニ歸リ、其ノ子姪ヲ戒メテ曰ク、吾少ニシテ書ヲ讀ミ、文ヲ屬セシコト、儕輩ニ減ゼズ、今獨リ畫ヲ以テ召サレ、厮役ト等シ、若ガ曹愼ンデ此ヲ習フコトナカレト、

【和氏ノ璧】 韓非子に、「楚人卞和、玉璞ヲ荆山ニ得、奉ジ

テ之ヲ厲王ニ獻ス、厲王王人ニ之ヲ相セシム、王人曰ク、石ナリト、王和ヲ以テ誑スト爲シテ、其ノ左足ヲ別ル、厲王薨ジ、武王位ニ即クニ及ンデ、和マタ其ノ璞ヲ奉ジテ、之ヲ武王ニ獻ズ、武王王人ニ之ヲ相セシム、又曰ク、石ナリト、王マタ和ヲ以テ詐クトナシ、其ノ右足ヲ別ル、武王薨ジ、文王位ニ即ク、和乃チ其ノ璞ヲ抱キテ、荆山ノ下ニ哭スルヲ三日夜、涙盡キテ之ニ繼グニ血ヲ以テス、王之ヲ聞キ、人ニ其ノ故ヲ問ハシム、曰ク天下ノ別ラルル者多シ、子奚ゾ哭スルノ悲キト、和曰ク、吾レ別ヲ悲ムニアラザルナリ、夫レ寶玉ニシテ之ニ題スルニ石ヲ以テシ、貞士ニシテ之ニ名ヅクルニ詐ヲ以テスルヲ悲ム、此レ吾ガ悲ム所以ナリト、王乃チ王人ニ其ノ璞ヲ理メシメタルニ、果シテ玉ヲ得タリ、遂ニ命ジテ和氏ノ璧トイフ、璞は、玉の石中に在る者、王人は玉を琢く工をいふ、後に趙の惠王、此の璧を得、秦の昭王十五城を以て之に易へんと請ふ、是れよりまた連城の璧ともいふ、唐詩に、趙氏連城璧とある是れなり、

【花神】 花のかみ、月令廣義に、女夷爲一、乃魏夫人之弟子、花姑亦爲一、
【寡人】 徳の少き義によりて王侯自ら稱する謙辭、禮

氏出でて始めて燈を鑽りて人に火食することを教へたりといふ、

【貨殖】 財貨を増しふやすをいふ、書の仲虺之詁に、惟王不遷、聲色不殖、貨利また論語に、賜不受命而一

【華胥ノ夢】 列子に、黃帝天下ノ治マラザルヲ憂フ、聰明ヲ竭シ、智力ヲ盡シテ、焦然トシテ肌色肝鬪シ、昏然トシテ五情爽惑ス、是ニ於テ萬機ヲ放チ、退イテ而シテ大庭ノ館ニ閉居シ、心ヲ齋シ、形ヲ服シ、三月政事ヲ親ラセズ、晝寢テ而シテ夢ニ、華胥氏ノ國ニ遊ブ、其ノ國、師長ナク、自然ノミ、其ノ民嗜欲ナク、自然ノミ、生ヲ樂ムヲ知ラズ、死ヲ惡ムヲ知ラズ、故ニ天殤(わかじ)にナシ、己ヲ親ムヲ知ラズ、物ヲ疎ンズルヲ知ラズ、故ニ愛憎ナシ、空ニ乗ルコト實ヲ履ムガ如ク、虛ニ寢ヌルコト、牀ニ處ルガ若シ、雲霧其ノ視ヲ蔽ヘズ、雷霆其ノ聽ヲ亂サズ、神行スルノミ、黃帝既ニ寤メテ怡然トシテ自得シテ曰ク、今至道ノ、情ヲ以テ求ムベカラザルヲ知ルト、又二十有八年ニシテ天下大ニ治マル、幾ンド華胥ノ國ノ若シ、而シテ帝登假ス、登假とは、仙遊するをいふ、

【臥薪】 諸侯自稱曰、
【禍心ヲ包藏ス】 ひそかに他を害せんとする心をい

【花信風】 事文類聚に、江南初春ヨリ初夏ニ至ルマデ、五日ニ一番ノ風候、之ヲ一トイフ、梅花ノ風最モ先ニシテ、桃花ノ風最モ後ナリ、凡テ二十四番、以テ寒絶トナス、桃花は和名「アフチ」センダンの木なり、二十四番を見よ、

【化醇】 醇は厚くして凝るをいふ、氣化する義、易の繫辭に見ゆ(細縷)を見よ、

【火食】 煮て熟したる食なり、禮記に、東方曰夷、被髮文身、有不一者矣、太古は皆生にて食ひしを、燧人

は合なり、また歳時紀事に、七夕俗ニ蠶ヲ以テ嬰兒ノ形ヲ作り、水中ニ浮ベ以テ戯ト爲ス、婦人子ニ宜シキノ祥、之ヲ一トイフ、本ト西域ニ出ヅ、之ヲ摩睺羅トイフと、薛能の吳娃詞に、芙蓉殿上中元日、水拍銀盤弄一、また梵語の一は、無にして忽ち現出するをいふ、法華經に、一切衆生皆以爲一、无有淫欲

【畫聖】 すぐれて類なき畫家をいふ、圓機活法に、北齊ノ楊子華、馬ヲ壁ニ畫ク、毎夕必ズ蹄鬚長鳴ス、號シテ一トナス、

【華清宮】 驪山に在る離宮の名、唐書に、開元五年置、溫泉宮、於驪山、明皇雜錄に、天寶六年、更溫泉曰一、環山列宮室、宮在驪山、唐の崔魯の一の詩に、草遮回磴、絶鳴響、雲樹深深碧殿寒、明月自來還自去、更無人倚玉闌干、とあり、轉結は、同書に、明皇與貴妃、夜倚玉欄、自誓願世爲夫婦、とあるに本づき作りたるなり、儲光義の詩に、霧濕一

【花仙】 「カイダウ」の異名、唐の賈耽、花譜を著し、以海棠爲花中神仙、
【果然】 飽く貌、莊子逍遙遊に、三餐而反、腹猶一、また獸の名、裸に通ず、ラナガザル、宋國史補に、揚州取一、一、數十一、可得

【蝸涎】かたつぶりのよだれの如きしる、蘇軾の句に「一上_ニ綵_ニ」

【瓦全】苟くも全きをいふ(玉ト碎ケテモ)を見よ、

【火前火後】陸游の牡丹記に曰く、開在寒食前者謂_ニ之火前、在寒食後者謂_ニ之火後、寒食の日は、火を禁ずる故に火といふ、

【華族】身分の貴き家すぢ、柳宗元の句に「公以_レ令望_ヲ顯_ス于一_ニ」

【華佗】字は元化、漢の沛國譙の人なり、徐上に遊學し、兼て經史に通じ、養性の術を曉る、年且に百歳ならんとして猶ほ壯容あり、時人以て仙となす、舉辟皆就かず、方藥に精しく處劑數種に過ぎず、針藥の及ばざる所ろは、腹背を解剖し、腸胃を斷截し、その疾を除きて之を縫ひ、傳くるに神膏を以てすれば即ち愈ゆ、曹操頭風を苦む、佗を召して之を鍼せしむ、手に隨ひて瘥ゆ、後ち召せども至らず、竟に害する所ろとなる、

【科第】學術を試驗し、その科目によりて高下の次第を定むるをいふ、漢書元帝紀に「以此_ニ郎從官_ニ」

【禍胎】禍の由りて生ずる、キザシなり、枚乘の書に「禍生有_レ基、禍生有_レ胎、納其_レ基、絕其_レ胎、禍何_レ自來_ニ」

【火宅僧】一定の住家あり、妻をたくはへ、肉を食ふ、な

まぐさ坊主、唐の鄭熊の番禺雜記に「廣中僧有_レ室家_ニ者、謂_ニ之_ニ一_ニ在家僧_ニ同じ、

【果斷】能く事を決行するに勇めるをいふ、書經に「惟克_ニ一_ニ乃罔_レ後艱_ニ」

【和衷】心を和合するなり、書經の皋陶謨に「同寅協恭_ニ一_ニ哉_ニ」の注に「衷ハ中ナリ」

【華蟲】雉の異名、書經の「日月星辰山龍_ニ一_ニ繪_ヲ作_ス」の註に見ゆ、

【花中十友】草木の花を品して十友になぞらふ、事文類聚に「曾端伯花中の十友を品せり、一桂花を以て仙友となし、二蓮花を淨友となし、三海棠を名友となし、四酴醾を韻友となし、五梅花を清友となし、六菊花を佳友となし、七梔子花を禪友となし、八瑞香花を殊友となし、九蘭花を芳友となし、十蠟梅花を奇友となす、異説あり、名花十友を見よ、

【花中神仙】海棠の異名、花木録に「唐ノ相、賈耽、百花譜ヲ著シ、海棠ヲ以テ花中ノ神仙トナス」

【科場】士を登庸する試験場、宋史に「博求_ニ俊彦_ニ於_ニ一_ニ場屋_ニまた文場ともいふ、

【聒聒】多言して人を亂るをいふ、書の盤庚に「今汝_ニ一_ニ解_ニ、無知の貌、また、ヤカマシキ貌、

【活計】生活の計なり、白居易の詩に「莫_レ厭_ニ家貧_ニ活計_ニ微_ニ」

【豁如】心のひろやかなる貌、史記高祖本紀の字面、次之(豁達)を見よ、

【豁達大度】心胸事理に通達し、度量寛大なるをいふ、唐の陸贄の奏議に「漢高_ニ一_ニ、天下之士至者、納用_ニ史記の高祖本紀に「仁而愛_ニ人_ニ、喜_ニ施_ニ、意豁如也_ニ」とあるに本づく、

【括囊】囊の口を括るが如くに、口を閉ぢて言はざるをいふ、易の坤の卦に「六四、括_ニ囊_ニ、无_レ咎_ニ、譽_ニ」とあり、言ふてゝろは若し其の知を晦藏して、囊の口を括りて、露はさざるが如くなれば、則ち咎なきことを得べし、譽とは實に過ぐるの名、謹密是の如くなるときは咎なく、亦譽もなしとなり、

【活潑】勢よくしていき／＼したる貌、殷邁の句に「臆_ニ外_ニ、魚_ニ一_ニ」

【活佛】(生祠)を見よ、

【刮目】刮は摩なり、目を拭ふといふが如し、三國志の吳志呂蒙家傳に「士別三日、當_ニ刮_ニ目_ニ相看_ニ」(復吳下)を見よ、

【闊略】罪をゆるして問はざるをいふ、漢書杜欽傳

【以前黜黜】故見_ニ一_ニ」

【禍梯】禍の「カケハシ」なり、禍階に同じ、史記の趙世家に「母_ニ爲_レ怨府、母_ニ爲_レ禍梯_ニ」

【花朝】提要録に「二月十五日ヲ一_ニトナス高麗_ニコノ月ヲ以テ上元節トナス、今吳ノ俗二月十二日ヲ以テ一_ニト爲_ス」翰墨記には「洛陽ノ風俗二月二日ヲ以テ一_ニト爲_ス」節トナシ、土庶遊玩ス、マタ挑菜節トナス」と、また誠齋詩話には「東京ハ二月十二日ヲ一_ニトイヒ、撰蝶會ヲナス」おもふに支那は國大なり、地方によりて異なるか、

【花鳥ノ使】男女の閉をなかだちする者に借り用ふ、唐書に「帝歲遣使_ニ、采擇_ニ天下_ニ、姝好_ニ、内_ニ之後宮_ニ、號_ニ一_ニ」姝好とは、顔よき女、

【瓜田ニ履ヲ納レズ】嫌疑を避くるに喩ふ、列女傳に「齊ノ威王ノ虞姬、王ニ謂_ツテ曰ク、瓜田ヲ經_ルトキハ履ヲ納_レズ、李園ヲ過_グルトキハ冠ヲ整_ヘズ、妾此ヲ避_ケズ、罪一ナリ」文選の古詩に「君子防未然、不處_ニ嫌疑_ニ、瓜田不_レ納履、李下不_レ整冠_ニ」の註に「納ハ取ナリ、履ヲ取_ラバ、瓜ヲ盜ムカト疑ハレ、冠ヲ正_サバ、李ヲ盜ムカト疑ハル」と、一説に納は、履を「ハキカフルをいふと、

【火斗】「ヒノシ」通俗文に「一曰熨」また熨斗ともいふ。

【科頭】冠などを戴かざるなり「ヌアタマ」史記張儀傳に「虎賁之士、跣跣一云云註に「兜鍪ヲ著ケズシテ敵ニ入ルナリ」と。唐の王維の詩にも「一箕踞長松下白眼看他世上人」

【科斗ノ書】古代の文字をいふ、科斗は蝦蟆の子なり、「オタマジヤクシ」古代は漆を以て簡に書す、故に頭圓大にして、尾細尖、科斗の形に似たり、故にいふ、西京雜記に「叔孫通曰、一也」

【瓜ニ及ブ】任限の満つるをいふ、左傳の莊八年に「齊侯、連稱管至父ヲシテ葵丘ヲ成ラシム、瓜時ニシテ往カシム、曰ク瓜ニ及ンデ代ハラシメン」とあり、今年瓜の熟するときに往かしめ、明年瓜の熟する時、人をして汝に交代せしめんとの義、書言故事に「任滿ツルヲ及瓜トイフ」と、齊世家の註に「及瓜ハ七月ナリ」

【華ニシテ實ナラズ】言の「ハナヤカ」にして、その行に過ぐるをいふ、左傳に「華而不實、怨之所聚也」

【畫ニ六法アリ】事類全書に「畫品ニ曰ク、畫有六法、一曰氣韻生動、二曰骨力用筆、三曰應物象形、四曰隨類賦彩、五曰經營置位、六曰傳移模寫」

【瓜分】地を分つこと、瓜をさり分つ如くする義、漢書賈誼傳に「高皇帝一天下、以王功臣」

【瓦釜雷鳴】瓦釜は聲なきの物、雷鳴は妖怪の聲を爲すをいふ、以て庸人の鼓説して以て衆を驚かすに喩ふ、屈原の卜居に「黃鐘毀棄、一譏人高張、賢士無名」瓦釜は庸下の人にたとへ、雷鳴は衆を驚かすにたとふ、つもらぬ者が勢を得るををさるなり。

【畫餅】畫きし餅は、食ふべからず、以て用ふべからざるに喩ふ、魏志に「盧毓吏部尙書トナル、文帝毓ヲシテ自ラ代ヲ選バシム、曰ク卿ガ如キ者ヲ得バ、乃チ可ナリト、此ヨリ前ニ諸葛誕、鄭襲、等名譽ヲ馳ス、四憲八達ノ諂アリ、帝之ヲ疾ム、詔スラク、選舉ニ有名ノ者ヲ取ルナカレ、地ニ畫イテ餅ヲ作ルガ如シ、啖フベカラザルナリト」

【畫ノ三品】神品、妙品、能品をいふ。

【火伴】仲間の義、琅琊代醉卷十九に、古樂府木蘭の詞を引きて「出門逢一、一皆驚忙」とあり、唐の兵制五人を伍とし、十人を火となすより出てたるなり。

【畫眉】「ホホジロ」なり、花鏡に「狀山雀ニ類シテ大ナリ、毛色蒼黃、兩頰ニ白毛アリ、眉ノ如シ」また支那人眉を削り、更に綠黛を以て假眉を畫く、その巧拙によりて顔容を改め妍醜をなす、柳眉蛾眉遠山眉等の目あり、漢書張敞傳に「婦ノ爲メニ眉ヲ畫ク」

【禍福己ニ由ル】（禍福由己）禍も福も皆自ら招くをいふ、説苑に「禍福非從地中出、非從天上來、己自生之、また淮南子に「禍之來也、人自生之、福來也、人自成之、禍與福同門、利與害爲隣」

【禍福糾纏ノ如シ】（禍福如糾纏）繩を合すを糾といふ、纏は、三合の繩なり、禍福表裏を相爲すこと、三合の繩を糾り合すが如きなり、漢書賈誼傳に「禍之與福、何異糾纏」また史記南越傳に「因禍爲福、成敗之轉、若糾纏」また老子に「禍兮福所倚、福兮禍所伏、孰知其極、鶻冠子にも、この語あり、

【禍福門ナシ】人自ら惡をなせば、其の處、即ち禍の入る門となり、又自ら善をなせば、其の處、即ち福の入る門となり、

【華封ノ三祝】莊子天地篇に「華封人祝堯曰、使聖人壽、使聖人富、使聖人多男子、堯曰辭」

【瓦卜】圓機活法に「唐ノ中宗ノ神龍中、西京ノ壽安縣ニ黒石山ノ神祠アリ、頗ル靈アリ、前ニ兩瓦子有リ、過客之ヲ投ジ以テ休咎ヲトス、仰グヲ吉トナシ、覆フヲ凶トナス」杜甫の詩に「瓦卜傳神語」

【花木ノ妖】唐明皇の時、沈香亭前の牡丹一株、朝には則ち深碧、暮には則ち深黃、夜は則ち粉白、晝夜の閒、顔色各異なり、帝曰く、此れ花木の妖也と、淵鑑類函四百五卷に見ゆ。

【花幔】幔は幕なり、釋名に「幔ハ漫ナリ、漫漫トシテ相連接スルヲイフ」と、一は花が幕を張りたる如く、盛んに開きたるさまなり。

【鶴】水鳥なり、禽經に「鶴仰鳴則晴、俯鳴則陰、又鶴生三子、一爲鶴」とあり、和名「コウヅル」鶴の類にて大さ丹頂の鶴の如く、眼邊黄色にして全身白く翼の下黒し、喬木の上、又は寺院の棟などに栖む、鳴かずしてただ喙を撃ち聲をなす、詩に「一鳴于垤」

【管夷吾】名は仲夷吾はその字なり、齊の襄公無道なり、群弟禍の及ばんことを恐れ、子糾は魯に奔る、管仲之に傳たり、小白は莒に奔る、鮑叔之に傳たり、襄公弟

門となる、皆是れ人の自ら招く所にして、未だ始より門あらざるなりと、左傳の襄二十三年に「禍福無門、唯人所召、荀子にも、禍與福隣、莫知其門」

【夸父日影ヲ追フ】（夸父追日影）己の力を量らずして、大事を企て、中道にして斃るるに喩ふ、列子に「夸父不量力、欲追日影、遂之於隅谷之際、渴欲得飲、赴飲、河渭不足、將走北飲、大澤未至、道渴而死」

【瓜分】地を分つこと、瓜をさり分つ如くする義、漢書賈誼傳に「高皇帝一天下、以王功臣」

【瓦釜雷鳴】瓦釜は聲なきの物、雷鳴は妖怪の聲を爲すをいふ、以て庸人の鼓説して以て衆を驚かすに喩ふ、屈原の卜居に「黃鐘毀棄、一譏人高張、賢士無名」瓦釜は庸下の人にたとへ、雷鳴は衆を驚かすにたとふ、つもらぬ者が勢を得るををさるなり。

【畫餅】畫きし餅は、食ふべからず、以て用ふべからざるに喩ふ、魏志に「盧毓吏部尙書トナル、文帝毓ヲシテ自ラ代ヲ選バシム、曰ク卿ガ如キ者ヲ得バ、乃チ可ナリト、此ヨリ前ニ諸葛誕、鄭襲、等名譽ヲ馳ス、四憲八達ノ諂アリ、帝之ヲ疾ム、詔スラク、選舉ニ有名ノ者ヲ取ルナカレ、地ニ畫イテ餅ヲ作ルガ如シ、啖フベカラザルナリト」

無知のために弑せらる。無知また人の爲めに殺さる。齊人小白を莒に召す、而して魯も亦兵を發して糾を送る。管仲嘗て莒の道を遮り、小白を射て、帶鉤に中つ、小白先づ齊に至りて立つ、これを桓公となす。鮑叔牙管仲を薦めて政を爲さしむ、公怨を置きて之を用ふ。桓公諸侯を九合して、天下を一匡せしは、皆管仲の力なり、孔子曰く、管仲微りせば吾其れ被髮左衽せんと、著すところ、管子八十六篇今ハ十篇ヲ佚スあり、

【巖邑】

巖險にして要害よき邑、左傳隱元年に「制一也」

【關羽】 字は雲長、解の人、蜀の劉備に事へ萬人の敵と稱せらる、前將軍に拜し、節鉞を假り、威華夏に震す、死して神と爲る、

【貫盈】

貫は通なり、盈は滿なり、つらぬきみつる義、書經に「商罪一、天命誅之」

【灌園】

はたけに水をそそぐこと、史記に「爲人、一棺ヲ蓋ヒテ事定マル」(蓋棺事定人の善惡の評は、死後に及びて定まるをいふ人事を見よ、)

【冠ヲ挂ク】

辭職するをいふ(挂冠を見よ、)

【冠ヲ彈ズ】

(彈冠冠上の塵を彈じて、清からしめ、衣を整へて召命を待つ)の意、漢書王吉傳に「王陽在位、貢

公一、王吉字は子陽、故に王陽といふ、貢公は貢禹なり、また蕭育傳に「長安語曰、蕭朱結綬、王貢一、言其相達也、蕭朱は、蕭育と、朱博となり、王貢は、王吉と貢禹となり、

【棺ヲ鬻グ者ハ歲ノ疫センヲ欲ス】 漢書の刑法志に「今ノ獄吏ハ、上下相驅リ、刻ヲ以テ明ト爲ス、深キ者ハ功名ヲ獲、平ナル者ハ後患多シ、諺ニ曰ク鬻棺者欲歲之疫ト、人ヲ憎ンテ之ヲ殺サント欲スルニハアラズ、利、人ノ死ニ在レバナリ」とあり、また韓非子に「與人與ヲ成セバ、則チ人ノ富貴ヲ欲シ、匠人棺ヲ成セバ、則チ人ノ天死ヲ欲スルナリ、與人ノ仁ニシテ、而シテ匠人ノ賊ナルニ非ザルナリ、人貴カラザレバ、則チ與售レズ、人死セザレバ、則チ棺買ハレズ、情、人ヲ憎ムニアラザルナリ、利、人ノ死ニアレバナリ、故ニ后妃夫人太子ノ黨成ツテ、而シテ君ノ死ヲ欲スルナリ、君死セザレバ、則チ勢重カラズ、情君ヲ憎ムニアラザルナリ、利君ノ死ニ在レバナリ、故ニ人主ハ以テ心ヲ己ノ死ヲ利トスル者ニ加ヘザル可カラズ、

【卷ヲ開ケバ益アリ】 宋の太宗詔して太平御覽一千卷を修せしむ、上日に讀むこと三卷、宋琪勞瘁せんとを以て上を諫む、上曰く「開卷有益不爲勞也」

運之明晦、人才之盛衰、其表在政、其裏在學、不佞承乏兩湖、與有教士化民之責、夙夜兢兢、思有所以裨助之者、乃規時勢、綜本末、著論二十四篇、以告兩湖之士、海内君子與我同志、亦所不隱、內篇務本、以正人心、外篇務通、以開風氣、云云、內篇は同心、致忠、明綱、知類、宗經、正權、循序、守約、去毒の九に分つ、外篇は益智、遊學、設學、學制、廣譯、閱報、變法、變科、舉、農工商學、兵學、鑛學、鐵路、會通、非弭兵、非攻敵の十五に分つ、內篇言ふ所る、皆仁を求むるの事なり、外篇言ふ所る、皆智と勇とを求むるの事なり、

【管ヲ以テ天ヲ窺フ】

(以管窺天) 知ること小なるを謙して管窺又は管見といふ、莊子の秋水篇に「是レ直チニ管ヲ用テ天ヲ闚ヒ、錐ヲ用テ地ヲ指スナリ、亦小ナラズ乎」と、漢書の東方朔傳に「窺ヲ以テ天ヲ闚ヒ、蠶ヲ以テ海ヲ測リ、莛ヲ以テ鐘ヲ撞ク」說苑に「譬ハ管ヲ以テ天ヲ窺ヒ、錐ヲ以テ地ヲ刺スガ如シ、窺フ所ノ者甚ダ大ニシテ、見ル所ノ者甚ダ小ナリ」すべて小智淺見に喩ふ、

【官家】

天子をいふ、說苑に「天下ノ官ハ則チ賢ニ讓リ、天下ノ家ハ則チ世世繼グ、故ニ曰ク、五帝ハ、天下ヲ以テ官ト爲シ、三王ハ、天下ヲ以テ家ト爲ス」儒林公議に見ゆる説も、略これに同じ、唐書太宗紀にも「吾母子之命皆託一、」

【飯悞】

むさぼる義、左傳昭元年に「飯歲而悞日」とあり、註に「一皆貪也」と、國語の晉語には「飯を悞に作る、悞も亦貪なり、

【冠蓋相望】

使者など頻頻と往來して、前なるものはかへり、後なる者は往き、車の冠蓋前後相望むをいふ、戰國策に「韓使使者求救於秦、一也」

【勸學篇】

内外二篇に分つ、著者張之洞が、管下の士民に讀ましめんと趣旨にて著す、自序に「竊惟古來世

男、一無可使者急の字甚だ重く、緩の字は軽くして意味アリ。

【頑】心、徳義の經に則らざるを頑となし、口、忠信の言を以てはざるを闇となす、書經堯典に「父頑母闇象傲克諧以孝烝烝乂不格姦象は舜の弟の名、

【款】猶ほ委曲の如し、慇懃なるをいふ、後漢書光武紀に「諸母相與語曰、文叔少時謹言與人不一、唯直柔耳」註に「委曲款誠ナリ、文叔は光武の字、

【冠】玉ノ如シ、冠を飾れる玉は、外麗はしく觀ゆるも、其の中は空虚なり、以て外貌美にして、その實なき者に比す、漢書陳平傳に「平雖美丈夫、如冠玉耳、其中未必有也、一解に才あれども徳なきに喩ふと、

【驩】驩は歡に同じ、虞は樂なり、「ヨロコビタノシム」孟子に「霸者之民、一一如也、

【闕】闕は市の門、闕は市の外門なり、魏都賦に「設一以襟帶、また市の道路をいふ、張衡の西京賦に「廓開九市通闕、闕は一音キ、

【觀】他國の光華たる制度文物等を觀察するをいふ、易經に「觀國之光」とあるに本づく、

【頑】「カタクナ」にしてわるづよきと、元史に「一皆悅服」は暴惡の義、

【棺】棺は屍をおさむる「ハコ」ハダツキノヒツギ、内くわん、柩は棺の外郭「ツハヒツギ」禮の檀弓に「有虞氏瓦棺、夏后氏桴周、殷人一」

【浣花溪】四川省に在り、溪上に杜甫の艸堂あり、一名は百花潭、唐妓薛濤その傍に家し、潭水を以て十色箋を造り、薛濤と號せり、

【鰥寡孤獨】窮民なり、孟子に「老イテ妻ナキヲ鰥トイヒ、老イテ夫ナキヲ寡トイヒ、幼ニシテ父ナキヲ孤トイヒ、老イテ子ナキヲ獨トイフ、此ノ四ノ者、天下ノ窮民ニシテ、告グルコトナキ者ナリ、文王政ヲ發シ、仁ヲ施ス、必ズ斯ノ四者ヲ先ニス」この孟子の解は、禮記の王制にも出づ、

【宦】宦、宮中のおくむきに仕ふる小吏、闕官に同じ、後漢書に「中興之初、一悉用闕人」古は男子の勢なくして、精の閉づるものを用ひたりといふ、

【款】忠誠の貌、楚辭の卜居に「惴惴」とあり、また後漢卓茂魯恭傳贊に「卓魯一、情慇懃、また款は緩に通ず、遲緩なり、杜甫の詩に「點水蜻蜓一飛」

【桓】武さ貌、詩の魯頌に「一于征」

【桓】字は次公、汝南の人、公羊春秋を治む、宣帝の時、擧げられて郎となり、廬江の太守に至る、博通にし

て善く文を屬す、鹽鐵の議數千萬言を集めて書となす、凡そ六十篇、鹽鐵論といふ、大旨皆經世實用の論にして、先王の道述べ、六經の旨に稱ふ、

【款啓】款は空なり、啓は開なり、空の開くが如きは、見る所の小なるをいふ、莊子に「一寡聞之夫」

【觀闕ノ誅】孔子が、少正卯を、兩觀の間に誅せし故事によりて、聖主が不臣の者を誅する義とす、漢書王尊傳に「當伏一之、放於無人之域」

【緩頰】徐かに言ひて、譬喩を引くをいふ、史記魏豹傳に「一往說魏豹能下之吾以萬戶封若」

【管見】見るところの小なるをいふ（管窺）を見よ、

【窺言】空言なり、史記太史公自序に「實中其聲者謂之端、實不中其聲者謂之窺、一不聽姦適不生、漢書司馬遷傳には款言に作る、

【煥乎】「アザヤカ」なる貌、説文に煥は「火光也」乎は語之餘也」と、玉篇に「煥ハ明ナリ」と、論語に「一其有文之章」

【純袴】氷統の袴は、貴戚子弟の服なり、よりに貴族の子を稱して「一子」といふ、漢書敘傳に「出與王許子弟爲群、在綺襦一之閒、王許は王氏と許氏とをいふ、

【款晤】對面してうちとけて話しあふ、蘇頌の句に「首

【與余一】

【換骨奪胎】古人の詩文の意趣を取り、その語句のみを換へて己のものとするなり、黄山谷の説に曰く「詩意窮リナクシテ人ノ才ハ限リアリ、限リアルノ才ヲ以テ窮リナキノ意ヲ追ハバ淵明少陵ト雖モ工ナルヲ得ザルナリ、然レドモ其ノ意ヲ易ヘズシテソノ語ヲ造ル之ヲ換骨法ト謂フ、ソノ意ヲ規模シテ之ヲ形容スル之ヲ奪胎法ト謂フ」と、つまり換骨も奪胎も同じことなり、唐の白居易の詩に、臨風抄秋樹對酒、長年身醉貌如霜葉、雖紅不是春、とあるを、宋の蘇軾がその意を取りて兒童誤喜朱顏在、一笑那知是酒紅とせし如きは「一」の妙を得たるものなり、

【款塞】款は叩くなり、邊塞の門をたたきて通せんとを求むるなり、歸服せんとする義、史記の太史公自序に「重譯一」

【官使】官に任じて人材を使ふをいふ、漢書の董仲舒傳に「可得而一也」

【款識】器物の銘をいふ、款は刻なり、陰字をいふ、凹入の者、款は俗字なり、識は記なり、陽字をいふ、凸出する者、漢書郊祀志に「鼎細小又有「一」また博古圖には「款ハ外ニ在リ、識ハ内ニ在リ、夏ノ器ハ、款アリ識ナ

シ商ノ器ハ款ナク識アリ」と、輟耕錄には「古器識ハ外ニ在リテ凸、款ハ内ニ居テ凹」

【管子】二十四卷、法家に屬す、周の管仲の撰と題すれども、多く管仲死後の事をいふ。蓋し後人の蒐録する所ろにかかる、一人一時の作にあらず、房玄齡の注も亦僞作なるべし、晁氏讀書志には、尹知章の註する所ろとす、この書、記する所ろ、霸者功利の見にして、能く世運の趨勢に應じ、常を變じ窮を通ぜり、牧民形勢、修權等最も誦すべし、明の劉績の管子補註は、舊註を補正して、學者に益あり、安井息軒の管子纂註また參考すべし。

【莞爾】すこしく笑ふ貌にして、喜ぶ意を含めり、論語に子之武城、聞弦歌之聲、夫子莞爾而笑曰、割雞焉用牛刀、その實は喜ばれたるなり。

【願絲】七夕に竹竿に絲をかけて、わが願ひ事を星に祈るなり、白詩に「憶得少年長乞巧、竹竿頭上願絲多」

【圓視】驚き視るなり、過秦論に「天下—而立—一解にめぐり視る義」

【完聚】城郭を完くして、人民を聚むる義、左傳隱元年に「大叔完聚」

【元日朝賀】通典によるに、漢の高祖十月に秦を定む、

遂に歳首とす、七年長樂宮成る、よつて群臣朝賀の儀を制す、武帝改めて夏正を用ひ、寅の月を以て歳首とす、されども元日の慶賀は、もと漢の高祖より始まる。

【貫蝨ノ技】射術の名人を稱す（蝨ヲ貫ク）を見よ、

【信人】駕を主る小臣をいふ、詩の鄘風に「命彼—」

【歡心】悦び樂む心、孝經に「故得人之—」以事其親

【管城子】筆の異名、韓愈の毛穎傳に「毛穎ハ中山ノ人ナリ（中略）獨リ其ノ毛ヲ取り簡牘是レ資ク（中略）秦ノ皇帝湯沐ヲ賜ヒ諸ヲ管城ニ封ジ、管城子ト號シ、日ニ親寵セラル」また文房四譜に「宣城毛元銳字文鋒封管城侯」

【館舍ヲ捐ツ】諸侯または貴人の死をいふ（捐館）を見よ、

【官守】職責に同じ、孟子に「有—者、不得其職、則去、左傳に「慎其—」

【關雎ノ化】關雎は、次項に説くが如く、文王と王妃との和合せしことを詠ぜし詩なり、即ち夫妻琴瑟和調せし徳のために、下民が感化して夫婦の道正しくな

りたるをいふ、

【關雎ハ樂ンデ淫セズ】（關雎樂而不淫）論語八佾篇の語、關雎は詩の周南の篇名、關雎、在河之洲、窈窕淑女、君子好逑云云とあり、關雎とは和らぎ鳴く聲なり、雎鳩は王雎なり、鳥撃にして別あり、洲とは水中居るべき者をいふ、后妃、文王の徳を悅樂して和諧せざるなく、又その色に淫せず慎固幽深にして、雎鳩の別あるが若きをいふ、

【觀世音】救世淨聖また救世菩薩とも稱す、觀音と略稱す、また觀世自在王また觀自在王ともいふ、この菩薩能く世間衆生の音聲を觀じ解脱を得しむ、故に—と名づく、彌陀如來の侍者として西方極樂世界に在りといふ、无量經に「阿難、白佛、彼二菩薩、其號云何、佛言、一名—、二名大勢至、」

【關石和鈞】書經の集傳に「關通、和平也、百二十斤爲石、二十斤爲鈞、鈞與石、五權之最重者也、陳氏師凱曰、五權、銖、兩、斤、鈞、石也」

【渙然】渙は散るなり、釋くるなり、杜預の左傳序に「—冰釋、怡然理順」

【純扇】白さねりぎぬの「ウチハ」江淹の句に「—如團月」

【勸善懲惡】善をすることを勧め、惡をすることを懲し戒むるをいふ、漢書賈誼傳に「慶賞以—、刑罰以—」

【緩帶】おびをゆるく結ぶ、轉じて、心を安んじて息ふ義とす、漢書匈奴傳に「使邊城守境之民、父兄—稚子咽哺、また閑暇迫らざる義とも解す、謝莊の句に「—談笑、擊壤聖世」

【管到】操觚字訣に「—ハ字ノカカリ場ナリ、文章ノ評語ニ、此句管到某處、トイフコトアリ、某ノ處マデカカルトイフコトナリ、此ノ訣ヲシラザレバ作文讀書ニ主意ヲアヤマル事多シ、タトヘバ人ノ屋宅ノ、ソレゾレニ地ドリノアルゴトシ、讀書ニ管到ノ處マデ至ラズシテヨミキレバ、吾屋敷ヲ人ニ奪ハルルガゴトシ、管到ノ處ヲコエテカヘリスグレバ、人ノ屋敷ヲ吾ガ奪フガゴトシ、タトヘバ有、朋自遠方來、トイフガゴトキ、舊點ニハ、朋遠方ヨリ來ルコト有リトヨム、コレハアシ、朋アリトヨミテヨシ、是ハ義理ノ違フコトハナケレドモ、有ノ字朋ノ字バカリニカカリテ、來ノ字マデハカカラズ、故ニ來ル有リトハ點スベカラズ

管到ノ處ヲコユレバナリ、蓋自天降生民、トイフガゴトキハ、舊點ニハ天ヨリトヨム、コレモアシ、天降生

民ヨリト、降ノ字ヨリカヘリヨムベシ、自ノ字下ノ四字マデ管到スレバナリ、況ヤ天降生民ノ四字ハ、揚子法言ニ出ヅル成語ナリ、ソレニ自ノ字ヲ加ヘタルモノナレバ、尙ホモツテ下ヨリ讀ムベシ」

【款段】馬の行くことおそきもの、後漢書馬援傳に「御」註に「款ハ猶ホ緩ノ如シ」とあり、舊唐書にも「常乘一馬」やせつかれたる馬をいふ、

【管仲】（管夷吾）を見よ、

【管中約ヲ窺フ】書言故事に「晉ノ王獻之、年數歲門生ノ糲蒲スルヲ觀テ、曰ク南風競ハズト、門生曰ク此郎亦管中窺豹時見一斑ト、獻之衣ヲ拂ヒテ去ル」註に「糲蒲ハ、雙六ナリ、此郎トハ、門生ガ獻之ヲ指シ、竹管ノ中ヨリ、豹ヲ視ル、一斑點ヲ見ルニ過ギサルノミ、見ル所口極メテ小ナルニ喩フルナリ」と、門生事に勤めず、却て獻之を以て小見となすなり、

【關同】五代の畫人、圖畫見聞志に「一畫山水ニ工ナリ、荆浩ニ從ヒテ學ブ、出藍ノ美アリ」米芾畫史に「同ノ石木ハ畢宏ヨリ出ヅ、枝アリテ幹ナシ」宣和畫譜に「同尤モ喜ンデ秋山寒林トソノ村居野渡幽人逸士漁市山驛トヲ作ル、ソノ見ル者ヲシテ悠然トシテ灞橋風雪ノ中、三峽猿ヲ聞クノ時ニ在リテ、復タ朝市抗塵

【關防ノ印】葛原詩話に「關防トハ、姦ヲ防グトイフ義ニテ、大家ノ詩文、或ハ名家ノ墨蹟ヲ、狡猾ノ輩、之ヲ裂キ取ルアラシコトヲ恐レ、其ノ全幅ナルコトヲ證センガ爲メニ、首ニ之ヲ押スナリ、故ニ關防ノ印ハ自己ノ手蹟ニ、押スベキモノニ非ズ、然レドモ近世之ヲ押スノ意ハ、必ズシモ姦ヲ防グニ限ラズ、只ダ端初ヲ認ムル爲メナリ」と、五雜俎に「其非掌印而給者、謂之關防印方而關防長、以此爲別耳」

【管鮑ノ交】管仲鮑叔二人の善く交りたるをいふ、列子に「管仲嘗テ歎ジテ曰ク、吾少クシテ窮困ナリシ時、嘗テ鮑叔ト賈ス、財ヲ分チテ多ク自ラ與フ、鮑叔我ヲ以テ貪ト、爲サズ我ガ貧ヲ知レバナリ、吾嘗テ鮑叔ノ爲メニ事ヲ謀リテ大ニ窮困ス、鮑叔我ヲ以テ愚ト爲サズ、時ニ利ト不利トアルヲ知レバナリ、吾嘗テ三タビ仕ヘ、三タビ君ニ逐ハル、鮑叔我ヲ以テ不肖ト爲サズ、我ガ時ニ遭ハザルヲ知レバナリ、吾レ嘗テ三タビ戰ヒ三タビ北グ、鮑叔我ヲ以テ怯ト爲サズ、我ニ老母アルヲ知レバナリ、公子糾敗レ、召忽之ニ死ス、吾幽囚セラレテ辱ヲ受ク、鮑叔我ヲ以テ恥ナシト爲サズ、我ガ小節ヲ羞ヂズシテ、名ノ天下ニ顯ハレザルヲ

恥ヅルヲ知レバナリ、我ヲ生ム者ハ父母、我ヲ知ル者ハ鮑叔ナリト」此れにより善く交る者を稱して「一」といふ、

【歡伯】酒の異名、易林に「酒爲一、除憂來樂」

【關白】啓白して關與せしむる義、漢書霍光傳に「諸事皆先一光、然後奏御天子」

【寛ハ以テ猛ヲ濟ヒ、猛ハ以テ寛ヲ濟フ】左傳昭二十一年に「政寛則民慢、慢則糾之以猛、猛則民殘、殘則施之以寛、寛以濟猛、猛以濟寛、政是以和」とあり、孔子の語なり、政寛なるときは、民あなどり狎るるに至る、その時は之をただすに猛を以てし、法を厳しくして之を治む、又あまり政猛きときは民煩はしく、こなはるるなり、その時はまた政を寛かにして之をすくふ、かくの如く寛猛の二つは、政を爲すに互に濟ひあふことなり、

【桓碑彝器】歐文の集古錄目序に見ゆ、木を斲りて石碑の如くし、四に植つ、之を桓といふ、以て棺を下すなり、彝器は宗廟の常器なり、彝は常なり、

【管夫人】元の人、畫史彙傳に「道昇字ハ仲姬、吳興ノ人、趙孟頫ノ室、魏國公ヲ贈ラル、墨竹蘭梅筆意清絶ナリ、晴竹新篁ハ是レソノ始創ニシテ後人ノ模範タリ、亦

山水佛像ニ工ナリ、翰墨詞章學バズシテ能クス、書牘行楷、文敏公ト殆ト同異ヲ辨ズ可カラズ、衛夫人ノ後

【灌佛】 陰曆の四月八日は釋尊の誕生日なれば、その

誕生の像に、香水をそそぐを—會といふ、南史に、四月八日、見衆人—わが國にては仁明天皇の承和七年四月に清涼殿にて始めて—の事を行はるる由、類聚國史に見ゆ、

【玩物喪志】 書經旅葵の語、物ヲ玩(モク)を見よ、

【觀兵】 兵威を示すなり、左傳に、—于周疆(また國語に「輝德不—兵」)

【桓表】 「トリキ」なり、格致鏡原に「縣ノ所治、兩邊ヲ夾ミ各一桓、陳宋ノ俗言、桓ノ聲和ノ如シ、今猶ホ之ヲ和表トイフ、即チ華表ナリ」

【冠冕】 「カンムリ」よりて首領の義とす、任昉の書に「晉中興以來、六世名德、爲海内—」

【灌木】 木の一根よりあつたり生ずるもの、あまり長大とならず、萩山吹の類、詩經の周南に「黃鳥于飛、集于—」

【灌莽】 灌は木の叢生するをいふ、莽は一音「バウ」草深き貌、柳宗元の龍興寺東丘記に「抵丘堦、伏—」

【關龍逢】 桀を諫めしを以て殺さる、相傳ふ安邑の

【寬猛相濟】 (寬猛相濟) 寬猛互に其の弊を濟ひ、優柔に流れず、粗暴に陥いらざる義(寬ハ以テ)を見よ、
【睥目瞞腹】 睥は目の出でて大なる貌、瞞は大腹の貌、眼の突き出て腹の大なるをいふ、左傳宣二年に「睥其目、瞞其腹、乘甲而歸」また蘇軾の蝦蟇詩に「睥目知誰瞞、瞞腹空自脹」
【款門】 款は叩くなり、門を叩きて通せんことを求むるなり、晏子雜篇に「前驅—」また史記商君傳に「由余聞之、款關請見」
【管籥】 笛なり、籥は三孔或は六孔あり、孟子に「百姓聞王之鐘鼓之聲、—之音、—又た二字共に「カギ」なり、禮記の月令に「慎—籥は籥に同じ、」
【冠履ヲ貴ビテ頭足ヲ忘ル】 (貴冠履忘頭足) 本を忘れ、末を重んずるに喩ふ、淮南子の秦族訓に「仁義ハ治ノ本ナリ、今其ノ本ヲ修ムルヲ事トスルヲ知ラズシテ、而シテ其ノ末ヲ治ムルヲ務ム、是レ其ノ根ヲ釋キテ而シテ其ノ枝ニ灌グナリ、且ツ法ノ生ズルヤ、以テ仁義ヲ輔クルナリ、今法ヲ重ンジテ而シテ義ヲ棄ツ、是レ其ノ冠履ヲ貴ンデ而シテ其ノ頭足ヲ忘ルルナリ」
【關龍逢】 桀を諫めしを以て殺さる、相傳ふ安邑の

人なりと、

【寡黙】 呂氏家訓に見ゆ、寡は事を省きて少くするなり、黙は言を慎みて言はざるなり、また寡言沈黙の義にも用ふ、

【貨悖リテ入ル者ハ、亦悖リテ出ツ】 (貨悖而入者亦悖而出) (貨)を見よ、

【華陽隱居】 陶弘景の號なり(山中ノ宰相)を見よ、

【花樣同ジカラズ】 流儀の異なるをいふ、書言故事に「時文別格ナルヲ花樣不同トイフ云云」

【寡欲】 心ざぼり願ふ心を少くする義、多欲の反、孟子に「養心莫善於—」

【畫廊】 系がきて飾れる「ワタドノ温庭筠の句に「縹帙無塵滿—」

【花柳】 「ウタヒメ」遊女をいふ、また狹斜の巷なり、李白の詩に「昔在長安醉花柳、五侯七貴同杯酒」

【火輪】 日をいふ、蔣防の望海日初出賦に「—上碾、燒碧落之氛埃」

【模楯】 (模楯)を見よ、

【臥龍】 龍は靈物なり、起てば必ず爲すとあり、—は英雄の未だ世に用ひられざるに喩ふ、三國志の蜀志諸葛亮傳に「先主屯新野、徐庶見先主、先主器之、謂先

主曰、諸葛孔明臥龍也、將軍豈願見之乎」

【畫龍點睛】 詩文など一字一句を下して、全篇ために生動する如きをいふ、水衡記に「張僧繇于金陵安樂寺、畫四龍于壁、不點睛、每日、點之即飛去、人以爲誕、因點其一、須臾雷電破壁、一龍乘雲上天、不點睛者皆在、」また畫龍不點睛は、事を行ひてその要を缺くに喩ふ、

【蝸廬】 蝸は、カタツムリ—は小屋をいふ、魏志に「焦先字孝然、結草廬於河間、號蝸牛廬、呻吟其中」

【花王】 牡丹の異名、釋名に「錢思公曰ク、人牡丹ヲ謂テ—ト爲ス、今ノ姚黃ハ眞ニ王タリ、魏紫ハ后ノミ、」

錦字箋に「姚黃ハ姚氏ニ出ツルヲ以テ、故ニ名ツク」

ケ

【偈】梵語に伽陀といふ、西域記に「伽陀ハ唐ニハ頌トイフ、諸經ニ五字七字句ヲ爲スコト同ジカラズト雖モ、皆四句ヲ以テ一偈ト爲セリ」梵一妙一遺一等と熟す、

【磬】玉または石にてつくる、一種の樂器、五經要義に「ハ立秋ノ樂ナリ」と、白虎通に「ハ夷則ノ氣萬物ノ成ルニ象ドル」と、世本に「無句一ヲ作ル註に「無句ハ堯ノ臣ナリ」と、樂府錄には「磬叔ガ造ルトコロナリ」とあり、

【閨愛】「ムスメ」の子をいふ、輟耕錄に「宇文公諒少時嘗館巨室、其一中夜來奔、堅拒不納」

【經緯】經は織物の「タテ」緯は横絲、一は「タテ」又「キ」相錯綜して布帛を織り成すにより、轉じて物の秩序を立ててよく整へ、正す義とす、左傳に「禮上下之紀、天地之—也」また南北の道、之を經と謂ひ、東西の道之を緯と謂ふと、周禮天官冢宰の體國經野の疏に見えたり、

【京尹】京兆尹の略にて、京都所司代と職掌畧同じきにより、所司代の唐名として用ふ、所司代の職は、宮闕を守護して關西を控制するに在り、

【鯨飲】大に酒を飲むをいふ、杜甫の飲中八仙歌に「左相日與費萬錢、飲如長鯨吸百川」

【涇渭分ル】涇水は濁り渭水は清む、合流三百里、清濁混ぜず、借りて物事の區別明かに定まるに喩ふ、蘇軾の句に「胸中—」拾遺の（涇渭）を見よ、

【倪迂】（倪雲林）を見よ、

【奎運】文運に同じ、奎は星の名なり、二十八宿の一、孝經援神契に「奎主文昌」

【卿雲】或は慶雲に作り、また景雲に作る、太平の瑞氣なり、西京雜記の註に「雲ノ五色ナルヲ慶トイフ」史記天官書に「若、煙非煙、若、雲非雲、郁郁紛紛、蕭索輪囷是謂—、—見、喜氣也」註に「正義ニ曰ク、卿音慶」また漢書の禮樂志に「甘露降、慶雲集」また晉書の天文志に「景雲太平之應」

【景雲】前の（卿雲）を見よ、

【慶雲】（卿雲）を見よ、

【鷄雲中ニ鳴ク】事文類聚に「淮南王安、仙シ去ルニ臨ミ、餘藥鼎中ニ在リ、鷄犬之ヲ祇メテ竝ニ飛昇スルヲ

得タリ、故ニ鷄ハ雲中ニ鳴キ、犬ハ天上ニ吠ユトイフ」この事は、もと神仙傳に出づ、

【倪雲林】元の無錫の人、名は瓊字は元鎮、雲林はその號、博學にして古を好み、詩畫に工なり、性甚だ狷介にして、潔を好み、人號して倪迂といふ、家もと資産に富む、一旦舍て去りて曰く、天下事多しと、乃ち五湖三卯の間に往來す、人之を望むに仙の如しと、雲林遺事に「元鎮僧寺ヲ好ミ、一タビ住スレバ必ズ旬日、篝灯木榻、蕭然トシテ晏坐ス、時ニ紙筆ヲ操リ竹石小景ヲ作ル、客求ムレバ必ズ與フ、一時好事者之ヲ購フ、價數十金ニ至ル云云」また曰く「顧謹中云フ、倪迂初メ董源ヲ以テ師トナス、晩年ニ及ビ愈益精詣ス、古法ヲ一變シ天真幽淡ヲ以テ宗ト爲ス、所謂漸ク老イテ漸ク熟スル者、若シ北苑ニ從ヒテ基ヲ築カザレバ、ココニ到ルコト容易ナラザリシノミト」

【經營】經は「ナハバリ」をして、其の創造の基礎を定むるなり、營は其の向背のよろしきを正すなり、詩經の大雅に「經始靈臺、經之營之」の註に「經ハ度はかるナリ」又「ヲサメイトナム」意にも用ふ、

【形影相弔ス】己が形と、かげとが互にあはれみ、とぶらふ義にて、孤立してさびしくあるさま、李密の陳情

表に「鞞々獨立、—」

【瓊瑤】美しくしき玉の名、詩の衛風に「投我以—木桃、報之以—」

【經筵】品字箋に「帝王ノ講席ヲ—トナス」事類全書に「伊川—ニ在リ、文潞公嘗テ呂范諸公ト入テ—ニ侍ス、先生ノ講説ヲ聞イテ、退テ相與ニ歎ジテ曰ク眞ノ侍講ナリト」

【經ヲ帶ビテ鋤ク】漢書ノ兒寬傳に「寬治尙書、貧無資用、帶經而鋤、息則誦讀」

【桂ヲ折ル】科擧に及第せしをいふ（折桂）を見よ、

【雞ヲ割クニ焉ゾ牛刀ヲ用ヒン】小事を處するに、大器を用ひざるに喩ふ、論語陽貨篇に「子、武城ニ之キテ弦歌ノ聲ヲ聞ク、夫子莞爾トシテ笑テ曰ク、割雞焉用牛刀、—弦は琴瑟なり、時に子游武城の宰たり、禮樂を以て教と爲す、故に邑人皆弦歌せるなり、莞爾は少しく笑ふ貌、蓋し之を喜びてなり、因つて言ふ、其の小邑を治むるに、何ぞ必ずしも、此の大道を用ひんと、戲れて言はれたれど、其の實は深く喜ばれたるなり、

【經ヲ説キ席ヲ奪フ】（說經奪席）後漢書儒林傳に「正旦ニ朝賀ス、帝群臣ノ能ク經ヲ説ク者ヲシテ、更ル—相難詰セシム、義、通ゼザル有レバ輒チ其ノ席ヲ

奪ヒ、以テ通ズル者ニ益ス、戴憑遂ニ五十餘席ヲ重ネ坐ス、故ニ京師語シテ曰ク、解經不窮戴侍中ト

【慶ヲ放ツヲモテ、託國ノ仁ヲトル】 駿臺雜話「天下の寶」の條に見ゆ、こは韓非子の説林に「孟孫獵シテ鹿ヲ得タリ、秦西巴ヲシテ之ヲ載セテ持チ歸ラシム、其ノ母之ニ隨ヒテ啼ク、秦西巴忍ビズシテ之ヲ與フ、孟孫歸リ至リテ鹿ヲ求ム、答ヘテ曰ク、余忍ビズシテ其ノ母ニ與ヘキト、孟孫大ニ怒リテ之ヲ逐フ、居ル三月復召シテ以テ其ノ子ノ傳ト爲ス、其ノ御ノ曰ク、曩ニハ將ニ之ヲ罪セントシ、今ハ召シテ以テ子ノ傳ト爲スハ何ゾヤト、孟孫曰ク、夫レ鹿ニ忍ビズ、又且、吾ガ子ニ忍バンヤト」あるをいふ、託國の仁とは、太子の傳となりて、忍びざるの仁徳あるをいふ、この話は劉向説苑にも見ゆ、ただ居三月を、居一年となすのみ、

【鯨音】 梵鐘の聲なり、祖庭事苑に「鯨ハ魚ノ名、海中ニ生ズ、雄ヲ鯨トイヒ雌ヲ鯢トイフ(中略)常ニ五月ヲ以テ岸ニ就キテ數萬ノ子ヲ生ム、八月ニ至リテ子ヲ引キ海ニ還ル、浪ヲ鼓シテ雷ヲ成シ、水ヲ噴キテ雨ヲ成ス(中畧)物類相感志ニ云フ、海岸ニ獸アリ、蒲牢ト曰フ、性鯨魚ヲ畏ル、海畔ニ食スルニ、鯨或ハ躍レバ蒲牢則チ鳴ク、聲鐘ノ如シ、今ノ人多ク蒲牢獸ノ形ヲ狀シ

ケテ語ル、終日甚ダ相親シム」また史記の魯鄒列傳に「諺ニ曰ク、白頭如新傾蓋如故」とある註に「傾蓋トハ道ヲ行クニ相遇ヒテ車ヲ並ベテ對話シ、兩蓋相切シテ小シク敬ツノ義とあり、白髪になるまで交りても昨今新たに交りたるが如きものあり、又一度相遇ヒテ蓋を傾けて語りたるのみにても、故人(フルキナジミ)の如きものもありとの意なり、

【警歎】 言笑なり、列子黃帝篇に「一疾言とあり、また一シハブキ、セキバラヒ」の義、北史に「一爲洪鐘」人に接するを一に接すといふは、謙しいへるなり、

【形骸ヲ土木ニス】 (土木形骸) 外貌をかざらざる義、晉の嵇康字は叔夜、風度あり、形骸を土木にし、自ら藻飾せず、人以爲らく龍章鳳姿天質自然なりと、

【荆浩】 五代の畫人、五代名畫補遺に「字ハ浩然、經史ニ博通ス、五季多故ナリシカバ、太行ノ洪谷ニ隱レ、自ラ洪谷子ト號ス、嘗ニ山水樹石ヲ畫キ以テ自ラ適ス」圖畫見聞志に「浩嘗テ人ニ語リテ曰ク、吳道子ノ山水ハ筆アリテ墨ナシ、項容ハ墨アリテ筆ナシ、吾レ當ニ二子ノ所長ヲ采リテ一家ノ體ヲ成スベシト」

【嵇康】 字は叔夜、晉人、性遠邁にして不群なり、魏の宗室と婚す、中散大夫に拜せらるれども、就かず、常に琴

テ、鐘上ニ施シ、櫓ヲ斲リ、鯨ト爲シテ之ヲ擊ツ、鯨ハ本聲ナシ、鯨ノ躍ルニ因リテ蒲牢鳴ク、故ニ一ト曰フ

【荆軻】 衛の人、燕の太子丹之を客とし、荆卿と稱す、軻をして秦王を劫かし、諸侯の侵地を反さしめんとす、去るに臨み、賓客皆白衣冠し、送つて易水に至る、高漸離筑を擊ち、荆卿和して歌つて曰く、風蕭々兮易水寒、壯士一去兮不復還、と、復羽聲を爲す、士皆目を瞠らし、髮盡く冠を指す、秦に入り、事成らずして死す、

詠荆軻 燕丹善養士、志在報強嬴、招集百夫良、歲暮得荆卿、君子死知己、提劍出燕京、素驥鳴廣陌、慷慨送我行、雄髮指危冠、猛氣衝長纓、飲饒易水上、四座列群英、漸離擊悲筑、宋意唱高聲、蕭蕭哀風逝、淡淡寒波生、商音更流涕、羽奏壯士驚、心知去不歸、且有後世名、登車何時顧、飛蓋入秦庭、凌厲越萬里、逶迤過千城、圖窮事自至、豪主正怔營、惜哉劍術疎、奇功遂不成、其人雖已沒、千載有餘情、

【傾蓋】 車を駐め蓋キヌガサを傾けて相語るなり、家語致思篇に「孔子郊ニ之ク、程子ニ途ニ遭ヒ、蓋ヲ傾

を彈じ、詩を詠じて自ら足るとす、後ち語を以て害せらる、世に一一阮籍山濤向秀劉伶王戎阮咸の七子を竹林七賢と稱す、康、また書を善くし、草書に妙にして、自ら一家を爲す、文選の一一與山濤書に「遊山澤、觀魚鳥、心甚樂之、一行作吏、此事便廢形骸」を見よ、

【谿壑ノ慾】 大いなる「タニ」の深さが如くに、慾ふかくして飽さざることを知らざるをいふ、國語に「谿壑可盈、是不可厭」

【閨閣ノ内】 寢處をいふ、臥内に同じ、史記列傳に「汲黯多病、臥一室」

【啓籠】 籠は字典に「浮圖塔、一曰塔下室とあり、一一は俗の開扉、又は開帳に同じ、睽車志に「人輸百錢、乃爲一一」

【經函】 佛教の經文を入れたる「ハコ」洛陽伽藍記に「一一至今猶存」

【傾葵】 葵の日に傾く如く、心を傾けて之に向ふ義、曹植の表に「葵藿之傾葉太陽、雖不同光、然向之者、誠也」

【經紀】 「ナカガヒ」スハヒ海篇上層に「一一牙人也」と、牙家、牙行皆同じ、また通じおさむる義、淮南子に「一一山川」

【經義】 經書の意義、經書とは聖人の手に成りたる書をいふ、十三經の類、後漢書に「爲人質直守一」

【輕騎】 人馬共に甲冑を著けざるをいふ、

【稽疑】 書經洪範の七を「一」といふ、稽は考なり、疑ふ所るあれば卜筮して以て之を考ふるなり、

【勁弓】 はりつよき弓、漢書に「可賜之堅甲及一利矢」

【瓊瑤】 瓊は美玉なり、瑤は佩玉の名、よき贈物をいふ、詩經の衛風に「投我以木瓜、報之以瓊瑶、人我に贈るに微物を以てすれば、我は當に之に報ゆるに重寶を以てすべしとなり、また詩文の字句の美なるに喩へていふ、錢起の詩に「詞律響一李純甫の詩に「字不減瓊瑤」

【桂玉】 他國にありて桂よりも貴き薪と、玉よりも貴き食とにて辛くも生活する義、戰國策に「蘇秦曰、楚國之食、貴於玉、薪貴於桂、調者難得見、如鬼、王難得見、如天帝、今令臣食玉炊桂、因鬼見帝、」桂玉の艱とは、都に遊學して、辛苦するにも用ふ、

【荆棘】 「イバラ刺多し、以て讒賊に喩ふ、楚辭に「一聚而成林、」

【桂花】 (木犀)を見よ、

【菊花】 「アザミの花、また「マユハギ」ともいふ、大菊小菊、飛廉の三品あり、大菊は多く山に生ず、釋名に虎菊、馬菊といふものこれなり、小菊は多く野に生ず、その花賞すべし、飛廉は和名、オニノマユハギといふものこれなり、

【契闊】 隔遠の義、俗にいふ無沙汰なり、詩經の鄘風に「死生契闊、與子成說、執子之手、與子偕老、」また漢書范丹傳に「行路急卒非陳契闊之所」

【螢火亂飛】 飛ビテト、ロズサブ、十訓抄第一に見ゆ、唐の元稹の夜坐七律の腹聯に「螢火亂飛秋已近、辰星早沒夜初長、」とあるを斥す、元氏長慶集卷の二十に出づ、辰星は北辰なり、この星、夏夜は光、他の衆星にまさりて明かなるも、秋に至れば光も薄らぎ早く没すといふ、

【挂冠】 (一)を見よ、

【罄歎】 歎を盡すをいふ、罄は盡なり、一は竭歎に同じ、詩經の小雅の字面、

【兒寬】 千乘の人、尚書を治む、家貧くして賃作し、經を帯びて鋤く、漢の武帝の時、射策を以て掌故となり、左内史に遷る、吏民大に之を信愛す、世務に通じ、文法に明習し、經術を以て吏事を縁飾す、後ち御史大夫となる、

【稽古】 稽は考なり、古道を考ふるをいふ、書の堯典に「稽古帝堯、」とあるに出づ、事類全書に「後漢ノ桓榮、太子ノ少傅トナル、輜車乗馬ヲ賜フ、榮諸生ヲ大會シテ、其ノ車馬印綬ヲ庭ニ陳ネテ曰ク、今日蒙ル所、一ノ力ナリ、勉メザル可ケンヤト」

【嘖語】 夢中に知らずして發する語、ネゴト「タハコト」拾遺記に「呂蒙嘗テ孫策ノ牀上ニ在リテ酣醉ス、忽チ臥シテ夢中ニ周易一部ヲ誦ス、俄ニシテ驚キ起ツ、衆皆イフ、呂蒙ハ嘖語モ周易ニ通ズト」嘖、寐語、睡語皆同じ、

【惠肯】 人を招請するを、仰覲「一」といふ、詩の終風に「惠然肯來」とあるに本づく、惠は順なり、

【轡控】 馬を馴するを轡といひ、馬を止むるを控といふ、詩經に「抑一忌、抑縱送忌」忌は語助なり、

【雞口】 小さなものの長となるに喩ふ、寧ろ「一」を見よ、

【雞狗馬之血】 史記の毛遂至楚定從の條に見ゆ、凡て

【鮠桓ノ審】 太平記卷二十四に見ゆ、鮠は鯨なり、桓は盤桓なり、一解に桓も魚の名なりと、審はたまり水淵をいふ、莊子應帝王に「鮠桓之審、爲淵、止水之審爲淵、流水之審爲淵」

【荆溪】 晉陵に在り、天台宗の妙樂大師ここに住す、故に大師を「一尊者ともいふ、

【卿卿】 妻、夫を稱していふ、「アナタ」世説に「王安豊ノ妻、常ニ安豊ヲ卿トス、豊曰ク、婦人婿ヲ卿トス、禮ニ於イテ不敬トナス、後復スルナカランノミト、妻曰ク、卿ヲ親ミ卿ヲ愛ス、是ヲ以テ卿ヲ卿トス、我卿ヲ卿トセズンバ、誰レカ復タ卿ヲ卿トセント」

【熒熒】 微微たる光をいふ、説苑に「一不滅、またさらくと明らかに光る貌、阿房宮賦に「明星一」

【鞞鞞】 憂ふる意、また單也、左傳哀十六年、「一余在疚、憂ふる意、鞞鞞に同じ、詩經の小雅に「憂心一」

【惇惇】 憂ふる意、鞞鞞に同じ、詩經の小雅に「憂心一」

【醯醢裏ノ天】 見る所の小なるを「一」といふ、莊子田子方篇に「孔子、老聃ニ見エ、顔回ニ告ゲテ曰ク、丘ノ道ニ於ケルヤ、ソレ猶ホ醯醢ノ如キカ、夫子ノ吾ガ覆ヲ發スル微セバ、吾豈天地ノ大全ヲ知ラシヤト」蚊蚋の醯醢中に聚れるを醯醢といふ、孔子いふ、丘の道に於けるや、蚊の醯中に居るが如く、道の大

を知らざりき、夫子即ち老子の我が蒙を發するなきときは、吾れ能く大觀して、天地の大全を知らんやと、劉師道の詩に「一醯醢は「ヌカガ」の類、列子の天瑞にも「醯醢生乎酒」

【稽古】 稽は考なり、古道を考ふるをいふ、書の堯典に「稽古帝堯、」とあるに出づ、事類全書に「後漢ノ桓榮、太子ノ少傅トナル、輜車乗馬ヲ賜フ、榮諸生ヲ大會シテ、其ノ車馬印綬ヲ庭ニ陳ネテ曰ク、今日蒙ル所、一ノ力ナリ、勉メザル可ケンヤト」

【嘖語】 夢中に知らずして發する語、ネゴト「タハコト」拾遺記に「呂蒙嘗テ孫策ノ牀上ニ在リテ酣醉ス、忽チ臥シテ夢中ニ周易一部ヲ誦ス、俄ニシテ驚キ起ツ、衆皆イフ、呂蒙ハ嘖語モ周易ニ通ズト」嘖、寐語、睡語皆同じ、

【惠肯】 人を招請するを、仰覲「一」といふ、詩の終風に「惠然肯來」とあるに本づく、惠は順なり、

【轡控】 馬を馴するを轡といひ、馬を止むるを控といふ、詩經に「抑一忌、抑縱送忌」忌は語助なり、

【雞口】 小さなものの長となるに喩ふ、寧ろ「一」を見よ、

【雞狗馬之血】 史記の毛遂至楚定從の條に見ゆ、凡て

盟には性を用ふ、天子は牛馬、諸侯は犬豕、大夫以下は雞を用ふ、今總て盟ふ、故に鶏狗馬の血といふ、

【傾國】傾城ともいふ、妖美なる女をいふ、詩經に「哲夫成城、哲婦傾城」また漢書外戚傳に「北方有佳人、絕世而獨立、一顧傾人城、再顧傾人國、寧不知傾城與傾國、佳人難再得」詩經のは褒姒を斥し、漢書のは李夫人を斥す、白樂天の長恨歌に「漢皇重色思傾國」

【經國ノ大業】文章をいふ(文章ハ)を見よ、

【蟪蛄春秋ヲ知ラズ】(蟪蛄不知春秋)莊子に見ゆ、生命の短きものをいふ、蟪蛄は蟬の一種「ナツゼミ」ムギハラゼミ」詩疏に「三輔以西ハ蟪蛄トナシ、梁宋以東ハ蟪蛄トナシ、楚地ハ之ヲ蟪蛄トイフ」と、本草に「陶弘景曰ク、蟬ノ類甚ダ多シ、四五月鳴キ、小ニシテ紫青色ノ者ハ蟪蛄ナリト」

【稽古ノ力】古の事をかんがへ究めたる功をいふ、學問の力といふに同じ、後漢書に「以榮爲少傅、賜以輜車乘馬、榮大會諸生、陳其車馬印綬、曰、今日所蒙、稽古之力也、榮は桓榮、

【景差】周の楚の公族にして大夫たり、宋玉、唐勒と襄王に事ふ、賦を善くす、

【祝座】佛座なり、師子座に同じ、祖庭事苑に「祝ハ發祝ナリ、師子ノ屬ナリ、西方王者ノ所坐ノ座ナリ、猶ホ中國ノ龍牀ノ如キナリ(中略)佛ハ人中ノ師子タリ、佛ノ所坐ノ座、若クハ牀、若クハ地、皆師子座ト名ヅク」

【經濟ノ才】國家を治むる才をいふ、類書纂要に「人才ヲ稱シテ經濟ノ才トイフハ、邦ヲ經リ世ヲ濟フノ才ヲ謂フナリ」

【稽顙】禮記の檀弓に見ゆ、註に「稽顙トハ、頭ヲ以テ地ニ觸ル、哀痛ノ至ナリ、類は類なり、類を地につくる義、喪拜の禮なり、儀禮士喪禮に「主人哭拜」

【警策】文選の陸機の文賦に「立片言而居要、乃一篇之」註に「片善ノ言ヲ立テテ、以テ要節ニ居ク、乃チ能ク一ト爲ス、警ハ驅リ動カス貌、策ハ以テ馬ヲ擊ツベキ者、ムチ謂フハ片善ノ言、一篇ヲ光益スルコト、亦猶ホ策ヲ以テ馬ヲ擊チテ、其ノ警動ヲ得ルガゴトキナリ」と、即ち文中に人の注意を惹き起すべき語句を挿みて、文勢を盛んならしむること、疲れたる馬に鞭うちて勇ましむるが如くするをいふ、

【倪瓚】(倪雲林)を見よ、

【荆山ノ璞】璞は玉の未だ治めざるもの(和氏ノ璧)を見よ、

【兄事】他人をわが兄の如くに敬ひ事ふる義、禮記に

者、謂之弟、形而下者、謂之器、形而上とは、無形なり、道は無形の者なり、形而下とは、有形をいふ、器は有形の者なり、而は助字なり、

【瓊枝梅樹】蘇林伐山故事に「佛經云、瓊枝寸寸是玉、梅檀片片皆香」註に「之ヲ聖賢ニ比スルニ、德ノ備ハラザルコト無カラントラ欲シ、之ヲ詩文ニ喻フルニ、字ノ工ナラザルコト無カラントラ欲スルナリ」

【稀侍中ノ血】晉書に「惠帝ノ時、稀紹侍中タリ、會、河間成都二王兵ヲ擧グ帝既ニ蒙塵シ、軍衛皆潰散ス、紹身ヲ以テ御筵ヲ捍グ、飛矢雨ノ如ク集ル、遂ニ害ニ遇フ、血帝ノ衣ニ濺グ、左右之ヲ浣ガント請フ、帝ノ曰ク、此レ稀侍中ガ血ナリ、之ヲ去ルコト勿レト」(稀紹)を見よ、

【雞人】平家物語卷六に「一曉を唱ふる聲明王の眠を驚す」とあり、都良香の漏刻の詩に「一曉唱聲驚明王之眠、烏鐘夜鳴、響徹暗天之聽」とあり、御垣守が「火危シ」と唱へつつ、夜廻をするを「一」といふ、周禮春官に「一掌共雞牲辨其物、大祭祀夜嘯且以詔百官」と見ゆ、廣絶交論にも「一始唱、鶴蓋成陰」

【傾城】美しき遊女をいふ(傾城)を見よ、

【霓裳羽衣ノ曲】仙樂をいふ、書言故事に「龍神錄云、八

十年以長、則一之

【京師】京は大、師は衆、大衆の居る所、天子の都なり、公羊傳に「一者何、衆大也、漢書儒林傳に「教化之行也、建首善、自一始、由内及外」

【桂子】人の子を稱していふ、五代史に「竇禹鈞ノ五子、儀儼、僊、僉、俱ニ及第ス、五龍ト號ス、馮道詩ヲ贈リテイフ、燕山竇十郎、教子有義方、靈椿一株老、丹桂五枝芳」第三句は禹鈞を讚し、末句は五子の俱に及第せしを讚す、及第をば天に登り、月に歩し、手づから仙桂を攀ぶといふに由る、

【經始】「フシン」を始むるをいふ、成語考に「土木方ニ典ルヲ、一トイフ」(經營)を見よ、

【攜貳】携は離なり、貳は疑なり、そひき離れて信ぜざるをいふ、左傳に「我德、則睦否、則一」また國語に「百姓一」

【閨秀】賢婦をいふ、晉書に「王夫人、神情散朗、故有林下風氣、顧家婦、清新玉映、自是閨房之秀」

【勁秋】風氣のはげしき秋の期節をいふ、文選の文賦に「悲、落葉于一一」

【輕舟已ニ過グ萬重ノ山】(朝ニ辭ス)を見よ、

【形而上】無形の道をいふ、易の繫辭上傳に「形而上

ナリ、師子ノ屬ナリ、西方王者ノ所坐ノ座ナリ、猶ホ中國ノ龍牀ノ如キナリ(中略)佛ハ人中ノ師子タリ、佛ノ所坐ノ座、若クハ牀、若クハ地、皆師子座ト名ヅク」

【經濟ノ才】國家を治むる才をいふ、類書纂要に「人才ヲ稱シテ經濟ノ才トイフハ、邦ヲ經リ世ヲ濟フノ才ヲ謂フナリ」

【稽顙】禮記の檀弓に見ゆ、註に「稽顙トハ、頭ヲ以テ地ニ觸ル、哀痛ノ至ナリ、類は類なり、類を地につくる義、喪拜の禮なり、儀禮士喪禮に「主人哭拜」

【警策】文選の陸機の文賦に「立片言而居要、乃一篇之」註に「片善ノ言ヲ立テテ、以テ要節ニ居ク、乃チ能ク一ト爲ス、警ハ驅リ動カス貌、策ハ以テ馬ヲ擊ツベキ者、ムチ謂フハ片善ノ言、一篇ヲ光益スルコト、亦猶ホ策ヲ以テ馬ヲ擊チテ、其ノ警動ヲ得ルガゴトキナリ」と、即ち文中に人の注意を惹き起すべき語句を挿みて、文勢を盛んならしむること、疲れたる馬に鞭うちて勇ましむるが如くするをいふ、

【倪瓚】(倪雲林)を見よ、

【荆山ノ璞】璞は玉の未だ治めざるもの(和氏ノ璧)を見よ、

【兄事】他人をわが兄の如くに敬ひ事ふる義、禮記に

者、謂之弟、形而下者、謂之器、形而上とは、無形なり、道は無形の者なり、形而下とは、有形をいふ、器は有形の者なり、而は助字なり、

【瓊枝梅樹】蘇林伐山故事に「佛經云、瓊枝寸寸是玉、梅檀片片皆香」註に「之ヲ聖賢ニ比スルニ、德ノ備ハラザルコト無カラントラ欲シ、之ヲ詩文ニ喻フルニ、字ノ工ナラザルコト無カラントラ欲スルナリ」

【稀侍中ノ血】晉書に「惠帝ノ時、稀紹侍中タリ、會、河間成都二王兵ヲ擧グ帝既ニ蒙塵シ、軍衛皆潰散ス、紹身ヲ以テ御筵ヲ捍グ、飛矢雨ノ如ク集ル、遂ニ害ニ遇フ、血帝ノ衣ニ濺グ、左右之ヲ浣ガント請フ、帝ノ曰ク、此レ稀侍中ガ血ナリ、之ヲ去ルコト勿レト」(稀紹)を見よ、

【雞人】平家物語卷六に「一曉を唱ふる聲明王の眠を驚す」とあり、都良香の漏刻の詩に「一曉唱聲驚明王之眠、烏鐘夜鳴、響徹暗天之聽」とあり、御垣守が「火危シ」と唱へつつ、夜廻をするを「一」といふ、周禮春官に「一掌共雞牲辨其物、大祭祀夜嘯且以詔百官」と見ゆ、廣絶交論にも「一始唱、鶴蓋成陰」

【傾城】美しき遊女をいふ(傾城)を見よ、

【霓裳羽衣ノ曲】仙樂をいふ、書言故事に「龍神錄云、八

月望日 唐明皇與申天師遊月宮寒氣逼人霜露露衣過一大門在玉光中見一大府榜曰廣寒清虛之府少前見素娥十餘人皓衣乘白鸞笑舞於廣庭大桂樹下樂音清麗上皇歸製霓裳羽衣曲

【稽首】 荀子の大畧篇に「平衡曰拜下衡曰稽首至地曰稽類平衡とは頭と腰と、衡の平かなるが如くするをいひ、稽首とは頭を屈して地に至るをいふ、書經にも「王拜首稽首」とあり、

【桂樹】 その皮は肉桂と稱し、香氣多くして藥種とす、支那の古傳説に、月中に桂ありといふ、酉陽雜俎に「月中有桂高五百丈、下有一人常斫之、樹創隨合云云」駱賓王の句に「桂子月中落、天香雲外飄」また白居易の句に「偃蹇月中桂、結根依青天」古今集にも、久方の月の桂も秋はなほ紅葉すればや照りまざるらむ前の(霓裳羽衣)を參看せよ、

【瓊樹】 人品の高潔に喩ふ、江淹の詩に「願一見顏色、不異一枝瑤林」を見よ、

【稽叔夜】 (嵇康)を見よ、

【經術】 術は、藝なり、業なり、經學をいふ

【雞黍】 飯をわづらはすを「雞黍」といふ、漢の范巨卿、張元伯と友たり、春、京師に至り、秋に至り訪はん

延年上ニ侍ス、起舞シテ歌ヒテ曰フ、北方ニ佳人アリ、絶世ニシテ獨リ立テリ、一タビ顧ミレバ人ノ城ヲ傾ケ、再ビ顧ミレバ人ノ國ヲ傾ク、寧ロ傾城ト傾國トヲ知ラザランヤ、佳人再ビ得難シト、上嘆息シテ曰ク、善シ、世豈ニ此ノ人アラランヤト、平陽主因ツテ言フ、延年女弟アリト、上乃チ之ヲ召見ス、實ニ妙麗ニシテ善ク舞フ、是ニ由ツテ幸セラルルヲ得、一男ヲ生ム、是ヲ昌邑ノ哀王ト爲ス

【雞聲茅店ノ月】 (人跡板橋)を見よ、
【景星鳳凰】 景星はめてたき星、鳳凰は四靈の一、以て賢人に喩ふ、韓愈の與李拾遺書に「朝廷之士引頸東望若一」之始見也、爭先觀之以爲快
【嵇紹】 晉の人、字は延祖、康の子、母に事へて孝なり、累官して侍中に至る(稽待中)を見よ、
【磬折】 腰をかかむると、禮記の曲禮に「立則一垂佩」疏に「臣ハ身宜シク僂折磬ノ背ノ如クナルベシ、故ニ一トイフ」磬の形はその背は屈して兩頭は垂る、人の腰を屈めたるに似たり、故にいふ、

【螢雪ノ功】 勤學の功をいふ、晉書に「車胤字ハ武子、幼ニシテ恭勤博覽、貧ニシテ常ニ油ヲ得ズ、夏月練囊ヲ以テ、數十ノ螢火ヲ盛リ、書ヲ照シテ之ヲ讀ム、夜

と期す、元伯九月十五日に雞を殺し、黍をつくり以て待つ、母曰く、千里何ぞ期することの審かなるやと、元伯曰く、巨卿は信士なりと、言未だ畢らざるに巨卿至る、母大に悦ぶ、また論語の微子篇に「荷蓑丈人止子路宿殺雞爲黍而食之」
【啓處スルニ違アラズ】 啓は跪、處は居なり、家に安坐して居る暇なきをいふ、詩經に「王事靡盬不遑啓處」左傳に「夫婦男女不遑啓處」處を居に作るも同じ
【徑寸】 さしわたし一寸あること、史記に「尙有一寸之珠、照車前後十二乘者十枚」
【勁松ハ歳ノ寒キニアラハル】 十訓抄第六に見ゆ、文選「二の潘安仁の西征賦に「勁松彰於歲寒、貞臣見於國危」とあるを引けり、また貞觀政要の忠義篇に、太宗の賜蕭瑀詩に「疾風知勁草、板蕩識誠臣」とあるも義同じ、もと論語の子罕篇に「歲寒、然後知松柏之後凋也」とあるに於るならんか、
【傾城】 妖美なる女をいふ、傾國といふも同じ、詩の大雅に「哲夫成城、哲婦傾城」とあり、哲は知なり、傾は覆なり、漢書の外戚傳に「李夫人ハ本ト倡ヲ以テ進ム、初メ夫人ノ兄延年、性音ヲ知リ善ク歌舞ス、武帝之ヲ愛ス、新聲變曲ヲ爲ル毎ニ、聞ク者感動セザルハナシ

ヲ以テ、日ニ繼グ、後ニ官、尙書郎ニ至ル」また孫康傳に「孫康少クシテ清介、交遊雜ナラズ、家貧ニシテ油ナシ、嘗テ雪ニ映ジテ書ヲ讀ム、後ニ官、御史大夫ニ至ル」この二人の故事に本づく、
【計然】 周の人、名は研、范蠡の師なり、蠡既に會稽の恥を雪ぐ、歎じて曰く、「一の策十あり、越その五を用ひて志を得たり、今吾之を家に用ひんと欲すと、乃ち陶に之を産を治め、鉅萬の富を致す、世に陶朱公と稱す、
【輕扇ヲ堅氷ノ節ニ貢ス】 時に合はざれば無用として棄てらるるに喩ふ、抱朴子に「貢輕扇於堅氷之節、街裘纈於隆暑之月、必見捐於無用、速非時之巨噓」噓は音シ笑ふなり、
【惠崇】 (一)を見よ、
【雞窓】 讀書の舎を「一」といふ、幽冥錄に「宋ノ處宗嘗テ一ノ長鳴雞ヲ買ヒ、窓閉ニ著ク、後ニ雞、人語ヲ作シ、處宗ト談論シ終日輟メズ、處宗コレニヨツテ功業大ニ進メリ」
【荆楚歲時記】 一卷、梁の宗懐撰す、舊本晉人と題するは誤なり、南史梁元帝本紀に據るに、懐は蓋し楚人、故にその郷の土俗を述ぶ、この書たる凡そ三十六事、そ

の註は相傳へて隋の杜公瞻の作となす、この書收めて漢魏叢書の中に在り、

【繼體ノ君】 太平記卷三に見ゆ、文選四十七の註に「繼體謂後主也」また漢書師古註にも「繼體謂嗣位也」

【輕諾】 かるく受合ふ義、老子に「一必寡、信多易必多難」

【驚蛇ノ草ニ入ルガ如シ】 (如驚蛇入草、事類全書に「張旭草書、如驚蛇入草、飛鳥出林」)

【輕煖】 衣服の輕く煖かにして體に適するもの、孟子

梁惠王上篇に「一不足於體與」

【雞壇】 友人の相會する「ニハ」をいふ、北戸錄に「越人每相交、作壇、祭以白犬丹雞」

【兄タリ難ク弟タリ難シ】 優劣を分ち難きをいふ、世

説に「漢ノ陳元方ノ子、羣字ハ長文、英才アリ、季方ノ子、忠字ハ孝先ト、各、其ノ父ノ功德ヲ論ジ、之ヲ爭ヒテ決スル能ハズ、祖ノ太郎ニ諮フ、太郎曰ク、元方難ク爲兄、季方難ク爲弟ト」太郎は、元方及び季方の父、太郎の長、陳寔なり、元方、名は紀、季方、名は譙、父寔と竝に高名を著す、時に三君と號す、

【瓊厨】 拾遺記に「郭況ハ光武ノ皇后ノ弟ニシテ、富匹無シ、其ノ内寵皆玉器ヲ以テ食ヲ盛ル、故ニ東京郭氏

領す、今の陝西省西安府は即ちその地なり、尹はその地方の政を行ふ長官、即ち京師の守護職なり、わが徳川時代の所司代に似たるを以て、その唐名として用ふ、略しては京尹といふ、

【勅敵】 強敵をいふ、左傳僖二十二年に「一之人、陰而不列、天贊我也」陰而不列とは險隘に在りて列を成すを得ざるをいふ、

【鯨徒】 鯨は面の墨刑「イレズミ」刑に逢ひ「イレズミ」せられて奴僕となれる者、

【惠棟】 字は定宇、松厓と號す、清朝の儒者なり、祖の周惕、父の士奇皆名儒、各著作あり、棟幼にして家學を承け、經史諸子百家涉獵せざるなく、尤も易に達し、謂へらく宣尼十翼を作り、その微言大義七十子の徒相傳へ、漢に至り猶ほ存する者あり、王弼興りてよりして漢學亡びぬ、幸にその畧を李鼎祚集解中に存せりと、精研三十年、始めて貫通を得たり、乃ち周易述二十三卷を撰す、専ら虞仲翔を宗として、參するに荀鄭諸家の義を以てす、漢學の絶ゆる者、千有五百年、是に至りて復章かなり、また易漢學、易例、古文尙書考、左傳補註、九經古義等の書あり、乾隆二十三年卒す、年六十

二、

ノ家ヲイヒ、瓊厨金穴トナス、

【警枕】 通鑑の後梁紀に「錢鏐少ヨリ軍中ニ在リ、夜未

ダ嘗テ寢ネズ、倦極レバ、則チ圓木ノ小枕ニ就キ、或ハ大鈴ヲ枕ニス、寐熟スレバ、輒チ欬チテ寤ム、名ツケテ

「一トイフ」また書言故事に「宋司馬溫公、以圓木爲一、纔睡、則枕轉而覺、乃起讀書」

【逡庭】 大小廣狹の、隔たること遠きをいふ、莊子の逍遙遊篇に「太有、一、不近、人情、逡庭は狭く、庭は廣し、故にいふ、

【兄弟牆ニ閔グモ、外其ノ侮ヲ禦グ】 詩經の小雅に「兄弟閔牆于外、禦其務」の註に「兄弟モシ不幸ニシテ、内ニ鬪狼スルコトアルモ、外ノ侮有レバ、則チ心ヲ同ジクシテ、之ヲ禦グライフ、務は侮なり、

【兄弟ハ手足タリ】 莊子に「兄弟爲手足、夫婦如衣服、衣服破時更得、手足斷時難、再繼」

【慶弔踵ヲ門ニ接ス】 駿臺雜話の「夢のうき世」に見ゆ、柳玘傳に「玘戒子孫曰、董生有云、弔者在門、賀者在閭、云云、荀子の大略篇に「下卿進曰、敬戒無怠、慶者在堂、弔者在閭、禍與福隣、莫知其門」

【京兆ノ尹】 京兆、左馮翊、右扶風、これを漢の三輔といひ、以て帝室の輔翼とす、京兆は、長安縣等凡そ十二を

【雞冠花】 閔耕餘錄に「一ハ、佛書ニコレヲ波羅奢花トイフ、マタ汗中ニコレヲ洗手花トイフ」碧雞漫志に「吳蜀ノ一ニ一種小ナル者アリ、高サ五六寸ニ過ギズ、目シテ後庭花トイフ、花疏に、雞冠ハ、須ラク矮脚ナル者ヲ磚石砌中ニ種ウベシ、其ノ脚掌片毬子ニ纒絡アリ、其ノ色紫黃白アリ、可ナラザル所ロナシ」帶經堂詩注に「一ハ、マタ後庭花ト名ヅク」

【雞頭肉】 美人の乳を稱す、楊妃外傳に「楊妃出浴、中略、露一乳、明皇捫弄曰、軟溫新刺、一、安祿山在、傍對曰、潤滑由來塞上酥、妃笑曰、信是胡兒只識酥」酥とは牛羊馬の乳なり、胡地以て酒となす、

【惺惺】 惺は獨なり、一は單獨にして窮して告ぐるなき民をいふ、詩の小雅に「哀此、一、一解に兄弟なきを惺といひ、子孫なきを獨といふと、惺一に單に作る、孟子に小雅正月篇を引きて「一」を惺獨に作る、

【竽獨】 前の惺獨に同じ、

【奚囊】 詩を入るる「フクロ」唐書李賀傳に「賀ノ小奚奴、古錦囊ヲ背ニシテ從フ、詩ヲ得ル所ロニ遇ヘバ、囊中ニ投ズ、奚は嬖候に通ず、隸役なり、この故事によりて錦囊ともいふ、

【雞ニ五德アリ】 (雞、ニ、一、一)を見よ、

二、

【鯨波】「トキ」の聲なり、祖庭事苑の四に「鯨ハ常ニ五月ヲ以テ岸ニ就キ、數萬ノ子ヲ生ミ、八月ニ至リ子ヲ引キ海ニ還ル、波ヲ鼓シテ雷ヲ成シ、水ヲ噴キテ雨ヲ成ス云云」其の聲の盛なるを、軍勢の聲に比したるなり、鯨一に鯨に作る、鯨は「クヂラ」の雄にて、鯨は雌なり、

【京房】字は君明、漢の頓丘の人なり、焦延壽を師とし易を學ぶと甚だ精し、尤も災變占驗に長ず、孝廉を以て郎となる、元帝の時、日食陰霧す、房數上疏して時政の得失を指陳す、石顯五鹿充宗之を嫉む、出でて魏郡の太守となる、卒に中つる所となり、獄に下されて死す

【繫匏】匏は瓢の類、フクベ—は棚にかかれる、フクベ轉じてふくべの棚にかかりて爲す事なきが如く、徒に日を送るに喩へていふ、薛能の句に「三載從戎類て死す」
【刑ハ輕キヲ厭ハズ】刑罰は、重きに失せんよりは輕きに過ぐるを可とすとの義、新語に「設刑者、不厭輕、爲德者、不厭重」
【輕薄兒】輕躁浮薄にして情義に乏しきものをいふ、阮籍の詩に「平生少年時、—好絃歌、また沈約の詩

に「洛陽繁華子、長安—」また後漢書の馬援傳に「昭爲天下輕薄子」と、杜甫の貧交行に「紛紛輕薄何須數」
【啓發】啓は其の意を開くをいひ、發は其の辭を達するを謂ふ、論語の述而篇に「子曰、不憤不啓、不悱不發、憤は心通せんことを求めて、未だ得ざるの意、悱は口言はんと欲して、未だ能はざるの貌、其の誠意の辭色にあらはると此の如くならざれば、啓發するも益なしとなり、教導してその蒙を啓くをいふ、師の恩を—の恩といふ、

【輕肥】輕裘肥馬の略語、杜甫の詩に「同學少年多不賤、五陵裘馬自—」また張詠の詩に「寄語巢由莫相笑、此心不是愛—」
【雞皮鶴髮】老人の皮膚、衰へて雞皮の如く、頭髮鶴羽の如く白きをいふ、

【警蹕】蹕は行人を止め道を清むるをいひ、警は戒め肅ましむるをいふ、天子出入の儀なり、史記梁孝王世家に「擬天子、出言蹕、入言警」とあり、出入皆—の儀を備ふ、出蹕入警と分ち記するは文を互にせしのみ、蹕は蹕に同じ、古今註には「—ハ秦ノ制、出ルニ警、入ルニ蹕、出入皆止ムルヲ謂フナリ」と、駐蹕は、天

子の「ゴトウリウ」なり、
【擊臂ノ寵】宮女の特別の君寵を受くるものをいふ、晉書に武帝胡貴嬪名芳、鎮軍胡奮女也、帝多寵、良家子女、以充内職、自擇美者、以絳紗繫臂、芳既入、選中略帝每有顧問、不飾言辭、率爾而答、進退方雅、有專房之寵

【荆布】人に對して、己の妻を謙する辭なり、漢の梁鴻の妻孟光、狀肥醜にして黒し、力石臼を擧ぐ、德行甚だ高し、對を擇んで嫁せず、年三十、父母其の故を問ふ、いはく、節操梁鴻が如き者を欲すと、鴻遂に之を娶る、常に荆の簞、布の裙、食を進むる毎に、案を擧げて眉に齊しくすとあるに本づく、書言故事に、自稱妻曰「—ニ

【圭復】人より寄せ來りたる書簡を再三くりかへし讀むをいふ、圭は白圭の詩、復は三復して讀むをいふ、白圭ヲ—を見よ、

【奎文】文章をいふ、奎は星の名なり、孝經援神契に「奎主文章」註に「奎星屈曲シテ相鉤リ、文章ノ畫ニ似タリ」

【邢昺】字は叔明、宋の鄭の人、九經の廷試に應ずる日、召されて外殿に至り、比師二卦を講ず、また群經を取

り題を發す、太宗之を嘉し、上第に擢ぐ、真宗の朝、刑部尙書に累遷す、卒するに及び、真宗喪に臨み涕を頌す、

【啓閉】啓は立春立夏なり、閉は立秋立冬なり、左傳僖五年に「分至—分は春秋分、至は冬夏至なり、

【雞卜】漢郊祀志に「東甌王、粵巫ニ命ジテ祝祠ヲ立テシメ、而シテ雞ヲ以テトス、上之ヲ信ズ、粵祠ノ雞トハ此ヨリ始マル」

【雞盲】「トリメ」をいふ、留青日札に「人ノ目、晚ニ至リテ見エザル者ヲ—トイフ」

【啓明】爾雅に「明星之ヲ—トイフ」註に「大白星ナリ、晨ニ東方ニ見ハルルヲ啓明トナシ、昏ニ西方ニ見ハルルヲ明星トナス」アケノミヤウジヤウ」

【雞鳴狗盜】函谷ノ雞鳴を見よ、
【雞鳴狗吠相聞】人家長く接續して絶えざる義、孟子に「——、而達於四境」また老子に「隣國相望、雞狗之聲相聞」

【雞鳴ニシテ起キ、華華トシテ善ヲ爲ス】(雞 鳴イテ起キ)を見よ、
【刑名ノ學】名と實と一致せしむる學派なり、即ち其の名を以て實を責めて、毫も恕する所無し、故に司

馬遷は、之を慘憺少恩といへり、史記の老莊申韓列傳に「韓非者、韓之諸公子也、喜刑名法術之學、ことあり、刑」と形とは、古字通用す。

【鷄鳴ノ助】 國君賢婦の内助あるをいふ、詩經の齊風鷄鳴篇に「鷄既鳴矣、朝既盈矣」の朱註に「古ノ賢妃君所ニ御スルヤ、將ニ且ケントスル時ニ至レバ、必ズ君ニ告ゲテ曰ク、鷄ステニ鳴ケリ、會朝ノ臣、ステニ盈テリト、君ヲシテ早起シテ朝ヲ視シムルナリ」

【藝文類聚】 一百卷、唐の歐陽詢等勅を奉じて撰す、中に蘇味道李嶠宋之間沈佺期の詩あるは、皆後人の竄入せしなり、凡そ四十八門、事實を以て前に置き、詩文を後に列す、諸の類書中に在りて、體例最も善しとす。

【揭陽】 唐の潮州の地をいふ、もと漢の南海の—の地なればなり。

【圭竅】 牆を穿ちて爲る、門旁の小戸なり、上は鋭く下は方にして圭の如し、廣韻に「門邊ノ小竅」とあり、貧家の「サマ」(筆門)を見よ。

【羿、弓ヲ控ク】 太平記卷二十二に見ゆ、史記夏本紀の正義に「帝王紀ニイフ、帝羿ハ有窮氏、帝嚳以上世、射正ヲ掌ル、嚳ニ至リ賜フニ彤弓素矢ヲ以テシ、之ヲ劔

ニ封ズ、帝ノタメニ射ヲ司リ虞夏ヲ歴、羿射ヲ吉甫ニ學ブ、ソノ臂長シ、故ニ善射ヲ以テ聞ユ、遂ニ帝位ヲ篡フ、羿ソノ射ヲ善クスルヲ特ミ、民事ヲ修メズ、田獵ニ淫ス、後ニ其ノ相寒泥ノ爲メニ殺サル云云」とあり、詳しくは右の本文を見よ、但し日を射りたるは、堯の時の人にて、同名異人なりといふ。

【形容枯槁】 かたち、やうすの瘦せ衰へたるをいふ、屈原の漁父の辭に「顔色憔悴—」とあり、戰國策にも「—、面目黎黑、狀有愧色」

【啓沃】 啓は開なり、沃は「ソソグ」なり、心に思ふことを開説して君主の心にそそぎ入るるをいふ、書經の説命に「啓乃心沃朕心、正義に「當ニ汝ノ心ニ有ル所」ヲ開キテ、以テ我が心ニ灌沃スベシ」とあり。

【經綸】 經は經緯の經なり、綸は綱なり、—は經理する義、國家を治むるにいふ、易に「君子以—」

【雞林】 新羅の別名、今は廣く朝鮮の別名に用ふ、東國通鑑に「新羅王、夜、金城ノ西、始林ノ間ニ雞聲アルヲ聞キ、明ヲ遲チテ人ヲ遣シテ之ヲ視シムレバ、金色ノ小積アリ、樹梢ニ掛ル、白雞ソノ下ニ鳴ク、之ヲ開ケバ、小男兒ソノ中ニ在ルアリ、闕智ト名ヅク、ソノ金積ニ出ヅルヲ以テ金氏ヲ姓トス、雞怪アリ、始林ヲ改

メテ—ト名ヅケ、因ツテ以テ國號トナス、—ハ道は、京畿・江原・慶尙・平安・咸鏡・黃海・忠清・全羅をいふ。

【藝林】 學藝の仲間、魏書に「屬意—」

【桂林ノ一枝、崑山ノ片玉】 士林中の第一といふが如し、事文類聚に「晉ノ泰始中ニ、郗詵、雍州ノ刺史ニ遷ル、武帝東堂ニ於テ、會送シテ詵ニ問ヒテ曰ク、卿自以テ何如ト爲スト、詵對ヘテイハク、臣賢良ヲ奉ジテ策ニ對シテ天下第一トナルハ、猶ホ桂林ノ一枝、崑山之片玉ノ如シト、帝笑フ、侍中奏シテ詵ガ官ヲ免セントス、帝曰ク、吾レ之ト戲ルルノミト」

【經畧】 經は度るなり、畧は治むるなり、はかり治むる義、左傳昭七年に「天子—」の註に「天下ヲ經營シテ四海ヲ略有ス、故ニ—トイフ」

【驚龍】 草書のすぐれて妙なるに喩ふ、梁武帝の論書に「王羲之尤善草、其筆法飄若浮雲、矯若—」

【係累】 縛、結なり、孟子に「—其子弟ニ轉じて妻子眷屬の煩累の義にも用ふ、疊に作るも同じ、

【痠擥】 醫術の語、筋の引きつること、

【輕擥】 かるく手にとりて持つこと、白居易の琵琶行に「—慢撻撥復挑」

【雞肋】 さして有用にあらざれども、亦棄つるには惜

しとの意、後漢書楊修傳に「楊修學ヲ好ミ、俊才アリ、丞相曹操ノ主簿トナル、操、漢中ヲ平ゲ、因ツテ劉備ヲ討タント欲シ、而シテ進ムヲ得ズ、之ヲ守ラント欲シ、マタ功ヲ爲シ難シ、操、教ヲ出シテ唯—ト曰フノミ、外曹能ク曉ルナシ、修獨リ曰ク、夫—ハ—ノヲ食ヘバ、則チ得ル所ロナク、之ヲ棄ツルハ、則チ惜ムベキガ如シ、公ノ歸計決セリト、操是ニ於テ師ヲ廻ヘス」又體のやせて弱きに譬へてもいふ、晉書に「劉伶嘗テ醉ヒ、俗人ト相忤フ、其ノ人袂ヲ攘ヒ、拳ヲ奮ヒテ往ク、伶徐ロニ曰ク、—、以テ尊拳ヲ安ンズルニ足ラズト、其ノ人笑ヒテ止ム」

【熒惑】 「マヨハス」義、六韜の豹韜少衆篇に「安ニ詐誘ヲ張リテ以テ其ノ將ヲ—ス」とあり、直解に「—トハ火星ノ名、其光熒々クヲ以テ人ヲ疑惑セシムベシ」史記の孔子世家に「匹夫而—諸侯者、罪當誅」

【穢】 「ソリ」雪又は泥の上をすべらして行く乗物、形策に似たり、史記の夏本紀に「泥行乘—」

【饒倖】 倖は幸に同じ、—は、マグレザイハヒ班固の奔旨に「優者有、不遇、劣者有—」

【澆季】 澆は薄なり、末世の浮薄をいふ、文選の任彦昇の王文憲集の序の字面、

【僑居】旅寓なり。魏書杜欽傳に「僑居趙郡」とあり。通鑑の梁紀に「廣陵僑人朱盛等云云」の註に「僑人ハ本ト廣陵ノ人ニアラズシテ、廣陵ニ僑居スル者ナリ」と、カリスマヒなり。説文に「旅寓ヲイフ」。

【徵塞】徵も亦塞なり。一は邊界をいふ。史記の司馬相如傳に「南至牂何爲徵」の註に「徵ハ塞ナリ、木ヲ以テ水ニ柵シ、蠻夷ノ界トナス」錦字箋に「南ヲ徵外トイヒ、北ヲ塞外トイフ」。

【橋梓】父子の尊卑に喩ふ。事類全書に世説を引きて「伯禽、康叔トトモニ、周公ニ見ユ、三タビ見エテ三タビ之ニ答ウタル、二子乃チ商子ニ問フ、商子曰ク、南山ノ陽ニ木アリ、橋ト名ヅク、南山ノ陰ニ木アリ、梓ト名ヅク、何ゾ往イテ之ヲ觀ザルト、三子往イテ見ル、橋木ハ高クシテ仰ギ、梓木ハ實リテ俯セリ、還リテ商子ニ告グ、商子曰ク、橋ハ父ノ道、梓ハ子ノ道ナリト、子タル者父ニ見エテ卑下遜順シテ、梓木ノ實リテ俯スガ如クナル能ハズ、是ヲ以テ捷タルルニ遭フナリ」類書纂要に「人ノ父子ヲ稱シテ賢橋梓トイフ」。

【堯舜ノ人ハ堯舜ノ心ヲ以テ心トス】(車ヲ下リテ)を見よ。【喬松】仙人王子喬と、赤松子との二人、共に長壽の仙

人、戰國策に「世世稱孤、而有——之壽」。

【翹楚】楚は雜薪中の尤も翹翹たる者なり、由りて衆に卓出する者の稱とす。詩經の周南漢廣篇に「翹翹錯薪、言刈其楚」とあり。翹翹は高さ貌、楚は荆の屬、薪は皆高しと雖も、楚は尤も翹翹として高し、故にその楚を刈るとなり。春秋の序に「其爲義疏者、則有沈文何蘇寬、劉炫、子數君之内、實爲——」。

【堯ニ吠ユ】(吠堯そのつかふる主に忠なるをいふ、史記に「跖之狗吠堯、堯非不仁、狗固吠非其主」。

【教坊】歌舞を教ふる場所をいふ。唐書の百官志に「開元二年、置教坊於蓬萊宮側、京都置左右教坊、掌俳優雜劇、開元は玄宗の朝の年號、

【轎夫】「カゴカキ」龍圖公案に「將銀備二道士、假扮——轎兒に同じ」。

【毛ヲ吹キ疵ヲ求ム】(吹毛求疵、疵毛の中までもたづねて、疵を求むる如く、人の隱罪を發訖し、小疵を深求する意、漢書中山王傳に「有司吹毛求疵、韓非子に「不吹毛而求小疵、不洗垢而察難知」。

【毛ヲ以テ馬ヲ相ス】(外貌を見て、實力を見ざるに喩ふ、鹽鐵論に「以言舉人、若以毛相馬、口には巧に政事を談ずれども、之に政を執らしむれば、多くは昏

亂して治まらざるなり、故に人を用ふるに其の實力

を見ずして只其の言辭を聞き、之を用ふるは、恰も馬を相するに、眞に駢足なるや否やと、見分けずして

只毛色の善きを以て良馬と思へるが如しとなり。

【下疳】微毒の小瘡の下部に發してただるもの、

【檄】釋文に「檄ハ軍馬ナリ」と、説文に「木簡ヲ以テ書ヲツクリ、長サ尺二寸アリ、若シ急アレバ、雞羽ヲ插ミテ之ヲ遣ル、故ニ羽檄トイフ、ソノ疾キヲ飛ブガ若キヲイフナリ、ソノ詞ハ散文アリ、儷語アリ」劉勰いふ「義ヲ植テ辭ヲ颺グル、務メテ剛健ニ在リ、或ハソノ休明ヲ述ベ、或ハ彼ガ苛虐ヲ敘ス、天時ヲ指シテ人事ヲ審ニシ、強弱ヲ算シテ權勢ヲ角シ、著龜ヲ前驗ニ表シ、盤銘ヲ已ニ然ルニ懸ケ、羽ヲ插ンデ以テ迅ヲ示シ、辭ヲシテ緩ナラシムベカラズ、板ニ露ハシテ以テ衆ニ宣シ、義ヲシテ隱サシムベカラズ」と、以てその體裁の如何を察すべきなり。

【擊壓】壓は、概に同じ、指にておさへる、笛の孔などを

おさへる義、元稹の連昌宮辭に「李響壓笛傍宮牆——」は手にてうち、指にておさへ、白居易の句に「——彈吹聲遽逝」。

【檄ヲ捧ゲテ喜ブ】檄は召書(メシブミ)なり(毛義を

見よ、【屐ヲ著ケテ山ニ登ル】(著屐登山)六帖に「謝靈運好

ンデ山ニ登リ嶺ヲ陟ルニ、必ズ幽峻ニ造ル、岩障數十重、盡ク躡マザルハ莫シ、常ニ木屐ヲ著ク、山ニ上ル

キハ、則チ前齒ヲ去リ、山ヲ下ルキハ、則チ後齒ヲ去ル」と、詳しくは、南史の謝靈運傳を見よ。

【隙駒】光陰をいふ(白駒ノ)を見よ。

【御缺】周人、晉の大夫芮の子、冀に稱る、その妻之に媿するに、敬して相待つと賓の如し、白季使して冀を過ぎ、之を見て與に歸り、文公に言つて曰く、敬は徳の聚なり、能く敬すれば必ず徳あり、徳は以て民を治む、君請ふ之を用ひよと、文公用ひて下軍大夫となし、復之に冀を與へて采邑となす、因つて以て氏と爲し、冀缺と稱すといふ、子の克、克の子錡世、晉の卿たり、

【屐齒】あしだのは、通鑑晉紀に「謝安不覺——之折」註に「屐ハ木履ナリ」。

【閱牆】兄弟の中あしきをいふ、詩の棠棣に見ゆ兄弟牆ニ)を見よ、【擊壤】古代の遊戲なり、壤は木にてつくる、形履の如し、一壤を地に側て、三四歩を去り、一壤を以て之を擊ち、中つるものを上とす、史記の五帝紀に「帝遊

【康衢老人擊壤而歌】于路太平無事のありさまにいふ

【擊壤ノ歌】二十卷、宋の邵雍の詩集なり、その詩超俗

清逸にして、その源、寒山拾得より出づと稱す、然れ

ども寒山拾得の詩派唐に行はれず、而してこの集の

派は南宋に蔓延し、明代陳獻章、莊泉等に至るまで講

學を以て自ら名づくる者、大抵之を宗とす、

【擊壤ノ歌】帝王世記に「帝堯ノ世、天下太々和シ、百

姓無事、老人アリ、壤ヲ擊チテ歌フ、歌ニ曰ク「日出而

作、日入而息、鑿井而飲、耕田而食、帝力于我何有哉」

【鶴首】鶴は鷺に似て大なる水鳥、淮南子の「龍舟一

天子之乗也」の高誘註に「鶴ハ大鳥ナリ、其ノ象ヲ畫

キ船首ニ著ク、晉書王濬傳に「濬造大舟、畫鶴鳥怪獸

於船首、以懼江神」集韻に「鶴ハ水鳥、鷺ニ似テ大ナリ」

【閑寂】さびしく静かなる貌、寂寂または靜寂に同じ、

杜甫の句に「多病獨愁常一」

【缺舌】外國人の語を卑めていふ、缺は惡聲の鳥にて、

鵙(モズ)なり、孟子の滕文公上に「今也南登一之人、

非先王之道」とあるに本づく、柳文の與蕭翰林書に

「一嗥噪」とあり、嗥噪は「サハガシキ」なり、

【逆旅ノ主人】はたごやの亭主、王陽明の詩に「逆旅主

人多慇懃、出門轉眄、成路人」

【下浣】一月中にて終の十日をいふ(上浣を見よ)

【下戸】(上戸)を見よ、

【華嚴宗】華嚴經を所憑とす、もと馬鳴菩薩に出づ、馬

鳴、龍樹に傳ふ、これに繼ぐもの帝心、雲華、賢首、涼清、

圭峰の諸法師なり、これを一の七祖といふ、或は

これを賢者宗と稱す、我が國にては慈訓、審詳の諸師

これを傳へ、後ち天平七年唐の道璿律師來りて之を

傳ふ、良辨僧正これを受けて弘通す、ここに至りて始

めて宗名を立てたり

【袈裟】梵語迦羅沙洩の略、沙門の服、原語は、不正色

又は雜色の意にて木蘭色なるを本義とす、道服出世

服法衣、閉色服、慈悲衣、無垢衣、功德衣、福田衣、忍辱鎧

等の稱あり、もと迦沙に作る、

【罌粟】花疏に「芍藥ノ後チ一花最モ繁華ナリ、其ノ

物能ク變ズ、意ヲ加ヘテ灌植スルルハ、妍好千態ナリ」

群芳譜に「一一名ハ御米花、一名ハ米殼花、雍陶の詩

に「馬頭初見米囊花」一説に張籍の句なりと、格物論に

「麗春ハ一ノ別種ナリ、叢生シ、柔幹多葉、刺有リ、紅

紫白三種アリ、今江浙ノ間、此レ多シ、惟ダ金陵獨リ

ゲキリ—ケツヲ

【激湍】湍は水の急に流るる瀬なり、「ハヤセ」一はは

げしき早瀬、徐璣の句に「平沙少一峻湍、奔湍急湍

など義略、同じ、

【擊斷シテ諱ムコトナシ】刑罰を擅まにして諱み憚る

所、なさをいふ、史記范雎傳に「涇陽華陽擊斷無諱」

【劇孟】漢の洛陽の人、俠を以て顯はる、文帝の時、吳楚

反す、周亞夫傳に乗じて河南に至り、孟を得て喜んで

曰く、吳楚大事を擧げ而して孟を求めず、吾その能く

爲すこと無さを知るなりと、

【劇務】いそがしき事務なり、北史に「不能處一煩

務に同じ、

【逆鱗】帝王の怒をいふ、韓非子の說難篇に「夫レ龍ノ

蟲タルヤ、狎レテ騎ルベキナリ、然レドモ、其ノ喉下ニ、

逆鱗ノ徑尺ナルアリ、若シ人之ニ嬰ル者アレバ、則テ

必ズ人ヲ殺ス、人主モ亦一アリ、説スル者、能ク人主

ノ一ニ嬰ルコト無ケレバ、則チ幾カラン」龍は人君

の象なり、故に人主の怒に逢ふことを、一に觸ると

いふ、

【逆旅】逆は迎なり、旅の客を迎ふる義にて、旅館をい

ふ、莊子の山木篇に「陽子之宋、宿於一」また李白

の春夜宴桃李園序に「天地者萬物之一」

タリ、今始テ秦ニ入ッテ即チ其ノ樂ニ安ンゼバ、此レ所謂助祭爲虐也ト

【結構】 家などを結び構ふる義、文選靈光殿賦に「觀其規矩應天」

【顔頰】 成語考に「力相上下スルヲ一トイフ」詩經の邶風に「燕燕于飛頰之頰」の註に「飛ンデ上ルヲ頰トイヒ、飛ンデ下ルヲ頰トイフ」

【結跏趺坐】 圓滿安坐の義、婆娑論に「以兩足趺、加致兩髀、如龍蟠結、又重疊兩足、左右交蟠、是故名爲一」

【月眼】 明鑑を欲するを一を以て之を照せといふ、黄山谷の詩に「讀書眼如月、罅隙靡不照」

【月下老】 婚姻の「ナカダチ」する者をいふ（赤繩）を見よ、

【闕疑】 疑しきことをば取り退け置くをいふ、論語爲政篇に「子曰、多聞、慎言其餘、則寡尤云云」

【穴居】 易に「上古一而野處」また搜神記に「巢居知風、一知雨」

【月桂】 桂樹を見よ

【揭傒斯】 字は曼碩、元の富州の人、父來成は宋の郷貢進士、傒斯父子自ら師友となる、是に由つて五經に通

じ、文を屬する典麗、經世大典及び遼金二史を修するに與る、卒して豫章郡公に追封せられ、文安と諡せらる、

【穴隙ヲ鑽ル】 淫奔なり、禮によらずして私通するをいふ、孟子に「不待父母之命、媒妁之言、鑽穴隙、相窺、踰牆相從、則父母國人皆賤之」

【缺缺】 缺は缺と同じ、小智の貌、老子五十八章に「其政察察而其民一」柳文の桐葉封弟辯に「是直小丈夫一者之事」

【子子】 特出の貌、詩經の邶風に「一干旌、また孤立せる貌にもいふ、單獨の義、また水に生ずる赤蟲、ボウフラ」

【歇後】 歇は息なり、後尾の語をとどめ、略していはざるなり、例へば「友于兄弟」の兄弟の二字をとどめて「友于」といふ如し、一種の謎語にて、以て時事を諷刺せしなり、唐の鄭五好みて一の詩を作りき、唐書に「一鄭五作宰相」

【結草ノ報】 草ヲ結びテを見よ、

【月氏】 一に月支に作る、漢の世に、葱嶺の西に國を建てし種族の名、正韻に「一西域國名、在大宛西」また史記大宛傳に「有大一、小一」

情意相通ゼザルニ起ル、今、月ゴトニ必ズ會集シ、善アレバ相告ゲ、過アレバ、相規ストキハ故アリテ、相抵牾スルモノ、彼ト此ト一タビ見テ、亦從容談笑ノ閑ニ相忘ル、豈小補ナカラヤト

【月旦評】 月旦は朔日なり、許劭の故事に由りて、人物を品評する義とす、後漢書許劭傳に「初、劭與從兄靖俱有高名、好共論鄉黨人物、每月輒更其品題、故汝南俗有「一」焉」魏の曹操郡に請ひ問うて曰く、我は如何なる人かと、郡曰く、子は治世の能臣、亂世の奸雄なりと、操大に喜ぶ、

【榮紂ハ天子タリシカドモ、顔閔ガ賤シキ身ニ劣レリ】 十訓抄第三に見ゆ、夏の榮王、殷の紂王は共に暴虐の君にて天下を亡ひしこと、史記に詳かなり、顔回字は子淵、閔損字は子騫の二人は、共に孔子の弟子にて論語の先進篇にも「德行、顔淵、閔子騫」とあり、さて十訓抄の文は、貞觀政要鑑誡篇に「太宗曰、朕又聞、榮紂帝王也、以匹夫比之、則以爲辱、顔閔匹夫也、以帝王比之、則以爲榮」とあるによれり、

【蹶張】 脚もて弩、イシユミをふみてつよく張るなり、漢書に「以材官一、從高帝擊項籍」また手にて弩をはるを蹶張といふ、

【孽子】 孽は孽の俗字、庶子なり、嫡子にあらざる庶子をいふ、孟子に「孤臣一」

【潔疾】 「キレイズキ」潔病、潔癖に同じ、文海披沙に「古今一莫如、庚炳之王思微、米南宮倪元鎮、潔病」を參看せよ、

【決拾】 決は「ユガケ」拾は「オシテカケ」詩の小雅に「一既飲」の朱傳に「決ハ、象骨ヲ以テ之ヲ爲ル、右手ノ大指ニ著ケテ弦ヲ鈎シ、體ヲ開ク所以、拾ハ、皮ヲ以テ之ヲ爲ル、左臂ニ著ケテ以テ弦ヲ遂グ、故ニ亦遂ト名ヅク」通典に「皇帝澤宮ニ射ル、儀、站ヲ弓ヲ執ル者ノ前ニ設ケ、御一箭ヲソノ上ニ置ク」註に「決ハ今ノ射查、拾ハ今ノ射提」とあり

【結繩ノ政】 上古文字未だあらざりし時代に繩を結びて「シルシ」とせし時の政をいふ、

【血食】 神を祭る義、祭には毛血ある、性を用ふ、故にいふ、史記陳涉世家に「置守家三十家、燭、至今一」また左傳莊六年に「社稷實不」ことあるは祭の絶え國の亡ぶる義、

【月旦會】 劉氏人譜に「宋ノ劉子平月旦ゴトニ必ズ湯餅ヲ治メ、族ヲ會シテ曰ク、今日ノ集ハ酒食ヲ以テ禮ト爲ルニハ非ズ、尋常宗族ノ睦シカラザルハ、多クハ

【桀ノ狗、堯ニ吠ユ】(桀之狗吠堯)仕ふる所に従ひて忠を致す義、鄒陽の上書に「桀之犬可使吠堯、而堯之客可使刺由」とあり、雖は盜賊、由は許由なり、また史記の淮陰侯傳に「跖之狗吠堯、堯非不仁、狗固吠非其主」といひ、一説には始めて冠するをいふと、諸説あれども必ずしも拘はらず、廣く年少者の髪を上げて結ぶ義とすべし、程伊川の「婚姻結髮、無義、欲去之、久矣、言結髮爲夫婦者、只稱其少小也、如言結髮事君、結髮事匈奴、只言初上頭時也、豈謂合髻子耶云云」といふ説従ふべし、漢書李廣の傳に「廣結髮與匈奴大小七十餘戰」

【潔病】人の清潔を好むこと甚しきをいふ、毘陵の倪元鎮、一あり一日歌妓趙寬兒を眷し、別業中に留宿せしむ、心に其の不潔を疑ひ、之れをして浴せしむ、既に榻に登る、手を以て頂より踵に至るまで、且つ捫り且つ嗅ぎ、捫りて陰に至り穢氣あり、復た浴せしむること凡そ再三、東方既に白く、復た巫山の夢を作さず、徒らに贈るに金を以てす、趙或自ら談じて絶倒する

【挾書ノ律】挾は藏なり、秦の律にて書を挾むものは族す、漢の惠帝四年はじめて此の律を除く、
【夾竹桃】群芳譜に「一ハ、花五瓣ニシテ、長筒微尖、淡紅嬌艶ナリ、桃花ニ類シ、葉狹長ニシテ竹ニ類ス、嫵媚賞スルニ堪ヘタリ」
【業ハ勤ムルニ精シク、嬉ムニ荒ム】(業精於勤、荒於嬉)韓愈の進學解の語、下に「行成於思、毀於隨」とあり、

【華鬘】佛像の頂に飾る物、生花をも用ふれども、多くは金銀のつくり花を綴りて垂る、眞俗佛事編に「西域ノ風俗貴賤男女共ニ蘇摩羅華ヲ多ク聯ネ結ビテ之ヲ貫キ或ハ首或ハ身ヲ飾ル、此レヲ一トイフ、之ニヨツテ種種ノ鮮妙華ヲ集メ結ンデ鬘トナシテ、佛前ヲ莊嚴シ供養ス云云」守護國界經に「以種種寶用作一而爲莊嚴」
【劔】釋名に「劔ハ檢ナリ、非常ヲ防檢スル所以ナリ」初學記に「管子ヲ按ズルニ曰ク、昔、葛天盧ノ山發シテ金ヲ出ス、蚩尤受ケテ之ヲ制シ以テ劔鎧トナス、コレ劔ノ始ナリ」と、史記の項羽本紀に「學一不成、乃曰、一入敵、不足學、學萬人敵」秋水「三尺は皆劔の異名、越

に至る、
【挈瓶ノ智】挈は提ぐるなり、提ぐるほどの瓶は、容るところ小なり、故に小智を一の一といふ、文選の東京賦に見ゆ、また左傳にも「雖有挈瓶之知、守不假器禮也」
【潔癖】「キレイズキ」潔病、潔疾、好潔皆同じ、澄懷錄に「元章有」
【闕里】圓機活法に「兗州曲阜縣ノ一ハ、孔子ノ居ル所、ノ地ナリ、朱熹建陽ニ居リ、考亭アリ、南州ノ一ト號ス」
【毛ニ謹ミテ貌ニ失フ】意を小事にのみ留むるときは、かへつて其の大體を失ふに喩ふ、淮南子に「畫者謹毛而失貌」
【業ヲ創メ統ヲ垂ル】創は造なり、統は緒なり、基業を前に造りて、統緒を後に垂るる義、孟子に「君子創業垂統爲可繼也」
【脅從】「おびやかされて、惡に與みする者、書經に「殲厥渠魁、一罔治」
【夾室】太廟には、東西一あり、太室の兩旁を夾む、故に一といふ、
【狹斜】花柳の巷「イロザト」古樂府に「長安有」道

絶書に「太阿劔、其色如秋水、また漢書に「高祖提三尺、取天下、また列子に「周穆王得昆吾赤刀寶劔、切玉如泥、宋玉大言に「長劔倚天外」
【壘】樂器、土をやきてつくる、上とがり底ひらたく、形「ハカリノオモリ」に似、聲さけぶが如し、ツチブエ詩經に「伯氏吹」は壘に同じ、
【言】「コト」人の思想をあらはす聲なり、また語たること、述ぶること、書經に「詩言志、歌永言、また句若くは字を斥していふこともあり、言はややもすれば、中正を失し易きものなれば古人のそれを戒むること甚だ切なり、論語に「寡、尤行寡、悔、孟子に「一近而指遠者善一也、列子に「一美、則譽美、一惡、則譽惡、文心雕龍に「一者風也、無足而行、無翼而飛、揚子法言に「言輕、則招憂、行輕、則招辜、貌輕、則招辱、好輕、則招淫、苟子に「言有召禍也、行有召辱也、君子其慎所立乎」史記仲尼弟子列傳に「以言取人、失之宰予、以貌取人、失之子羽、穀梁傳僖二十二年に「言而不信、何以爲言」大學に「言悖而出者、亦悖而入、貨悖而入者、亦悖而出」苟子に「言而當智也、默而當亦智也、禮記緇衣に「言必慮其所終、行必稽其所敵」
【兼愛】彼我親疎の別なく、兼ねて一樣にいつくしむ

義、墨子に—説あり、參看せよ、孟子に「墨氏—是無父也、墨子は墨程なり」

【涓埃之微】 微細の義に喩ふ、涓は水點、埃は塵なり、韓文の爲妻相公讓官表の句、

【嚴威儼格】 親ニ事フル所以ニアラズ、親に事ふるには柔和にして歡を奉ずべし、威嚴に失すべからずとの義、禮記の祭義に「孝子之有深愛者、必有和氣、有和氣者、必有愉色、有愉色者、必有婉容、孝子如執玉、如奉盈、洞洞屬屬、然如弗勝、如將失之、—非所以事親也」

【元遺山】 (元好問)を見よ、

【檢狃】 匈奴の一名、夏に獯鬻といひ、周に—といひ、漢に匈奴といふ、狃一に獵に作る、詩經に「獵狃孔棘」

【玄英】 冬をいふ、爾雅の註に「氣黒クシテ清英ナリ」と、(青陽)を見よ、

【劔ヲ賣テ牛ヲ買フ】 (賣劔買牛) 漢書の循吏傳に「龔遂渤海ノ太守トナル、齊ノ俗、奢侈ニシテ末技ヲ好ミテ田作セザルヲ見、廼チ躬ヲ率、キルニ儉約ヲ以テシテ民ニ農桑ヲ務ムルコトヲ勸ム、民ニ刀劔ヲ帶持スル者アレバ、劔ヲ賣リテ牛ヲ買ヒ、刀ヲ賣リテ積ヲ買ハシム、吏民皆富貴トナル」

【賢ヲ見テ齊シカラシムコトヲ思フ】 賢人を見て、己も亦それと等しくならんことを思ふ義、論語里仁篇に「子曰、見賢思齊焉、見不賢而內自省也」

【犬牙相制ス】 境土の入り交ると、犬牙のくちがひて、相衝み入るが如し、かくして互に控制するをいふ、史記孝文紀に「高帝封王子弟、地犬牙相制、此所謂磐石之宗也」

【見解】 字彙に「解ハ釋ナリ、曉ナリ」道理を見てさとるところある義、鶴林玉露に「曾點之—、顔子之工夫」

【狷介】 操を守ること甚だかたくして、人を容るるの量なき者をいふ、禮記に「小心—」

【懸崖】 かべのごとくそばだてるがけ、書斷に「—墜石」

【元愷】 (八元八愷)を見よ、

【元凱功ヲ銘ズ】 歐文の岷山亭記に見ゆ(杜預二碑)を見よ、

【建囊】 戦のやみたる義、建は讀んで鍵となす、鎖なり、囊は、兵甲をおさむる袋の類、—は兵甲を閉藏して復用ひざるをいふ、禮記の樂記に「倒載干戈、包之以虎皮、將帥之士、使爲諸侯、名之曰—」

【絃ヲ立ツ】 (立言)不朽を見よ、

【絃ヲ續グ】 再び妻を娶るをいふ(續絃)を見よ、

【險ヲ歷、危ニ乗ルハ、則チ驥驥ハ狐狸ニ如カズ】 長所を措きて、短所の事を爲せば、賢者と雖も愚者に及ばざる所あるに喩ふ、戰國策に「猿獼猴錯木據、水則不若魚鼈、歴險乘危、則驥驥不如狐狸」

【乾ヲ旋シ坤ヲ轉ズ】 (旋乾轉坤)を見よ、

【言ヲ立ツ】 (立言)不朽を見よ、

【險ヲ歷、危ニ乗ルハ、則チ驥驥ハ狐狸ニ如カズ】 長所を措きて、短所の事を爲せば、賢者と雖も愚者に及ばざる所あるに喩ふ、戰國策に「猿獼猴錯木據、水則不若魚鼈、歴險乘危、則驥驥不如狐狸」

同五國六國七國八國九國十國

【軒昂】 意氣の揚がる貌、三國志孫堅傳に「一自高、物の高くあがる貌、柳宗元の句に、舟航一兮、下上飄鼓」

【乾綱】 乾は天なり、一は天子の綱紀なり、君主の大権をいふ、國文に「中古一紐を解く」とあるは、中世武家の手に政權の歸して君主の大權の弛びすたりたる義、晉書華譚傳に「祖一以流化順、谷風以興仁」

【檢校】 「トリシラブル」點檢と略、同じ、王建の句に「騎馬城西一花」また杜詩に「茅堂一收稻」といふ題あり、

【權衡】 權は、玉篇に「稱錘也」とあり、秤の「オモリ」、衡は秤の「サヲ」なり、前漢書律歷志に「衡平也、所以任權而均物平輕重也、轉じて平均、又釣合の義とす、申子、君必有明法正義、若懸一以稱輕重、所以一羣臣也」

【言行相悖】 淮南子に「言與行相悖、情與貌相反」

【元亨釋書】 三十卷、わが東福寺の虎關和尚の編するところ、推古天皇以來七百餘年間の、佛道に關したる事を詳しく記せり、

【言行ハ君子ノ樞機】 易の繫辭上傳に「言行、君子之樞機、樞機之發、榮辱之主也、樞は戸の「クルル」をいひ、機は弩牙（ヒキガネ）をいふ、以て事の要に喩ふ、また易に「言行者君子之所以動天地也、可不慎乎」ともあり、

【懸隔】 甚しくへだたる義、史記の高祖本紀に「秦形勝之國、帶山河之險、一千里」の註に「河山ノ險固、形勝ナルヲ以テ、其ノ勢千里ヲ隔ツルガ如シ」

【玄學】 老莊の學をいふ、老子の「玄之又玄、衆妙之門」の語より出づ、晉書陸雲傳に「雲本無一」

【儼恪】 おごそかにしてつつしむ、禮記に「嚴威一、非所以事親也」

【劔閣嶮シト雖モ、之ヲ憑ム者ハ厥ク云云】 太平記卷九に見ゆ、鈔に「左太冲ガ魏都賦ノ辭ナリ、文選第六卷ニノセタリ、劔閣ハ蜀ノ境ニ在リ、ソノ峯ガ劔ノゴトク、ソノ勢閣ノ如クナレバ名トスルナリ、小劔、大劔ノ二ノ峯アリ、其間三十里許ナリ、猶委クハ張孟陽ガ劔閣賦ニ見エタリ、文選第五十六卷ニ載ス」とあり、嶮ハ「ケハシ」「タカシ」

【劔閣ノ遠キ昔】 太平記卷九に見ゆ、唐の玄宗天寶十五年、安祿山の亂によりて都を出て、蜀に奔る、路劔閣の嶮山を過ぐ、その昔をいふ、

【元好問】 字は裕之、道山と號す、金の太原秀容の人、父徳明幼より書を嗜み、詩酒自ら適す、好問七歳詩を能くす、長ずるに及び經史百家を淹貫す、正大中に、南陽の令となり、累遷して尙書省左司員外郎となる、金亡びて仕へず、著すところ杜詩學、東坡詩雅、詩文自警、壬辰雜編等あり、大同三年歿す、年六十八、

【元亨利貞】 易に「乾一」とある傳に「一ハ一ハ之ヲ四徳トイフ、元トハ萬物ノ始メ、亨トハ萬物ノ長利トハ萬物ノ遂、貞トハ萬物ノ成ナリ、惟、乾坤ニ、此ノ四徳アリ」と、元は春に屬し、仁と爲す、亨は夏に屬し、禮と爲す、利は秋に屬し、義と爲す、貞は冬に屬し、智と爲す、

【兼葭玉樹ニ依ル】 成語考に「兼葭依玉樹、自謙借戚屬之光」註に「毛曾、夏侯湛ト竝ビ坐ス、之ヲ兼葭玉樹ニ依ルトナス」とあり、貴き親戚を得たるに對し自ら謙していふ、またひろく賢人貴人等に交るにあたり、先方を玉樹に比し、自ら謙して兼葭に比していふ、兼は「ヒメヨシ」一説に荻なりと、葭は「アシ」

【研覈】 研は審なり、覈は實なり、是非を論究してその實を審かにする義、文選に「溫故知新、一是非」

【劔客】 「ケンジュツシ」劔士ともいふ、後漢書の馬廩の

【阮家ノ南北ノ垣云云】 十訓抄第五に見ゆ、これは新撰朗詠集に無、隣家と題して「阮家南北舊來隣、不隔牆垣不愧貧」とあるに本づく、晉書阮咸傳に「咸字仲容、與籍居道南、諸阮居道北、北阮富而南阮貧、七月七日、北阮盛晒衣服、皆錦綺、衆目咸以竿掛、大布積鼻于庭、人或怪之、答曰、未能免俗、聊復爾耳」

【懸河ノ辯】 辯說水の流るるが如き能辯をいふ、晉書の郭象傳に「郭象字ハ子玄、少クシテ才理アリ、老莊ヲ好ンデ清言ヲ能クス、太尉王衍毎ニイフ、象ガ語ヲ聽ケバ、如懸河瀉水而不竭」

【堅甲利兵】 堅固なる甲を擐、銳利なる兵器を帶ぶる精兵をいふ、孟子に「可使制挺以撻秦楚之一一」矣、荀子に「一一、不足以為勝」

【阮咸】 字は仲容、籍の兄の子、竹林七賢の一人なり、任達にして不拘なり、籍と名を齊しくす、仕へて散騎侍郎に至る、音律に妙にして、善く琵琶を彈ず、性酒を好み、家甚だ貧し、咸籍と道南に居り、諸阮は道北に居る、北阮は富み、南阮は貧し、七夕の日、北阮衣を曝して、錦綺日に熇く、咸竹竿を以て積鼻樞を庭に掲げて曰く、未だ俗を免るること能はず、聊また爾のみと、

【嚴顔】(嚴將軍)を見よ、

【軒岐】醫術をいふ、軒は黄帝軒轅氏なり、岐は岐伯なり、皇甫謐の帝王世紀に「黃帝岐伯ヲシテ醫藥ヲ司ラシメ衆庶ノ疾ヲ治セシム」

【險巇】頭危なり、あやふくけはし、楚辭に「何周道之平易兮、然蕪穢而一一」また廣絶交書に「世路一一至此、大行孟門豈云嶄然、張九齡の詩に「經途避一一」また嶮巇と義同し、

【元魏】拓跋魏、後に元氏と改む、故にいふ、

【牽牛織女】七月七日、牽牛、織女の二星が、天の河を渡りて相會ふといふ事、事林廣記に詳かなり、曹植九詠の注に「牽牛夫タリ、織女婦タリ、二星各一、旁ニ處ル、七月七日一會同ヲ得」

【元規ノ塵】次の故事によりて、心よからぬ人の行爲をいふに用ふ、晉書に「庾亮居外鎮、而執朝廷之權、導内不能平、常遇西風塵起、舉扇自蔽曰「一一汚人」元規は亮の字、導は王導、

【兼金】好金なり、價、常に兼倍するもの、孟子に「王飽兼金一百」

【獻芹】(芹ヲ獻ズ)を見よ、

【牽強】強ひてひきつくる義、「コジツケル」一一附會

【誼諱】かまひすしく騒ぐなり、史記の鼂錯傳に「諸侯

【嚴光】(嚴子陵)を見よ、

【縣官】史記絳侯世家の註に「一一天子ヲ謂フ、王者ハ天下ヲ官ニス、故ニイフ」漢書東平王傳に「今一一年少」の註に「張晏イフ、敢テ天子ヲ指斥セズ、故ニ之ヲ一一トイフ」

【玄關】玄妙の門の義、禪寺にて客殿に入る門をいふ、轉じて常の人家の正面の門をいふ、傳燈錄に「懸河ノ辯ヲ瀉ギ、稠人廣衆ニ對シ一一ヲ啓鑿シ、般若ノ妙門ヲ開ク」とあり、幽玄なる門關を啓くの意より出てたり、一解に、玄旨に涉入するの關門なりと、

【懸磬】謹直にして誠あると、後漢書に「辭氣一一」

【懸磬】家資の空しさをいふ(室一一)を見よ、

【元輕白俗郊寒島瘦】唐の元稹の詩は輕浮、白居易の詩は淺俗、孟郊の詩は寒酸、賈島の詩は瘦衰の氣味ありとの義、宋の張表臣の珊瑚鉤詩話に「詩以意爲主、又須篇中練句、句中練字、乃得工耳、以氣韻清高深妙者、絶以格力雅健雄豪者、勝一一、一一皆其病也」

と連用す、蘇軾の句に「烹煎崖蜜真一一」

【軒渠】笑ふ貌、後漢書方技傳に「一一笑自若」また湘素雜記には同書荀子訓傳に「兒識父母、一一笑悅、欲往就之」とあるを引きて「一一ハソノ身體ヲ舉ゲテ以テ父母ニ就カント(とりつく)欲スルノ狀ナリ」といへり、

【噉嚼】説文に「魚口上見也」淮南子主術訓に「水濁則魚噉、政苛則民亂」庾肩吾の詩に「江鱗乍一一」

【建極】民の則とすべき道を立つる義、書經の洪範に「皇建其有極」疏に「人君爲民之主、大自立其有中之道」とあり、

【玄駒】蟻の異名、古今注に「河内ノ人、河ニ遊ビテ人馬數千萬ヲ見ル、皆黍米ノ如シ、遊動往來ス、火ヲ以テ之ヲ燒ケバ、人ハ皆是レ蚊蚋ニシテ、馬ハ皆是レ大蟻ナリ、故ニ蟻ヲ名ツケテ一一トイフ」

【嚴君】父をいふ、易の家人の卦に「家人ニ嚴君アリ、父母ノ謂ナリ」とあり、されども主として父をいふ、

【賢君アリト雖モ、無功ノ臣ヲ愛ヒズ】墨子の親士篇に「雖有賢君、不愛無功之臣、雖有慈父、不愛無益之子」とあり、

【嚴君平】(君平)を見よ、

【涓潔】さよらかなる義、元史に「殊非一一之道」涓も亦潔の義、

【元結】字は次山、唐の武昌の人、天寶十二年の進士、道州の刺史と爲り、容管經略使に進む、到る處、惠政あり、民石を立て徳を頌す、卒して禮部侍郎を贈らる、その詩自ら胸次を寫し、古人を規撫するを欲せず、而かも奇響逸趣、唐人中に在りて別に一派を開けり、

【涓涓】涓は説文に「小流ナリ」一一は水のちよろ／＼と小さく流るる貌、潘岳の句に「泉一一而吐溜」また家語の金人銘に「一一不壅、終爲江河」

【拳拳】忠謹の貌、漢書貢禹傳に「不勝一一不敬不盡」愚心「また一一は憂なり、愛なり、勤懇なり等の解あり、また奉持して失はざる貌、中庸に「得一善、則一一服膺而弗失之矣」

【眷眷】顧みる貌、あはれと目をかくること、詩經に「一一懷顧」勤厚の意なり、

【軒軒】高く衆に出づる貌、世説に「會稽王來、一一如朝霞舉」また舞ふ貌、淮南子道應訓に「一一然迎風而舞」

【憲憲】興り盛んなる貌、柳文の箕子の碑に「一一大人其德不渝、渝は變なり、

【蹇蹇】 艱難の甚しきをいふ、また忠貞の貌(匪躬ノ節)を見よ。

【審審】 正しき言なり、また直言なり、後漢書魯丕傳に「廣納一以開四聰」また蹇蹇に通じ用ふ、晉書王豹傳に「王臣一」

【元元】 百姓をいふ、黎元に同じ、戰國策に「制海内子」一「また史記の文帝本紀に「全天下一之民」の註に「古者人ヲ謂ヒテ善人トイフ、善ニ因ツテ元トナス、故ニ黎元トイフ、ソノ元元トイフハ多衆ニシテ一人ニ非ザレバナリ」と、また根本の義にも用ふ、後漢班固の傳に「一一本本」

【原憲】 周の宋人、孔子の弟子、原思なり、人と爲り狷介居る所、蓬樞甕牖なり、子貢之に過ぎりて曰く、夫子病めるかと、憲曰く、財なき之を貧といふ、道を學びて行ふこと能はざる之を病といふ、思の如きは貧なり、病にあらざるなりと、杜甫の詩に「諸生一貧」

【拳拳服膺】 中庸に「子曰ク、回ノ人ト爲リヤ、中庸ヲ擇ブ、一善ヲ得レバ、則チ一シテ之ヲ失ハズ」同は孔子の弟子、顔淵の名、拳拳は奉持(ササゲモツ)の貌、服は猶ほ著のごとし、膺は膺なり、奉持して之を心膺の間に著く、能く守るをいふ、顔子は蓋し眞に之を知

る、故に能く擇び能く守ること此の如し、此れ之を行ふこと、過不及無き所以にして、道の明かなる所以なり、

【頸工】 「ヤキモノシ」南畿志に「陳沂ガ琉璃塔ノ記ニ、文皇詔天下盡一之能者、造五色琉璃」(甄者)を見よ、

【箱口】 口をツグミテ言はざるなり、莊子の田子方篇に「形解不欲動口、箱不欲言、箱は箱に同じ、また漢書の爰盎傳に「君自閉箱、天下之口而日益愚」

【錯口】 口をつぐみて言はざるをいふ(箱口)に同じ、

【元后】 元は大なり、后は君なり、大君に同じ、天子の別稱、書の泰誓に「亶聰明作一、一作民父母」

【險語鬼膽ヲ破ル】 奇險の語、鬼神を驚かしむる義、唐の韓愈の詩に「險語破鬼膽、高詞驚皇墳」墳は墳典なり、

【懸弧ノ令旦】 男子の誕生日をいふ、禮記の内則に「男子生、桑弧六、蓬矢六、以射天地四方、天地四方、男子所有事也」とあるに本づく(設帳)を參看せよ、

【硯材】 硯につくるべき石材、怡情小品に「汪森遊靈巖記、其下多一」

【歎歲】 歎は説文に「食不滿也」博雅に「少也」一は穀物の實らざる凶年をいふ、宋書明帝の詔に「歳久不登、

公私歎歎」

【言悖リテ出ヅル者ハ、悖リテ入ル】 (悖リテ入ル)を見よ、

【研鑽】 研究すること、研はとき磨く、鑽は物を穿つ器「ノミ」の類、一は深くみがきをさむる義、爾雅の序の字面、

【嚴粲】 字は明卿、宋の邵武の人、毛氏の詩に精し、註する所の毛詩、名づけて嚴氏詩輯といふ、善本なり、

【岷山碑】 岷山は襄陽に在り(墮涙ノ碑)を見よ、

【健兒】 勇壯のわかもの、南史宗室傳に「募一、百餘人」杜甫の詩に「朔方一好身手」また隨侍の軍卒をいふ、六典に「左右萬騎躡天下諸軍有」

【元子】 天子の嫡子をいふ、書經に「有王雖小一」

【元史】 明の宋濂撰す、本紀四十七卷、志五十三卷、表六卷、列傳九十七卷あり、此の書倉卒にして成る、最も疎略となす、太祖嘗て解縉に命じて改修せしむ、書竟に成らず、故に仍この書を以て正史に列す、

【言志】 詩をいふ、書經の舜典に「詩言志、歌永言」

【元戎】 大いなる兵車なり、詩經小雅六月篇に「一十乘、以先啓行」とあり、大戎に同じ、

【元次山】 (元結)を見よ、

【言志】 詩をいふ、書經の舜典に「詩言志、歌永言」

【牽絲ノ幸】 婚を定むるを牽絲の幸を遂ぐといふ、唐の郭元振丰姿に美なり、宰相張嘉貞納れて婿となさんと欲し、言つて曰く、吾が五女各一絲を持てり、慢後より子之を牽け、得たるものを婦となさんと、元振一紅絲を牽きて、第三女を得たり、姿色あり、

【原隰】 書經禹貢の字面、傳に「高クシテ平カナルヲ原トイフ」また公羊傳昭元年に「下平ヲ隰トイフ」低くして濕りたる地をいふ、

【欠伸】 欠は「アクビ」なり、伸は「ノビラスル」なり、禮記に「君子欠伸」の註に「氣乏シキトキハ欠シ、體疲ルルトキハ伸ス」

【涓人】 涓は「イサギヨシ」涓潔の人、謁者の類をいふ、顔師古曰く「涓ハ潔ナリ、言フ心ハ其ノ中ニ在リテ、潔清洒掃ノ事ヲ知ルコトヲ主ル、蓋王ノ親舊左右ナリ」

【元稹】 字は微之、河南河内の人、元和元年、制科に擧げられ第一たり、左拾遺に除し、監察御史に至る、事に坐して貶せられ、また徵用せられ、累遷して尙書左丞、檢校戸部尙書となり、鄂州刺史、武昌軍節度使を兼ね、卒して尙書右僕射を贈らる、少より白居易と唱和し、元白と稱せらる、その詩を元和體となす、集あり元氏長慶集といふ、

【玄真子】唐の張志和、字は子同、金華の人、一（一本）
真ヲ貞ニ作ル）と號す、自ら歌を作りて曰く、青籜笠、
（籜ハ竹小ニ葉大ナリ、ソノ葉ヲ以テ雨笠ヲ作ル）綠蓑
衣、斜風細雨不須歸と、雨具相隨ふ、風雨と雖も、歸る
をもちひずとの義（釣徒）を見よ、

【甄者】甄は埴をこねて器をつくるをいふ、スエ、陶工
に同じ、漢書董仲舒の傳に「唯一一之所爲」の註に「
一ハ瓦ヲ作ルノ人」とあり、

【玄昇】高僧なり、姓は陳氏、河南洛陽の人、隋の大業
の末、出家す、經典に深くして、辨博群に絶す、翻譯の
訛謬多きを病み、貞觀の初、商人に隨ひ、西域に遊び、
廣く異本を求めて之を參驗し、居ること凡そ十七年、
百餘國を経、悉くその語を解し、西域記十二卷を撰す、
貞觀十九年歸りて京に到り朝見す、太宗詔して弘福
寺に於て梵本六百五十七部を翻譯せしむ、凡そ七十
五部を成して之を上る、麟德元年二月五日寂す、年六
十五、帝朝を輟むること三日、

【嚴將軍ノ頭】三國志の蜀志に「劉璋が將嚴顔江州ヲ
守ル、蜀ノ將張飛攻メテ之ヲ破リ、遂ニ顔ヲ獲タリ、飛
喝シテ曰ク、何ゾ早ク降ラザルト、顔ガ曰ク、卿無狀我
ガ州ヲ侵奪ス、我州ニハ、但斷頭將軍アリテ、降將軍ナ
シト、飛怒リテ命ジテ之ヲ斬ラシム、顔色變ゼズシテ
曰ク、頭ヲ斬ラントナレバ、便チ頭ヲ斫レ、何ゾ怒ラン
ヤト、飛壯トシテ之ヲ釋ス」文天祥の正氣歌に「爲嚴
將軍頭爲嵇侍中血」
【嚴將軍ノ頭ト爲ル】（爲嚴將軍頭）文天祥正氣の歌
の中の一句、前項または（斷頭將軍）を見よ、

【沉湘日夜東流去】唐の戴叔倫の湘南即事の轉句
なり、即ち「盧橘花開楓葉衰、出門何處望京師、一
一、不爲愁人住、少時」とあり、沉湘は二水の
名、江に會す、三體詩の註に「身不得去、故怨水之去、
所以深傷己之不能去也」この詩、作者が曹王に從ひ
て湖湘間に在り、歸を思ひて作るところなり、光陰匆
匆として逝きて人を待たず、沉湘滔滔として去るも、
我之に倣ひて去ること能はず、而して京師は何の處
にかある、瞻望すれども及ばず、絳情眞摯、出語尤も
清雋、怨を無情の流水に寄す、怨み得て妙なり、
【懸車ノ年】七十をいふ、漢書薛廣德傳に「與丞相定國、
車騎將軍史高、俱乞骸骨、皆賜安車駟馬黃金六十斤、
罷、廣德東歸沛、太守迎之界上、沛以爲榮、縣其安車、
傳子孫」とあり、注に「縣其所賜安車、以示榮也」さて
禮の曲禮に「大夫年七十而致事」とあり、致事とは致

仕の義なり、晉書劉毅傳にも「雖過懸車之年、必有可
用」とあり、懸縣二字同じ、

【黔首】黎民と言ふに同じ、史記の始皇本紀に「更メテ
民ヲ名ヅケテ、一トイハシ」とあり、書經の堯典の註
に「黎ハ黒ナリ、民ノ首皆黒シ、故ニ黎民トイフ」とあ
り、黔も亦黎（クロシ）の義、戰國策魏策「扶社稷、安一
【懸珠】目のうつくしきに喩ふ、漢書の東方朔傳に「臣
朔年二十二、長九尺三寸、目若一、齒若編貝」
【元首】元も亦首なり、君は身體の頭首あるが如し、故
に君の稱とす、書經益稷に「一明哉、股肱良哉、庶事
康哉」
【玄珠】道家者流にて、道の眞に名づけて「一」といふ、
莊子の天地篇に「黃帝赤水ノ北ニ遊ビ、崑崙ノ丘ニ登
リ、而シテ南望シテ還歸シ其ノ一ヲ遺ル」
【賢主ハ人ヲ求ムルニ勞シテ、事ヲ治ムルニ佚ス】（賢
主勞求人、而佚于治事）人才を得れば、政事を治むる
こと容易なればなり、呂子の語、
【嚴峻】「オゴソカニキビシ」史記酷吏傳に「吏務爲一
【乾淳ノ三先生】朱熹（字ハ元晦）張拭（字ハ敬夫）號ハ
南軒）呂祖謙（字ハ伯恭）號ハ東萊）をいふ、

【卷舒】猶ほ屈伸の如し、淮南子に「羸縮一、與時變
化」また進退の義にも用ふ、
【健訟】自ら強くして息まず、好んで争訟をなすをい
ふ、カチキにて妄りに争ひうつたふ、易の説卦に「險
而一」
【縣勝母ト名ヅクレバ曾子入ラズ】その名を惡みてな
り、史記魯仲連鄒陽傳に「縣名勝母、曾子不入、邑號朝
歌、墨子剋車」説苑には「邑勝母ト名ヅクレバ曾子入
ラズ、水盜泉ト名ヅクレバ、孔子飲マズ」に作る、
【嚴子陵ガ釣臺】處士嚴光は字を子陵といふ、餘姚の人、
後漢の光武帝と嘗て同じく游學す、帝物色して之を
齊國に得たり、羊裘を披て澤中に釣る、徵し至る、亦屈
せず、帝光と同じく臥す、光足を以て帝の腹に加ふ、明
日本史奏す、客星御座を犯すこと甚だ急なりと帝曰
く朕故人嚴子陵と同じく臥するのみと、諫議大夫に拜
す、受くるを肯んぜず、去りて舂釣し、富春山に隠れて
終る、富春山は、浙江嚴州府桐廬縣の西三十里に在り、
一名嚴陵山、清麗奇絶、錦峯繡嶺と號す、乃ち漢の嚴子
陵、隱釣の處、前大江に臨み、上に東西二釣臺あり
【元帥】總大將をいふ、左傳の僖二十七年の「謀一」
の註に「中軍ノ帥ナリ」

【嚴遂成】字は崧瞻、海珊と號す、清の浙江烏程の人、雍正二年の進士、雲南の知州に官す、詩に工に著す、この海珊詩鈔あり、その明史雜詠は、時に詩史と稱す、

【牽掣】ひきつけて自由にさせぬ、漢書元帝紀贊に、「一義、優遊不斷」唐書に、「一、首尾」

【元夕】上元に同じ、正月十五日を上元といふ、夜に入れば、戸戸燈を張り、游觀す、事類全書に、唐太宗時、三元不禁夜、上元御乾元門、中元下元御東華門、而上元游觀獨盛

【言責】言語に責任を有すること、孟子に、「有—者、不得其言、則去」諫官の職に在るものの如きは、—あるものなり、

【阮籍】晉書に、「—字ハ嗣宗、瑀ノ子、性不羈ニシテ喜怒形レズ、老莊ヲ好ミ、酒ヲ嗜ミ、能ク嘯キ、善ク琴ヲ彈ズ、其ノ意ヲ得ルニ當ツテハ、形骸ヲ忘ルルニ至ル人多ク之ヲ癡トイフ、白眼」を參看せよ、

【泣然】涙のはらりと落つる貌、禮記に、「孔子—流涕」

【儼然】「オゴソカナル貌、威儀莊嚴なる義、論語に、「望之—」

【玄宗ノ友愛】唐書に、「玄宗ノ兄薛王業疾アリ、上親ラ

爲メニ藥ヲ煮ル、會、回臈火ヲ吹キ、其ノ鬚ヲ齧ク、左右驚キテ之ヲ救フ、上曰ク、但王ヲシテ此ノ藥ヲ飲ミテ愈エシメバ、則チ朕ガ鬚ハ何ソ惜ムニ足ランヤト」

【眷屬】眷顧し係屬する義にて、家族從僕の類をいふ、史記樊噲傳に、「誅、諸呂呂須嬖屬」嬖は眷なり、普觀記に、「眷ハ顧ナリ、屬ハ續ナリ、恩相連續スルヲイフ」

【謙巽】巽は遜に同じ、—は、「ヘリクダ」韓愈の句に「—滋甚」

【玄孫】「ヒマゴ」の子、史記に、「孫之孫爲何、曰、爲—ト爾雅の註に、「玄トハ、親屬ノ微味ナルヲイフ」

【鼈龜】鼈は説文に、「大鼈也」とあり、鼈は蜥蜴に似て長さ丈餘、その甲は鏡の如く、皮は堅厚にして鼓に冒すべし、禮記の月令に、「季夏天子命漁師、伐蛟、取鼈、登龜、取鼈」中庸に、「今夫水一勺之多、及其不測、—蛟龍魚鼈生焉」

【萱堂】詩の衛風伯兮篇に、「焉得—言、樹之背」とあり、背は北堂なり、北堂は母の居るところ、類書纂要に、「人ノ母ヲ稱シテ萱堂令堂北堂トイフ」詩の註に「設ハ忘ナリ、萱ト同ジ、萱草ハ合歡、之ヲ食ヘバ憂ヲ忘ル」と、萱草また宜男草と名づく、婦人其花を帶ぶれば即ち男を生む、故に母を稱して萱堂といふ、

【壺池】壺の「ウミ」葉平巖の詩に、「雙雙瓦雀行書案、點點楊花入—」

【壺簾相和】壺簾はみな樂器、笛の屬、壺は埙に同じ、土を燒きて造り上尖り底ひらたく、形稱鐘（ハカリノオモリ）に似たり、その聲叫ぶが如し、簾は横笛の一種、長さ尺四寸若くは尺二寸、管に八孔あり、その一孔は上において吹く所とす、小兒の啼聲に似たり、兄弟の親しきこと壺唱へて簾和するが如きに喩ふ、詩の小雅に「伯氏吹壺、仲氏吹簾」

【獻替】可を進め、否を廢つるなり、文選の袁宏の三國名臣序贊に、「道ヲ以テ世ヲ佐ク、出デテハ能ク功ヲ勤メ、入リテハ能ク—」註に、「出デテハ將帥ト爲リ、事ヲ勤メテ功アリ、入リテハ、則チ其可否ヲ—ス、獻ハ進ナリ、替ハ廢ナリ」

【嚴程】「タビダチ」の支度をいふ、書言故事に、「人ノ遠行ヲ問ウテ、嚴程在幾時トイフ、杜甫ノ送長孫判官詩ニ、聞君適萬里、取別何草草、天子憂涼州、—須到早」と、嚴は急切にする義なり、また曹子建の詩に、「僕夫早嚴駕、吾將—遠行遊」

【玄鳥】「ツバメ」なり、呂氏春秋に、「仲春月—至」燕は

輕ナリ、輕ハ重ナリ

【頸陶】頸もまた陶なり、「スエ」轉じて民を治めて善に化せしむる義、漢書董仲舒傳に、「夫上之化、下之從上、猶泥之在鈞、惟甄者之所爲、師古の註に、「甄ハ瓦ヲ作ル人ナリ、何晏の景福殿賦に、「—國風」の註に、「埴ヲ埴シテ器ヲツクルヲ—トイフ、王者モ亦ソノ民ヲ—スルナリ」

【現當】佛經の語、現在と當來とをいふ、この世とあの世と、

【健啖】大食をいふ、「ヨクモノヲクラフ」癸辛雜識に、「聞、—健は多なり、儒門事親にも、「—如昔日」

【乾端坤倪】天地の「カギリ」倪も亦端なり、韓文の南海神廟碑に見ゆ、

【妍媸】妍は美なり、媸は醜なり、世説に、「顧長康、人ヲ畫クニ、或ハ數年目、睛ヲ點ゼズ、或人之ニ問フ、曰ク、四體—、本ト妙處ニ關スルナシ、傳神寫照、正ニ阿堵ノ中ニ在リト」阿堵は「アレ」といふ俗語、こゝは睛を斥す、

【軒輕】詩經の小雅六月篇に、「戎車既安、如輕如軒」軒は車の後に却き回るなり、輕は、車の前に覆ひ回るなり、前より視れば軒の如く、後より視れば輕の如し、故に輕重高下なきを軒輕なしといふ、また釋文に「軒ハ

【涓滴】 春分に來り秋分に去る。

【涓滴】 すこしのシツク、杜甫の句に「重露成—」に轉じて物事の極めて些少なる義に用ふ。

【鉗徒】 鉗は鐵を以て罪人の頸を束ぬるなり「クビカセ—」は罪人なり、漢書衛青傳に「有—」相青曰、貴人也、官至封侯。

【玄同】 彼と我との差別なく、すべて一つに混同する義、文中子に「無所樂、無所苦、無所喜、無所怒、萬物—」

【驗得】 佛を祈念せし効によりて、その靈驗を得たるをいふ、十訓抄第七に「—」の方方不思議多かりける

【權德輿】 字は載之、阜の子、少くして文章を以て稱せらる、唐の德宗その才を聞き、召して左補闕となし、禮部尚書同平章事に累遷す、德輿思を經術に積み、貫綜せざるなし、動止外飾なしと雖も、醜藉風流自然に慕ふべし、子の璵進士に擧げられ、鄭州の刺史となる。

【犬兔ノ爭】 春秋後語に「韓、盧、東郭、魏、遂、山、二騰、ル、コト、五、タ、ビ、山、ヲ、環、ル、コト、三、タ、ビ、免、ハ、前、ニ、キ

【權德輿】 字は載之、阜の子、少くして文章を以て稱せらる、唐の德宗その才を聞き、召して左補闕となし、禮部尚書同平章事に累遷す、德輿思を經術に積み、貫綜せざるなし、動止外飾なしと雖も、醜藉風流自然に慕ふべし、子の璵進士に擧げられ、鄭州の刺史となる。

【權德輿】 字は載之、阜の子、少くして文章を以て稱せらる、唐の德宗その才を聞き、召して左補闕となし、禮部尚書同平章事に累遷す、德輿思を經術に積み、貫綜せざるなし、動止外飾なしと雖も、醜藉風流自然に慕ふべし、子の璵進士に擧げられ、鄭州の刺史となる。

【權德輿】 字は載之、阜の子、少くして文章を以て稱せらる、唐の德宗その才を聞き、召して左補闕となし、禮部尚書同平章事に累遷す、德輿思を經術に積み、貫綜せざるなし、動止外飾なしと雖も、醜藉風流自然に慕ふべし、子の璵進士に擧げられ、鄭州の刺史となる。

【權德輿】 字は載之、阜の子、少くして文章を以て稱せらる、唐の德宗その才を聞き、召して左補闕となし、禮部尚書同平章事に累遷す、德輿思を經術に積み、貫綜せざるなし、動止外飾なしと雖も、醜藉風流自然に慕ふべし、子の璵進士に擧げられ、鄭州の刺史となる。

【權德輿】 字は載之、阜の子、少くして文章を以て稱せらる、唐の德宗その才を聞き、召して左補闕となし、禮部尚書同平章事に累遷す、德輿思を經術に積み、貫綜せざるなし、動止外飾なしと雖も、醜藉風流自然に慕ふべし、子の璵進士に擧げられ、鄭州の刺史となる。

【權德輿】 字は載之、阜の子、少くして文章を以て稱せらる、唐の德宗その才を聞き、召して左補闕となし、禮部尚書同平章事に累遷す、德輿思を經術に積み、貫綜せざるなし、動止外飾なしと雖も、醜藉風流自然に慕ふべし、子の璵進士に擧げられ、鄭州の刺史となる。

【權德輿】 字は載之、阜の子、少くして文章を以て稱せらる、唐の德宗その才を聞き、召して左補闕となし、禮部尚書同平章事に累遷す、德輿思を經術に積み、貫綜せざるなし、動止外飾なしと雖も、醜藉風流自然に慕ふべし、子の璵進士に擧げられ、鄭州の刺史となる。

【權德輿】 字は載之、阜の子、少くして文章を以て稱せらる、唐の德宗その才を聞き、召して左補闕となし、禮部尚書同平章事に累遷す、德輿思を經術に積み、貫綜せざるなし、動止外飾なしと雖も、醜藉風流自然に慕ふべし、子の璵進士に擧げられ、鄭州の刺史となる。

【權德輿】 字は載之、阜の子、少くして文章を以て稱せらる、唐の德宗その才を聞き、召して左補闕となし、禮部尚書同平章事に累遷す、德輿思を經術に積み、貫綜せざるなし、動止外飾なしと雖も、醜藉風流自然に慕ふべし、子の璵進士に擧げられ、鄭州の刺史となる。

【權德輿】 字は載之、阜の子、少くして文章を以て稱せらる、唐の德宗その才を聞き、召して左補闕となし、禮部尚書同平章事に累遷す、德輿思を經術に積み、貫綜せざるなし、動止外飾なしと雖も、醜藉風流自然に慕ふべし、子の璵進士に擧げられ、鄭州の刺史となる。

【權德輿】 字は載之、阜の子、少くして文章を以て稱せらる、唐の德宗その才を聞き、召して左補闕となし、禮部尚書同平章事に累遷す、德輿思を經術に積み、貫綜せざるなし、動止外飾なしと雖も、醜藉風流自然に慕ふべし、子の璵進士に擧げられ、鄭州の刺史となる。

【權德輿】 字は載之、阜の子、少くして文章を以て稱せらる、唐の德宗その才を聞き、召して左補闕となし、禮部尚書同平章事に累遷す、德輿思を經術に積み、貫綜せざるなし、動止外飾なしと雖も、醜藉風流自然に慕ふべし、子の璵進士に擧げられ、鄭州の刺史となる。

【權德輿】 字は載之、阜の子、少くして文章を以て稱せらる、唐の德宗その才を聞き、召して左補闕となし、禮部尚書同平章事に累遷す、德輿思を經術に積み、貫綜せざるなし、動止外飾なしと雖も、醜藉風流自然に慕ふべし、子の璵進士に擧げられ、鄭州の刺史となる。

【權德輿】 字は載之、阜の子、少くして文章を以て稱せらる、唐の德宗その才を聞き、召して左補闕となし、禮部尚書同平章事に累遷す、德輿思を經術に積み、貫綜せざるなし、動止外飾なしと雖も、醜藉風流自然に慕ふべし、子の璵進士に擧げられ、鄭州の刺史となる。

ハマリ、犬ハ後ニ疲レテ、各ソノ處ニ死ス、田父見テ之ヲ獲タリ」と、鵝蚌の争は漁父の利といふと、義は同

【擗食】 貪り吞みて飽くことを知らず求めて止まざるをいふ、法華經に「衆生垢重—」嫉妬

【劍南詩稿】 八十五卷、宋の陸游撰す、游蜀に留まること十年、その風土を樂む、故に一生作る所、總べて目くるに劍南を以てす、猶ほ元稹白居易二人一生の作

【儉ナルハ存ジ、奢レルハ失ス】 十訓抄第二に見ゆ、杏爲梁ニハを見よ、

【劍ニ伏シテ使ヲ送ル】 (王陵)を見よ、

【堦ノ如ク堦ノ如シ】 詩經の小雅に「伯氏吹塤、仲氏吹簫、また如塤如簫とあり、塤は堦に同じ、樂器なり、土を燒きて作る、上銳に底平、形稱、錘に似たり、簫は爾雅の註に「長サ尺四寸、圍三寸、一孔上出寸三分、横吹之、小者尺二寸」と、伯氏は兄、仲氏は弟なり、兄弟の

【儉ナルハ存ジ、奢レルハ失ス】 十訓抄第二に見ゆ、杏爲梁ニハを見よ、

【劍ニ伏シテ使ヲ送ル】 (王陵)を見よ、

【堦ノ如ク堦ノ如シ】 詩經の小雅に「伯氏吹塤、仲氏吹簫、また如塤如簫とあり、塤は堦に同じ、樂器なり、土を燒きて作る、上銳に底平、形稱、錘に似たり、簫は爾雅の註に「長サ尺四寸、圍三寸、一孔上出寸三分、横吹之、小者尺二寸」と、伯氏は兄、仲氏は弟なり、兄弟の

【儉ナルハ存ジ、奢レルハ失ス】 十訓抄第二に見ゆ、杏爲梁ニハを見よ、

【劍ニ伏シテ使ヲ送ル】 (王陵)を見よ、

【堦ノ如ク堦ノ如シ】 詩經の小雅に「伯氏吹塤、仲氏吹簫、また如塤如簫とあり、塤は堦に同じ、樂器なり、土を燒きて作る、上銳に底平、形稱、錘に似たり、簫は爾雅の註に「長サ尺四寸、圍三寸、一孔上出寸三分、横吹之、小者尺二寸」と、伯氏は兄、仲氏は弟なり、兄弟の

【儉ナルハ存ジ、奢レルハ失ス】 十訓抄第二に見ゆ、杏爲梁ニハを見よ、

【劍ニ伏シテ使ヲ送ル】 (王陵)を見よ、

【堦ノ如ク堦ノ如シ】 詩經の小雅に「伯氏吹塤、仲氏吹簫、また如塤如簫とあり、塤は堦に同じ、樂器なり、土を燒きて作る、上銳に底平、形稱、錘に似たり、簫は爾雅の註に「長サ尺四寸、圍三寸、一孔上出寸三分、横吹之、小者尺二寸」と、伯氏は兄、仲氏は弟なり、兄弟の

【儉ナルハ存ジ、奢レルハ失ス】 十訓抄第二に見ゆ、杏爲梁ニハを見よ、

【劍ニ伏シテ使ヲ送ル】 (王陵)を見よ、

【堦ノ如ク堦ノ如シ】 詩經の小雅に「伯氏吹塤、仲氏吹簫、また如塤如簫とあり、塤は堦に同じ、樂器なり、土を燒きて作る、上銳に底平、形稱、錘に似たり、簫は爾雅の註に「長サ尺四寸、圍三寸、一孔上出寸三分、横吹之、小者尺二寸」と、伯氏は兄、仲氏は弟なり、兄弟の

【儉ナルハ存ジ、奢レルハ失ス】 十訓抄第二に見ゆ、杏爲梁ニハを見よ、

【劍ニ伏シテ使ヲ送ル】 (王陵)を見よ、

【堦ノ如ク堦ノ如シ】 詩經の小雅に「伯氏吹塤、仲氏吹簫、また如塤如簫とあり、塤は堦に同じ、樂器なり、土を燒きて作る、上銳に底平、形稱、錘に似たり、簫は爾雅の註に「長サ尺四寸、圍三寸、一孔上出寸三分、横吹之、小者尺二寸」と、伯氏は兄、仲氏は弟なり、兄弟の

【儉ナルハ存ジ、奢レルハ失ス】 十訓抄第二に見ゆ、杏爲梁ニハを見よ、

【劍ニ伏シテ使ヲ送ル】 (王陵)を見よ、

【堦ノ如ク堦ノ如シ】 詩經の小雅に「伯氏吹塤、仲氏吹簫、また如塤如簫とあり、塤は堦に同じ、樂器なり、土を燒きて作る、上銳に底平、形稱、錘に似たり、簫は爾雅の註に「長サ尺四寸、圍三寸、一孔上出寸三分、横吹之、小者尺二寸」と、伯氏は兄、仲氏は弟なり、兄弟の

【儉ナルハ存ジ、奢レルハ失ス】 十訓抄第二に見ゆ、杏爲梁ニハを見よ、

【劍ニ伏シテ使ヲ送ル】 (王陵)を見よ、

【堦ノ如ク堦ノ如シ】 詩經の小雅に「伯氏吹塤、仲氏吹簫、また如塤如簫とあり、塤は堦に同じ、樂器なり、土を燒きて作る、上銳に底平、形稱、錘に似たり、簫は爾雅の註に「長サ尺四寸、圍三寸、一孔上出寸三分、横吹之、小者尺二寸」と、伯氏は兄、仲氏は弟なり、兄弟の

【玄武】 天の北方の神なり、北斗をいふ、東を青龍、南を朱雀、西を白虎、北を一といふ（一ハ龜蛇ノ象ナリ）これを四神といふ、天の四方の星象によりて名づく、

【元服】 幼童が元めて大人の服を著、冠をかぶり、成人となるの禮儀禮に「祝シテ曰ク、合月吉日、始メテ一ヲ加フ、爾ノ幼志ヲ棄テテ、爾ノ成徳ニ順ヘト」

【玄武門ニ血ヲ蹀ム】 玄武門とは、洛陽城の北門の名なり、唐書の太宗紀に「太宗始メ秦王タリ、ソノ父高祖ヲ勸メテ天下ヲ定メ、威名日ニ盛ンナリ、兄太子建成之ヲ忌ミ、弟齊王元吉ト謀リテ之ヲ除カント欲ス、秦王ノ府僚王ニ勸メテ周公ノ事（周公は兄の管叔弟の蔡叔を放殺せり）ヲ行ハシム、王乃チ兵ヲ玄武門ニ伏セ、太子及ビ齊王ヲ射殺シ、遂ニ立チテ太子トナル」と蹀血とは、わが足にて同胞の血をふむをいふ、

【權柄】 字彙に「權は稱、權柄ハ斧ノ柄、人ノ上ニ居ル者ノ執ル所、下ニ移スベカラザル者」とあり、六韜に「無借人國柄、借人國柄、則失其權」また漢書劉向傳に「夫大臣操權柄、持國政、未有不爲害者也」

【見兵】 「アリアフツハモノ」通鑑唐紀に「當分一爲五番」

【元明善】 金の人、字は復初、清河の人、五經皆通じ、尤も春秋に達し、早く文章を以て自ら豪とす、翰林學士參知政事を歴、一代の文宗たり、文敏と諡せらる、

【權門】 權勢のさかんなる家をいふ、文選の陳琳の檄に「與金華壁、輸貨一」

【檢約】 「ツツマヤカ」にする義、史記龔遂傳に「遂爲渤海太守、躬率以」

【權輿】 事の始めをいふ、詩の秦風權輿篇の、嚴粲の註に「衡ヲ造ルニハ權ヨリ始メ、車ヲ造ルニハ輿ヨリ始ム、故ニ始ノ義トナス」衡は稱衡（ハカリザラ）なり、衡を造るには、權錘より始む、輿は車の底なり、

【煙】 「カスミ」に似たる氣なり、謝眺の句に「桑柘起寒煙」また唐詩に「一村桑柘一村煙」また李白の詩に「梨花千樹雪、楊柳萬條煙」

【權利】 權勢利益なり、史記の鄭世家に「語有之、以一合者、權利盡而交疎」

【建瓴】 建は覆すなり、瓴は水をいふる「カメ」なり、高き處より瓴の水をこぼすは勢のつよきに喩ふ、史記の高祖紀に「猶居高屋之上、建瓴水也」

【黔黎】 黔首に同じ「タミクサ」をいふ、黎は衆庶の義、

ゲンメーケンマ

【研辨】 硯をすくくせ、五雜組に「蔡氏可謂世有一」

【甄別】 甄は明らかに察するをいふ、一はあきらかにわかつ義、元史に「一能否」

【玄圃】 崑崙山に在り、天帝居るところといふ、また崑崙山の異名、抱朴子に「登一者、悟丘阜之卑、浮溟海者、識池沼之褊」褊は狭なり、小なり、

【玄謨】 深き「ハカリゴト」、晉書齊王冏傳に「偉哉武閔、首創一」

【研北】 研は硯に同じ、几案は南に向ふ、人は硯の北に坐す、故に人の左右を稱して研北といふ、書簡に某君研北と書く高士奇の天祿議餘に「杯宴之餘、常居一」

【願朴】 生れままにして飾なきをいふ「スナホ」後漢書に「山民一質朴素朴などいふに同じ、

【賦畝ノ中】 賦は田開の「ミゾ」畝は田の「ウネ」なり、田舎の開といふが如し、孟子に「舜發於賦畝之中」

【玄圃ノ積玉】 晉書に「葛洪稱陸機文猶玄圃積玉無非、夜光焉」玄圃は崑崙の異名、文の美なること、崑崙山の玉の累積するが如しとなり、

【肩摩】 人や車の雜沓するをいふ、戰國策に「臨淄之途、車轂擊、人肩摩、連衽成幃、舉袂成幕、揮汗成雨」

唐文宗の詩「願蒙四海福」

【賢路ヲ避ク】 避賢路自ら退隱して、賢者の爲めに仕進の路を避けて、妨げざるをいふ、史記萬石君傳に「願歸丞相侯印、乞骸骨歸避賢者路」賢路避ケを參看せよ、

【玄鹿】 錦字箋に「鹿ハ千歳ニシテ蒼、又五百歳ニシテ白、又五百歳ニシテ玄、仙者ノ説ニ、一ノ脯トナシ、之ヲ食ヘバ壽二千歳」

【懸腕枕腕】 書法の語、古今法書苑に「腕法有三、有枕腕、有懸腕、有提腕、枕腕者、以左手枕右手、而書之、提腕者、肘著案、虛提手腕、而書之、懸腕者、懸著空中、而書之、枕腕以書、小字、提腕以書、中字、懸腕以書、大字」



【孤哀子】 父母の喪を共にするを自ら稱して「孤」といふ、兩親の忌中に在る子の稱(孝子(哀子)を參看せよ、

【胡渭】 字は開明、東樵と號す、清の德清の人、心を經義に潛め、尤も輿地の學に精し、徐乾學の詔を奉じて一統志を修するや、渭及び顧祖禹、閻若璩等を延き、郡を分ち纂輯せしむ、著す所の禹貢錐指二十八卷、歴代の義疏より、方志輿圖に至るまで、搜索殆ど徧く、九州の分域、山水の脈絡等詳明ならざるはなし、康熙五十二年卒す、年八十二、

【五噫】 噫は恨聲なり、後漢書の逸民傳に、梁鴻過京師、作「一之歌、曰陟彼北芒兮噫、顧瞻帝京兮噫、宮闕崔巍兮噫、人之劬勞兮噫、遼遠未央兮噫、この詩、民を土木に勞せしむるを嘆じて作る、首二句、登高望遠より説き起す、三四はこれ主句、末句底止するところを知らざるの意あり、限りなき悲痛、全く五個の噫字托出するに在り、眞に是れ創體、

【吾伊】 讀書の聲なり、黃山谷の詩に「南窓讀書聲——」
唔啞に作る同じ、

【五友】 薛文清のさだめたる「一」は、竹、梅、蘭、菊、蓮、
【滬遊雜記】 四卷清の武林の人葛元煦著す、都門紀略に仿ひて、上海に遊ぶ官民の便覽に供せんために編する由、光緒二年著者の序に見ゆ、滬は上海の異名、

【虎威ヲ借ル狐】 (狐)を見よ、
【吳偉業】 字は駿公、梅村と號す、清の江南大倉の人、祕書院侍讀兼國子祭酒に官す、著す所る梅村集あり、康熙十年歿す、年六十三、梅村の詩、最も七言古詩に長ず、

【吳隱之】 晉書良吏傳に「一」字ハ處默、文史ニ博涉シ、儒雅ヲ以テ名ヲ標ス、而シテ介立シテ清操アリ、廣州ノ刺史トナリ、未ダ州ニ至ラザル二十里、石門ニ水アリ、貪泉トイフ、飲ム者ハ、厭クナキノ欲ヲ懷クト、隱之酌ンデ之ヲ飲ミ、詩ヲ賦シテ曰ク、古人云、此水、一飲、懷千金、試使夷齊飲、終當不易心ト、州ニ至リテ清操愈厲シ、後チ度支尙書ニ拜シ、光祿大夫ヲ授ケラル、

【公案】 禪宗の問答の案なり、碧巖集第一の評に、且據雪竇頌此「一」とあり、種電鈔に「中峯山房夜話ニ、

また聲韻推歩の學に明かに、音學辨微古韻標準四聲切韻歷辨、歷學補論等の著あり、
【後裔】 裔は衣裾なり、正韻に「未なり、曹なり」と、子孫の義、書經の微子之命に「功加于時、德垂一」
【孔穎達】 齊州の人、孔子三十二世の孫、誦記すること日に千餘言、長ずるに及び、能く文を屬す、唐末明經に擧げられ、後ち唐に仕へて、國子司業より祭酒に遷る、五經正義を撰ぶ、邦讀クエウダツ

【苟安】 「ハ乃チ公府ノ案牘ニ喩フルナリ」
【苟安】 「カリツメ」に、一時の安をむさぼる義、後漢書に「情存一苟且また儉安に同じ、

【孔安國】 漢人、孔子十一世の孫、年四十にして諫議大夫となり、侍中博士に遷る、又臨淮太守となる、年六十にして卒す、邦讀クアングク

【紅友】 酒の異名、東坡嘗て宜興の黃土村に遊ぶ、村主酒を餉りて曰く、「一」なりと、周必大題跋に見ゆ、

【江道ガ雞ヲ連ネシ】 十訓抄第七に見ゆ、晉書の列傳に「一」字道載、陳留圉人也、中軍將軍殷浩請爲諮議參軍、遷長史、時羌及丁零叛、姚襄結營以逼浩、浩令道擊之、道謂將校曰、今兵非不精、而衆少於羌、且其壘柵甚固、難與校力、吾當以計破之、乃取數百雞、以長繩連之、繫火於足、群雞駭散、飛集襄營、營火發、因其亂、而擊之、襄遂小敗」とあり、

【紅一點】 王安石の石榴の詩に「萬綠叢中一、動人春色不須多、萬綠叢中一」
【江永】 字は慎修、安徽婺源の人、諸生たること數十年、博く古今に通じ、心を十三經注疏に専らす、而して三禮に於ては功最も深し、禮書綱目八十八卷、及び周禮疑義舉要、禮記訓義擇言、近思錄集注等著書甚だ多し、

【紅葉媒ヲ爲ス】 太平廣記に、唐ノ于祐トイフ人、禁衛ニ歩シ、偶、御溝ニ、一紅葉ノ流レ來ルヲ見テ拾ヒ取リシニ、葉上ニ詩アリイフ、慙慙謝紅葉、好去到人間、ト、祐乃チ又一葉ニ題シテイフ、曾聞葉上題紅葉、葉上題詩寄阿誰ト、コレヲ上流ニ放チテ宮牆内ニ流レ入ラシメシニ、宮女韓夫人之ヲ拾ヘリ、後ニ祐ト韓夫人ト婚ヲ結ブ、時ニ夫人マタ詩ヲ作リテ曰フ、一聯佳句隨流水、十載幽思滿素懷、今日卻成鸞鳳友、方知紅葉是良媒ト、この故事によりていふ、

【江淹】 南史の列傳に「一」字ハ文通、濟陽考城ノ人、少クシテ孤貧、嘗テ司馬長卿染伯鸞ノ入ト爲リヲ慕ヒ

章句ノ學ヲ事トセズ、情ヲ文章ニ留メ、齊ニ仕ヘテ侍中秘書監トナリ、梁ニ入りテ金紫光祿大夫ニ至ル。その作るところの恨の賦は文選四に出づ、中に「試望平原、蔓艸繁骨、拱木歛魂、人生到此、天道寧論、於是僕本恨人、心驚不已、直念古者、伏恨而死」の句あり、十訓抄第九にも引きた。

【後援】「アトカラ、タスケル」唐書高宗紀に「左武衛將軍薛仁貴、左監門衛將軍李謹行為」

【紅於】楓の異名、唐の杜牧の山行の詩に「遠上寒山石徑斜、白雲生處有人家、停車坐愛楓林晚、霜葉紅於二月花」とある、結句の二字に取る。

【功ヲ一賞ニ虧ク】(九切ノ)を見よ、

【功ヲ買フ】(買功)互に骨折を相かふるをいふ、元倉子に「男子不織而衣、婦人不耕而食、男女買功、相資爲業、垢ヲ刮リ光ヲ磨ク」(刮垢磨光)人の瑕疵を刮り去りて、善行の光輝を發せしむる義にて、人才を成就するをいふ。

【功ヲ立ツ】(立功)不朽を見よ、

【鉤ヲ竊ム者ハ誅セラレ、國ヲ竊ム者ハ侯タリ】鉤は腰帶の環なり、之をぬすむは小盗なり、國を竊むは大盗なり、小盗は刑に處せられ、大盗は富貴を受くるの

謂、莊子に「彼竊鉤者誅、竊國者爲諸侯、諸侯之門而仁義存焉」とあり、諸侯は自ら不仁不義を行ふを以て他の之に倣はんとを畏る、故に仁義の道を存して、民を教化せざるを得ずとの意、史記游俠傳には「竊鉤者誅、竊國者侯、侯之門仁義存」に作る。

【姮娥】月の異名、淮南子に「羿請不死藥於西王母、一竊以奔月」の註に「一ハ羿ノ妻ナリ、羿不死ノ藥ヲ西王母ニ請フ、之ヲ服スルニ及バズ、一ハ盜ミテ之ヲ食ヒ、仙タルヲ得、奔リテ月中ニ入り、月ノ精トナル」と、この事は後漢書天文志にも見ゆ、姮は婦の正字なり、史記にも、姮娥は羿の妻とあり、

【嫦娥】月の異名、姮娥に同じ、靈憲に「后羿不死ノ藥ヲ西王母ニ得タリ、一之ヲ竊ミ以テ月ニ奔ル、將ニ往カントシ、之ヲ有黄ニ筮セシム、有黄之ヲ占シテ曰ク吉ナリ、翩翩タル歸妹、獨リ將ニ西ニ行カントス、天ノ晦芒ニ逢フ、驚ク勿レ、恐ルル勿レ、後チ且ツ昌ナラント、一遂ニ身ヲ月ニ託ス、是レヲ蟾蜍トナス」

【口號】「クチズサム」詩などをぞろに吟ずるをいふ、途上——などといふ

【後學】後進の學者をいふ、後漢書の徐防傳に「宜シク章句ヲ爲シテ、以テ後學ヲ悟スベシ」

【溝壑ニ填ム】(填溝壑)命を失ふといふ謙辭、戰國策に「及未——而託之」また史記扁鵲傳に「無先生則棄捐——、長終而不得反」

【江革ノ至孝】後漢書に「後漢ノ江革、少クシテ父ヲ失ヒ、獨リ母ト與ニ居ル、亂ニ遭ヒ、母ヲ負ヒテ難ヲ逃レ、數賊ニ遇フ、或ハ劫シテ將キ去ラント欲ス、革輒チ泣キテ老母ノ在ル有リト告グ、賊殺スニ忍ビズ、轉ジテ下邳ニ客タリ、貧窮ニシテ、行傭シテ以テ母ニ供シ、母ノ身ニ便ナル物ハ、畢ク給セザルコト莫カリキ」

【恒河沙】恒河は東天竺に在り、佛經に見ゆ、——は俗に濱の「マサゴ」といふが如く、數のさはめて多きに喩ふ、張陽の詩に「深心大海水、廣願——」また略しては恒沙ともいふ、

【江河ノ源ヲ決シテ之ヲ障グニ手ヲ以テス】事の根源を究めずして、徒に其の末流を壅がんとするも、勞して効なきに喩ふ、淮南子に「今夫儒者不本其所以欲、而禁其所欲、不原其所以樂、而閉其所樂、是猶決江河之源、而障之以手也」

【苟簡】苟且簡略の義、カリソメ、莊子に「遊逍遙之墟、食——之田、立於不貸之圃」

【厚顔】恥を恥と思はぬをいふ、アツカマシ、書經に「鬱

陶乎予心、顔厚有、性悷、また北山移文に「豈可使芳杜——、薛荔蒙恥」

【鴻雁】圓機活法に「雁ハ陽鳥ナリ、江湖洲渚ノ間ニ泊ス、動モスレバ計ルニ千百、大ナル者其ノ中ニ居リ、雁ヲシテ雙ビ圍ミテ警察セシム、飛ブニ先後ノ行列アリ、秋ハ南シ、春ハ北ス、鴻ハ又其ノ大ナル者、羽毛純白ナリ」

【弘毅】弘は寛廣、毅は強忍なり、論語泰伯篇に「士不可以不——、任重而道遠、弘にあらざれば、其の重に勝ふる能はず、毅にあらざれば、其の遠きに致す能はず、

【興起】感動して奮起するなり、孟子に「百世之下、聞者莫不——也」

【口給】口才あるをいふ、給は、提給なり、佞人が口に任せて、その場を都合よくいひまはす義、論語公冶長に「禦人以——、屢憎於人、禦は當なり、

【厚贖】「アツキタマモノ」人より贈られたる品物を敬していふ、成語考に「謝人禮厚」曰「——」

【後距】後軍なり、ゴツメ、後に居て敵を拒ぐ義に取る、後繼に同じ、漢書李陵傳に「羞爲——、距一に拒に作る、

【控御】 詩の鄭風の傳に「止馬曰控説文に御使馬也」轉じて一は馬をあつかふ如く、諸侯を制し治むる義とす。

【鉤距】 鉤の距ありて、之を吞めば則ち順ひ、之を吐けば則ち逆ふが如く、人をして其の中に入りて、出づる能はざらしめ、以て隱情を鉤索するをいふ、後漢書趙廣漢傳に「尤善爲一以得事情」

【公共】 一人の私有する所にあらざる義、漢書張釋之傳に「法者天子所與天下」也。

【孔棘】 孔は甚なり、棘は速なり、急なり、外患急に迫るの義とす、詩經に「豈不日戒、猷猷」にあるに本づく。

【攻玉】 玉をみがき治むるをいふ、易林に「鉛刀一以堅不可得、潛夫論にも且攻玉以石洗、金以鹽物固」有以賤理貴以醜化、好者矣、他山ノ石を見よ、

【紅玉】 美人の肌の色をいふ、轉じて美人の稱とす、西京雜記に「趙飛燕與女弟昭儀皆色如一、爲當時第一、並寵擅後宮」

【紅裙】 藝妓の類をいふ、書言故事に「韓愈ノ詩ニ長安衆富兒、盤饌羅羶葷、不解文字飲、惟能醉紅裙」

【洪化】 洪は大なり、大に政教を施して民を教化する

ろにまかせ、速に美を盡さんとて、外物のためにその心を累すことなきは、賢なるものかなとの意、

【肯綮】 肯は骨に著く肉なり、綮は筋と肉と結ばるる處なり、故に緊要の處をいふ、議論など急所を衝くを肯綮に中るといふ、莊子の養生主の庖丁解牛の條に「庖丁爲文惠君解牛、中畧技經、肯綮之未嘗、而況大瓠乎」とあり、瓠は骨なり、

【虹霓】 虹は説文に「蜺也、理雅に雄曰虹、雌曰霓」とあり、舊説に、虹は常に雙見、盛鮮の者は雄なり、其間さ者は雌なりと、一に曰く、赤白色之を虹といひ、青白色之を霓といふと、仔細に觀れば、紫紺青、綠黃柑、赤の七色に分るといふ、月令章句に「夫陰陽不和、婚姻失序、即生此氣云云」

【後勁】 勁は堅なり、「ゴヅメ」の兵なり、左傳宣公十二年に「中權後勁」とあり、「アトオサ」の兵は最も勁健なるを要す、故にいふ、

【口血未乾カズ】 口に飲れる血の、未だ乾かざるは、盟ひてより未だ日を経ざるをいふなり、左傳に「與大國盟、口血未乾、而背之可乎」

【控弦】 弓のつるを引くこと、轉じて能く弓を引き、戦に堪ふる者をいふ、史記の匈奴傳に「一之士、三十

をいふ、漢書の敘傳の字面、

【篝火】 かがり火、高啓の句に「一樹閉照、篝火籠なり、史記の註に「一ハ籠ヲ以テ火ヲ覆フナリ、燎火また篝火に同じ、

【後會期遙カナリ、櫻ヲ鴻臚ノ曉涙ニ霑ス】 (前途程遠シ)を見よ、

【後光】 「ゴクワウ」とも讀む、神佛の體より放つ頭上の光をいふ、背光または圓光ともいふ、

【鴻荒】 鴻は大なり、荒は蒙なり、太古をいふ、

【苟完】 いささか全きをいふ、苟は聊且粗略の意にて、しばらく是にてよしといふが如き辭なり、論語子路篇に「子謂衛公子荆、善居室、始有曰、苟合矣、少有曰、苟完矣、富有曰、苟美矣」とあり、合は聚なり、孔子、衛の公子荆を評していふ、彼は程善く、室家に居るものなり、その一例をいはんに、始めその家の財用器具を有するときは、その意にいふ、まづこれにて物聚合せり、餘は差し置きて然るべしと、後ち少しく備り有るときには、その意にいふ、まづこれにて物完く備はれ、此の上は入らぬなりと、終りに不足なく富み満ちて有るときに至りて、その意にいふ、まづこれにて諸物盛美になりぬ、この外又望なしと、その家の有る所

餘萬、また漢書李陵傳に「悉舉引弓之民、共攻圍之」とあり、引弓は控弦に同じ、李商隱の詩に「一二十萬、長臂皆如猿」

【鉤玄】 ふかさ玄妙なる旨を鉤索するをいふ、韓文の進學解に「記事者必提其要、纂言者必鉤其玄」

【江湖】 三江五湖の略稱、また廣く「カハ」と「ミヅウミ」とをいふ、轉じて世間の義、史記貨殖傳に「范蠡乘扁舟、浮于江湖、陶潛の詩に「良木不隱世、一多賤貧」

【鴻溝】 鴻は大なり、大なる渠なり、また地名、史記項羽紀に「項王乃與漢約、中分天下、割一以西者爲漢、鴻溝而東者爲楚、これより轉じて分界を畫することをも、一を畫すといふ、

【公侯伯子男】 孝經に「昔神明王ノ孝ヲ以テ天下ヲ治ムルヤ、敢テ小國ノ臣ヲ遣レズ、而ルヲ況ヤ一ニ於テラヤ」の註に「一ハ一、凡ソ五等、皆國君ノ尊爵ナリ」

【鴻鵠ノ志】 貧賤にして大志を抱くをいふ、史記に「陳勝字ハ涉、少時家貧シク、人ノ爲メニ傭耕ス、同耕ノ者ニ謂ツテ曰ク、他日富貴トナラバ、汝等ヲ忘レシト、同耕ノ者笑ツテ曰ク、貧寒此ノ如シ、焉ゾ富貴ナルコトアラシヤト、勝曰ク、燕雀豈ニ鴻鵠ノ志ヲ知ランヤ

【鴻雁】鴻は雁の屬、オホトリ、鵠は「クグヒ」

【江湖散人】成語考に「係累ナキ者ヲ一ノトイフ」と、註に「唐ノ陸龜蒙俗ト交ルコトヲ喜マズ、常ニ溪居シ、舟ヲ以テ茶竈筆床釣具ヲ載セ、江湖ニ往來ス、時ニ一ノトイフ」

【後昆】後世に同じ、爾雅釋言に「昆ハ後ナリ」書經の仲虺之誥ニ「垂裕後昆」の傳に「垂優足之道、示後世」

【江左】江南の地をいふ、楊子江の上流に向ひて左の方にあたればなり、晉書に「奕世多才、興於一」

【功曹】郡の録事をいふ、

【鴻爪】(雪泥—)を見よ、

【恒産】五嶽の一、山西省の東北に在り、周禮に「并州ノ鎮ヲ、一ノトイフ」と、白虎通に「北方ヲ一ノトイフハ何ゾ、陰終リ陽始マリテ、ソノ道常ニ久シ、故ニ一ノトイフ」と、爾雅に「一ノ爲北嶽」

【恒産ナキ者ハ恒心ナシ】恒は常なり、産は生業なり、恒産は、常の生業なり、恒心は人常に有する所の善心なり、士は嘗て學びて義理を知る、故に常の産なしと雖も、常の心あり、民は則ち然ること能はざるなり、孟子に「無恒産而有恒心者、惟士爲能、若民則無恒産、因無恒心、苟無恒心、放辟邪侈、無不爲己」

の賢者を選びて世、曲阜縣に知たらしむ、十八史略に「孔子名丘、字仲尼、其先宋人也、孔氏滅於宋、其後適魯有叔梁紇者、與顏氏女、禱於尼山而生孔子、爲兒嬉戲、常陳俎豆、設禮容、長爲季氏吏、料量平、嘗爲司職吏、畜蕃息、適周、問禮於老子、反而弟子稍益、進適齊、齊景公將待以季孟之閒、孔子反魯、定公用之、不終適衛、將適陳、過匡、匡人嘗爲陽虎所暴、孔子貌類陽虎、止之、既免、反于衛、醜靈公所爲、去之、過曹、適宋、與弟子習禮於大樹下、桓魋伐其樹、適鄭、鄭人曰「東門有人、其類似堯、其項類皋陶、其肩類子產、自要以下不及禹三寸、纍纍然若喪家之狗、適陳、又適衛、將西見趙簡子、至河、聞竇鳴犢舜華殺死、臨河歎曰「美哉水、洋洋乎、丘之不濟、此命也、反于衛、適陳、適衛、如葉、反于蔡、楚使人聘之、陳蔡大夫謀曰「孔子用衛、如葉、反于蔡、楚使、人聘之、陳蔡大夫謀曰「孔子用於楚、則陳蔡危矣、相與發徒、圍之於野、孔子曰「詩云、匪兇匪虎、率彼曠野、吾道非邪、吾何爲於此、子貢曰「夫子道至大、天下莫能容顏、曰「不容、何病、然後見君子、楚昭王與師迎之、乃得至楚、將封以書社地七百里、令尹子西不可、孔子反于衛、季康子迎歸魯、哀公問政、終不能用、乃序書、上自唐虞、下至秦穆、刪古詩三千、爲三百五篇、皆絃歌之禮樂、自此可述、晚而喜

【易序】象象繫辭說卦文言讀易章句三絶、因魯史記作春秋、自隱至哀十二公、絶筆於獲麟、筆則筆、削則削、子夏之徒、不能贊一辭、弟子三千人、身通六藝者、七十有二人、年七十三而卒、子鯉字伯魚、早死、孫伋字子思、作中庸

【易序】象象繫辭說卦文言讀易章句三絶、因魯史記作春秋、自隱至哀十二公、絶筆於獲麟、筆則筆、削則削、子夏之徒、不能贊一辭、弟子三千人、身通六藝者、七十有二人、年七十三而卒、子鯉字伯魚、早死、孫伋字子思、作中庸